

御 蔵 遺 跡 V

第26・37・45・51次調査

—国道28号線道路改築工事（長田工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2003

神戸市教育委員会

御 蔵 遺 跡 V

第26・37・45・51次調査

—国道28号線道路改築工事（長田工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2 0 0 3

神戸市教育委員会

序

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は、兵庫県南東部に甚大な被害を与えました。神戸市内、とりわけ六甲山系の南側に位置する須磨区から東灘区にかけての市街地の被害は著しく、多くの市民が亡くなり、負傷し、住居・職場を失いました。

あれから8年、一日でも早く、市民の方々に元の生活に戻っていただきために、市を挙げての復興事業、それに伴う広範囲な埋蔵文化財調査の実施に、各都道府県・政令指定都市文化財担当職員の支援を得て、全力を傾けてまいりました。

このたび刊行いたします報告書は、震災で、大きな被害を受けた長田区の御蔵・菅原地区を南北に貫く、国道28号線の拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査の記録です。御蔵遺跡というこれまで、実体が明らかでなかった遺跡が、奈良・平安時代の役所の跡であろうということが、判明してまいりました。この報告が、地域の歴史を明らかにする一助となれば幸いです。

神戸市では震災によって、多くの貴い人命、財産が瞬時に失なわれましたが、同時にたくさんの人々の厚い支援を受け、希望という言葉は残すことができました。この言葉を大切にしながら、今後も私たちは、文化財保護行政に取り組んでいく所存です。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました方々、関係各機関に厚く御礼申し上げます。

平成15年3月
神戸市教育委員会
教育長 西川 和機

例　　言

1. 本書は、国道28号線道路改築工事（長田工区）に伴い、神戸市建設局より委託され、神戸市教育委員会、(財)神戸市体育協会が平成11年度から14年度にかけて実施した、御蔵遺跡の第26・37・45・51次の埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、御蔵遺跡については本書以前に別事業によるものではあるが、すでに4冊の報告書が刊行されているため、本書を「御蔵遺跡V」とする。
2. 本報告の発掘調査地点は、神戸市長田区御蔵通4・5丁目、菅原通5丁目に所在する。
3. 第26-1、2次調査については、平成14年発行の『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』では「第31-1、2次調査」と呼称していたが、本報告によって、「第26-1、2次調査」と改称する。調査時の旧次数と新次数の対照については、第1章第4節を参照されたい。
4. 各調査の担当者氏名、調査期間、調査面積等は第1章第4節に記載した。
5. 本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究部編集（神戸市体育協会発行）の50,000分の1神戸市全図を、詳細位置図は神戸市発行2,500分の1の地形図「長田」を使用した。
6. 本書に用いた方位・座標は平面直角座標系第V系（日本測地系）で、当遺跡では真北から30'、磁北から7°10'東に振る。標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示した。
7. 本書の執筆は、第2章第2節から第10節については、各調査担当者が行ったが、第2節から第4節の遺物の項は、谷正俊が担当した。その他の部分の執筆・編集は谷が行った。
8. 第3章自然科学分析の成果については、（株）古環境研究所に分析・執筆を委託した。また、出土石材のルーペでの肉眼観察による材質鑑定は、（株）京都フィショントラックに委託した。
9. 遺構写真は各担当者が撮影した。遺物写真については、独立行政法人奈良文化財研究所牛嶋茂氏の指導を得て、杉本和樹氏（西大寺フォト）が撮影した。また、金属製品のX線写真は千種浩、中村大介が撮影した。
10. 本調査で出土した獣骨・歯については独立行政法人奈良文化財研究所松井章氏に鑑定していただき、コメントを伺い、第2章第11節において、中村大介がその詳細をまとめた。また出土遺物については、同研究所巽淳一郎、山中敏史、小林謙一、次山淳の各氏、小野市立好古館館長大村敬通氏、兵庫県教育委員会森内秀造、西口圭介、山田清朝、池田征弘各氏にご教示いただいた。

本文目次

	執筆者	
例　言		
第1章　はじめに	(谷)	
第1節　御蔵遺跡の立地		1
第2節　既往の調査概要		2
第3節　六甲山南麓の飛鳥から平安時代前半にかけての遺跡		4
第4節　調査に至る経緯と経過		10
第5節　調査体制		12
第2章　発掘調査の成果		
第1節　調査の方法	(谷)	13
第2節　第26－1次調査	(佐伯)	15
第3節　第26－2次調査	(口野)	17
第4節　第37－1次調査	(口野)	19
第5節　第37－2次調査	(阿部)	23
第6節　第37－3次調査	(井尻)	29
第7節　第37－4次調査	(井尻)	31
第8節　第45次調査	(谷)	39
第9節　第51－1次調査	(谷)	69
第10節　第51－2次調査	(谷)	75
第11節　御蔵遺跡出土の動物遺存体	(中村)	91
第3章　自然科学的分析の成果	(古環境研究所)	95
第4章　まとめ	(谷)	
第1節　奈良・平安時代における御蔵遺跡の性格について		125
第2節　終わりに		136

挿図・挿図写真目次

fig. 1 御蔵遺跡の位置	1	fig.50 1区調査状況	39
fig. 2 御蔵遺跡位置図	3	fig.51 土層断面模式図とその位置関係	40
fig. 3 六甲山南麓の飛鳥～平安時代の遺跡	6・7	fig.52 2・3区第3遺構面平面図	41
fig. 4 国道28号線拡幅事業に伴う埋蔵文化財調査次数対照表	11	fig.53 2・3区第2遺構面平面図	42
fig. 5 調査区配置図	11	fig.54 S B201平・断面図	43
fig. 6 遺構集成図	14	fig.55 2区人力掘削作業	44
fig. 7 第26-1次調査位置図	15	fig.56 2・3区第1遺構面平面図	45
fig. 8 第26-1次調査区平面図	15	fig.57 黒色～暗褐色砂質シルト出土遺物(1)	46
fig. 9 調査区南壁断面図	16	fig.58 黒色～暗褐色砂質シルト出土遺物(2)	46
fig.10 第26-1次調査出土遺物	16	fig.59 暗褐色砂質シルト出土土師器、黒色土器坏・皿	47
fig.11 第26-1次調査 調査前の状況	16	fig.60 暗褐色砂質シルト出土須恵器坏・皿	47
fig.12 第26-2次調査位置図	17	fig.61 暗褐色砂質シルト出土土師器甕・竈・把手	48
fig.13 東壁中央部断面図	17	fig.62 暗褐色砂質シルト出土土馬・三彩	48
fig.14 第26-2次調査区平面図	17	fig.63 黒褐色粘質土出土土師器坏	49
fig.15 第26-2次調査出土遺物	18	fig.64 黒褐色粘質土出土土師器坏・皿・鉢	50
fig.16 第26-2次調査出土瓦	18	fig.65 黒褐色粘質土出土須恵器坏・皿	51
fig.17 第37-1次調査位置図	19	fig.66 墨書き器赤外線写真	51
fig.18 調査区東壁断面図	19	fig.67 宴字を有する僧名一覧表	52
fig.19 第37-1次調査区平面図	19	fig.68 黒褐色粘質土出土須恵器坏	53
fig.20 第37-1次調査出土遺物	21	fig.69 黒褐色粘質土出土黑色土器坏・皿	54
fig.21 第37-1次調査状況	22	fig.70 黒褐色粘質土出土綠釉陶器	55
fig.22 クレーンによる写真測量	22	fig.71 黒褐色粘質土出土灰釉陶器	56
fig.23 第37-2次調査位置図	23	fig.72 黒褐色粘質土出土越州窯系青磁	56
fig.24 機械掘削作業	23	fig.73 黒褐色粘質土出土須恵器壺・蓋・鉢・硯	57
fig.25 遺構検出作業	23	fig.74 黒褐色粘質土出土須恵器甕	57
fig.26 第37-2次調査区平面図	24	fig.75 黒褐色粘質土出土土師器羽釜	58
fig.27 調査区北壁断面図	24	fig.76 黒褐色粘質土出土土師器甕	58
fig.28 跨帶内面糊検出状況	25	fig.77 黒褐色粘質土出土竈	59
fig.29 第37-2次調査出土跨帶	25	fig.78 黒褐色粘質土上層出土土師器皿	59
fig.30 第37-2次調査出土遺物	26	fig.79 黒褐色粘質土上面出土の土器	59
fig.31 第37-2次調査出土瓦	27	fig.80 黒褐色粘質土出土瓦(1)	60
fig.32 第37-3次調査位置図	29	fig.81 黒褐色粘質土出土瓦(2)	61
fig.33 調査区東壁断面図	29	fig.82 第45次調査出土土錘・蛸壺・浮子	62
fig.34 第37-3次調査区平面図	29	fig.83 第45次調査出土土堀	63
fig.35 遺構検出作業	30	fig.84 第45次調査出土轔羽口	63
fig.36 調査地遠景	30	fig.85 黒褐色粘質土出土鐵製品	64
fig.37 第37-4次調査位置図	31	fig.86 黒褐色粘質土出土砥石	65
fig.38 S X201遺物出土状況	31	fig.87 S P242出土砥石	66
fig.39 第2遺構面平面図	31	fig.88 第45次調査出土杭・柱材	67
fig.40 第1遺構面平面図	32	fig.89 遺構出土の土器・陶器	68
fig.41 S X201出土遺物(1)	33	fig.90 中世耕作土出土土器・陶磁器・瓦	68
fig.42 S X201出土遺物(2)	34	fig.91 第51-1次調査位置図	69
fig.43 S X201出土瓦	35	fig.92 調査前の状況	69
fig.44 S D201出土遺物	36	fig.93 1・2区平面図	71
fig.45 S D101出土遺物	36	fig.94 3区平面図	72
fig.46 S D101出土瓦	37	fig.95 4・5区平面図	73
fig.47 遺構に伴わない遺物	38	fig.96 第51-1次調査出土遺物	74
fig.48 第45次調査位置図	39	fig.97 第51-1次調査出土金環・金属器	74
fig.49 調査区地区割図	39	fig.98 第51-2次調査位置図	75

fig.99 第51－2次調査柱状土層図	76
fig.100 A区平面図	77
fig.101 A－2区出土胞衣壺？出土状況図	78
fig.102 柵平・断面図	79
fig.103 集石遺構平・断面図	79
fig.104 B・C区平面図	80
fig.105 A－2区流路出土土師器	81
fig.106 A－2区流路出土須恵器(1)	82
fig.107 A－2区流路出土須恵器(2)	83
fig.108 A－2区流路出土木製品・部材(1)	84
fig.109 A－2区流路出土木製品・部材(2)	85
fig.110 A－2区流路出土杭	86
fig.111 A区出土蛸壺・土錘	87
fig.112 A区出土鎔帶	87
fig.113 A区黒色～暗褐色粘質土出土土器	88
fig.114 A区黒色～暗褐色粘質土出土瓦	89
fig.115 A－2区出土土師器甕・壺	90
fig.116 B区出土綠釉陶器・須恵器	90
fig.117 動物遺存体種別出土点数	92
fig.118 御蔵遺跡出土動物遺存体(1)	93
fig.119 御蔵遺跡出土動物遺存体(2)	94
fig.120 第45次調査における樹種同定結果	99
fig.121 第51－2次調査における樹種同定結果(1)	99
fig.122 第51－2次調査における樹種同定結果(2)	100
fig.123 第45次調査の木材(1)	101
fig.124 第45次調査の木材(2)	102
fig.125 第51－2次調査の木材(1)	103
fig.126 第51－2次調査の木材(2)	104
fig.127 第51－2次調査の木材(3)	105
fig.128 第45次調査における植物珪酸体分析結果(1)	109
fig.129 第45次調査における植物珪酸体分析結果(2)	109
fig.130 第45次調査の植物珪酸体顕微鏡写真	110
fig.131 第45次調査における花粉分析結果	113
fig.132 第45次調査における花粉ダイヤグラム	114
fig.133 第45次調査の花粉・胞子	115
fig.134 第45次調査における種実同定結果(1)	118
fig.135 第45次調査における種実同定結果(2)	118
fig.136 第51－2次調査における種実同定結果(1)	119
fig.137 第51－2次調査における種実同定結果(2)	119
fig.138 第51－2次調査におけるモモ核計測値	120
fig.139 第45次調査の種実(1)	121
fig.140 第45次調査の種実(2)	122
fig.141 第51－2次調査の種実(1)	123
fig.142 第51－2次調査の種実(2)	124
fig.143 御蔵遺跡主要遺構集成図	126
fig.144 上沢遺跡主要遺構集成図	128
fig.145 大田町遺跡主要遺構集成図	129

写真図版目次

カラー図版 1

- 第45次調査出土三彩（正面・側面）
- 第51－2次調査出土鎔帶金具（表面・裏面）
- 第37－2次調査出土鎔帶金具（表面・内面）

カラー図版 2

- 第37－1次調査出土陶磁器
- 第37－4次調査出土陶磁器
- 第45次調査出土越州窯系青磁
- 第45次調査出土灰釉陶器

カラー図版 3

- 第45次調査出土綠釉陶器(1)
- 第45次調査出土綠釉陶器(2)

カラー図版 4

- 第37－4次調査出土白磁碗
- 第45次調査出土赤色顔料付着軒平瓦

写真図版 1

- 第26－1次調査地全景（北東から）
- 第26－2次調査地北半部全景（南東から）
- 第26－2次調査地南半部全景（北西から）

写真図版 2

- 第37－1次調査地全景（南から）
- 第37－2次調査地全景（南東から）

第37－2次調査地帯金具出土状況

写真図版 3

- 第37－3次調査地全景（北西から）
- 第37－4次調査第2遺構面全景（南東から）
- 第37－4次調査第1遺構面全景（南東から）

写真図版 4

- 第45次調査第3遺構面全景（南東から）
- 西壁断面
- 第2遺構面全景（南東から）

写真図版 5

- 第45次調査鉤出土状況
- 第1遺構面全景（3区）
- 第1遺構面全景（2区）

写真図版 6

- 第51－1次調査1区中央部（南東から）
- 2区中央部（南東から）
- 3区南半部（北西から）
- 4区南半部（北西から）

写真図版 7

- 第51－2次調査 調査地遠景（北から）
- A区北半部全景（北西から）
- A区北半部全景（南東から）

写真図版 8

- 第51－2次調査

- A区南半部集石遺構出土状況（南から）
A区集石遺構と流路検出状況（北西から）
A区集石遺構と流路検出状況（南東から）
- 写真図版9
第51－2次調査
A区南半部集石遺構断ち割り状況（南から）
A区南半部東壁断面
A区南半部胞衣壺？出土状況
- 写真図版10
第26－1・2次調査出土遺物
第37－1次調査出土遺物
- 写真図版11
第37－1次調査出土遺物
- 写真図版12
第37－2次調査出土遺物
- 写真図版13
第37－4次調査S X201出土土器・陶磁器・瓦
- 写真図版14
第37－4次調査S X201出土土師器・瓦器
SD101出土土師器・須恵器
- 写真図版15
第37－4次調査出土土器・土錘
- 写真図版16
第37－4次調査出土瓦(1)
- 写真図版17
第37－4次調査出土瓦(2)
- 写真図版18
第45次調査 黒色～暗褐色砂質シルト出土土器
黒色～暗褐色砂質シルト出土須恵器坏
- 写真図版19
第45次調査
黑色～暗褐色砂質シルト、遺構出土土器
- 写真図版20
第45次調査
暗褐色砂質シルト、遺構出土土器・土馬
- 写真図版21
第45次調査 黑褐色粘質土出土土師器坏・皿
- 写真図版22
第45次調査 黑褐色粘質土出土遺物
- 写真図版23
第45次調査出土墨書き土器・刻書き土器・硯・転用硯
・漆付着土器
- 写真図版24
第45次調査 黑褐色粘質土出土土師器坏
黑褐色粘質土・遺構出土土師器坏
- 写真図版25
第45次調査 黑褐色粘質土・遺構出土土師器坏
黑褐色粘質土出土黑色土器(1)
- 写真図版26
第45次調査 黑褐色粘質土出土須恵器坏(1)
黑褐色粘質土出土須恵器坏(2)
- 写真図版27
第45次調査 黑褐色粘質土出土須恵器坏(3)
黑褐色粘質土出土須恵器壺・鉢
- 写真図版28
第45次調査
暗褐色砂質シルト、黑褐色粘質土出土土師器羽釜・甕
暗褐色砂質シルト、黑褐色粘質土出土土師器甕
- 写真図版29
第45次調査 黑褐色粘質土出土黑色土器(2)
黑褐色粘質土出土土師器皿
暗褐色砂質シルト、黑褐色粘質土出土土師器竈
- 写真図版30
第45次調査 黑褐色粘質土出土瓦(1)
- 写真図版31
第45次調査 黑褐色粘質土出土瓦(2)
- 写真図版32
第45次調査出土砥石・漁撈具・鍛冶関連遺物
- 写真図版33
第45次調査出土金属器・X線写真(1)
- 写真図版34
第45次調査出土金属器・X線写真(2)
- 写真図版35
第45次調査 中世耕作土出土土器・陶磁器・銅錢
第45次調査出土杭・柱材
- 写真図版36
第51－1次調査出土金環・金属器
第51－2次調査A区流路出土土器
- 写真図版37
第51－2次調査A区流路出土須恵器坏(1)
- 写真図版38
第51－2次調査A区流路出土須恵器坏(2)
- 写真図版39
第51－2次調査A区流路出土漆喰？付着土器
A区流路出土漆付着土器
A区出土蛸壺・土錘
- 写真図版40
第51－2次調査A区流路出土杭・建築部材
- 写真図版41
第51－2次調査A区流路出土木製品・端材
A区出土胞衣壺？と供献土器
- 写真図版42
第51－2次調査A区出土瓦
- 写真図版43
第37－4次調査出土動物遺存体(A)
第37－4次調査出土動物遺存体(B)
- 写真図版44
第45次調査出土動物遺存体(C)
第45次調査出土動物遺存体(D)
- 写真図版45
第51－1次調査出土動物遺存体(E)
第51－2次調査出土動物遺存体(F)

第1章 はじめに

第1節 御藏遺跡の立地

御藏遺跡は、神戸市南部の市街地に位置する遺跡である。その市街地は、背後に聳える六甲山系によって、東西方向に細長く形成されており、南北方向には相当な比高差を持つという特徴を持っている。

六甲山系は、およそ50万年前から隆起が活発となった山系であり、現在も造山活動を続けている。隆起の際の歪みが生じた部分には活断層が形成される。それらの活断層は山系内や山麓に多数存在し、一部は沖積地の下にも潜在しているといわれている。活断層のストレスは徐々にではなく、一気に開放され、そのエネルギーが地震となるが、六甲山系の場合、数千年に1回と考えられている。平成7年1月17日に起こった阪神・淡路大震災は、まさにその状態が到来したということであった。このような山系の隆起によって、相対的に南の大坂湾側は沈降し、山地と沖積地の間に急激な高低差が生じている。

この比高差のゆえに六甲山系南麓では、中小河川によって形成された扇状地・沖積地が発達している。当遺跡の西方には、新湊川（苅藻川）がほぼ南北方向に流れ、その營力によって形成された微高地から後背湿地に、遺跡は立地している。この付近の地形は北から南に緩やかに下がってゆく地形で、現況地表面の標高は6～7m前後である。遺跡およびその周辺の土層を観察すると、洪水によって堆積した複数の砂礫層が確認されており、河川の氾濫が、この遺跡の居住者に少なからぬ影響を及ぼしたことが窺える。



fig.1 御藏遺跡の位置

註

六甲山系の造山運動と活断層については以下の文献を参考にした。

藤田和夫「第3章 神戸の地形と地質 第4節 大阪層群と六甲変動」『新修神戸市史 歴史編1・自然・考古』1989 新修神戸市史編集委員会

神戸市・(財)建設工学研究所『阪神・淡路大震災と神戸の活断層』1999 (財)建設工学研究所

第2節 既往の調査概要

当遺跡では、これまで50次以上にわたる発掘調査を行ってきた。いずれの調査も面積的には、数十平方メートル程度のものがほとんどであるが、これまでに以下のような時代の遺構、遺物が確認されている。

1. 遺跡の範囲

これまでの、発掘調査および試掘調査で判明した御蔵遺跡の範囲は、東西750m、南北650m、面積はおよそ8.9haであるということ。また、先に遺跡の立地の節で述べたように、遺跡の西を流れる苅藻川によって形成された自然堤防上および、後背湿地に営まれているということが明らかになった。

2. 繩文時代～弥生時代中期

縩文時代晚期と弥生時代中期の土器が洪水砂層・流路から発見されているが、遺構は検出されていない。

3. 弥生時代後期末

庄内併行期の集落が自然堤防上に営まれる。豊穴住居址、溝、土坑、土器溜りが発見されている。土器溜りから出土した土器には、讃岐や山陰、吉備、河内地方から搬入された土器が見うけられる。また、後背湿地には水田畦畔が確認されているが、この水田層は厚い洪水砂によって覆われている。

4. 古墳時代

庄内併行期の集落は長続きせず、古墳時代前期初頭で急速に衰退する。自然堤防の発達が十分でなく、水田域である後背湿地が洪水の影響を受けやすかったのが、原因と推定される。

古墳時代後期から後期末（5世紀後半～6世紀末）の遺構・遺物は多くではなく、この時代には居住域としてはあまり利用されていなかったと考えられる。

5. 飛鳥時代

7世紀前半頃から中ごろにかけて、新たな集落が営まれる。倉庫を含む掘立柱建物址や溝などが、主に遺跡の東側で発見されている。奈良時代後半以降に展開される大型の掘形を持つ掘立柱建物址群のさきがけとなるもので、その在り様が注目される。

6. 奈良時代

前半頃の遺構は、遺跡の西半部にあり、掘立柱建物址、土坑、溝などを検出しているが、未だ詳細は明らかになったといえない。後半～末頃になると遺跡の東半分の微高地上に、大型の掘形を持つ掘立柱建物址群や溝、土坑等が検出されている。また、墨書き土器や転用硯、金属製帶金具、土馬などが発見されており、官衙的な性格を持つ遺跡になってくるようである。

7. 平安時代

平安時代前半頃は、奈良時代後半の遺跡の性格を踏襲しており、依然として官衙的な性格をもつ遺構、遺物が確認されている。平安時代の末頃、11世紀末から12世紀の掘立柱建物址、井戸、木棺墓群が発見されているが、この段階ではすでに、中世的な農村集落の様相を呈しているようである。また、この当時の溝の方向性をみると、市街地化される以前の条里地割りの方向とほぼ一致しており、奈良・平安時代の建物の方向性とは全く異なっていることから、条里の施工は11世紀頃と想定される。

参考文献

山口英正「御蔵遺跡第3次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』2000 神戸市教育委員会

山上雅弘他「神戸市御蔵遺跡－第8. 9. 10次調査－」2000 神戸市教育委員会

安田滋編「神戸市御蔵遺跡－第4. 6. 14. 32次調査－」2001 神戸市教育委員会

安田滋編「神戸市御蔵遺跡－第17. 38次調査－」2001 神戸市教育委員会

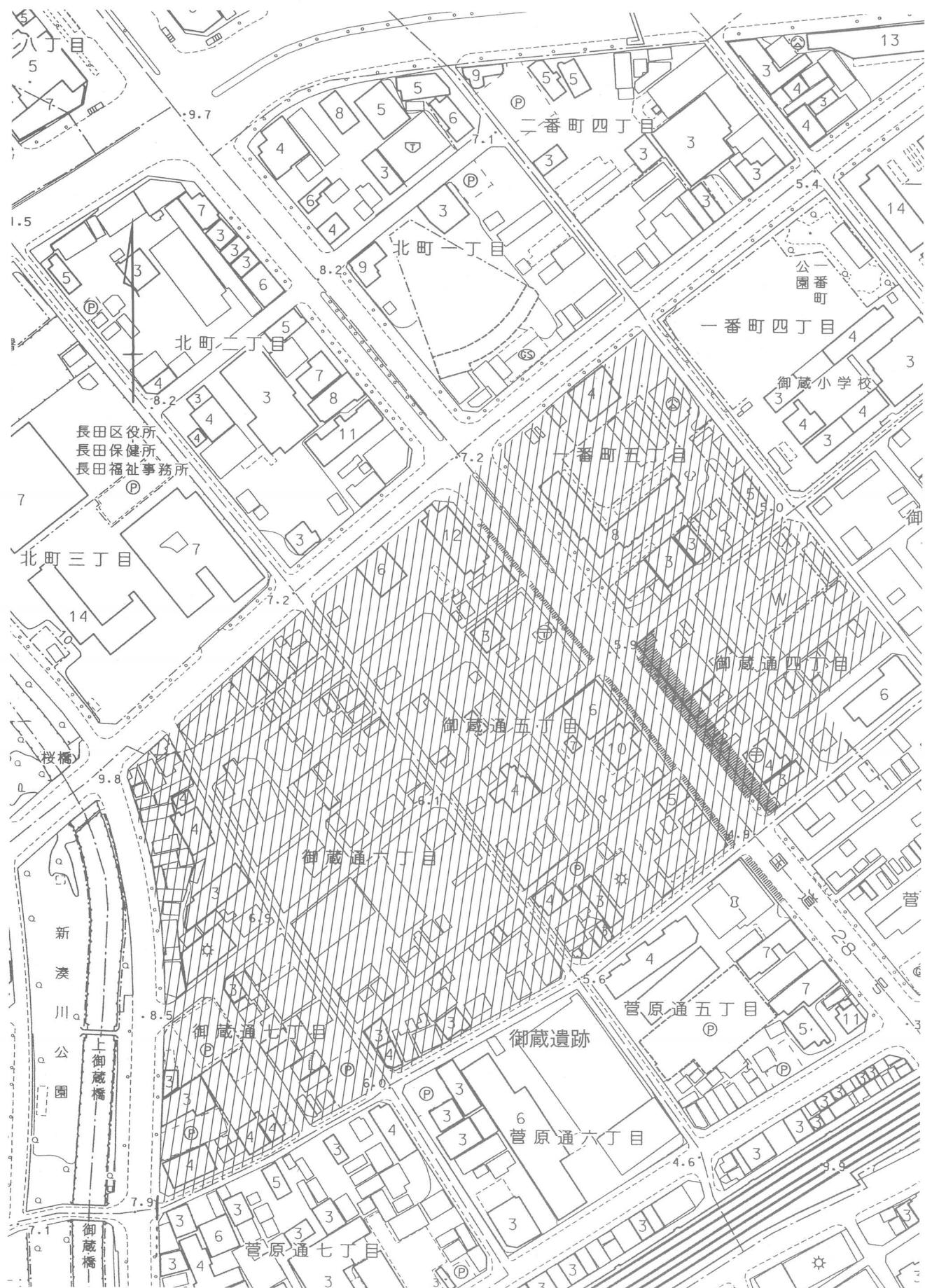


fig.2 御藏遺跡位置図 (S=1/2500・網線の濃い部分が調査地)

第3節 六甲山南麓の飛鳥から平安時代前半にかけての遺跡

六甲山系の南麓には、小河川によって形成された扇状地地形と狭い面積の沖積地が、山系に沿って帯状に分布しており、その間を古代山陽道が延びていた。山陽道の精確な位置は諸説があって、未だ確定はされていない。しかし、この地域の飛鳥から平安時代前半にかけての遺跡分布を概観すると帯状に点在しており、おおまかには古代山陽道推定地付近に沿うような状況を呈している。

1. 飛鳥時代

神戸市東灘区と芦屋市西部に接する地域には当該時期の遺跡が集中する。芦屋市寺田遺跡⁽¹⁾では、古墳時代後期末～飛鳥時代の堅穴住居址、掘立柱建物址等が検出されている。東灘区深江北町遺跡⁽²⁾では、飛鳥時代の堅穴住居址が奈良時代の遺構とともに見つかっている。森北町遺跡⁽³⁾では、飛鳥時代の水田遺構、流路、掘立柱建物址が確認されている。東灘区郡家遺跡⁽⁴⁾は菟原郡衙推定地のひとつであるが、その中の大蔵地区では、当該時期の掘立柱建物址が発見されている。中央区二宮遺跡⁽⁵⁾では、鍛冶炉遺構を伴う、堅穴住居址、掘立柱建物址を確認している。同区下山手北遺跡⁽⁶⁾でも、掘立柱建物址と堅穴住居址、区画溝が発見されているが、後世の削平がいちじるしいため、詳細は不明である。兵庫区上沢遺跡⁽⁷⁾では、掘立柱建物址、大壁造建物や轍羽口や鉄・銅滓、漆の入った容器が出土し、工房的な施設のあった可能性が指摘されている。長田区三番町遺跡⁽⁸⁾では、飛鳥時代の流路やピットが確認されている。長田区御蔵遺跡⁽⁹⁾ではこれまでの調査で、当該時期の掘立柱建物址や溝などを確認している。須磨区行幸町遺跡⁽¹⁰⁾では、飛鳥時代に掘削され、奈良時代頃に埋没した大規模な溝が発見されており、灌漑用水路の可能性がある。

2. 奈良時代

奈良時代の芦屋市～神戸市東部は「菟原（うばら）郡」と呼称される地域であった。東灘区深江北町遺跡⁽¹¹⁾では、奈良～平安時代にかけての掘立柱建物址の他、「駅」と書かれた墨書き器や承和の年号が記された木簡が出土し、「葦屋駅家」の関連施設である可能性が指摘されている。また、その北に隣接する芦屋市津知遺跡⁽¹²⁾でも当該時期の大型掘立柱建物址、皇朝錢、円面硯、芦屋廃寺と同范瓦等、官衙的要素の強いものが確認されており、ほぼこのあたりに古代山陽道が通過していたことは間違いないと考えられる。また、芦屋市寺田遺跡⁽¹³⁾では、「大領、小領」と記された墨書き器が発見されている。さらに北には、白鳳期に創建されたと推定される芦屋廃寺⁽¹⁴⁾が立地する。

東灘区住吉宮町遺跡⁽¹⁵⁾では、奈良～平安時代の掘立柱建物址や地鎮遺構、円面硯、瓦等が見つかっている。また、1596年の慶長伏見地震によって地中で大きく変形した、奈良時代の井戸からは、「橋東家」、「免（菟原郡の菟の誤記か）」と書かれた墨書き器が出土しており、菟原郡衙とのかかわりを推定できる。字名から菟原郡衙の参考地といわれてきた東灘区郡家遺跡⁽¹⁶⁾の大蔵地区では、奈良時代の大型の掘形を持つ掘立柱建物址が確認されている他は、菟原郡衙に関する情報には恵まれていない。

灘区西求女塚古墳⁽¹⁷⁾は古式の三角縁神獣鏡を伴った前方後方墳として有名であるが、その周辺の調査で、奈良時代後半の溝、掘立柱建物址が確認されている。この付近には、延喜式に新羅の使節を接待する場所とされた敏馬崎という良港があったといわれている。また、その西にある中央区日暮遺跡⁽¹⁸⁾では、奈良時代の掘立柱建物址や銅製巡方、緑・灰釉陶器、少量ながら越州窯青磁が出土している。この遺跡の南の海岸線には近世には脇浜とよばれた小湊があり、また古代山陽道の推定ルートに近接した遺跡として注目される。

中央区二宮遺跡⁽¹⁹⁾では、遺構は流路状の落ち込みから奈良時代前半の遺物がまとまって出土している。また、土馬がばらばらになった状態でかなり離れたところから出土しており、それらが接合することが判明している。当遺跡は古代山陽道の推定ルートから北にやや離れたところに位置しているが、「日本書紀」神

功皇后摂政元年二月条の「活田長峠国」の伝承、天武天皇九年条の「摂津国活田村」等の記事との関係が想定される遺跡であり、飛鳥から奈良時代の重要な集落が存在したことは窺える。中央区旧三宮駅構内遺跡⁽²⁰⁾では、土坑から奈良時代後半の遺物が大量に出土しているが、その周辺が建物基礎によって著しく損壊されており、遺跡の性格は不明確であった。

兵庫区上沢遺跡⁽²¹⁾では、大型の掘形をもつ掘立柱建物址や井戸、溝等が確認され、縁・灰釉陶器、帶金具、瓦、銭貨、土馬、円面硯等の遺物が出土している。また、井戸内から銅鏡が1点出土している。この周辺の字名「室ノ内（むろのうち）」と、有勢者の屋敷を意味する「館（むろつみ）」という言葉との関わりで、旧市街域の西半分を占めていた八部（やたべ）[雄伴（おとも）]郡の郡衙が存在した可能性が指摘されている。また、近くには白鳳期に創建とされる房王寺⁽²²⁾が存在したと伝えられるが、かつて工事の際に瓦が出土した以外には、明確な寺院遺構は発見されていない。なお、周辺の調査では、流路の中から平安時代の塑像の台座部分が出土している。

長田区御蔵遺跡⁽²³⁾では飛鳥～平安時代にかけての複数の掘立柱建物址、井戸等が確認されている。御船遺跡⁽²⁴⁾では、7世紀後半～8世紀後半の掘立柱建物址が発見されている。また、御蔵遺跡の南側のJR・山陽線を越えた所にある、長田中学校庭の防球ネット設置工事に伴う小規模な発掘調査⁽²⁵⁾では、ピットと共に、飛鳥時代～鎌倉時代初めの遺物が出土している。新湊川（苅藻川）に沿った自然堤防上の南側には御蔵遺跡とほぼ同様の時期の遺跡が拡がっているようであるが、詳細は不明である。川のやや下流右岸の神楽遺跡⁽²⁶⁾では、奈良～平安時代前半の一辺1mを測る正方形の掘形を持つ掘立柱建物址が発見されている。野田遺跡⁽²⁷⁾、二葉町遺跡⁽²⁸⁾は、奈良時代～中世の遺跡で、いずれも海岸線に近い位置を占めており、掘立柱建物址や井戸、土坑が検出されている。

須磨区大田町遺跡⁽²⁹⁾では、奈良～平安時代の掘立柱建物址、土坑、溝が確認されている。出土遺物を概観すると、奈良時代よりも平安時代のものが大勢をしめるようである。当遺跡は、後述するように「須磨駅家」の関連施設の可能性がある。また、「荒田郡 中富里 荒田直□□」とヘラ描きされた奈良時代前期の円面硯が出土しており、荒田郡が当地のことを指すのならば、雄伴郡成立前に荒田郡と呼称されていたことがわかり、興味深い資料である。須磨区行幸町遺跡⁽³⁰⁾では、飛鳥～奈良時代の溝から帶金具が出土している。また、古大内式の軒丸瓦が発見されている。「須磨関」が近辺に存在した可能性があるが、精確な位置はわかっていない。

3. 平安時代

平安時代前半の遺跡は、前代から継続して営まれる傾向が強い。東灘区深江北町遺跡⁽³¹⁾では、奈良時代の掘立柱建物址や溝と共に、平安時代に埋没する流路から承和の年号を持つ木簡が出土しており、椋人安道・稻継という名前が記されている。椋人とは、当時の文献資料に散見される葦屋椋（倉）人のことを指すとされており、彼らは葦屋駅家周辺に居住し、駅の仕事に従事していた下級官人一族との推定がなされている。東灘区住吉宮町遺跡⁽³²⁾では、前代に引き続き集落が存在し、平安時代の掘立柱建物址や地鎮遺構が発見されている。この遺跡は菟原郡衙とのかかわりが深いことが指摘されている。

中央区日暮遺跡⁽³³⁾では、10世紀を中心とする掘立柱建物址群と地鎮遺構が発見されている。また、下山手北遺跡⁽³⁴⁾では、9世紀の園池と推定される遺構を伴う掘立柱建物址群が確認されており、在地の有力者の館と結論づけている。また柱掘形から、皇朝十二錢のひとつである長年大寶が59枚まとまって出土した。

兵庫区上沢遺跡⁽³⁵⁾では、奈良・平安時代の掘立柱建物址、井戸等が発見されており、近くの房王寺廃寺（室内遺跡）と併せて考えると、奈良～平安時代を通しての有力な拠点集落または郡衙候補地といえる。

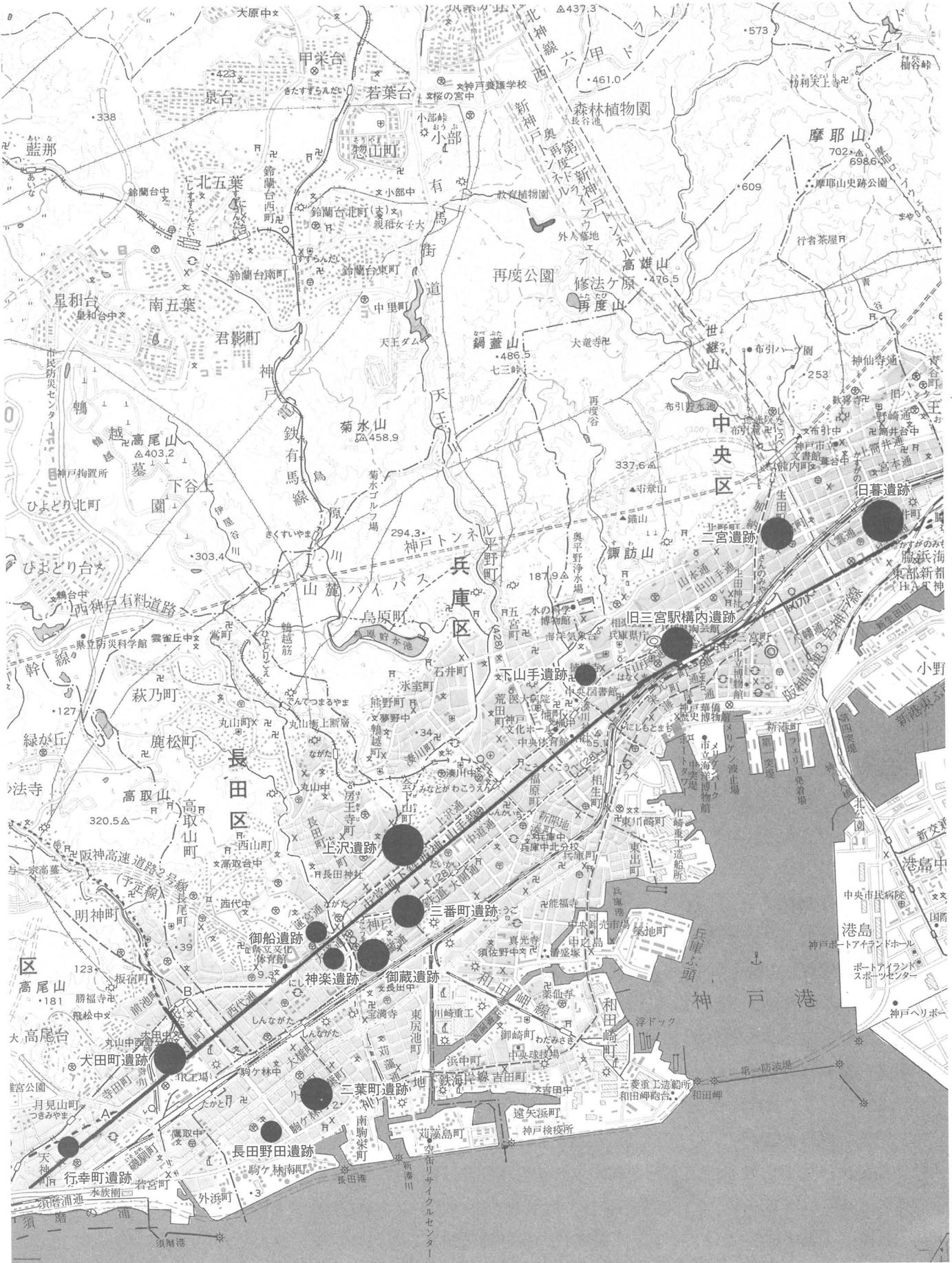
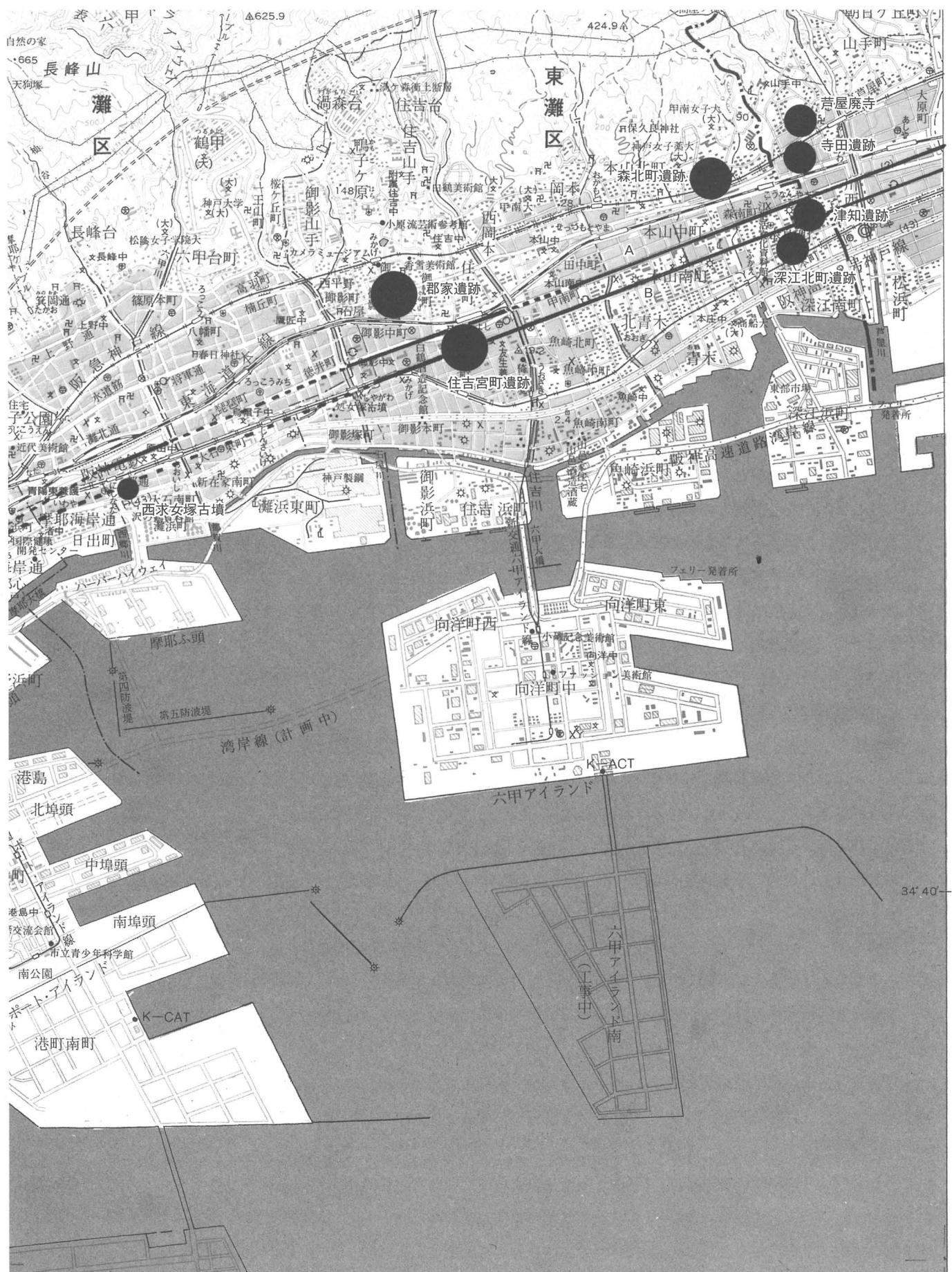


fig.3 六甲山南麓の飛鳥～平安時代の遺跡 S=1/50000



実線・破線は古代山陽道推定ライン Aは足利氏案、Bは吉本氏案

長田区御蔵遺跡⁽³⁶⁾では、平安時代の掘立柱建物址や井戸が確認されている。また、神楽遺跡⁽³⁷⁾では、溝内から多量の10世紀を中心とする時期の土器、施釉陶器類が出土しており、「東福」と墨書されたものが多数、発見されている。

須磨区大田町遺跡⁽³⁸⁾では、9～10世紀の掘立柱建物址を中心とする遺構が発見されている。その一部は出土遺物から官衙の工房的な要素を持つと考えられている。また、「神？人」、「東」と記された墨書土器が出土している。「神？人」を神人（みわひと）と判読することが許されるならば、『新撰姓氏録』摂津国神別条記載の神人（みわひと）の一族がこの地域となんらかの関わりを持っていた可能性が指摘される。

参考文献

- (1) 前田佳久編『兵庫県芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書 第127, 130, 133地点』2002 芦屋市 芦屋市教育委員会
- (2) 山下史朗編『神戸市東灘区深江北町遺跡』1988 兵庫県教育委員会
- (3) 丹治康明他「森北町遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』1992 神戸市教育委員会
- (4) 菅本宏明他「郡家遺跡大蔵地区第7次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』2001 神戸市教育委員会
- (5) 谷正俊「二宮遺跡第1次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』2001 神戸市教育委員会
- (6) 平成6、7年度 淡神文化財協会調査
- (7) 池田毅他「上沢遺跡第9次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』2000 神戸市教育委員会
橋詰清孝他「上沢遺跡第32次—1、2次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』2002 神戸市教育委員会
- (8) 谷正俊他「三番町遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』1992 神戸市教育委員会
- (9) 安田滋編『御蔵遺跡 第17, 38次発掘調査報告書』2001 神戸市教育委員会
山口英正「御蔵遺跡第3次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』2000 神戸市教育委員会
- (10) 平成12, 13年度 (財) 神戸市体育協会調査
- (11) 山本雅和編『深江北町遺跡 第9次埋蔵文化財発掘調査報告書』2002 神戸市教育委員会
- (12) 竹村忠洋編『芦屋市文化財調査報告第34集『津知遺跡第17地点発掘調査報告書』1999 芦屋市教育委員会
- (13) 宮本郁雄他編『古代のメインロード－山陽道沿線物語－』2001 神戸市教育委員会
- (14) 村川行弘『芦屋市文化財調査報告第7集 『芦屋廃寺址』1970 芦屋市教育委員会
芦屋市教育委員会『現地説明会ノート 芦屋廃寺跡(第62地点) 発掘調査－平成11年度震災復興埋蔵文化財調査－』1999
- (15) 森岡秀人・竹村忠洋「芦屋廃寺中枢の調査報告」『第110回考古学研究会関西例会資料』2001
- (16) 丹治康明他「住吉宮町第14次調査」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』1993 神戸市教育委員会
菊地逸夫他「住吉宮町第23次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』1999 神戸市教育委員会
- (17) (4)と同じ
- (18) 須藤宏「西求女塚古墳第6次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』1997 神戸市教育委員会
- (19) 兼康保明他「日暮遺跡第11次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』1998 神戸市教育委員会
- (20) (5)と同じ
- (21) 菅本宏明他「旧三宮駅構内遺跡」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』1993 神戸市教育委員会
- (22) 斎木巖他「上沢遺跡第3次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』1999 神戸市教育委員会
斎木巖他「上沢遺跡第8・16次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』2000 神戸市教育委員会
- (23) 富山直人「上沢遺跡第10次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』2000 神戸市教育委員会

- 口野博史他「上沢遺跡第33次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』2002 神戸市教育委員会
- (22) 薗田香融「第4節 宗教と文化 1. 寺院の建立」『兵庫県史第1巻』1974 兵庫県史編集専門委員会
水口富夫他「室内遺跡」『平成9年度年報』1998 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- (23) 安田滋編『御藏遺跡第4・6・14・32次発掘調査報告書』2001 神戸市教育委員会
- (24) 池田毅「御船遺跡第2次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』2000 神戸市教育委員会
- (25) 平成13年度 神戸市教育委員会調査
- (26) 前田佳久「神楽遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』1989 神戸市教育委員会
「神楽遺跡 第7次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』1994 神戸市教育委員会
- (27) 兼康保明他「長田野田遺跡第1次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』1998 神戸市教育委員会
- (28) 川上厚志編『二葉町遺跡第3・5・8・9・12次発掘調査報告書』2001 神戸市教育委員会
- (29) 森内秀造編『神戸市須磨区 大田町遺跡発掘調査報告書』1993 兵庫県教育委員会
吉川義彦『大田町遺跡発掘調査報告書』1994 関西文化財協会
口野博史他「大田町遺跡第2次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』1994 神戸市教育委員会
東喜代秀他「大田町遺跡第5次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』1997 神戸市教育委員会
- (30) (10)に同じ 松林宏典「須磨天神町遺跡第2次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』2001 神戸市教育委員会
- (31) (11)に同じ
- (32) 丸山潔編『住吉宮町遺跡第11次調査』1990 神戸市教育委員会
- (33) 谷正俊編『日暮遺跡発掘調査報告書』1989 神戸市教育委員会
- (34) (6)に同じ
- (35) (21)に同じ
- (36) (23)に同じ
- (37) 菅本宏明『神楽遺跡発掘調査報告書』1981 神戸市教育委員会
- (38) (29)に同じ 墨書き土器については(13)参照

註 図中の山陽道推定ルートは、足利健亮、吉本昌弘両氏の復元ルートを基に、谷が作図を行った。作図にあたって、以下の文献を参考にした。

- 足利健亮「山陽道の歴史地理的考察」『歴史の道調査報告書 第2集 山陽道(西国街道)』1992 兵庫県教育委員会
「摂河泉の古代道路計画」『日本古代地理研究』所収 1985 大明堂
吉本昌弘「摂津国八部、菟原両郡の古代山陽道と条里制」『人文地理』第33巻 第4号 1981
「播磨国明石駅家・摂津国須磨駅家間の古代駅路」『歴史地理学』128号

第4節 調査にいたる経緯と経過

1. 調査にいたる経緯

御蔵遺跡は、神戸市長田区御蔵通4・5・6・7丁目に位置する。この付近は、神戸市域でも明治以降、急速に市街地化が進み、人口密集地帯であったため、遺跡の分布状況は不明確な地帯であった。

平成2年に御蔵通4丁目の地域福祉センター建設に伴う発掘調査で、当遺跡の存在が知られるようになつたが、その後調査が行われず、その範囲や性格が明らかにできないまま、時が経過していった。

平成7年1月17日に起こった阪神・淡路大震災は、神戸市須磨区から東灘区にかけての市街地にとりわけ甚大な被害を与えた。その中でも長田区は被害の著しい地域であり、地震時の振動による家屋の倒壊とその後の火災によって多数の死傷者と夥しい家屋の損失を生じた。御蔵通とその南にある菅原通周辺も例外でなく、約9割の建物が倒壊、焼失の被害に遇ったという。

神戸市は、震災からの早期復興と、安全で快適な街づくりを行うため、平成7年3月には御菅地区震災復興土地区画整理事業として都市計画決定を行い、速やかな復興を目指した。

被災した市民に、すみやかに再びもとの生活を送っていただくための復興事業に際して、埋蔵文化財の分布状況の不明確な地区については、試掘調査を早急に行い、御蔵遺跡は、約8.9haの面積があることが判明した。

調査面積が膨大で、しかも迅速な調査が要求されたため、神戸市教育委員会だけでは対応することができず、文化庁の働きかけで、兵庫県、全国の都道府県、政令指定都市からの職員の応援を得て、これに対応することが可能となった。

区画整理事業に伴う街路整備や震災復興集合住宅建設、個人住宅の再建と並んで、御菅地区で懸案となつたのは、国道28号線の拡幅事業である。JR神戸駅付近から、市街地の中央を西に延び、長田神社付近で南に折れ、御蔵遺跡をほぼ南北に縦断するこの国道は、山手幹線と国道2号線を結ぶ大動脈であり、震災前からその拡幅事業が徐々に行われてきていた。ところが震災復興の区画整理事業の進捗に伴い、拡幅事業も加速化し、それに伴う埋蔵文化財調査も順次実施されることになった。

2. 調査の経過

国道28号線拡幅に伴う発掘調査は、平成11年度より行われ、平成14年度をもって完了した。

調査は、平成11年度～13年度は新しく歩道を設置する部分（道路東側）の調査が行われ、平成14年度には、共同溝設置部分（道路西側）と旧歩道部分（車道拡幅部分）の調査を行つた。旧歩道部分は当初、現道とみなされ、調査の対象外であったが、平成14年度の段階で関係部局との折衝の結果、急遽、調査を実施した。

歩道設置部分の調査は、家屋解体の完了した段階あるいは、セットバックして新たに建築される建物の工程を見計らいながら、実施した。そのため、各年度による調査位置にはばらつきがある。

3. 調査次数について

神戸市内における埋蔵文化財発掘調査については従来より、調査着手順に調査次数が付されてきた。これに基づき、神戸市教育委員会発行の『神戸市埋蔵文化財年報』では、その次数を掲載してきた。ところが、平成12年度より調査次数に関し、整理、改訂したため、過去に遡つて次数の変更が必要となり、従来の次数番号を廃し、改めて「新次数」が付されることとなった。このため、平成12年度以前の調査については、「旧次数」と「新次数」の対照が必要となっている。本書では、以下「新次数」で記述を行なう。なお、記録写真、図面、遺物収納コンテナラベル、遺物への注記等はすべて「旧次数」が付されている。調査次数については、別表を参照いただきたい。

調査新次数	調査旧次数	調査期間	調査面積	調査担当者	調査地住所	備考
26-1次	31-1次	H.11.10.13~10.20	24m ²	佐伯二郎	御藏通4丁目	
26-2次	31-2次	H.12.2.14~2.19 2.23~3.2	75m ²	口野博史	〃	
37-1次	37-1次	H.12.5.29~6.8	65m ²	口野博史	〃	遺物注記は36次調査
37-2次	37-2次	H.12.8.24~9.5	45m ²	阿部功	〃	
37-3次	37-3次	H.12.9.25~9.28	32m ²	井尻格	〃	
37-4次	37-4次	H.12.10.24~11.7	53m ²	井尻格	〃	
45次	45次	H.13.5.25~7.9	121m ²	谷正俊	〃	
51-1次	51-1次	H.14.8.26~9.26	163m ²	谷正俊	御藏通5丁目、菅原通5丁目	
51-2次	51-2次	H.14.9.30~10.18	243m ²	谷正俊・池田毅	御藏通4丁目	

fig.4 国道28号線拡幅事業に伴う埋蔵文化財調査次数対照表

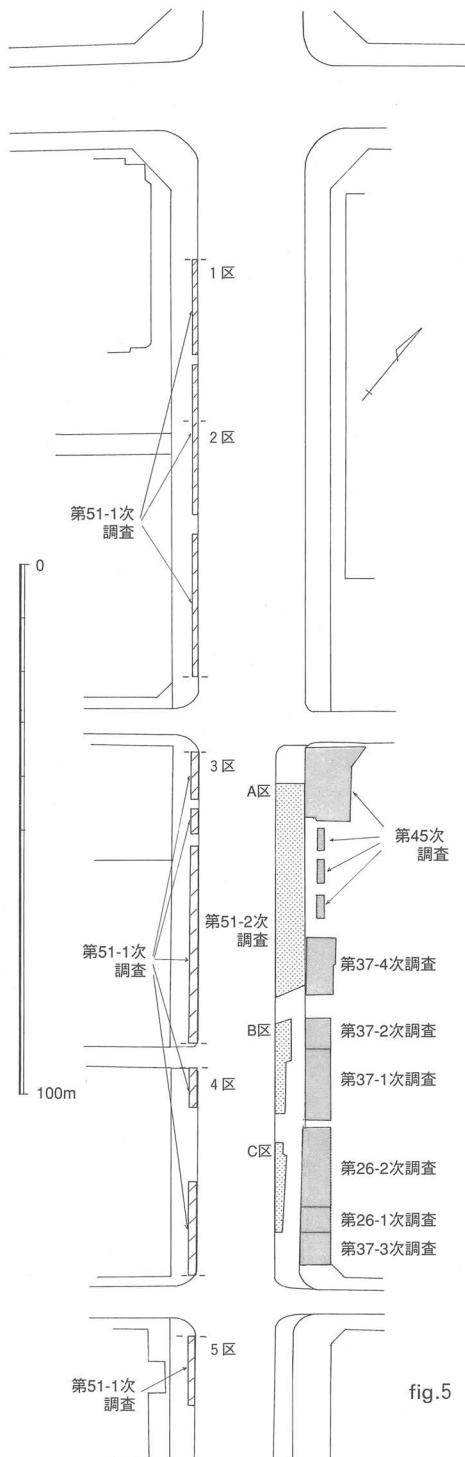


fig.5 調査区配置図

第5節 調査体制

発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導のもと、以下の組織で実施された。

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当（平成11年度～14年度）

檀上重光 前神戸女子短期大学教授

工渠善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
教 育 長	鞍本昌男	木村良一	同左	西川和機
社会教育部長	水田裕次	同左	岩畔法夫	同左
文化財課長	大勝俊一	同左	桑原泰豊	同左
社会教育部主幹	奥田哲通	同左	同左（～8月）	
同		渡辺伸行	同左	同左
同			宮本郁雄（1月～）	同左
埋蔵文化財係長	渡辺伸行			
埋蔵文化財調査係長		丹治康明	同左	同左
文化財課主査	丹治康明	宮本郁雄	同左（～12月）	
同	丸山 潔	同左	同左	同左
同	菅本宏明	同左	同左	同左
同			千種 浩	同左
事務担当学芸員	東喜代秀	山口英正	斎木 巍	内藤俊哉
同	井尻 格・藤井太郎			
遺物整理担当〃	平田朋子	谷 正俊	黒田恭正	関野 豊
保存科学担当〃	千種 浩	同左		
同	中村大介	同左	同左	同左
(財) 神戸市体育協会	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
会 長	笠山幸俊	同左	同左	矢田立郎
副 会 長	田村篤雄	鞍本昌男（専務理事事務取扱）	同左（会長職務代行）	鞍本昌男
常務理事	中野洋二		梶井昭武	同左
同	静観圭一	同左		
総務課長	村田孝政	前田豊晴	同左	谷川博志
総務課主幹	中西光男			
総務課主査（兼務）	丹治康明		丸山潔・菅本宏明	同左
事業係長		瀬田吉則		
事業係主査（兼務）		丸山潔・菅本宏明		
事務担当学芸員	斎木 巍	同左	川上厚志	池田 敏
調査担当〃	口野博史	同左	谷 正俊	同左
同	佐伯二郎	井尻 格		
同		阿部 功		

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査の方法

1. 調査の方法

国道28号線の拡幅に伴う発掘調査のため、調査地は御蔵遺跡東辺をほぼ南北に細長く縦断しており、第51-1次調査地以外は、御蔵通4丁目に集中している。

第1章第4節で記した通り、調査は区画整理の進行状況に応じて行われたため、調査地が作業工程に応じて細分化された。そのため、各調査地毎に国土座標第V系に基づく、基準点測量を実施し、周辺の調査との位置関係の整合性をとった。また、一部の調査では、クレーンによる空中写真撮影を実施し、遺跡の全容を探るための資料化を図った。

2. 基本層序

調査範囲が南北に細長く、複数の年度にわたって細分化された調査であるため、基本層序の層名が統一できていない。以下の各節では、それぞれの調査担当者の表記方法に基づき記載するが、標準的な層序と層名の概略を以下に記す。

- ① 表土・整地土層（瓦礫・腐植土等）
- ② 灰色～黒灰色系粘性砂質土（近代耕作土）
- ③ 黄褐色系粘性砂質土（床土、旧耕作土）
- ④ 灰色～灰黃褐色系粘性砂質土（中世耕作土）
- ⑤ 北端部：黒褐色系粘質土（遺物包含層）

南半部：暗褐色系粘質土（シルト）（ヶ月）

あるいは、遺物包含層が消失している部分もある。

- ⑥ 黄色～黄灰色系の砂質土（シルト）（遺構検出面）

表土から遺物包含層上面までは50～80cm程度、遺構面までは60cm～1mほどで達する。

3. 遺構分布

遺構の分布について概観すると、北西方向に遺構が集中し、南東方向に下がるにつれて、密度が低くなっている。これは、第1章第1節の項で述べたように、当遺跡が苅藻川（新湊川）の自然堤防上に沿って立地しているため、微高地にあたる部分には遺構が集中し、それから外れていくと、遺構の密度が下がることを現している。遺跡の中心は、本書掲載の調査地から北西側に拡がることがこれまでの調査例から明らかになっている。

4. その他

本報告に記載された調査は、足かけ4年に及ぶ期間を持って完了しており、周辺の調査の進展に伴い、その間に明らかになった点も多くある。このため、発掘当初段階の小結の所見と第4章のまとめの記述とは、若干異なる部分を生じていることをご了解いただきたい。

また、遺物の記述について土器の器種名は概ね、古代の土器研究会編『古代の土器1～4・都城の土器集成I～III、煮炊具（近畿編）』に準拠した。また、他の遺物については、別途、参考文献を提示した。

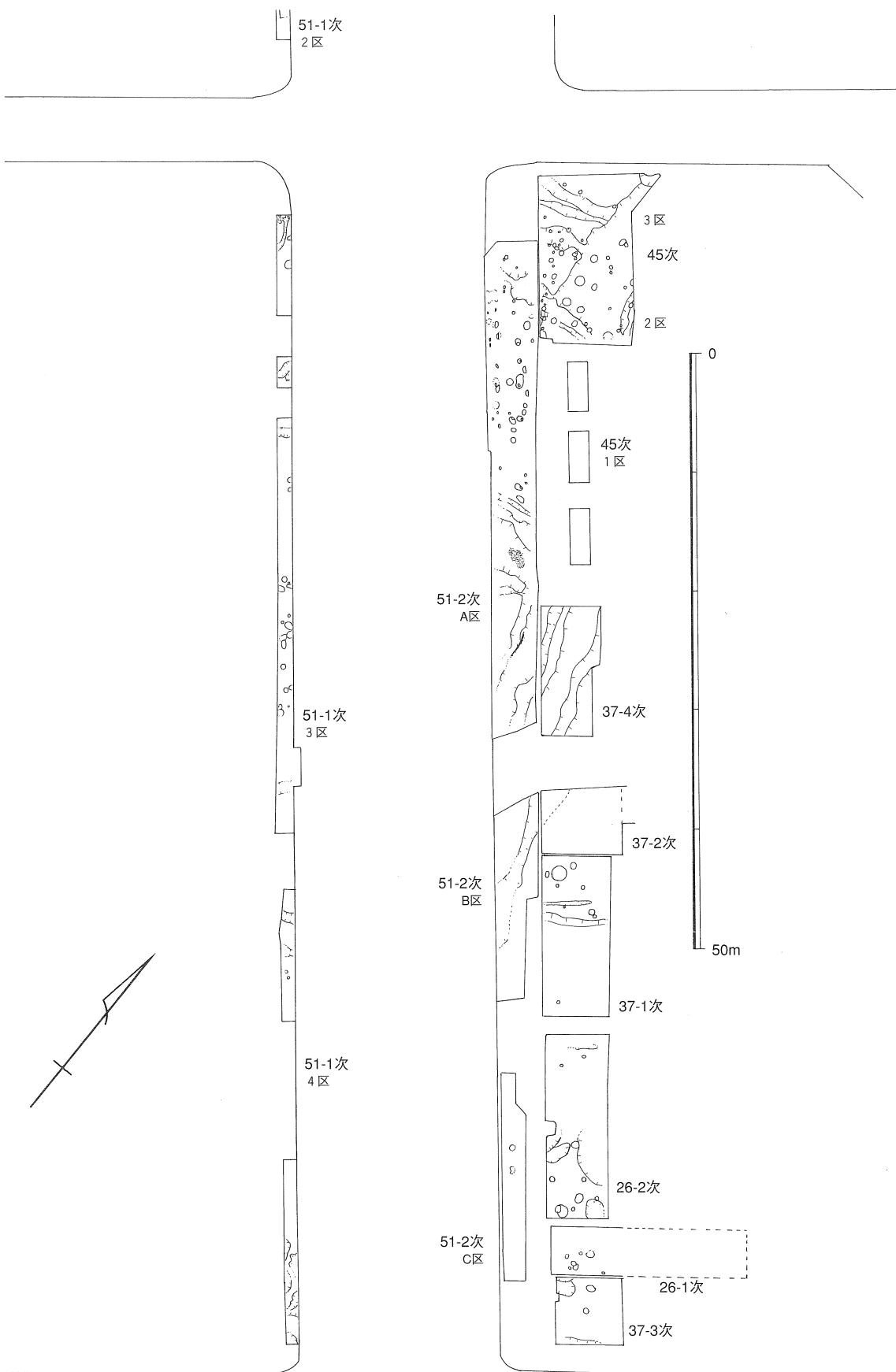


fig.6 遺構集成図

第2節 第26-1次調査

1. 調査の概要

調査は、遺物包含層上面までを機械で掘削し、以下の遺物包含層掘削、遺構面検出、遺構精査、遺構掘削などは人力で行った。また、掘削残土は都市計画局用地に仮置きし、調査終了後に埋め戻しを行った。

2. 基本層序

基本層序は、表土・整地層、灰色粘性砂質土（耕作土）、黄褐色粘性砂質土（床土）、灰黃褐色粘性砂質土（中世頃の耕作土）、黒褐色粘性砂質土（遺物包含層）、黄灰色粘性砂質土（遺構検出層）である。遺構面はほぼ水平である。現地表は標高5.1mで、遺構面は標高4.4mで検出する。

3. 検出遺構

調査区の北半は、建物基礎などにより遺構面以下まで掘削が及んでおり、遺物包含層・遺構面は残存していなかった。南半はそうした影響がほとんどなく、比較的良好な遺構面を保っていた。

検出した遺構は、土坑、ピット、落ち込みなどである。ピットは、平面形が円形のものと、方形のものが存在する。円形のピットは径30cm程度である。方形のピットは概ね50×30cm程度であり、深さは10cm未満と浅い。周辺調査地で検出された掘立柱建物の軸方向に整合するピット列も存在するが、建物としての確認には至らなかった。落ち込みは、不定形で深さは10数cmである。

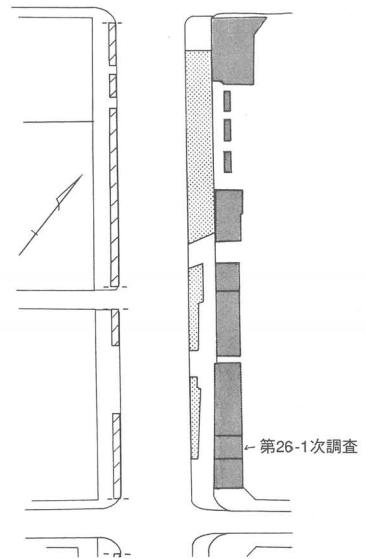


fig.7 第26-1次調査位置図

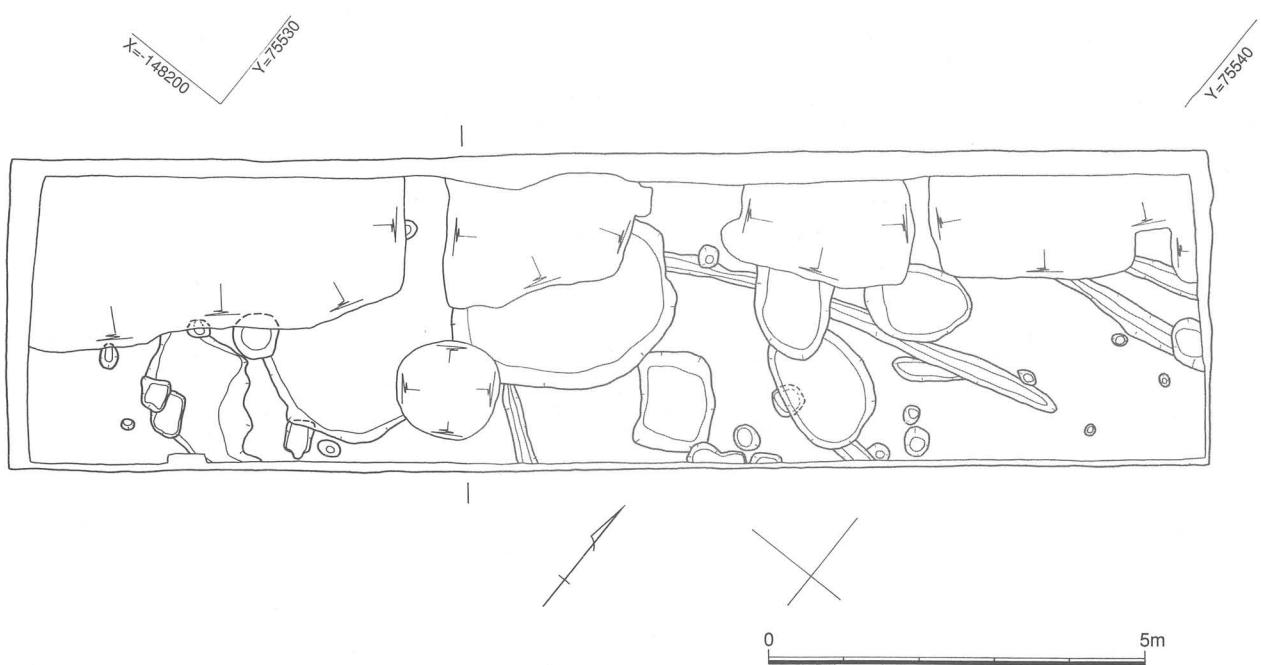


fig.8 第26-1次調査区平面図 (トーンの薄い部分は第25次調査区)

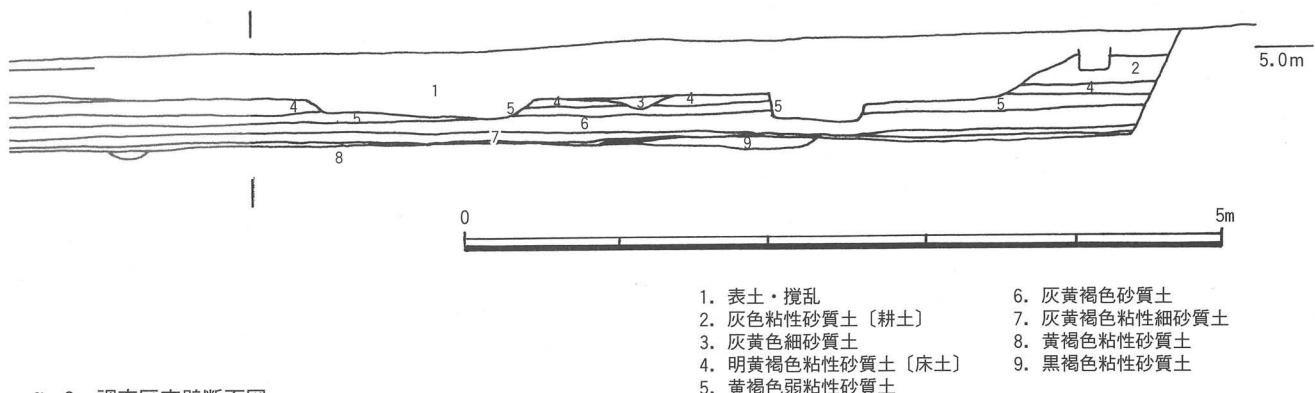


fig.9 調査区南壁断面図

4. 出土遺物

遺物は、遺物包含層や遺構から飛鳥時代～平安時代の遺物が出土したが、いずれも小片であり、実測可能であったものは、以下の2点である。1は須恵器壺である。肩がやや張りぎみで、短い頸部を有する。胴部より下は欠失しており、不明である。色調は明灰色を呈する。8世紀前半頃の遺物と考えられる。2は灰釉陶器である。三日月状の高台を有し、胴部は直線状に立ち上がる。黒窯90号窯式の中に納まると思われる。いずれも旧耕作土層出土であり、遺構に伴うものではない。

5. 小結

今回の調査では、飛鳥時代～平安時代の土坑、ピットなどを確認した。ピットは、何基か検出したが、調査区の制約のため、掘立柱建物としては不明確である。遺物包含層はほとんど無く、各遺構も浅いため、削平を受けているものと思われる。また、遺構基盤層は軟弱であり、遺構面としては良好な状態ではない。出土遺物が小片のため、詳細な時期決定はしがたいが、飛鳥時代～平安時代の建物配置や微地形なども、周辺での調査によって、より明らかになるものと思われる。

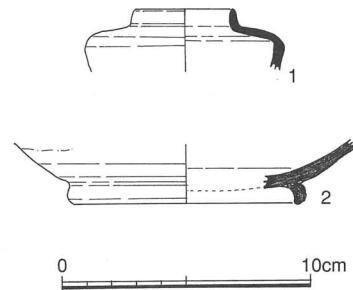


fig.10 第26—1次調査出土遺物



fig.11

第26—1次調査 調査前の状況

第3節 第26-2次調査

1. 調査の概要

調査対象地は、東側の郵便局新築工事の都合から、北半と南半に分けて調査を行った。調査区全体は $5 \times 15\text{m}$ の大きさである。盛土等は重機で掘削を行い、以下の層は人力で調査を行った。

2. 基本層序

層序は現代盛土、旧耕土、黄褐色砂泥、褐灰色砂泥、(奈良時代～中世)、暗褐色砂泥(奈良時代遺物包含層)、灰褐色泥砂(遺構面)となる。以下の層は砂層の堆積層であった。遺構面の標高は4.5m程度である。

3. 検出遺構

北半部では、遺構面が損なわれた部分が多く、ピット2ヵ所と溝状遺構と思われる遺構が検出されたに止まる。

ピットは直径30cm、深さ10cmの浅いもので、2ヵ所とも遺物は出土しなかった。溝状遺構は、遺構面の残存する北端部で南側部分に当たる肩が検出された。溝状遺構と思われるが幅や深さは不明である。堆積土からは少量の土師器・須恵器が出土した。南半部では、ほぼ全面に遺構面が残存した。ピット12ヵ所と落ち込み状遺構4ヵ所である。ピットは概ね直径40～60cm、深さ20～40cmである。SP04、06、08は柱痕があり、一直線上にならぶため、建物の一部と考えられる。

他に柱痕をもつのは、SP07、12である。他のピットとしたものは浅いか、柱痕がない。

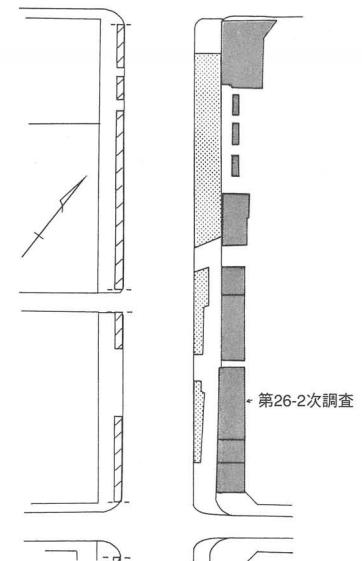


fig.12 第26-2次調査位置図

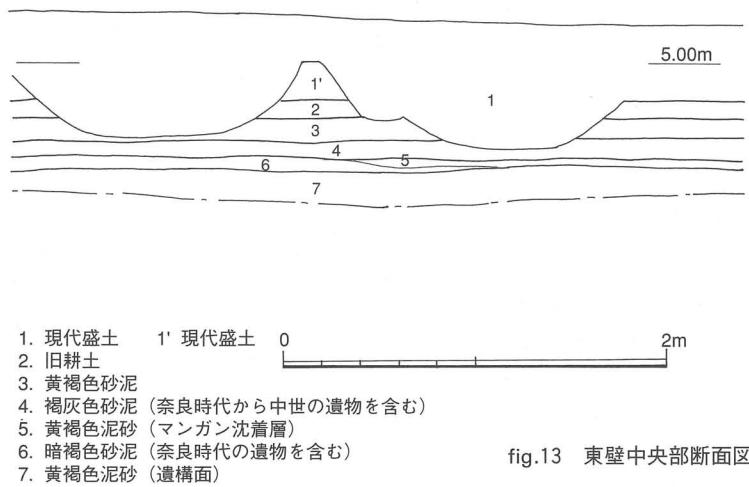


fig.13 東壁中央部断面図

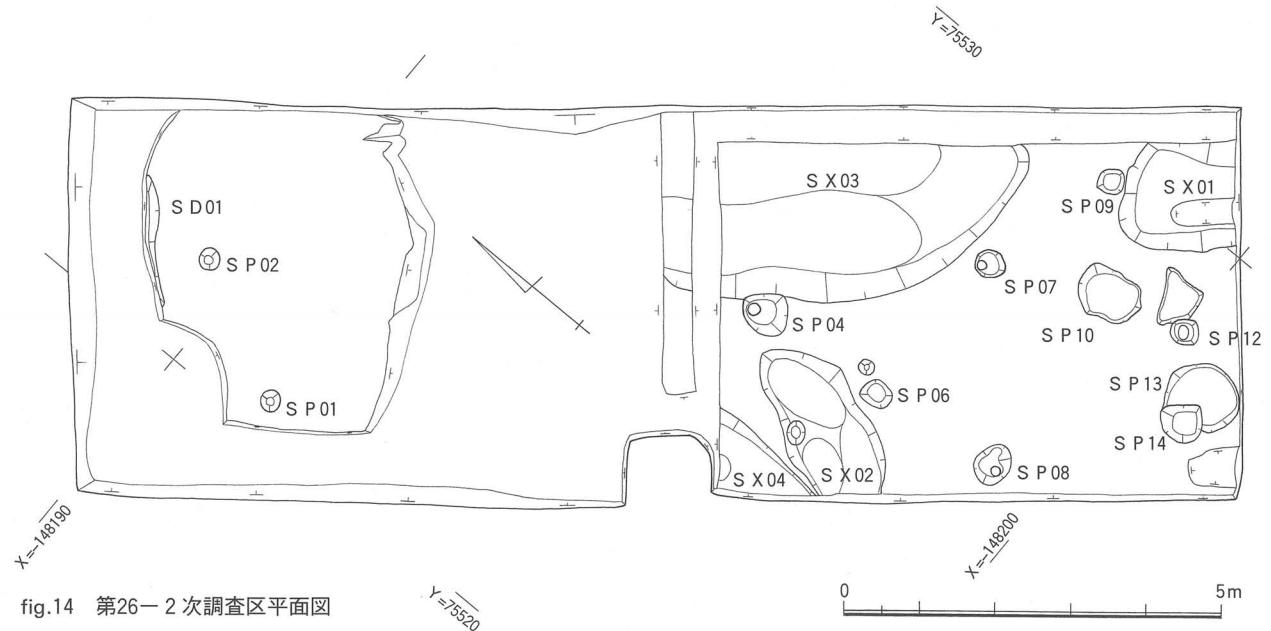


fig.14 第26-2次調査区平面図

落ち込み状遺構は、概ね深さ10~20cm程の深さで、規模等は調査区外に広がるため不明である。S X01とS X03の上面検出中にそれぞれ馬歯・猪歯と思われる動物の歯が出土した。

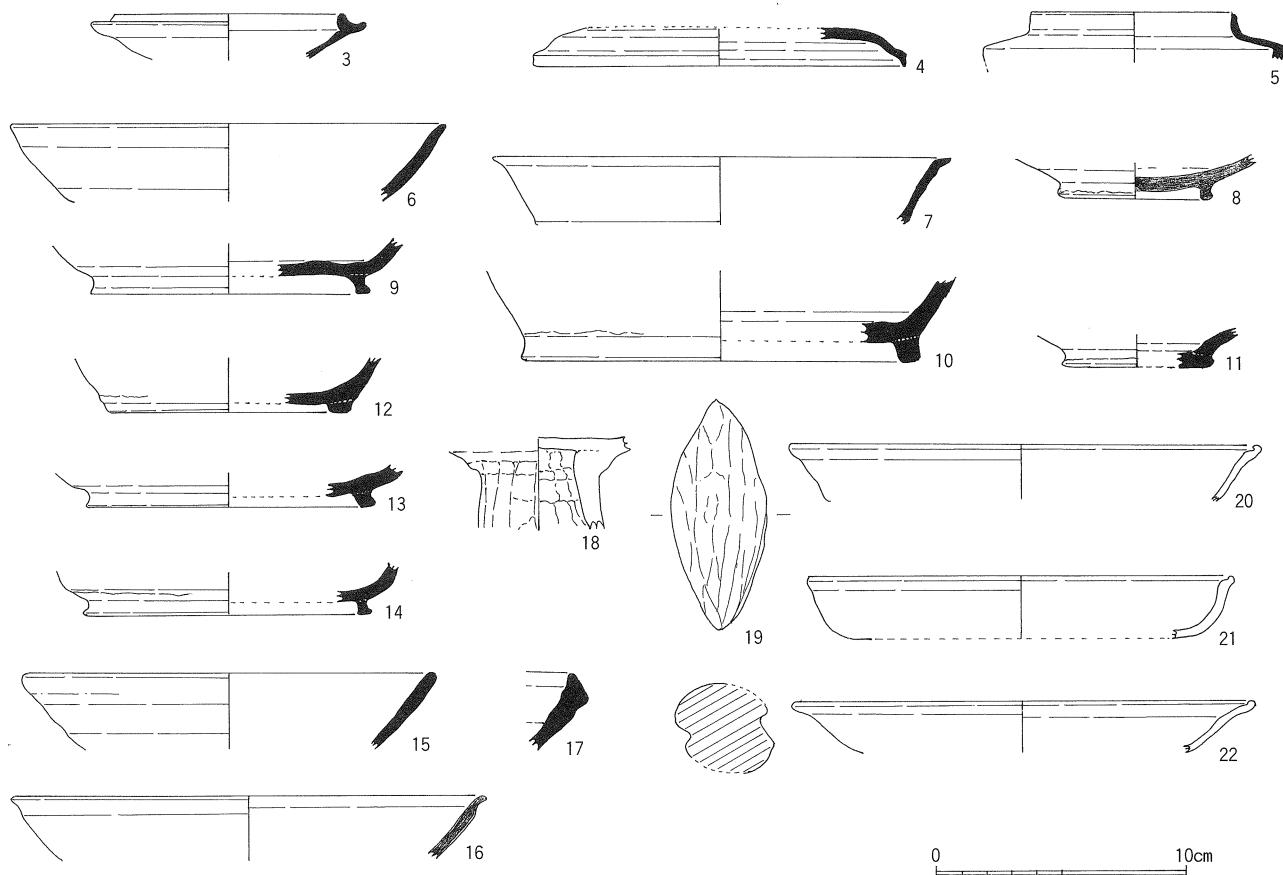


fig.15 第26-2次調査出土遺物 (19はS=1/2)

4. 出土遺物

28リットル入りコンテナで3箱分の遺物が出土した。

3~7、9~15、17は須恵器で、8は緑釉陶器、16は白磁、18、20~22は土師器、19は有溝土錘である。23、24は平瓦、23は須恵質、24は土師質である。3はS X02、14はS P14、22はS X01、その他は遺物包含層から出土しており、飛鳥時代~平安時代末の遺物である。

5. 小結

今回の調査で得られた資料は断片的なものであるが、周辺の調査成果を合わせると、国道28号線を挟んだ区域に奈良時代の掘立柱建物群が検出されている。掘立柱建物の方針は現在の街割りと異なり、真北方向に近い方針をとるようである。

現在の街割りやこれに基づいて推論される条里地割と如何なる関係があるのか、また条里地割りの可否や成立の時期などを今後、考察されなければならない点であろう。

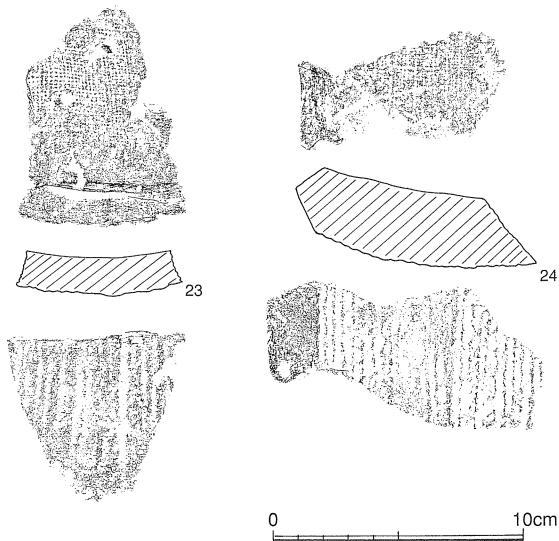


fig.16 第26-2次調査出土瓦

第4節 第37-1次調査

1. 調査の概要

バックホーで表土・盛土を除去後、人力により、遺物包含層・遺構検出と遺構掘削を実施した。また調査終了後埋め戻しを行った。

調査区は5×13mの方形の区画で、調査区を北半と南半に分けて遺物の取り上げ等をおこなった。また、一部の調査では、クレーンによる空中写真撮影を実施し、遺跡の全容を探るための資料化を図っている。

2. 基本層序

層序については、東壁中央部について述べる（断面図参照）。現代盛土層と搅乱・旧耕土・黄色砂泥・灰色泥砂（遺物包含層）・黄褐色混礫泥砂（遺構面）となる。

3. 検出遺構

検出された遺構は井戸状遺構・溝状遺構・落ち込み状遺構・ピットである。井戸状遺構（S E01）は直径1.3m、深さ50cmの円形の遺構で、土師器・須恵器・青磁が少量出土した。井戸状遺構は包含層上面から検出され、他の遺

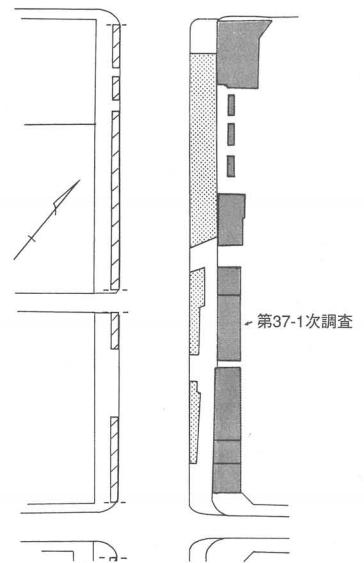


fig.17 第37-1次調査位置図

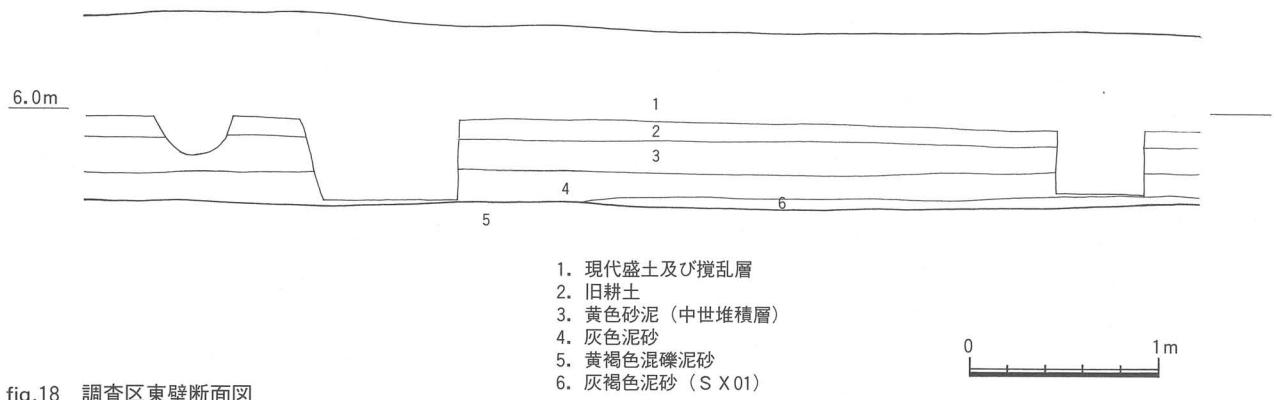


fig.18 調査区東壁断面図

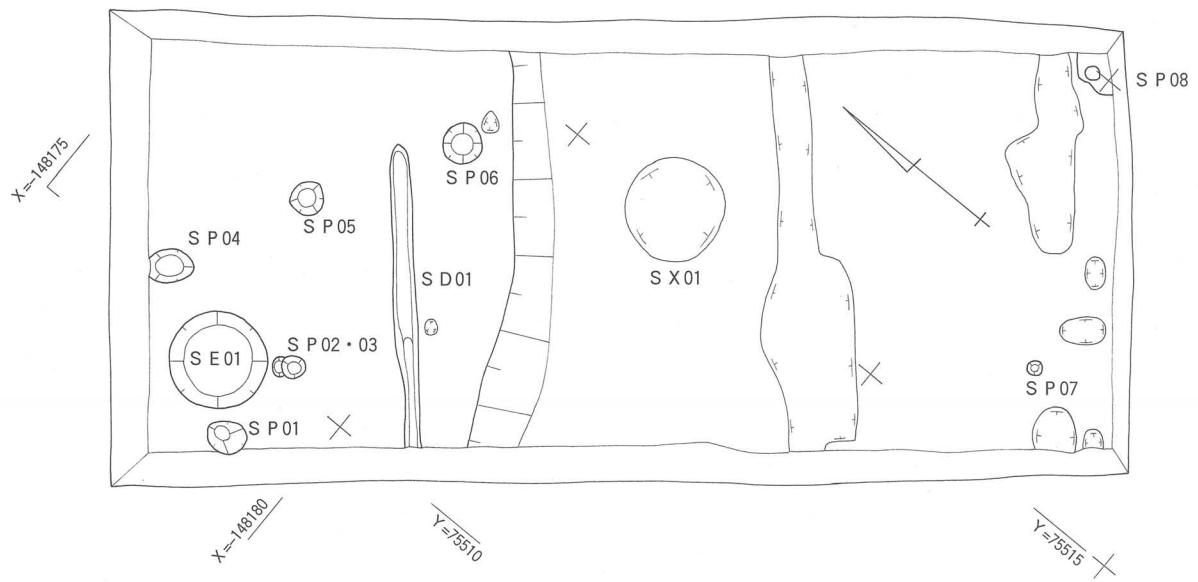


fig.19 第37-1次調査区平面図

構より時期的には新しいものと考えられる。

溝状遺構（S D01）は、幅20cm、深さ5cmの規模で、微量の土師器・須恵器が出土した。

落ち込み状遺構は南へ下がる遺物を多く含む堆積層である。南半は攪乱が多く、また前年度の調査区等などへの連続性は不明である。奈良時代から平安時代かけての土師器・須恵器が多量に出土したが施釉陶器類はほとんどなかった。

ピットは8基検出された。S P02、03、07は直径10~20cm、深さ20cm程の規模の小さいものである。S P01、04、05、06は直径50~60cm、深さ20~30cmである。S P04、05、06は直線上に並び、S P01との組み合わせが考えられ、周辺の精査、断ち割りなどを行ったが、他のピットは検出されなかった。これらのピットから奈良時代から平安時代かけての土師器・須恵器が少量それぞれ出土した。

S P08は調査区南東隅部で検出された柱穴である。柱痕があり、深さ50cmである。少量の土師器・須恵器が出土した。前年度調査区などへの広がりは、南側に攪乱が多く、遺構が損なわれており不明である。

4. 出土遺物

遺物包含層からは28リットル入りコンテナに2箱出土した。土師器・須恵器・灰釉陶器・青磁・白磁・獸齒などである。遺物は概ね奈良時代から平安時代の遺物がその大半を占めるが、鎌倉時代に属する遺物も散見される。遺物はいずれも小破片のものが多い。

25~29、32、34、36~47、49~51、56、57は須恵器である。25は、壺で、胴部下半に叩き目を残す、26は壺身で、短い立ち上がりを有する。27は蓋壺で、口縁端部内面に短いかえりがある。宝珠つまみの形状は欠損しており不明である。これらは飛鳥時代の土器である。

28、29、32、49は、壺蓋で、28以外は扁平なつまみを有する。34は短頸壺で、おそらく薬壺であろう。8世紀後半のものと考えられる。36、38は壺Bで、やや高い高台をつけるものと、四角い高台を有するものがある。39は壺Aで火襷が内外面に顯著に現れる。42、56は皿A、37、41、43は碗で、底部の残存しているものは回転糸切りの痕跡が残っている。47は壺の底部から胴部であるが、削りだした断面四角形の高台を持つ。57は壺Lで8世紀後半ぐらいのものである。

44~46、50は捏鉢で、44は口縁端部を片口に作る。平安時代末~鎌倉時代前半ごろの東播磨の製品である。35、52、55は土師器で、35は回転ヘラ切りを行った底部外面に、ヘラ状工具で記号を刻む、52は口縁端部が「ての字」状に屈曲している。55は口縁部内面に浅い段を有する。

30は白磁碗で、玉璧状の高台を持ち、底面と畳付部に釉を施していない。形状からみて、定窯系白磁と考えられる。31は緑釉陶器で、硬質の胎土に淡緑灰色の釉を回転糸切りの底部まで施す。

33は灰釉陶器皿で、断面三日月形の高台を有し、口縁端部がわずかに屈曲する。およそ9世紀前半のものと推定される。

48は青白磁合子蓋で、型押しによって花弁を表す。53、54は青磁で、53は櫛描きで外面は複数の平行な直線、内面には花弁状の文様を施す。同安窯系の小碗である。54は青磁の盤で、深い緑色の釉が厚くかかる。内面には細かい花弁をヘラ状の工具で施す。14世紀代の龍泉窯系の製品であろう。

58~62は土錘である。58は有溝土錘、59から61は棒状有孔土錘で、いずれも折損している。62は環状土錘である。25~48、54、58、60、62は遺物包含層（灰色泥砂）、49~53、59はS X01、55、57はS P01、56はS P05、61は黄色砂泥層から出土している。

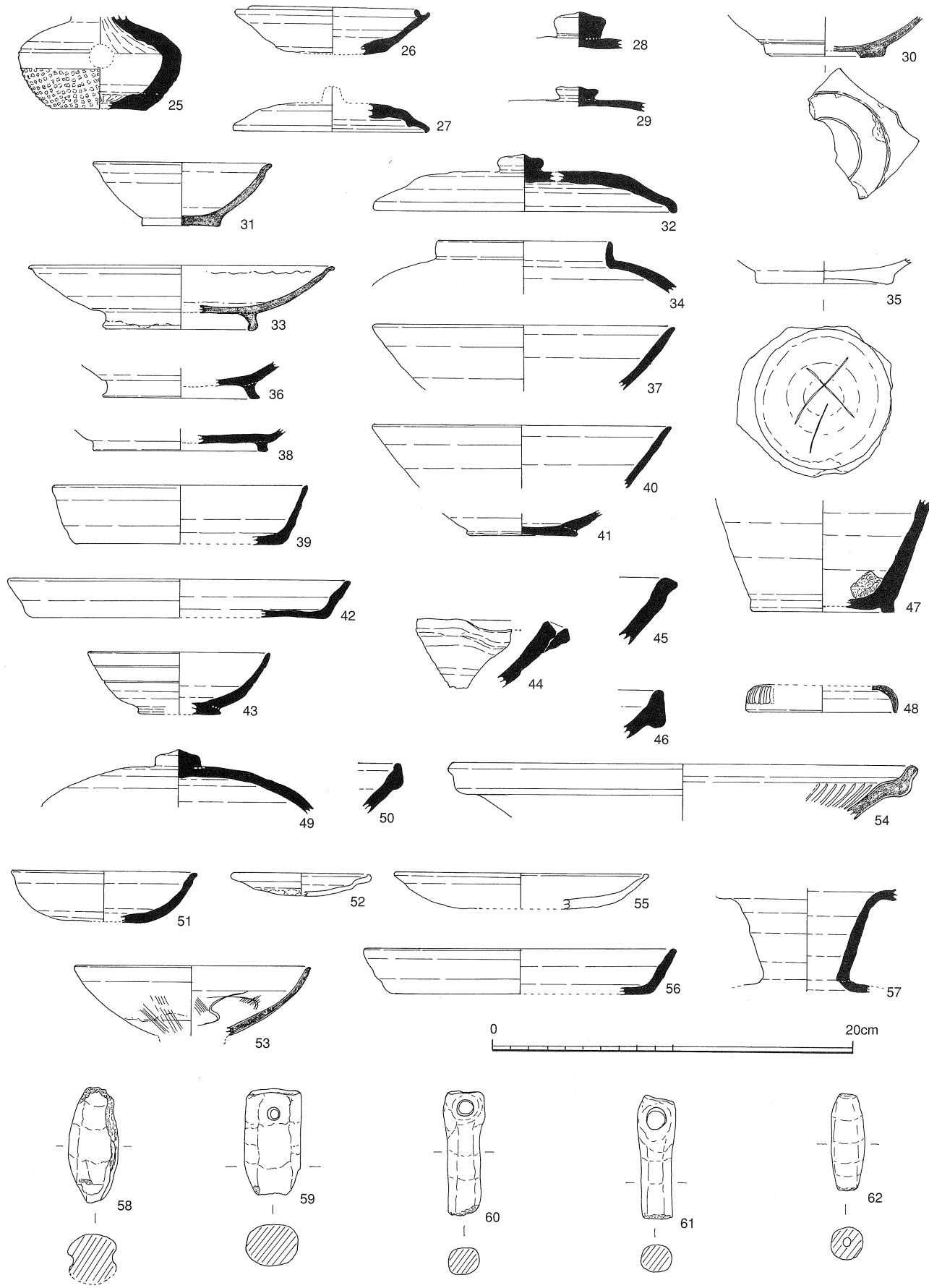


fig.20 第37-1次調査出土遺物

5. 小結

当調査地にも奈良時代から平安時代かけての遺構面の広がりが確認された。これまでの調査の成果から当調査地の東側には柱穴群が広がることが考えられる。

多量の遺物の出土は、当時の生活での消費が大きかったことを物語り、多数の人口の存在が想起される。また出土遺物に獣歯とりわけ馬歯が存在する。これについても今後解明しなければならない課題であろう。



fig.21
第37-1次調査
状況



fig.22
クレーンによる
写真測量

第5節 第37-2次調査

1. 調査の概要

第37-1次調査区の北側に隣接する調査区である。

表土及び旧耕土をバックホーにより掘削し、遺物包含層を人力掘削し、遺構面の検出と遺構検出のための精査作業を行った。

2. 基本層序

基本層序は近代から現代にかけての整地、盛土層の下層は旧耕土及び床土層であり、その下層が奈良時代～中世の遺物包含層である灰褐色粘質土（9層）である。この下層が遺構面を構成する暗灰黄色粘質土（14層）である。なお、調査区の西側では、流路状の堆積状態となっており、暗灰黄色粘質土は存在しなかった。

3. 検出遺構

遺構は検出されず、調査区の西半で砂とシルトが混在した流路状の落ち込みが確認された。この流路状の落ち込みは、調査区の西側に延びており、自然河川等が存在するものと推定される。

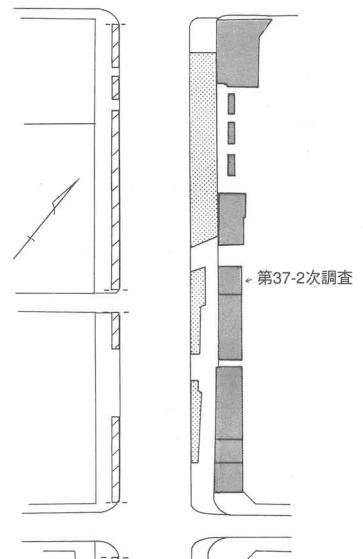


fig.23 第37-2次調査位置図



fig.24
機械掘削作業



fig.25
遺構検出作業

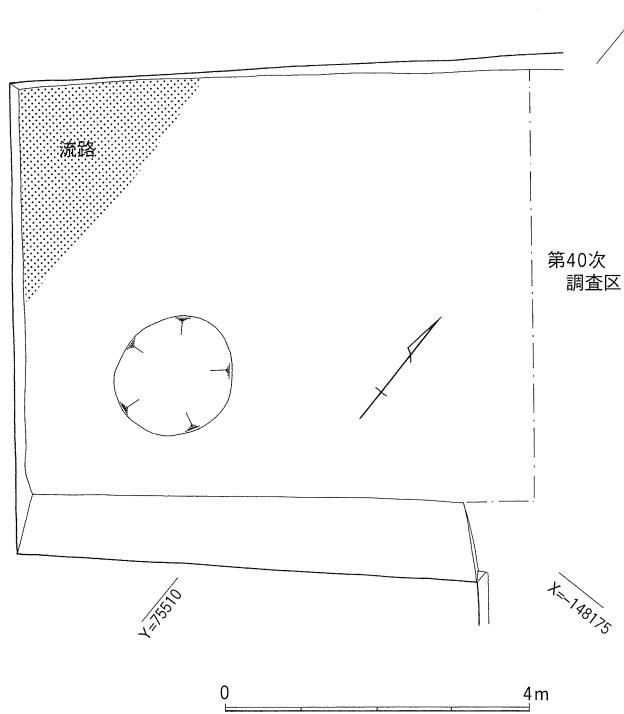


fig.26
第37-2次調査区
平面図

0 4m

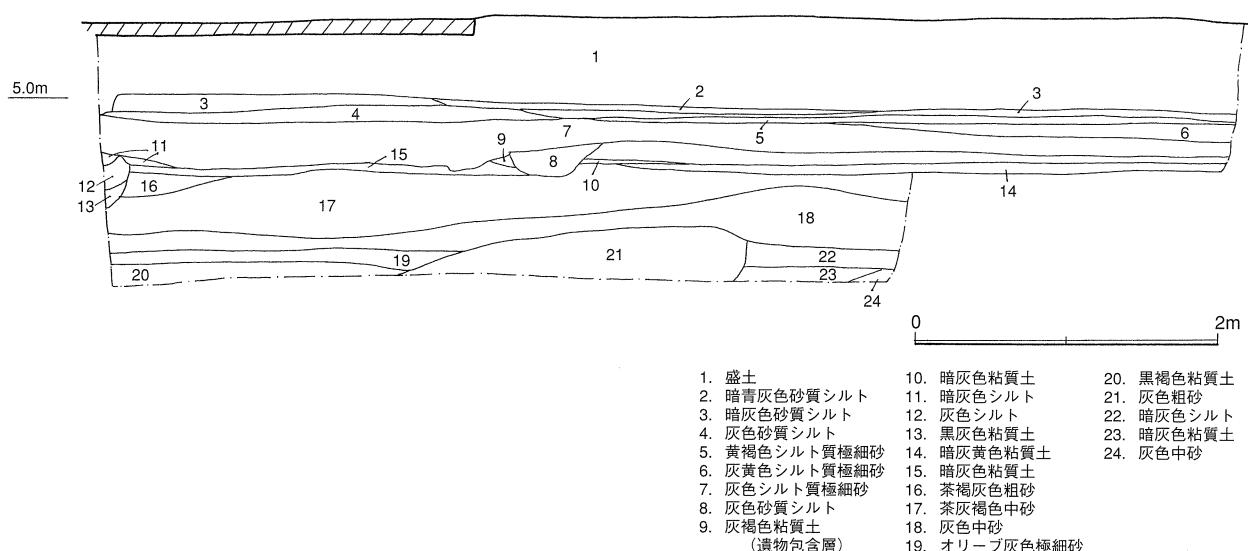


fig.27 調査区北壁断面図

4. 出土遺物

流路の肩付近では、埋土中から比較的まとまった量の奈良時代～中世にかけての遺物が出土している。

調査区の北端付近では遺構検出面上から金属製品（青銅製鎔帶）が出土した。

鎔帶は鉸具の部品であり、 $3.6 \times 4.4\text{cm}$ 、厚さ約7mmの長方形を呈する。表と裏金具の2枚の板金具に分かれ、鉢を裏金具から打ち込んで表金具を止めている。また、帯の留め具である軸棒を挟みこめるように、短い辺に切り込みがある。帯革を固定する外枠と刺金、軸棒は欠失している。

表面は腐食しているが、一部に黒漆状のものが残っている部分がある。

二枚にわかれた表金具と裏金具は、内側が若干くぼんでおり、その部分に糀殻・藁状のものが詰め込まれた状態で発見された。なぜ、そのようなものを入れるのかはよくわからない。帯革を挟んで固定するための緩衝材の役目があるか、または、帯革の形を整えるため、革の内側に挟み込んであったものが革の部分は腐食し、詰め物だけが遺存したのであろうか。類例がなく、今後の検討課題としたい。

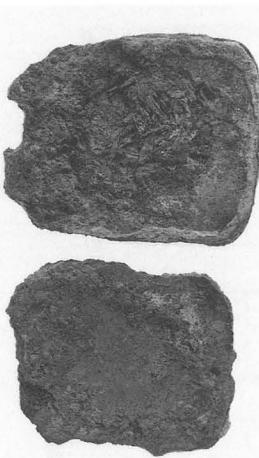


fig.28 鎔帶内面糀検出状況

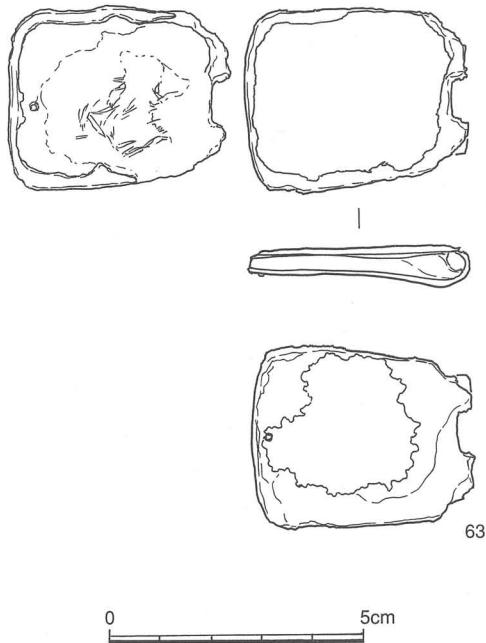


fig.29 第37-2次調査出土銙帶

遺物のほとんどは小破片のため、口径、底径数値は復元のものである。

64、65、68は須恵器の壊Aである。

64はヘラ切りの底部で直線的に外方へ立ち上がる体部からナデにより、やや外反するように口縁部を作り出している。口径は14.5cm、底径11.2cmである。底部外面にヘラ書きにより「×」の記号が描かれている。平安時代初め（9世紀前半）のものと考えられる。65、68は同じく、ヘラ切りの底部から直線的に外方へ立ち上がる体部である。68では口縁部下段にナデを施している。口径は12.8cm～13.6cmで、底径は8.0cm～9.4cmである。平安時代初め（9世紀前半）のものと考えられる。

73は壺の底部であろうか。貼り付け高台の接地面は内傾しており、わずかに内湾している。底径は5.3cmである。平安時代前半（9世紀中頃）のものと考えられる。

70、71、76、69は須恵器の壊Bである。70、71、69は共に、外反気味の高台を持ち、接地面はわずかに内湾している。69は底部からわずかに内湾しながら直立気味に体部が立ち上がる。口径は16.4cm、底径は8.8cm～13.0cmである。76は器高から壊とした。わずかに外反気味の高台を持つ。体部は直線的に外方に伸びる。口径は27.6cm、底径は22.0cmである。これらの壊は平安時代初頭頃（8世紀末～9世紀前半）のものと考えられる。

82は須恵器の鉢で、底部外面はヘラ切りである。平安時代前半（9世紀後半）のものと考えられる。

72は壺の口縁部で、口径は3.9cmである。平安時代半ば（10世紀代）のものと考えられる。

77は土師器の皿で、口縁端部は引き出すように作り出されている。口径は14.6cm。平安時代前半頃（9世紀後半）のものと考えられる。

80は須恵器の壊で、口縁端部は丸く収める。口径は16.0cm。平安時代末～鎌倉時代初頭（12世紀末～13世紀前半）のものと考えられる。

79と81は須恵器の片口鉢である。口縁端部は丸みをもつ。平安時代末～鎌倉時代初頭（12世紀末～13世紀前半）のものと考えられる。

78は灰釉陶器の段皿かと思われる。ヘラ切りの底部に貼り付けの高台が付く、高台は内湾気味で、外側を

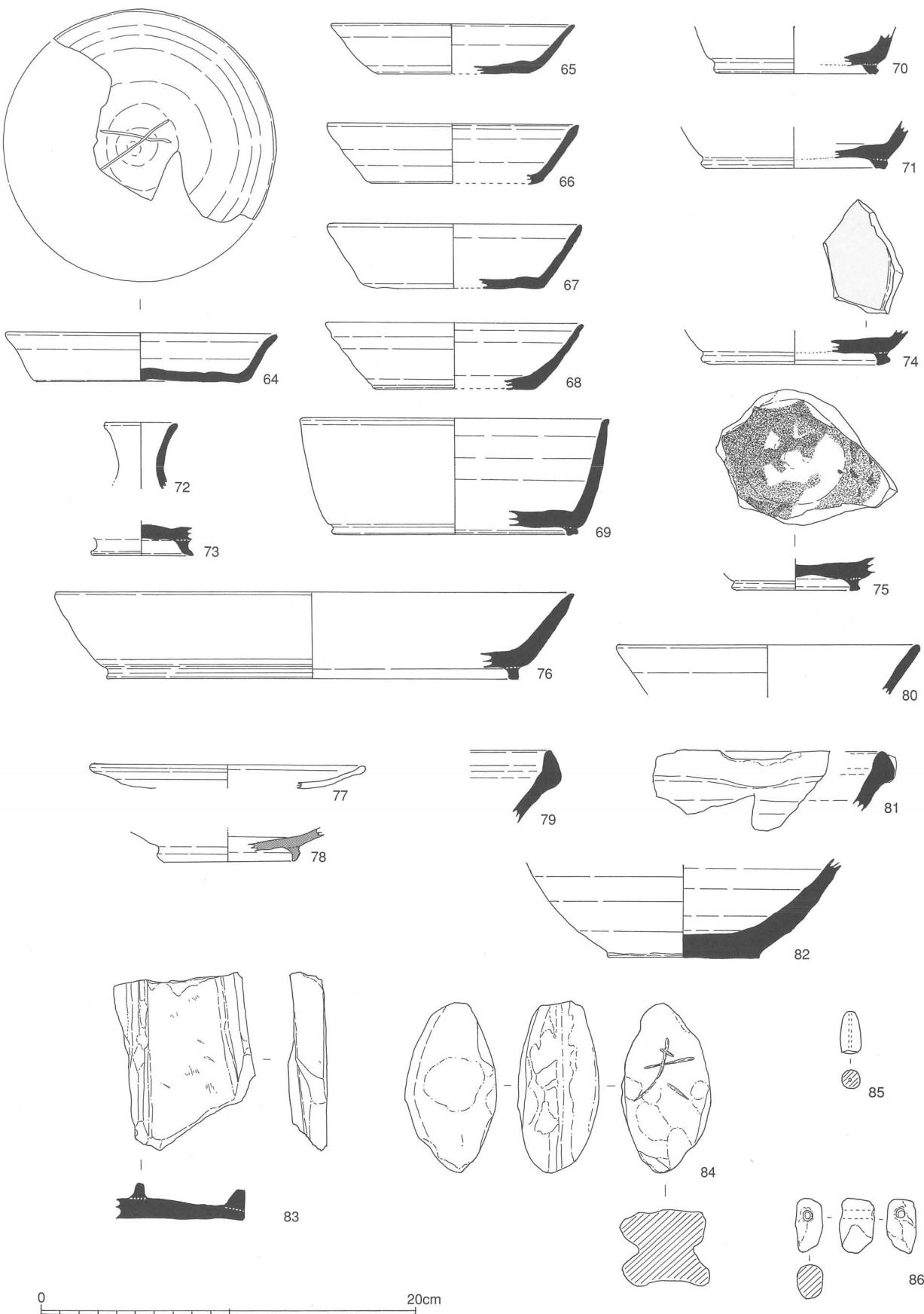


fig.30 第37-2次調査出土遺物

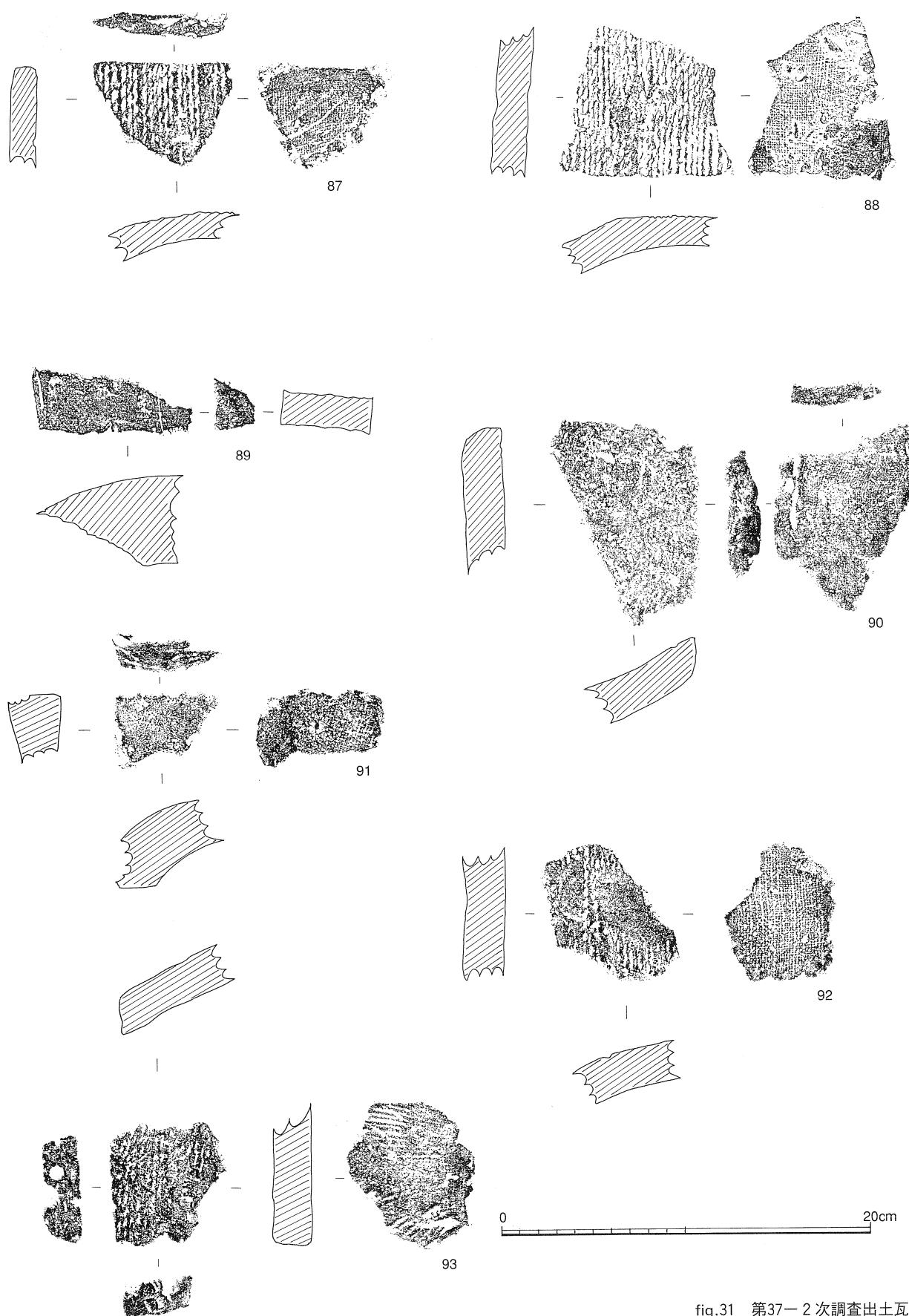


fig.31 第37－2次調査出土瓦

ケズリにより、断面は三日月状を呈する。底径は7.0cmである。平安時代前半（9世紀後半）頃のものと考えられる。

83は須恵器の風字硯である。海部中央に仕切りを持つもので、仕切りと陸部は貼り付けである。接合面の仕切り部の両端、陸部の海側は沈線状に窪む。陸部外面にはケズリを施す。海部は中央部から両端へ向かって緩やかに傾斜する。平安時代前半（9世紀中頃）のものと考えられる。

75は須恵器の壺Bの底部内面を用いた転用硯と考えられる。底部内面には墨痕と、墨を摺った擦痕が確認でき、底部内面の外周部を使用したものと推定される。壺Bの高台は内湾気味で、接地面がわずかに外方へ向く。底径は6.8cm。平安時代初頭（9世紀前半）頃のものと考えられる。

74は壺Bを転用した転用硯と考えられるが、墨痕は観察できない。底部内面は滑らかで、擦痕が観察できる。壺Bの高台は75と同様の特徴を示しており、ほぼ同時期と考えられる。底径は10.1cmである。

84は有溝土錘で、片側の外面に「大」もしくは「夫」の線刻がみられる。長さ9.0cm、幅は最大で3.8cmである。

86は棒状有孔土錘で、一部のみの残存である。最大径は1.9cmである。85は環状土錘で、半分を欠損する。最大径1.0cmである。

87～93は瓦である。87～89は須恵質。他は土師質である。

すべて、平瓦と考えられる。全体が窺われるものはない。大半が凸面は縄目タタキ、凹面が布目による仕上げである。中には、89のような両面ともケズリによる仕上げのものも含まれる。端面、側面はケズリで仕上げている。小破片であり時期の特定は困難であるが、概ね平安時代前半（9世紀代）と考えられる。

5. 小結

今回の調査では、遺構を確認することはできなかったが、遺物包含層中から奈良時代～中世にかけての比較的まとまった量の遺物が出土した。また、調査区の西半では砂とシルトが混在した流路状の落ち込みが検出された。調査区外へと続いているところから、今回の調査区の西側には自然河川等が存在するものと推定される。

参考文献

山本雅和編『深江北町遺跡 第9次 埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2002

森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」—神出古窯址群を中心に—『神戸市立博物館研究紀要』3 神戸市立博物館 1986

第6節 第37-3次調査

1. 調査の概要

バックホーにより表土・盛土及び旧耕土を除去後、人力により、遺物包含層・遺構検出と遺構掘削を実施した。調査終了後は埋め戻しを行っている。

調査地は第26-1次調査の南側にあたる幅5.6m、長さ5.7mの方形の調査区である。

2. 基本層序

現地表面以下の層序について、表土・盛土、耕土、床土、灰褐色粘性砂質土（中世耕土）、暗褐灰色砂質シルト（遺物包含層）、灰黄色シルト混じり砂（遺構面）となる。

現地表面から遺構面までの深さは約60cm、標高は約4.4mを測るほぼ水平な遺構面である。

3. 検出遺構

検出された遺構は、土坑、落込み状遺構、窪み状遺構である。

調査区北側の中央で検出された土坑（SK101）は、長さ70cmの楕円形で、fig.32 第37-3次調査位置図深さ約20cmの断面形状がU字形を呈している。なお、遺物の出土はない。

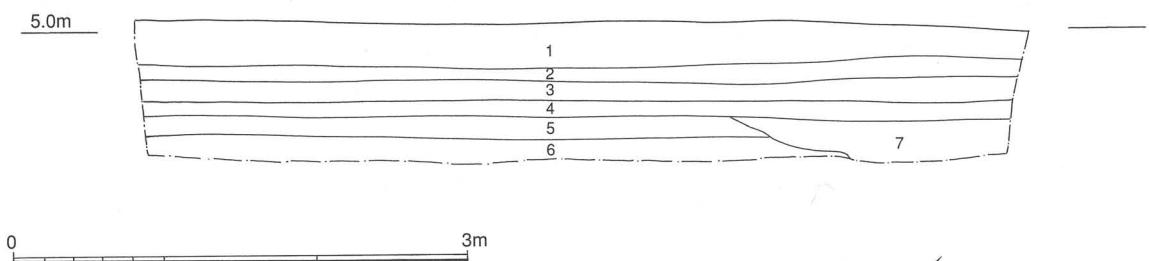
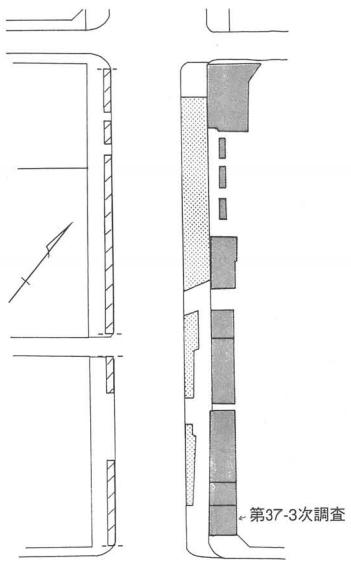


fig.33 調査区東壁断面図

調査区の南壁沿いで検出された落込み状遺構（SX101）は南側に落ちていくよう、最深部は約20cmを測るが、遺構の大半が調査区外であるため性格については判らない。

窪み状遺構（SX102～104）はいずれも深さが5～10cmと比較的浅い遺構である。これらの遺構は後世に削平された可能性もあり、遺物は出土しておらず、用途・性格については判らない。

4. 出土遺物

遺物の出土量は非常に少なく、須恵器・土師器の

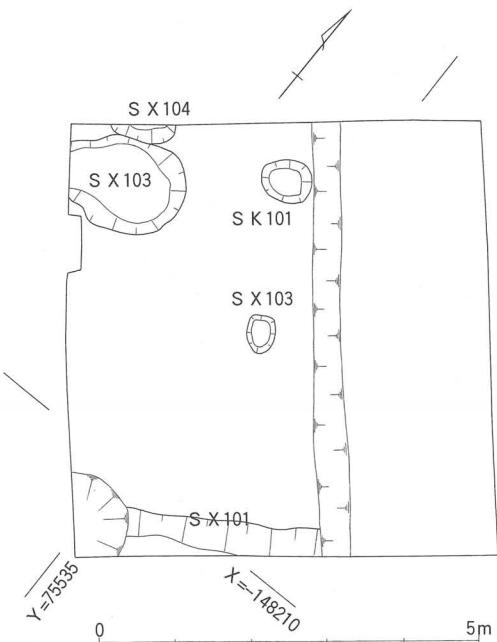


fig.34 第37-3次調査区平面図

細片が大半を占める。時期については、奈良時代から平安時代の須恵器・土師器、鎌倉時代頃の須恵器も出土している。

5. 小結

遺構内から時期を特定できる遺物が出土していないため、この遺構面の正確な時期については特定できないが、隣接地の調査結果を参考にすれば、飛鳥時代から平安時代にかけての遺構面となる。調査地は現在考えられている御蔵遺跡の南端に位置する。遺構面自体はかなり軟弱であり、遺物・遺構の検出具合から考えると、南側への遺跡の拡がりは少ないと思われる。



fig.35
遺構検出作業



fig.36 調査地遠景

第7節 第37-4次調査

1. 調査の概要

バックホーにより表土・盛土及び旧耕土を除去後、人力により、遺物包含層・遺構検出と遺構掘削を実施した。調査地は、第37-2次調査の北側にあたり、幅4.4~5.0m、長さ11.3mの長方形の調査区である。

2. 基本層序

現地表面以下の層序について、表土・盛土、耕土、床土、暗灰褐色砂質シルト（遺物包含層）、暗褐灰色砂質シルト（第1遺構面）、灰色シルト混じり砂（第2遺構面）の順となる。

遺構面は2面確認され、現地表面から第1遺構面までの深さは約70cm、遺構面の標高は約4.9mを測る。第2遺構面までの深さは約1m、遺構面の標高は約4.6mを測っている。そして、遺構面は南の方向に向かって緩やかに傾斜している。

3. 検出遺構

遺構は、奈良時代～平安時代の遺物包含層である暗褐灰色砂質シルト層から切り込む溝（SD101）を検出した。そして、暗褐灰色砂質シルトを除去すると第2遺構面上で溝1条（SD201）と落込み状遺構（SX201）を検出した。

灰色シルト混じり砂の遺構面で検出されたSX201は東側に向かって緩やかに傾斜している。ただ、



fig.38 SX201遺物出土状況

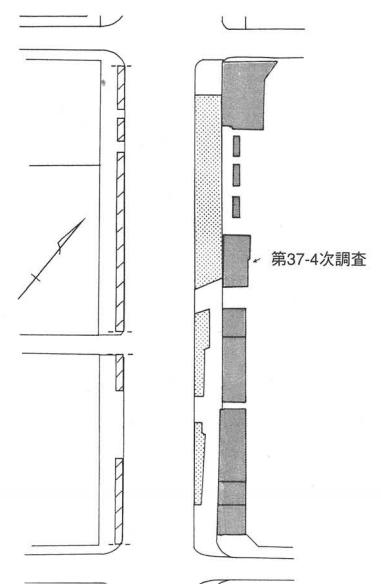


fig.37 第37-4次調査位置図

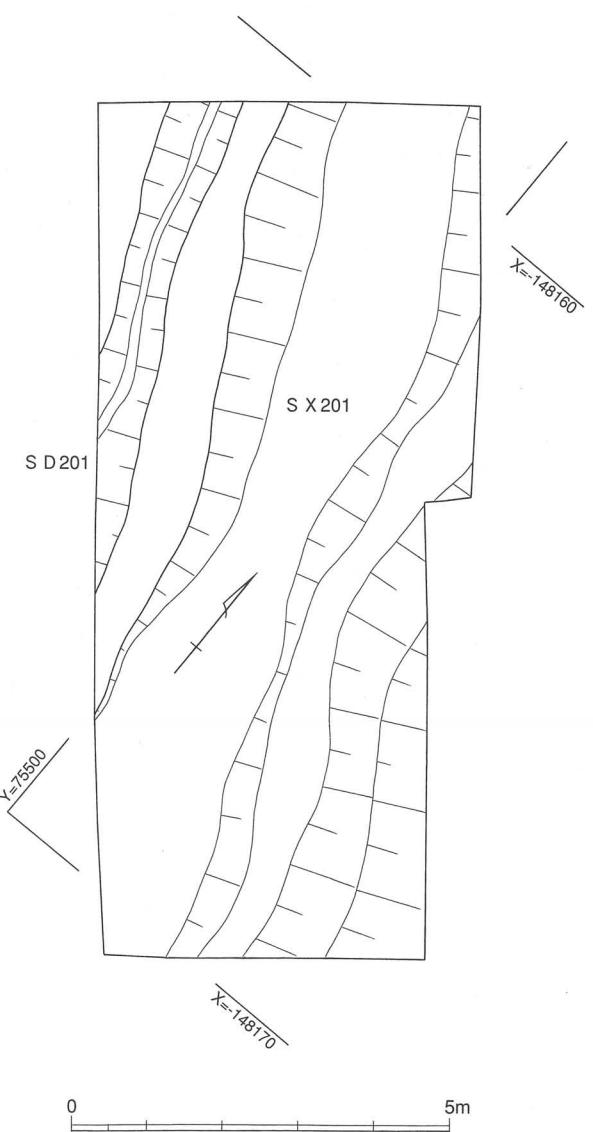


fig.39 第2遺構面平面図

東側の上がりを確認していないため断定できないが、土層の堆積状況からして流路の可能性がある。この遺構から奈良時代～平安時代の須恵器・土師器、瓦、牛の頭蓋骨、牛馬歯、牛馬骨が出土している。また、遺構の西側肩部や底内には、偶蹄目類が歩行していた痕跡が残っていた。

S X201に沿うように検出されたS D201は、幅70～90cm、深さ約10cmの南北方向の溝である。この溝からは平安時代頃の須恵器・土師器の小片と瓦が出土している。暗灰褐色砂質シルトの遺構面で検出されたS D101は、幅3.7m以上、検出面からの深さ約40cmの南北方向の溝である。出土遺物は、平安時代頃の須恵器・土師器、土錘、瓦が大半である。

4. 出土遺物

S X201から出土した遺物には、須恵器の壺・塊・壺、土師器の壺・甕・皿、黒色土器、瓦器、瓦などがある。遺構内から完形の土器はなく、破片が散在した状況で出土した。図示可能な遺物は以下である。

94は須恵器塊で、口径16.0cm、器高6.4cmである。底部は回転ヘラ切り後下外方へ踏ん張る高台が貼り付けられる。95～107は回転糸切りの底部をもつ須恵器塊である。口径15.6～17.4cm、器高4.4～5.6cmである。95、97、98、106は口縁が内彎気味に立ち上がるタイプ、99、100、103、104は口縁がやや外反するタイプ、101、102、105、

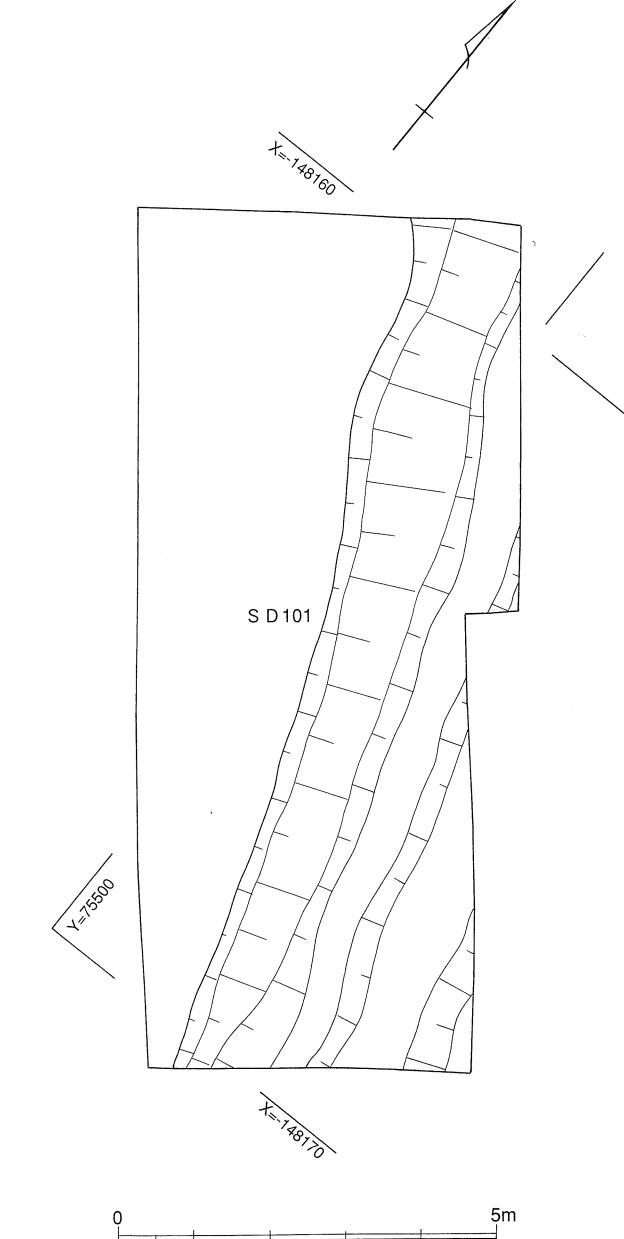


fig.40 第1遺構面平面図

107のように口縁を丸くおさめるタイプがある。108の須恵器は体部に段をもつ塊の底部。底部に下外方へ踏ん張る高台が貼り付けられる。109の須恵器は塊の底部と考えられる。高台が貼り付けられ外方へ踏ん張る。110の須恵器は貼り付け高台で底部は回転ヘラ切りで、内面に磨耗している痕跡があり転用硯の可能性がある。111はⅡ類の白磁碗で、口径15.8cm、器高5.8cmである。112はⅣ類の白磁碗である。口縁部は玉縁状を呈している。113は灰釉陶器の底部であるが、内面が磨耗しているため転用硯の可能性がある。

114、115、117、118はともに口径9.6cm、器高1.6cmを測る。114、118は口縁部が曲げられたいわゆる「て」の字状の口縁をもつ土師器皿である。平安時代後期に属すると考えられる。115の土師器皿は底部からやや外反しながらたちあがり口縁端部を丸くおさめている。底部は回転糸切りである。116は瓦器の皿で、口径10.4cm、器高2.5cmを測り、内外面ともヘラミガキを施している。117は土師器皿で、口縁端部を上方につまみあげている。119は土師器皿で、口径16.3cm、器高2.2cmである。120～123は口径14.6～16.6cm、器高3.6～3.8cmを測る。底部から斜め上方に延びる口縁部をもつ土師器塊である。124は口径16.0cmの黒色土器B類

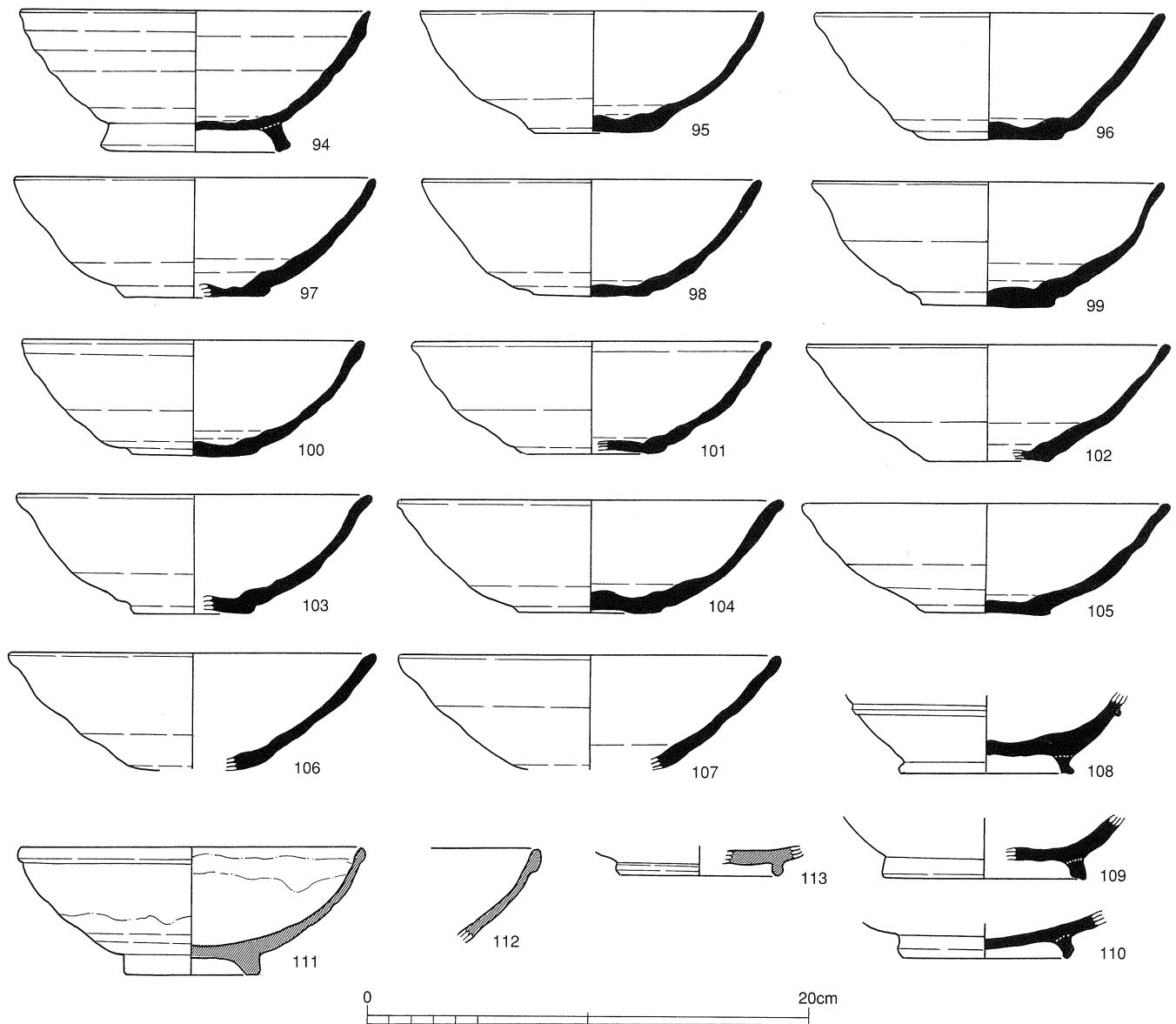


fig.41 S X 201出土遺物(1)

で、内面にヘラミガキが施される。125は土師器の堀で、大きく開く口縁部をもつ。口径33.8cm、残存高17.1cmを測る。126は土師器の堀で、口縁部は面をもち、大きく開いている。口径31.4cm、推定器高21.3cmを測る。127、128、130~132の瓦はいずれも平瓦である。127は瓦質、131は土師質で他は須恵質である。平瓦は概して凸面が縄目のタタキを施し、凹面が布目仕上げになっている。129の重郭文軒平瓦は凹面が布目圧痕で、凸面がヘラ削り後板ナデを施している。側縁部はヘラ削りで仕上げている。色調は暗灰色である。

S D 201から出土した図示可能な遺物には、土師器の壺、緑釉陶器、漁網錘、瓦などがある。133は硬質の緑釉陶器で底部まで施釉し、蛇ノ目高台風である。134は土師器皿で、口径18.6cm、器高2.2cmである。135は土師質の有溝土錘で、半分欠損している。長さ4.9cm、最大幅3.6cm、重さ58.5gである。136の平瓦は須恵質で、凸面が縄目のタタキ、凹面が布目仕上げになっている。側縁部はヘラ削りで仕上げ、色調は暗灰色である。

S D 101から出土した図示可能な遺物には、137は土師器皿で、口縁端部を外方につまみあげている。139、140は口縁部が曲げられた「て」の字状口縁の土師器皿である。これらは、いずれも口径9.8cm、器高1.4cm

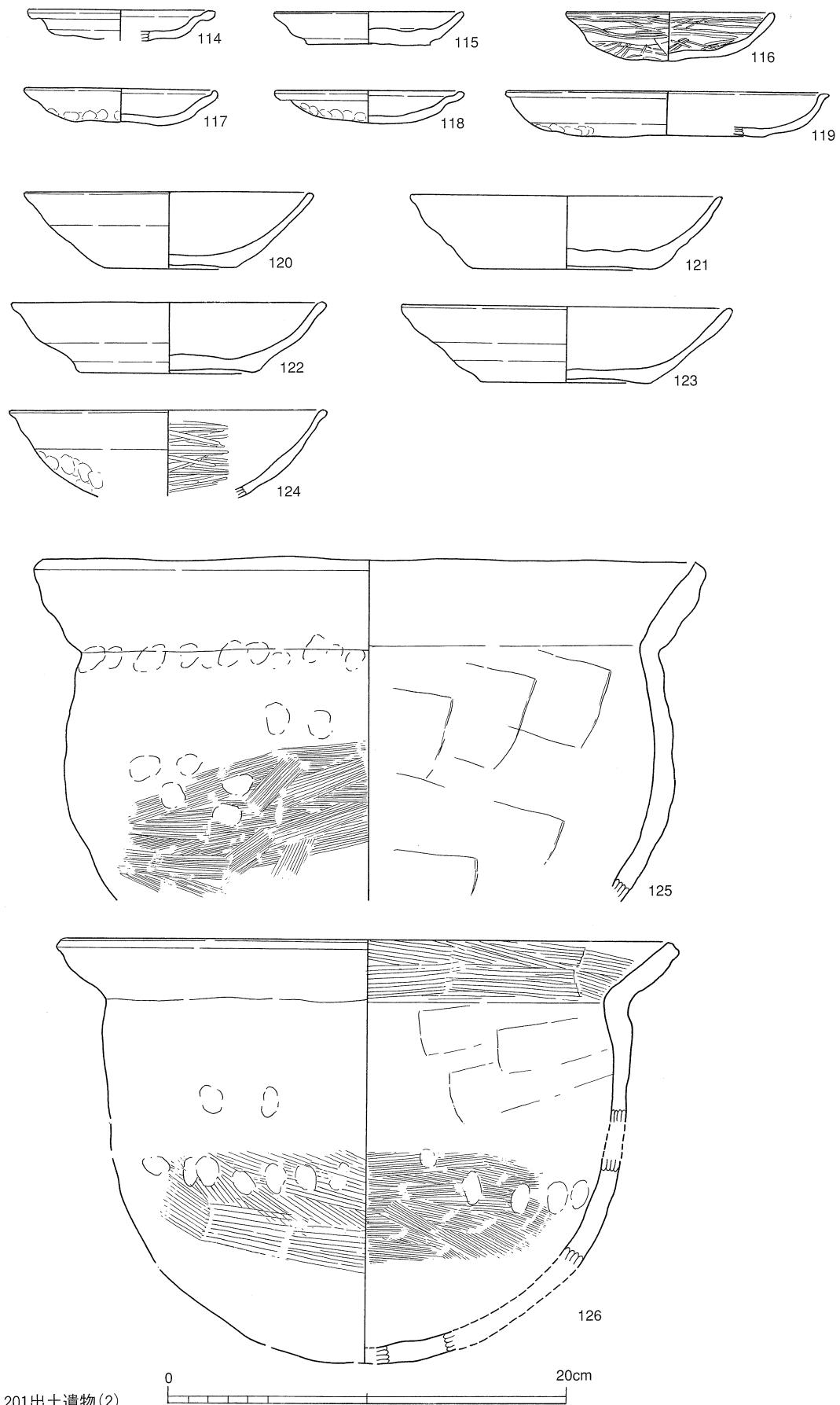


fig.42 S X 201出土遺物(2)

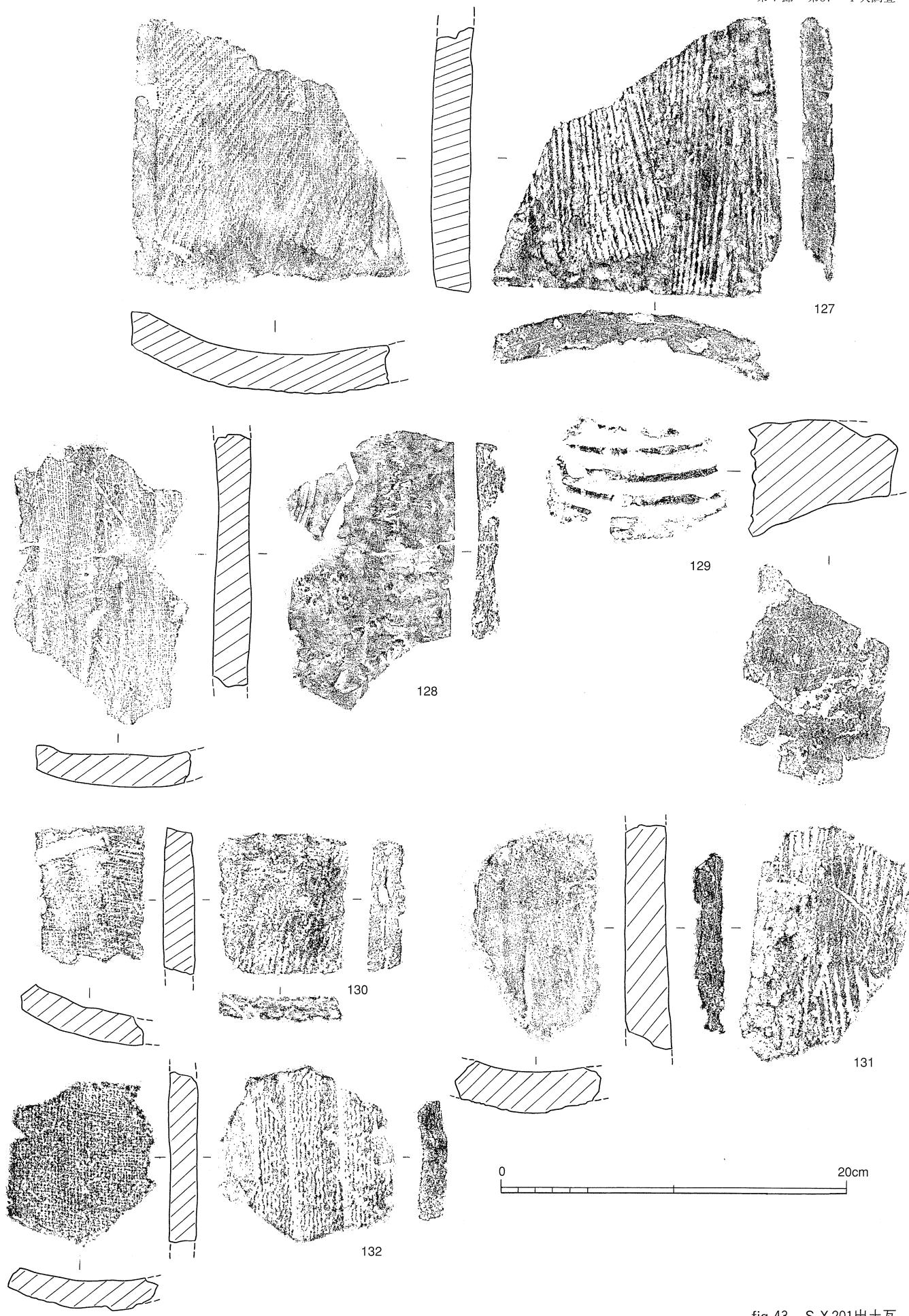


fig.43 SX201出土瓦

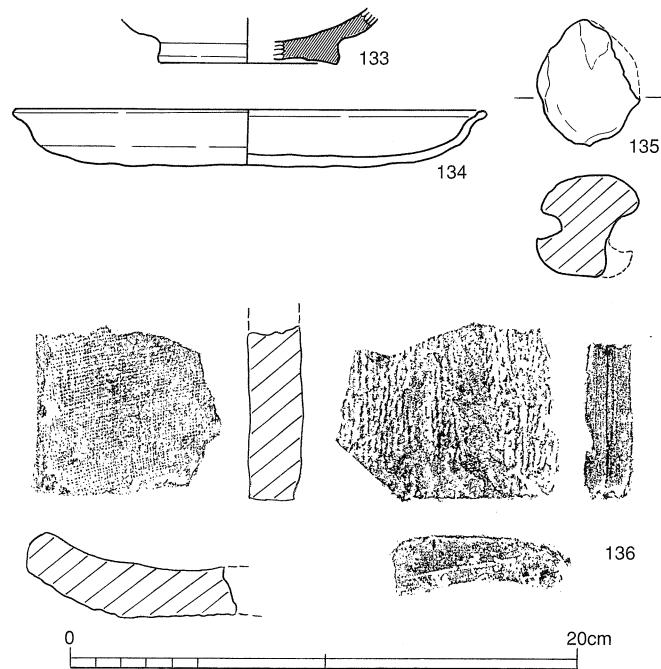


fig.44 SD 201出土遺物

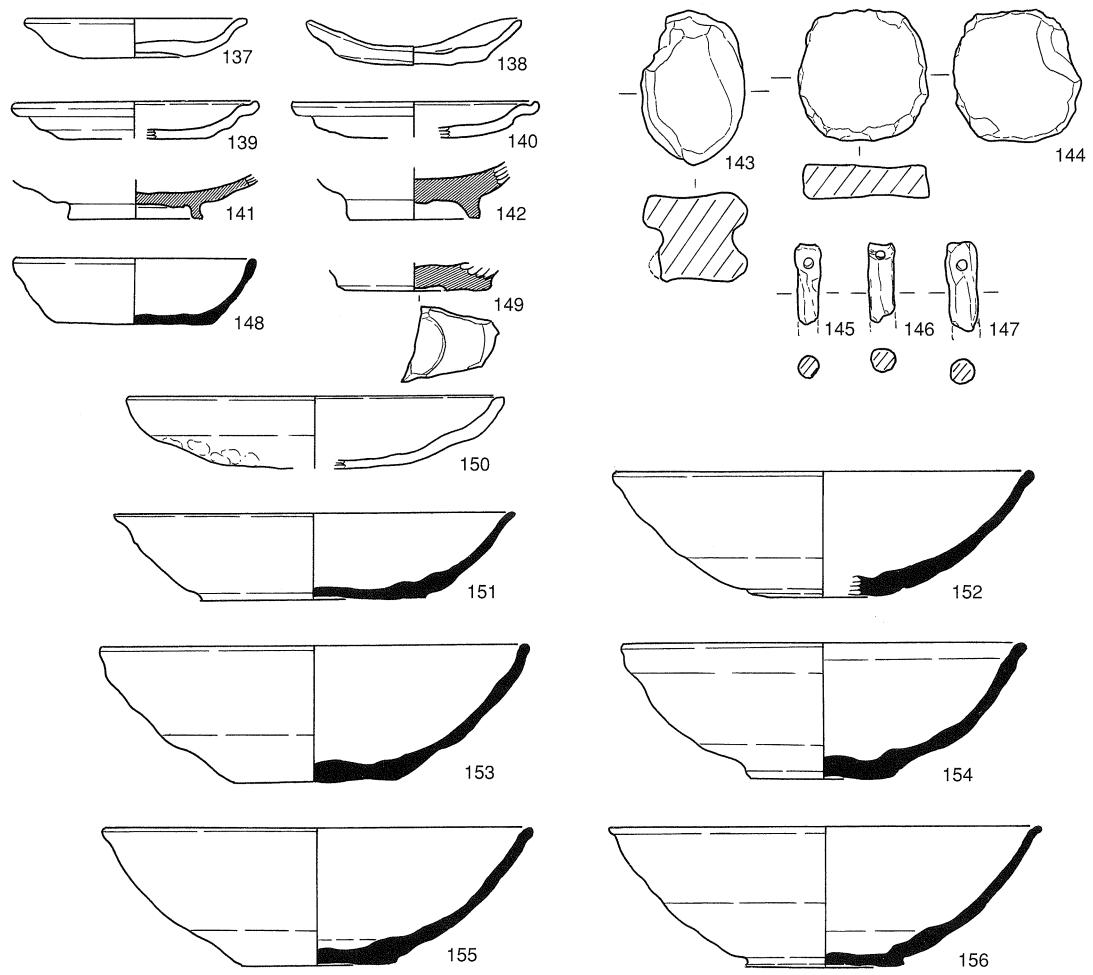


fig.45 SD 101出土遺物

0 20cm

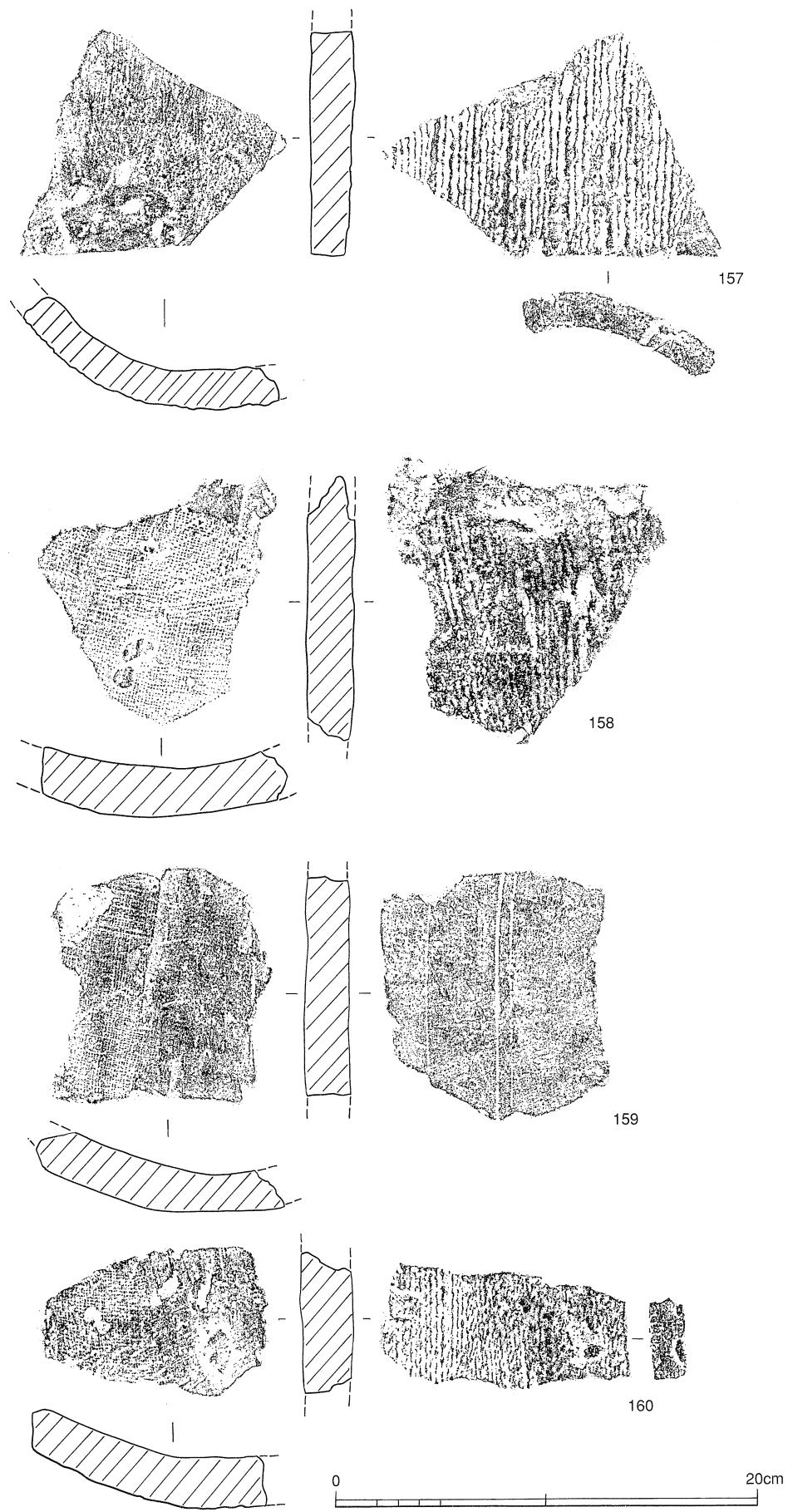


fig.46 S D 101出土瓦

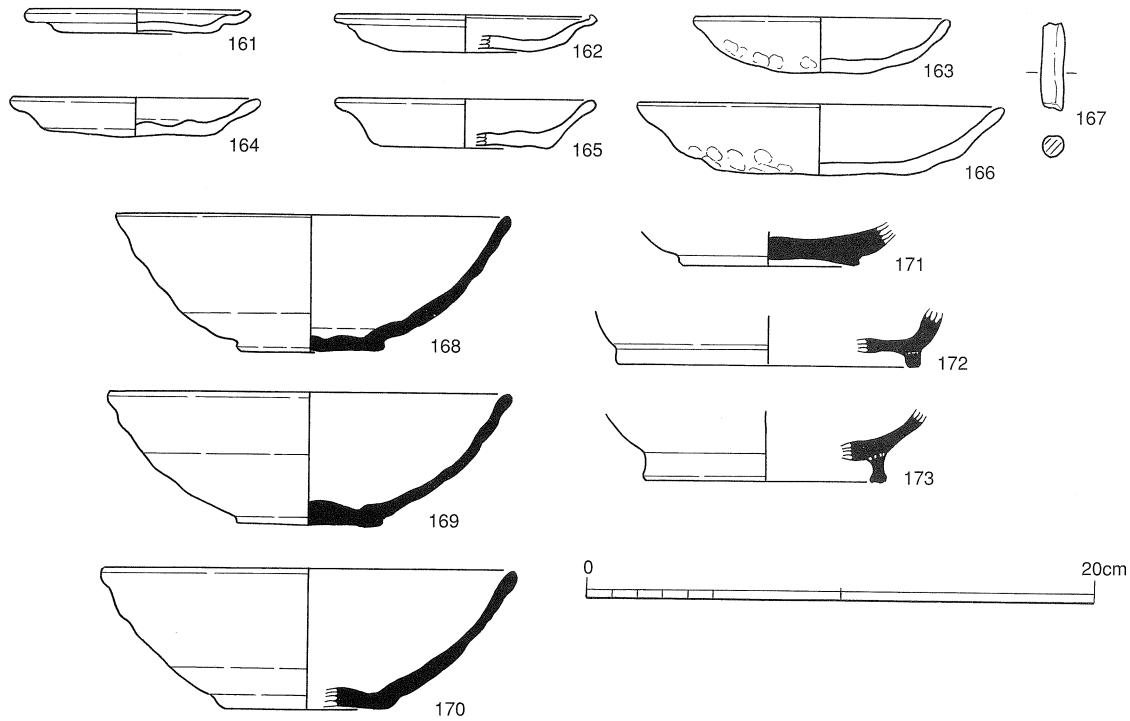


fig.47 遺構に伴わない遺物

である。141は削り出し高台をもつ硬質の緑釉陶器である。142は青磁で、小片であるため判別しにくいか龍泉窯系の可能性がある。漁網錐143、145～147はいずれも土師質で、143は有溝土錐で、長さ6.0cm、最大幅4.0cm、重さ94.8gである。145～147は棒状有孔土錐で、下半部を欠損している。断面形状は円形である。144は陶器を打ち欠いて作る円形土製品で、溝の最上層から出土し、比較的新しいと思われる。148は回転糸切り底の須恵器の小皿で、口径9.6cm、器高2.6cmである。149は越州窯系青磁で、蛇ノ目高台で畳付を掻き取っている。151は口径15.8cm、器高3.4cmの須恵器壊で、回転ヘラ切りの平らな底部から斜め上方に口縁部が延びるものである。152～156は回転糸切りの底部をもつ須恵器壊である。口径16.0～17.0cm、器高4.9～5.6cmである。157～160の平瓦はいずれも須恵質である。157、158、160は凸面が縄目のタタキ、凹面が布目仕上げになっている。159については凸面がヘラ削り後ナデ仕上げ、凹面が布目仕上げになっている。

161、162は口縁部が曲げられた「て」の字状口縁の土師器皿である。161～164は、口径9.0～10.4cm、器高1.4cmである。168～170は回転糸切りの底部をもつ須恵器壊である。口径15.8～16.4cm、器高5.2～5.5cmである。172は須恵器壊で、底部外面端部いっぱいに貼り付け高台が付く。

5. 小結

調査地から国道28号線を挟んだ西側の調査で奈良時代の掘立柱建物が11棟確認されている。また、調査地東側の地域の調査では、掘立柱建物が数棟確認されている。今回の調査地においてもこの時期の遺物が多量に出土していることから国道28号線を挟んだ両地域は、居住域として利用されていたと思われる。この調査地では溝以外の遺構は確認されておらず、性格について言及できないが、溝内から多量の遺物が出土していることから、両居住域からの遺物の廃棄場所であったかもしれない。調査中、S X201とS D101は別々の遺構として捉えていたが、これらの遺構は重なるように検出されている。また、出土遺物の時期が大差ないことから、S X201が徐々に埋まりながら、溝としての機能を持つようになっていったと思われる。

第8節 第45次調査

1. 調査の概要

(1) 調査前の状況

調査前の状況は、2階建の鉄筋造りのビルと家屋が除却され、更地になつた部分（1・2区）と2階建の木造家屋が建っている部分（3区）があった。現地表高は5.5～6.0m前後である。

(2) 1区の調査

ビルが建っていた部分については、建築時の基礎工事によって、遺構面が削平されている可能性が高いため、地中梁の間にトレーナーを設定し、試掘調査を行った。調査の結果、現況地表面下約2mまでは、工事によって掘削されていることが明らかになった。周辺の調査データーでは、現況地表面から約1m前後で奈良・平安時代の遺構面が確認されていることから、この部分は遺跡が残っていないと判断された。

(3) 2・3区の調査

家屋が除却された更地部分（2区）は、5月25日から機械で表土・整地土の除去を行い、その後は人力で中世耕作土を除去、遺構の確認を行い、溝、犁溝を検出した（第1遺構面）。

さらに平安時代の土器を含む層を除去して遺構検出を行い、柱穴、溝、ピット等を発見した（第2遺構面）。木造家屋が建っている部分（3区）は、建物除却後の6月11日から同様の調査を行い、第2遺構面については、2・3区合わせて写真撮影等を行った。

また、第2遺構面を形成する層には飛鳥～奈良時代の土器が含まれており、それらを除去して、自然流路やピットを検出した（第3遺構面）。

調査完了後、場内に仮置きした掘削残土で埋め戻し作業を行った。

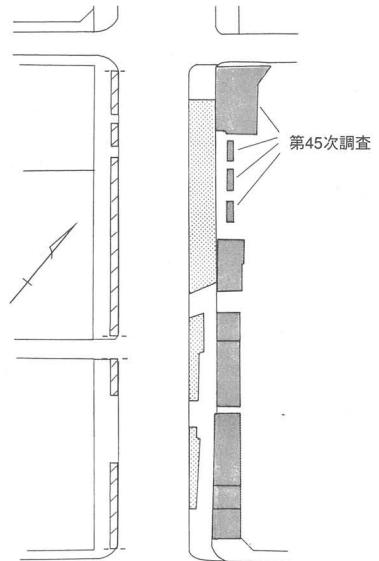


fig.48 第45次調査位置図

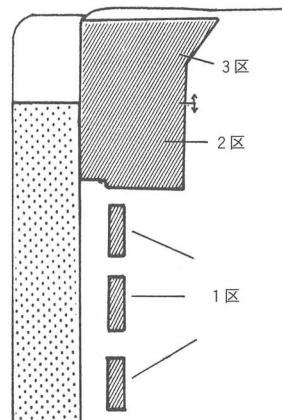


fig.49 調査区地区割図

fig.50
1区調査状況

2. 基本層序

2・3区の基本層序は以下の通りである。

- ①瓦礫を主に含む表土・整地土
- ②黒灰色粘性砂質土（江戸～明治時代頃の耕作土）
- ③黄灰褐色粘性砂質土（鎌倉～室町時代頃の耕作土）
- ④黄褐色混じり暗灰色粘性砂質土（平安～鎌倉時代頃の耕作土）
- ⑤黒褐色粘質土（第1遺構検出面・平安時代の土器を含む）
- ⑥暗褐色砂質シルト（第2遺構検出面・飛鳥～奈良時代の土器を含む）
- ⑦黒灰色砂質シルト（庄内併行期・飛鳥時代の土器を含む）
- ⑧黄褐色細砂～粗砂（第3遺構検出面）

現況地表面から第1遺構検出面である黒褐色粘質土上面までは、約50cmの深さがある。

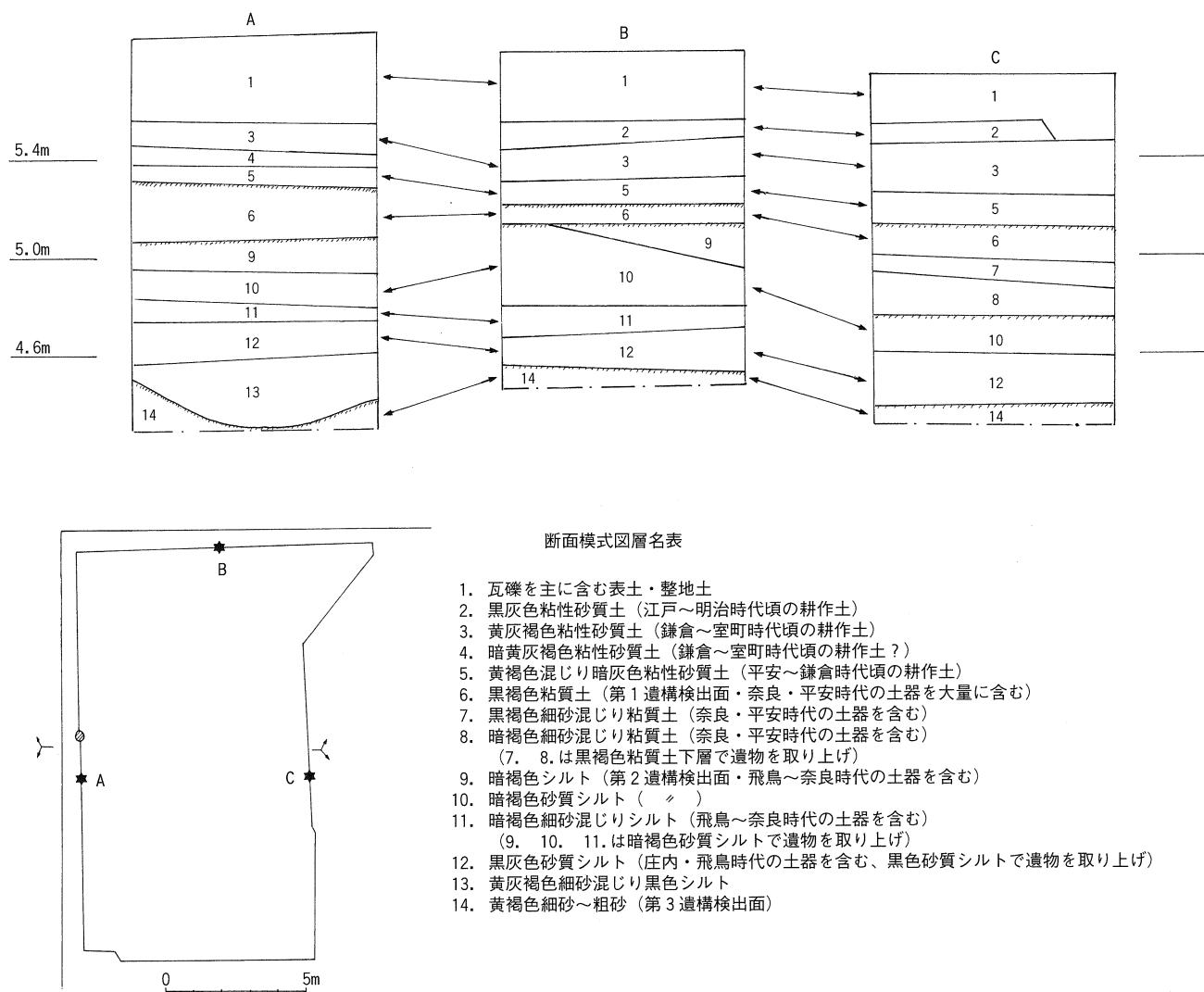


fig.51 土層断面模式図とその位置関係

3. 検出遺構

(1) 第3遺構面

第2遺構面を形成する層（暗褐色砂質シルト）には土器が包含されており、（飛鳥～奈良時代の土器を含む）また、さらに下層に黒灰色砂質シルト（庄内期・飛鳥時代の土器を含む）が堆積する部分がある。それらを除去すると、黄褐色細砂～粗砂層（第3遺構検出面）が現れる。この遺構面は起伏があり、東西方向の流路状の窪みやピットが若干確認できた。暗褐色砂質シルト中には複数の杭が打ち込まれており、この窪みに簡単な柵状の土留めが設けられていた可能性がある。遺存していた杭の樹種を同定してみると、マツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツ等）のものがほとんどで、コウヤマキ、ツガが各1本ずつというコメントを得た、おそらく手近に生えていた木を利用した結果なのであろう。また同層からは、三彩の獣脚（おそらく火舎の脚部）部分が出土した。

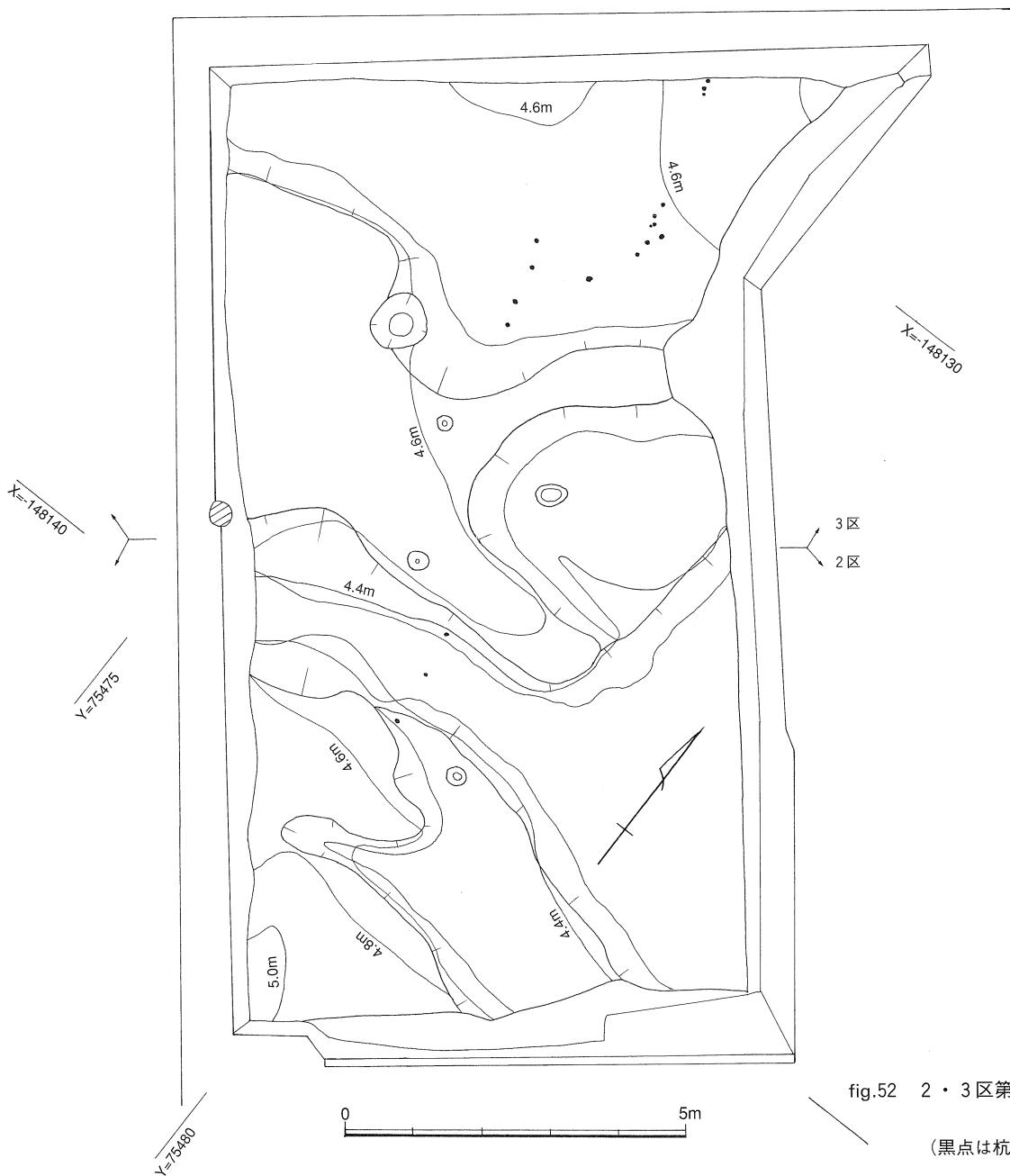


fig.52 2・3区第3遺構面
平面図
(黒点は杭検出地点)

(2) 第2遺構面

平安時代の土器を含む黒褐色粘質土を除去すると、西～東に下がる地形を呈する。この上面では掘立柱建物1棟、ピット多数と溝が4条検出された。遺構は、西半部には密に、東半部は疎に分布している。

柱穴、ピットの多くはその埋土に黒褐色粘質土を含んでいることから、黒褐色粘質土が堆積後または堆積中に掘りこまれたものと判断される。

S B 201

梁行1間(4.1m)、桁行3間(6.5m)以上の大きさがある、円形または隅円方形の柱掘形を持つ掘立柱建物である。南側が建物の基礎工事によって掘り取られているため、建物規模は不明である。西側に1間分の庇を有する。母屋の東側の柱が不揃いであるため、精査を重ねたが柱穴は検出できなかった。柱間の距離は梁行方向1.4～1.5m、桁行方向2.1～2.2mの等間で、建物方位はN 6°Wである。建物の精確な年代は不明であるが、上層の遺物包含層と掘形内出土の土器から、およそ9世紀末～10世紀初頭頃の時期に納まるものと考えられる。



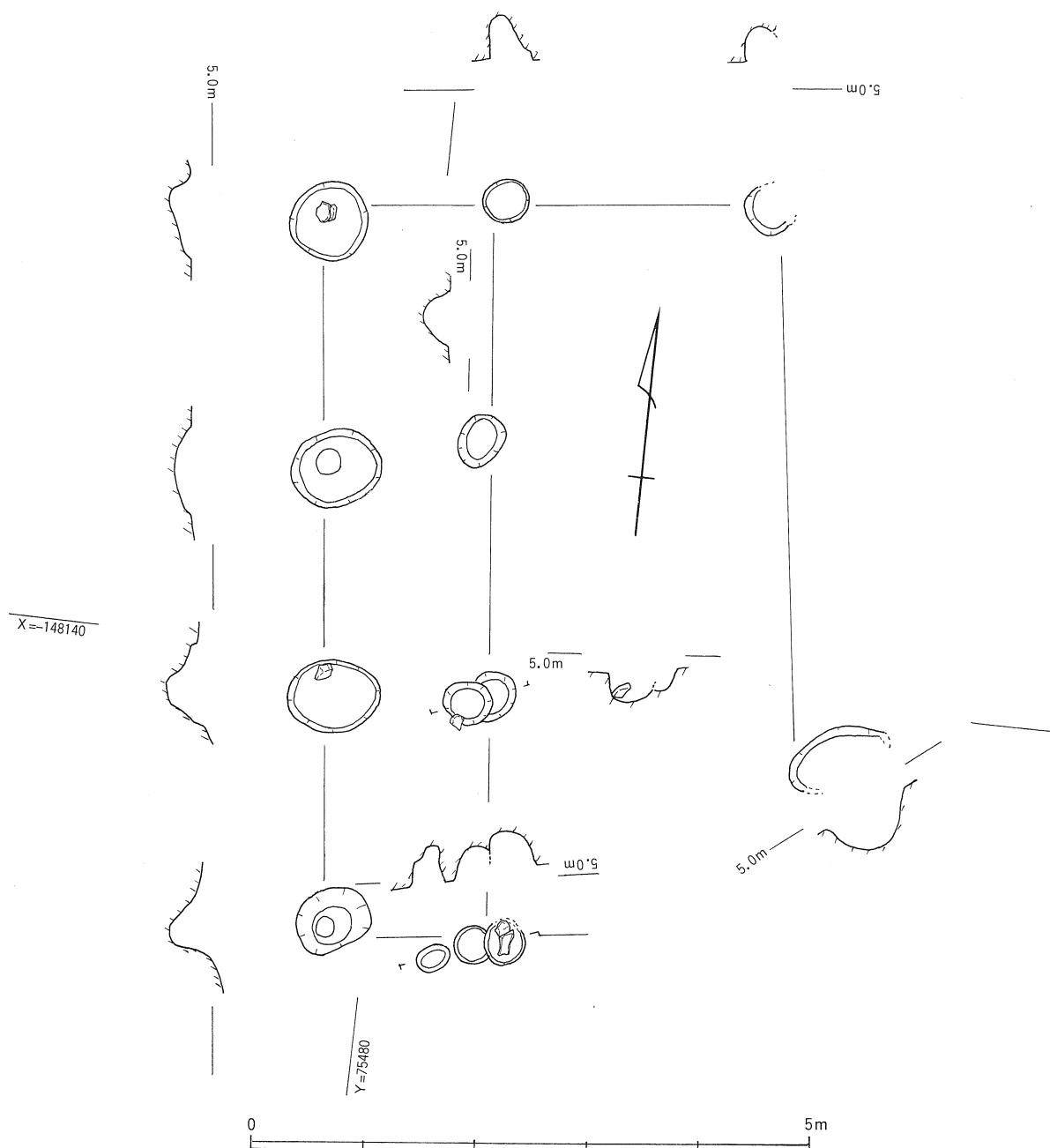


fig.54 SB 201平・断面図

SD 201・202

2区南半で確認された遺構で、幅約80cm、深さ約15~30cmを測る。これらの遺構は深さや幅が一定せず、人工的な溝というよりも雨水等が流れた痕跡のようなもので、当遺構面よりも新しい時期のものである。

SD 203・204

3区北半はピットの検出数が少なくなり、東西方向に平行に伸びる2条の溝が確認された。SD 203は検出長約5m、幅約30~50cm、深さ約6cm、SD 204は検出長約6m、幅約40~60cm、深さ約10cmで、いずれも黄褐色混礫砂質土が堆積している。

遺物包含層

第1遺構検出面である黒褐色粘質土は、西半分は薄く、東半分は厚く堆積し、調査区のほぼ真中で東に下がって、数十cmの落差を有する落ち込みになっている部分がある。

この層は土器を多く含み、主に平安時代前期（9～10世紀）の遺物で構成される。出土土器・陶磁器としては、須恵器、土師器、黒色土器、緑釉・灰釉陶器、瓦、三彩、越州窯系青磁等がある。また、部分的に炭化物や焼け焦げた木片がまとまって発見されるところがある。炭化物については、一部を試験的に水洗選別したところ、藁灰状の炭化物や獸魚骨の小片、穀粒等が発見されたため、(株)古環境研究所に分析委託を依頼した。分析の結果、イネ、オオムギ、コムギ、ササゲ属等の栽培植物の炭化種実が少量ずつ発見された。また、炭化物のプラントオパール分析を行ったところ、イネの藁および穀殻由来の植物珪酸体が非常に多く含まれているとの結果を得た。他に獸骨や歯、板状の木製品、鉄製品、銅錢の小破片（銭種不明）、鉄滓（椀形滓）、轍の羽口、埴堀、砥石、漁撈具等が出土した。また、墨書土器（いずれも須恵器坏）が3点確認されている。一つは「貞宴坏」と記され、との二つは、文字のごく一部分のため判読できない。ヘラ描きの刻書土器も1点確認されている。これは土師器坏の内面に「□（人か大）井」と焼成前に刻まれている。他には軒平瓦（重廓文）の一部が出土した。



fig.55
2区人力掘削作業

(1) 第1遺構面

中世耕作土（灰色系の粘性砂質土）を除去すると、第1遺構検出面である黒褐色粘質土が現れる。この層の上面で溝、犁溝が確認された。

耕作地に伴う溝

溝が6条発見された。深さは2～10cm程度で、堆積土は黄褐色混じり灰色粘性砂質土である。これらの溝のいずれからも須恵器・土師器の小破片が出土した。

犁溝

溝と平行に犁溝が數十条検出された。2区にその痕跡は顕著であった。ほとんどが数cm程度の深さで、検出長4.5m～50cm、幅は5～20cmぐらいである。牛の足跡と思われるものもいくつか確認できた。

検出状況から、これらは耕作に伴う遺構と判断される。また、3区北半で溝や犁溝が直交する部分があり、この付近が耕作地の境である可能性が高い。出土遺物から平安末～鎌倉時代頃の耕作地と考えられる。

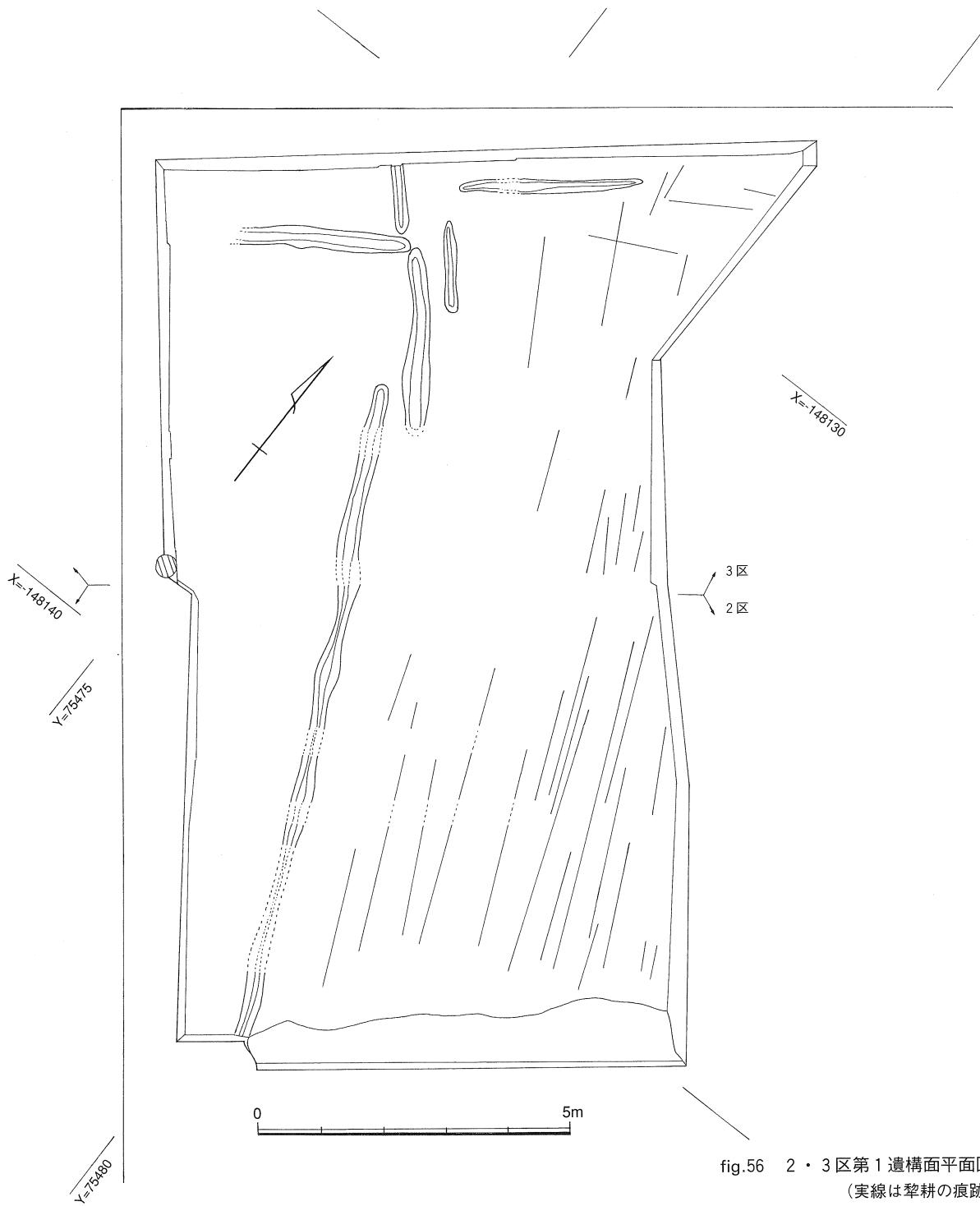


fig.56 2・3区第1遺構面平面図
(実線は犁耕の痕跡)

4. 出土遺物

(1) 黒灰色砂質シルト～暗褐色砂質シルト出土遺物

第3遺構面の直上層である黒灰色砂質シルトで、庄内併行期の土器と飛鳥時代の土器が発見された。さらにその上には暗褐色砂質シルトが堆積する。この層には、飛鳥～奈良・平安時代の土器が含まれている。

庄内併行期の土器

174は鉢形土器、177、180は壺形土器底部で、175、178～182は甕形土器底部である。176は高坏と思われる。183は線刻が施されているが、小破片のため文様の全体が判らない。174は外面に刷毛目調整を行う。180は内面に刷毛目の痕跡が残るが明瞭ではない。その他は外面は叩き目、内面に刷毛目の調整を行う。

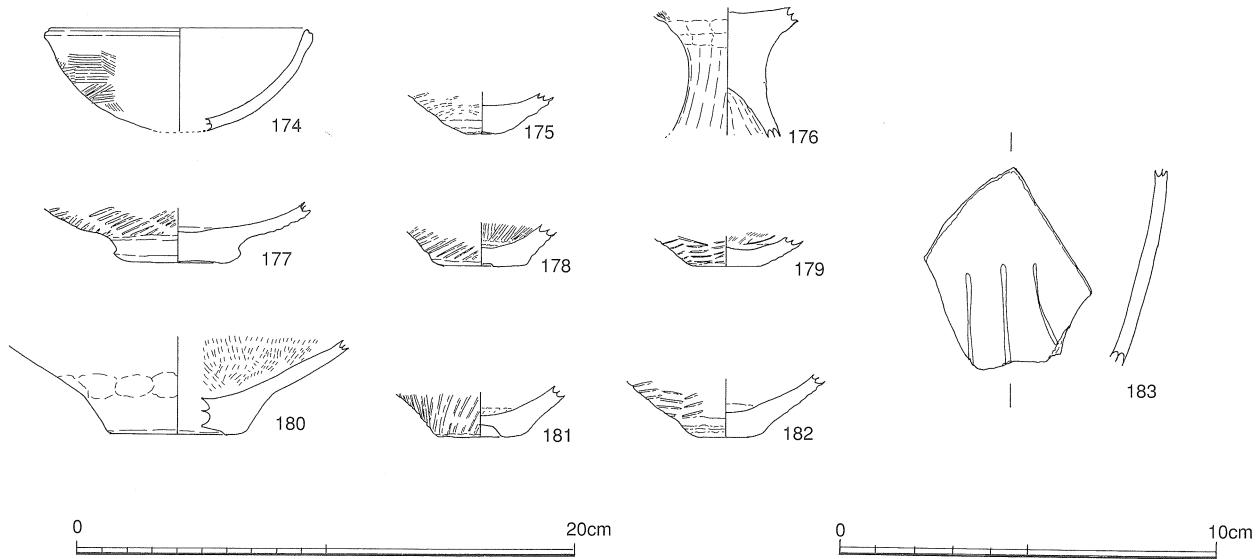


fig.57 黒色～暗褐色砂質シルト出土遺物(1)

飛鳥時代の須恵器・土師器

184、185は須恵器壺蓋、186～189は短い立ち上がりを持つ壺身で、190、191は宝珠つまみを持ち、かえりを有する蓋である。192、193は壺身である。194は頸で、球形に近い胴部に2条の沈線を施す。196、197は平瓶の口縁部、198は高壺の脚部である。195は土師器の壺、199は高壺で、壺部の内面に暗文を施す。

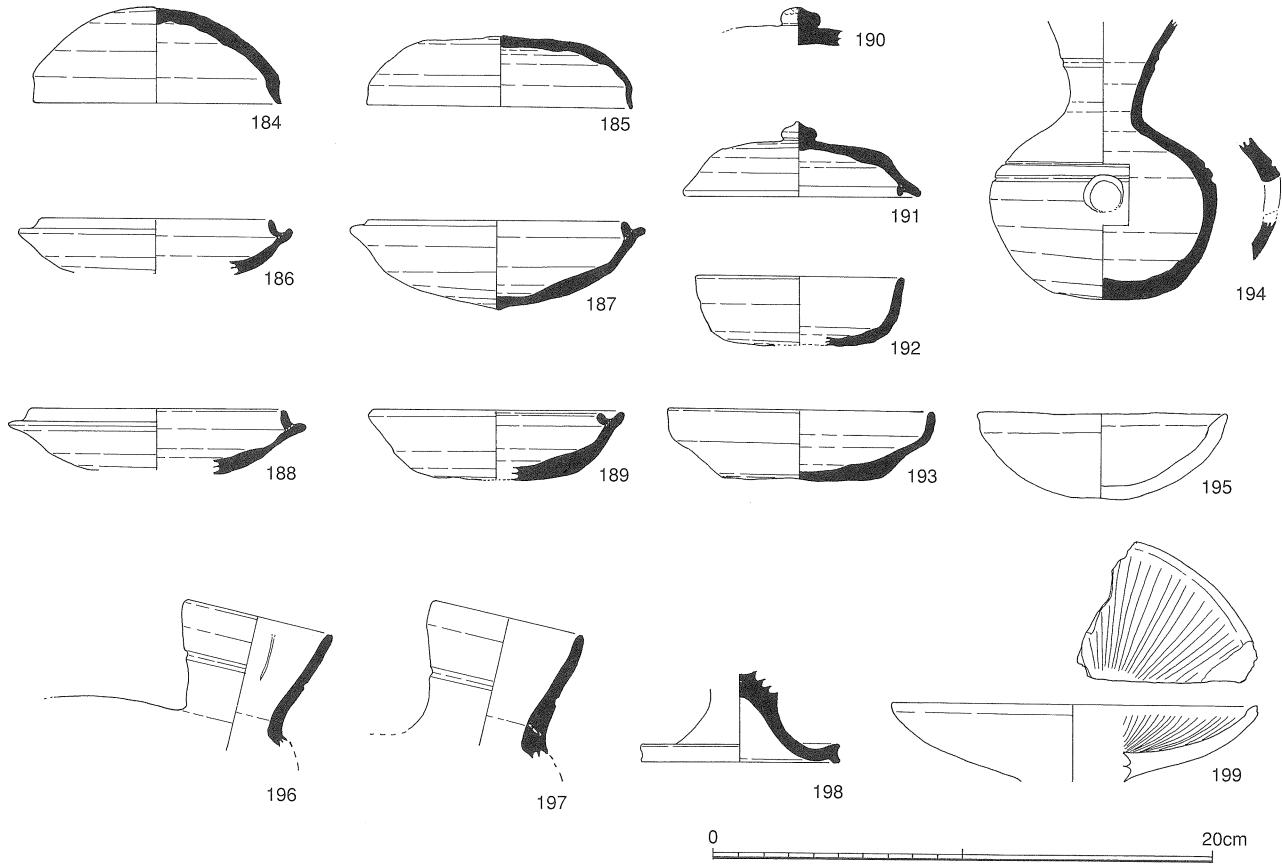


fig.58 黒色～暗褐色砂質シルト出土遺物(2)

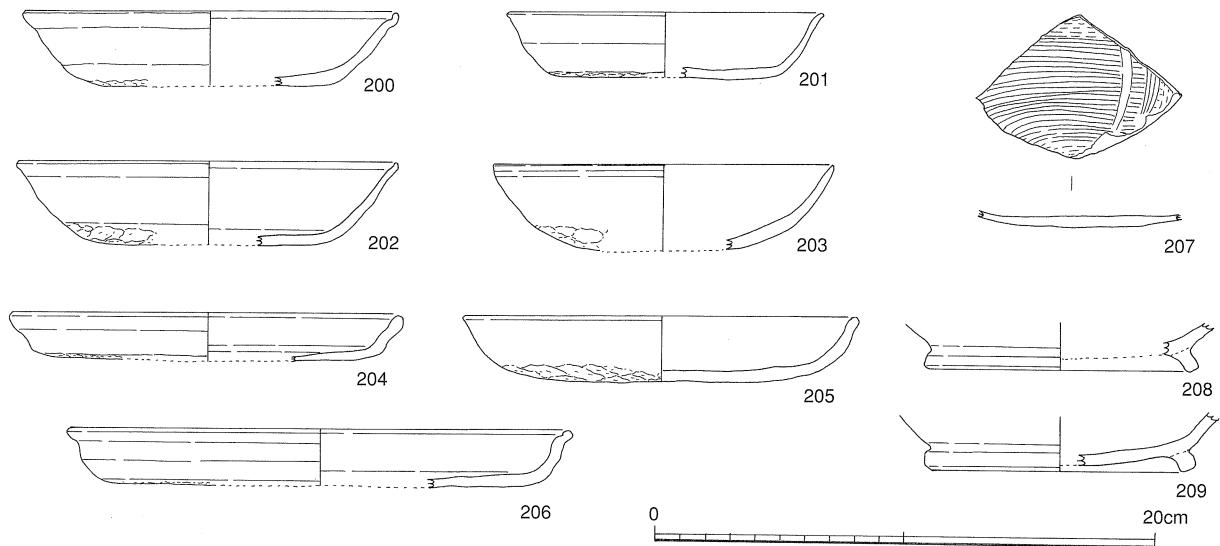


fig.59 暗褐色砂質シルト出土土師器、黒色土器坏・皿

奈良・平安時代の土師器

200～203は土師器坏Aで、胴部上半部までは横方向のナデを施し、胴部下半～底部はヘラ削りを行う。口縁端部は内湾ぎみのものと外反するものがある。後者は200、202のように口縁端部内面に段を施すものもある。204～206は皿Aで、坏Aと同じく口縁端部内面に段を施すものもある（206）。208、209は坏Bで、貼り付けた高台を有する。207は黒色土器坏で、底部内面に細かい暗文を施す。

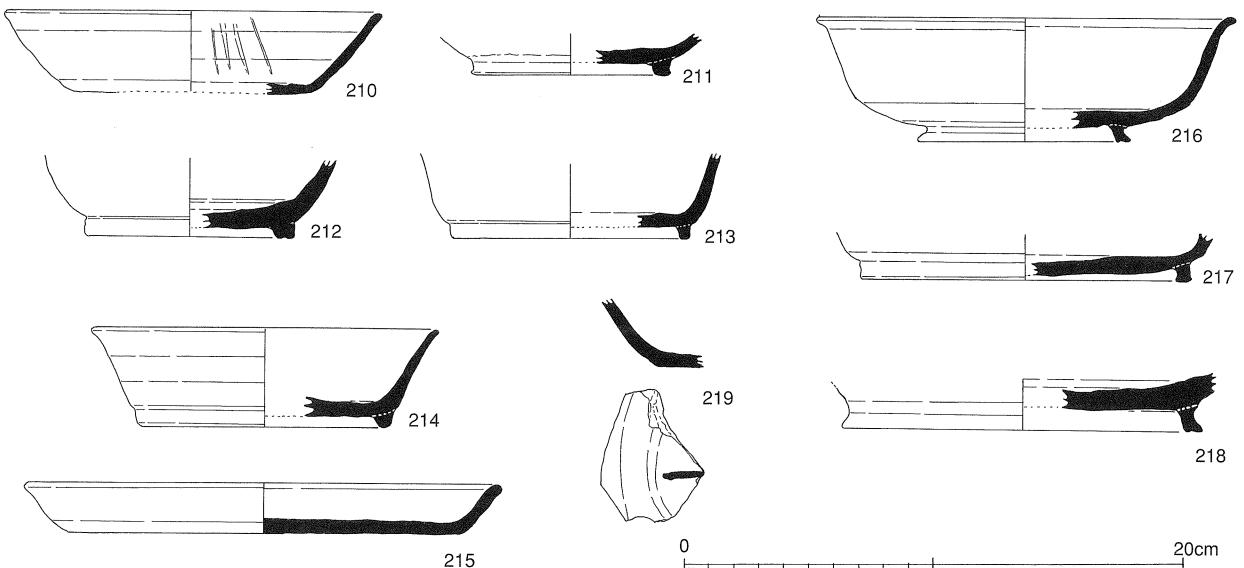


fig.60 暗褐色砂質シルト出土須恵器坏・皿

奈良・平安時代の須恵器

210は須恵器坏A、211～213は坏Bで、断面四角形に近い高台が付く。214は坏Bで、口縁部に向けてやや外反しながら立ち上がる。8世紀末頃の遺物と考えられる。216は底部から胴部にかけて屈曲し、口縁端部が外反する稜椀である。8世紀中頃の遺物と考えられる。217、218は坏Bで、台状の高台を持つ。215は皿Aで、直線的に立ち上がる短い口縁部を持つ。219は底部に墨書きが施されている。

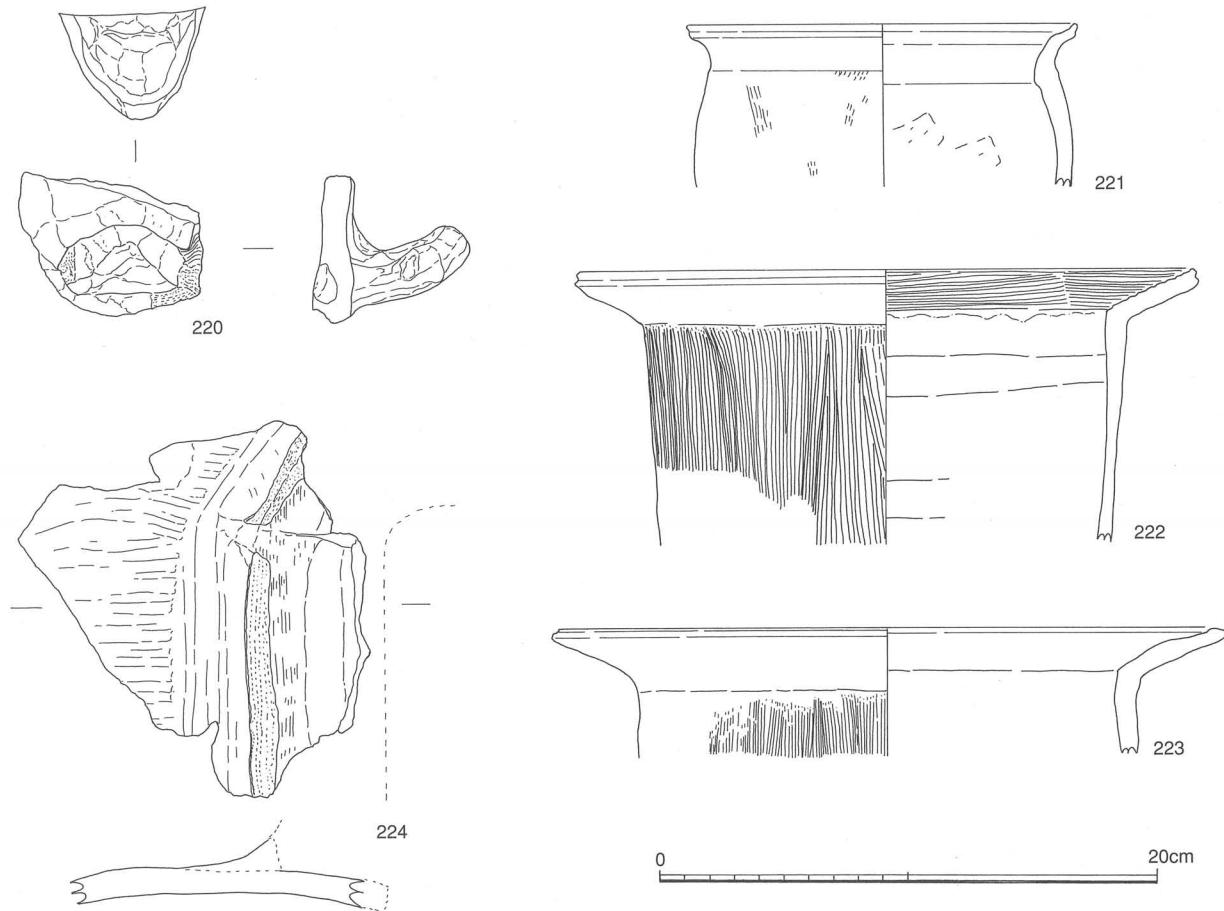


fig.61 暗褐色砂質シルト出土土師器甕・竈・把手

甕・甕・竈

220は甕の把手と思われる。把手部分を手づくねで整形する。224は移動式竈の焚口部分であるが剥離痕が明瞭であり、前方にもう少し突出する。接合周辺部には板ナデを施す。221～223は土師器甕で、口径15cm程度のものと25cm前後のものがある。小型のもの（221）は頸部がくびれて口縁部は外反し、内面をヘラ削りで調整する。大型のもの（222）は、直線的な体部で内面に横ナデを施し、口縁部は大きく外反する。

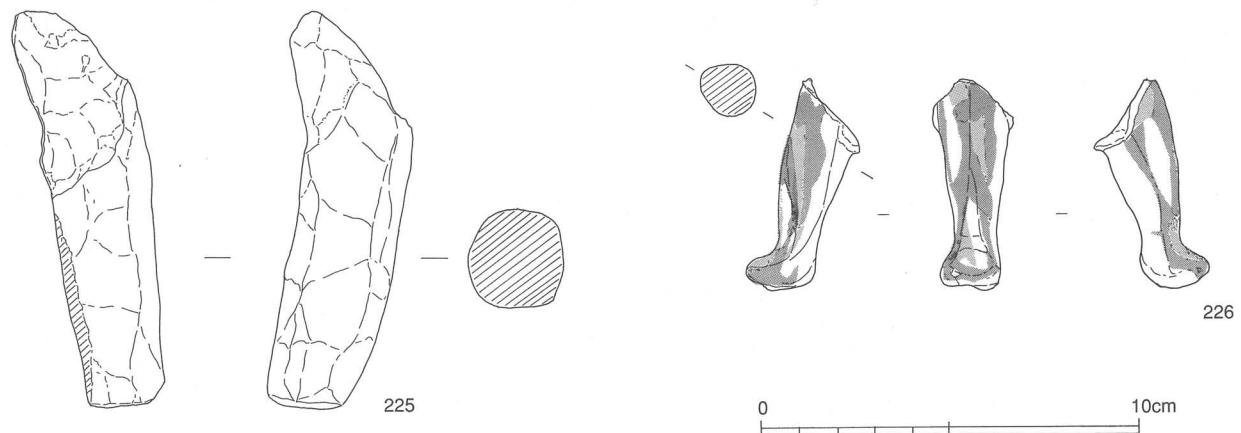


fig.62 暗褐色砂質シルト出土土馬・三彩

土馬・三彩

225は土馬の脚部分で、手づくねで整形された中実の脚部を、土馬の胴部に挟りを入れて差し込み、接合する。比較的馬形を忠実に再現するタイプのものと思われる。226は三彩で獸脚状に作り、基部に接合痕が明瞭である。脚付の火舎または、盤になると考えられる。整形の後、縦方向のナデを行い、表面を調整する。化粧土は塗らず、外から見える部分に、釉を緑、透明、褐色の順に施す。獸脚の指の表現は、簡略化されている。これらの点から奈良三彩と考えられる。兵庫県下では、加東郡喜田清水遺跡で、奈良時代後半～平安時代の遺物と共に二彩盤が出土している。これは指先まで表現し、四面を面取りで整形している。

註・参考文献

三彩については、小野市好古館館長 大村敬通氏（当時兵庫県埋蔵文化財調査事務所所長）よりご教示いただいた。

大村敬通「唐三彩と奈良三彩の序章」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要創刊号』2001

〃 「続・兵庫県出土の三彩」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要第2号』2002

矢部良明「唐三彩と奈良三彩」『日本の美術5 No.408』2000

(2) 黒褐色粘質土出土遺物

第2遺構検出面直上に堆積する黒褐色粘質土からは、平安時代前期（9～10世紀）の遺物が出土する。

土師器坏

227～232は土師器坏Bである。口縁部が内湾するもの（227、229）、直線的なもの（228）があり、高台部が外に開くもの（230、231）、内側に収めるもの（232）、断面三角形のもの（234、235）がある。227は外面にヘラ削りを施す。233は坏Bであるが、高台部が欠失し、輪状の接合痕跡を残す。内底面にはヘラ描きで「大または人・井」と記され、井の周辺には点が多数、刻まれている。よく見ると、井の下にも横棒「一」が彫られていることから、最初の文字は「大」ではなく、「一人」である可能性が高い。つまり、「一人井一」と読み取れる。「井」印は、ドーマンとよばれる魔除符号で、魔物も迷う迷路を意味するという。

参考文献

平川南 「墨書土器とその字形」『墨書土器の研究』2000

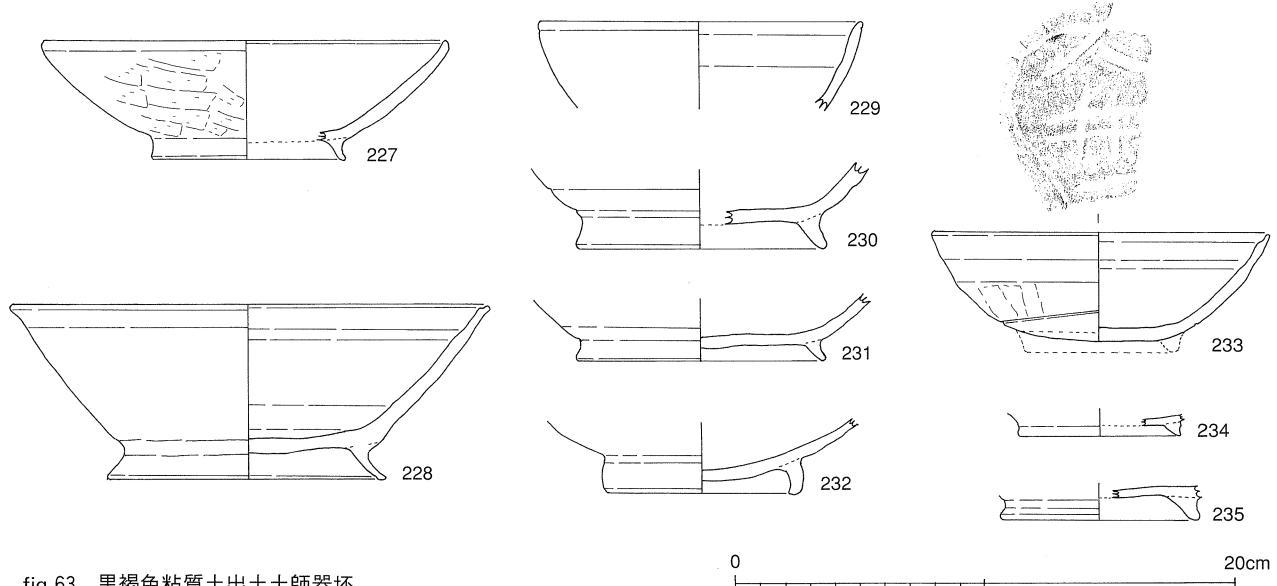


fig.63 黒褐色粘質土出土土師器坏

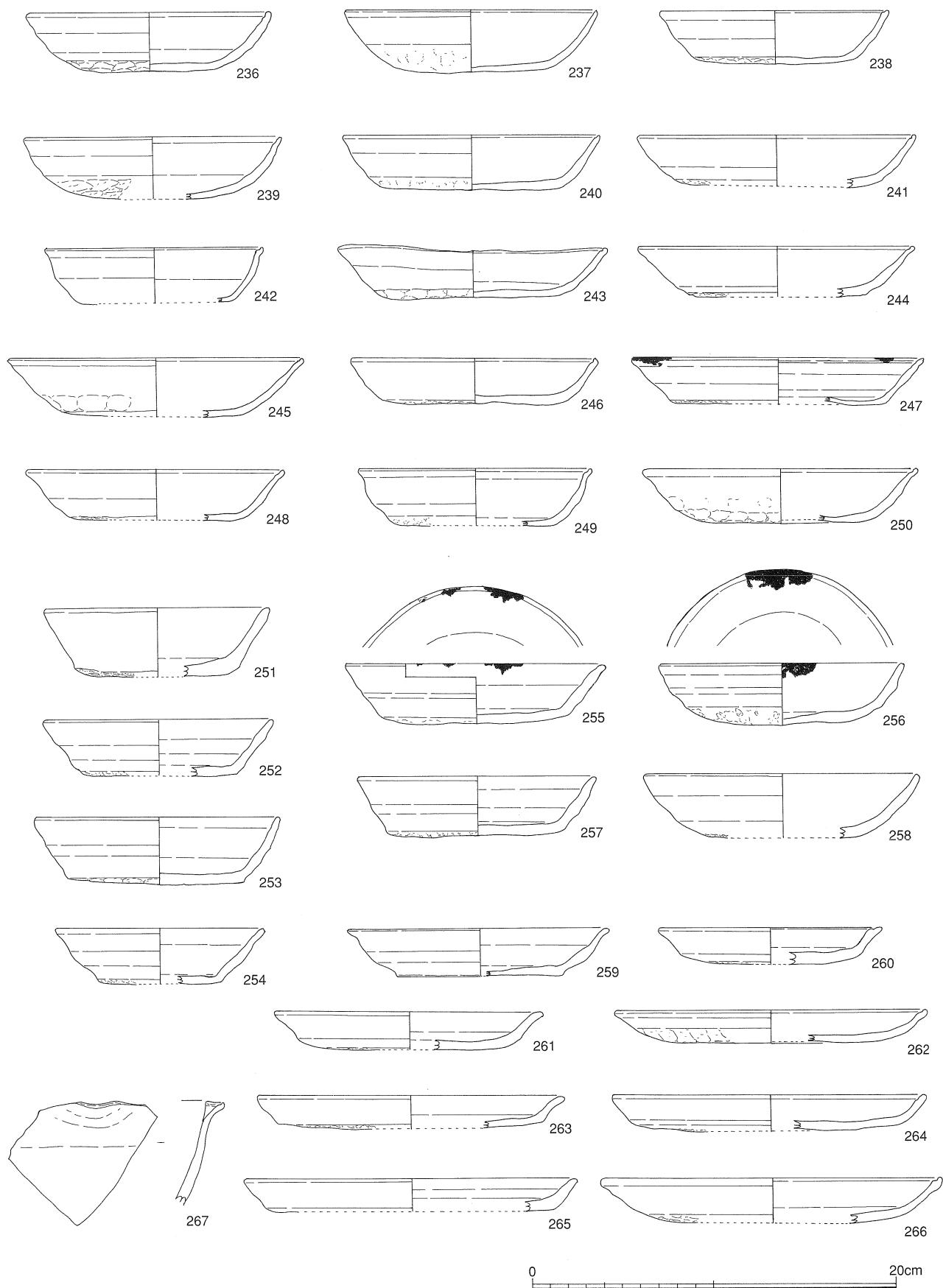


fig.64 黒褐色粘質土出土土師器壊・皿・鉢

土師器坏

236～250は土師器坏Aで、口縁端部内面に段を有する。口縁端部はやや外反するもの（244、245、248、250）や内湾するもの（236、237）がある。底部は、ヘラ削りまたは指頭圧痕を残すものが多い。胴部～口縁部は横方向のナデで調整する。251～258は坏Aで、底部にはヘラ削り、指頭圧痕を残す。底面が平らに近いもの（251～255、257）、丸みを帯びたもの（256、258）がある。247、255、256は、灯芯の痕跡が口縁端部に残っている。259～266は皿Aである。口縁端部内面に段を有するものがある。267は小型鉢で、片口が付く。

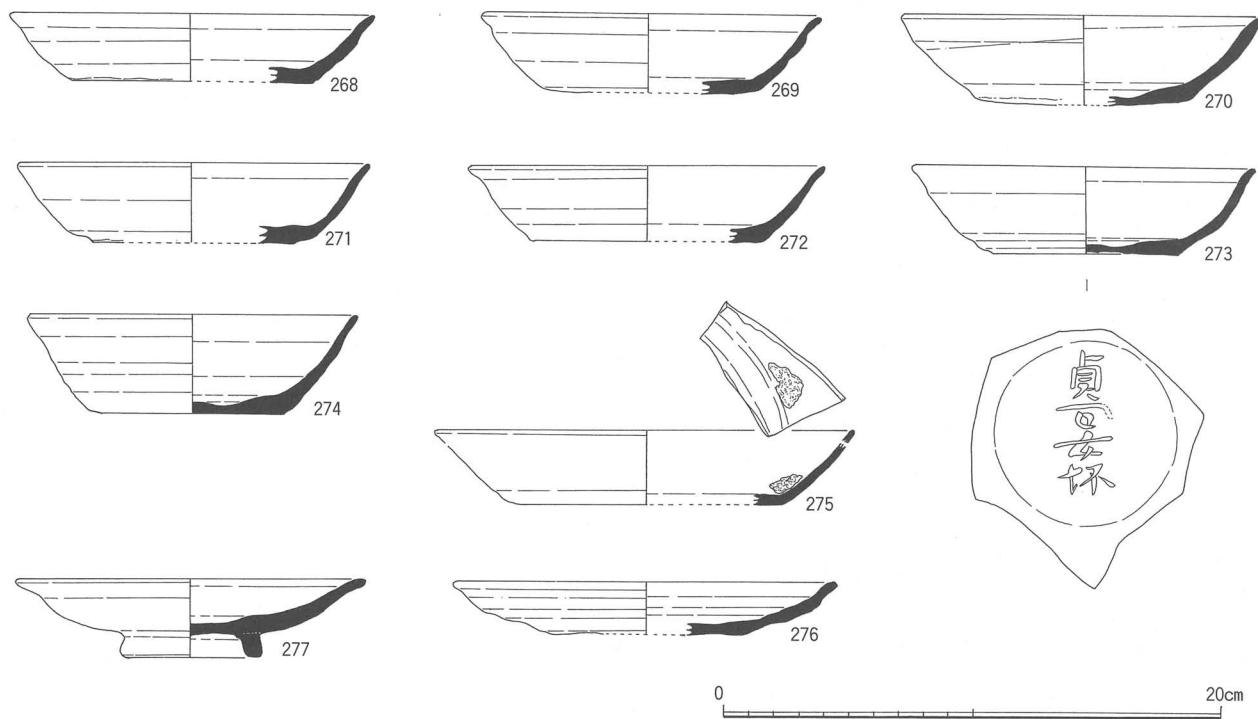


fig.65 黒褐色粘質土出土須恵器坏・皿

須恵器坏

268～273は須恵器坏Aである。胴部～口縁部が直線的に伸びるもの（268、269、271、274、272）、やや内湾し、口縁端部が外反するもの（270、273）がある。器高は3～4cm前後である。275は須恵器皿Aである。内底面に漆が付着している。277は須恵器皿Bである。内底面はよく摩滅しており、墨痕は見当たらぬが、転用硯と考えられる。276は須恵器皿である。277、276と同様のものが兵庫県相野窯跡⁽¹⁾で出土している。

273には外底面に墨書で「貞宴坏」と記されている。「貞宴」の意味はよくわからない。現在の段階では、人名特に僧名ではないかと推測している。僧名で「宴」の字が用いられるのは少ないようであるが、竹内理三氏編『平安遺文 題跋編』からこの字を用いる僧名を抜粋したのがfig. 67である。これをみると11世紀前半が初例で、土器の使用年代と考えられる9世紀～10世紀初めには至らないが、僧名に「宴」の文字が使われたのは確認できる。



fig.66 墨書土器赤外線写真

人名の記された土器の多くは、集団で給食を受けるにあたって、各人の食器が1ヵ所に集められる時に、他人が使用しない様にその器の属人性を主張するためとされる。また、底部外面に名前が書かれているのは、洗った器を伏せて乾燥させた状況が窺える⁽²⁾という。

さらに、使用された施設が郡衙の場合を想定した場合では、給食を恒常に受けうることはできるのは、書生等の雜任級以上の人物⁽³⁾であろうと推定されている。

「貞宴杯」の持ち主がどのような人物であったかは不明であるが、厨等において集団で、かつ恒常に給食を受ける立場の人物であることは想定できる。また、僧名と推測されることから、寺院の存在の可能性も指摘される。確かに、仏事に用いられる様な火舎の脚と推定される三彩や、瓦の出土が散見されることから、地方官衙に接近して造られた小規模な寺院あるいは仏教施設の存在⁽⁴⁾を否定することはできない。しかし、現在のところは、確定した答えを出す段階には至っていない。

僧名	年号	西暦	出典	所蔵	備考
長宴	長元9年	1036	203 金剛頂蓮華部心念誦儀軌 一帖	京都府東寺	
〃	〃	〃	204 大日經廣大成就儀軌卷 下一帖	〃	続きに同人長暦元、3年、長久4年追記あり
〃	長久2年	1041	213 大原四十帖口帖口決 三十帖之内	〃	
丹波長宴	長久4年	1043	218 大原四十帖口帖口決 三十帖之内	〃	
長宴	寛徳2年	1045	221~224 大原四十帖口決 十八帖之内	京都府仁和寺	
〃	寛徳3年	1046	228~230 大原四十帖口決 十八帖之内	京都府東寺	
〃	永承元年	1046	480~481 大日經卷十六、十七 二巻	個人蔵	
陽宴	康和2年	1105	647 淨地記 一帖	滋賀県叡山文庫	
宴遷	長治2年	1106	716 金剛頂瑜伽護摩儀軌 一帖	京都府高山寺	
宴俊	〃	〃	722~732 大般若経	兵庫県加東郡社町上鴨川住吉神社	卷二一三、二一四
陽宴	嘉承元年	1106	746~747 廣攝不動明王秘要訣 三帖	東京都大東急記念文庫	卷二一四
宴朗	久安2年	1121	1740~1743 大般若経 六百巻之内	静岡県榛原郡相良町般若寺	卷五十三、五十九
宴嚴	應保2年	1162	2320~2321 顯揚論卷十六、十八 二帖	大阪府金剛寺	
語宴公?	長寛元年	1163	2355 息心抄 四帖之内	滋賀県叡山文庫	
行宴	〃	〃	2383~2387 胎藏集記 八巻之内	京都府仁和寺	卷一~五
〃	長寛2年	1164	2390~2392 胎藏集記 八巻之内	〃	卷六、七
〃	承安4年	1174	2727 愛染王之身 一帖	〃	
〃	〃	〃	2718 (ラ・ギヤ) 一帖	〃	
金剛資行宴	〃	〃	2736 傳法灌頂秘記 一帖	〃	
行宴	安元3年	1177	2825 胎藏界次第 一帖	〃	
〃	治承3年	1179	2874 胎藏界略述 一帖	〃	菩提院行宴法眼
聖宴	治承4年	1180	2892~2897 法華三宗相對鈔 三十八巻之内	滋賀県叡山文庫	卷三
行宴	〃	〃	2900 大悲胎藏持念次第法 四帖	京都府仁和寺	行宴者菩提院法眼也
〃	〃	〃	2906 大悲胎藏持念次第法 四帖	〃	2900とは別物
〃	治承5年	1181	2910 胎藏界尊號 一巻	〃	

fig.67 宴字を有する僧名一覧表（平安遺文 題跋編より抜粋し地名は変更した）

参考文献

- (1) 岡崎正雄他 『相野古窯跡群』 1992 兵庫県教育委員会
- (2) 森公章「平城京跡の墨書き土器」『長屋王家木簡の基礎的研究』 2000
- (3) 山中敏史「館・厨の構造と機能」『古代地方官衙遺跡の研究』 1994
- (4) 同 「評衡、郡衙の歴史的意義について」 前掲書

須恵器坏

278~280は須恵器坏Bである。やや開きぎみの直線的な体部から口縁部を持つ。280は兵庫県相野古窯跡の製品である可能性が高い。291、292は断面四角形に近い高台部を持ち、体部は直線的である。287、288のような小型の坏も認められる。289、290は高台部が高く立ち上がり、上記の坏よりも新しい様相をもつ。298は回転ヘラ切りの底部を持ち、内底面が窪む坏である。これは10世紀に入る段階のものではないかと考えられる。281は坏蓋で、扁平なつまみを持つ。285は底部外面に墨書きが記されるが、破片のため文字は読み

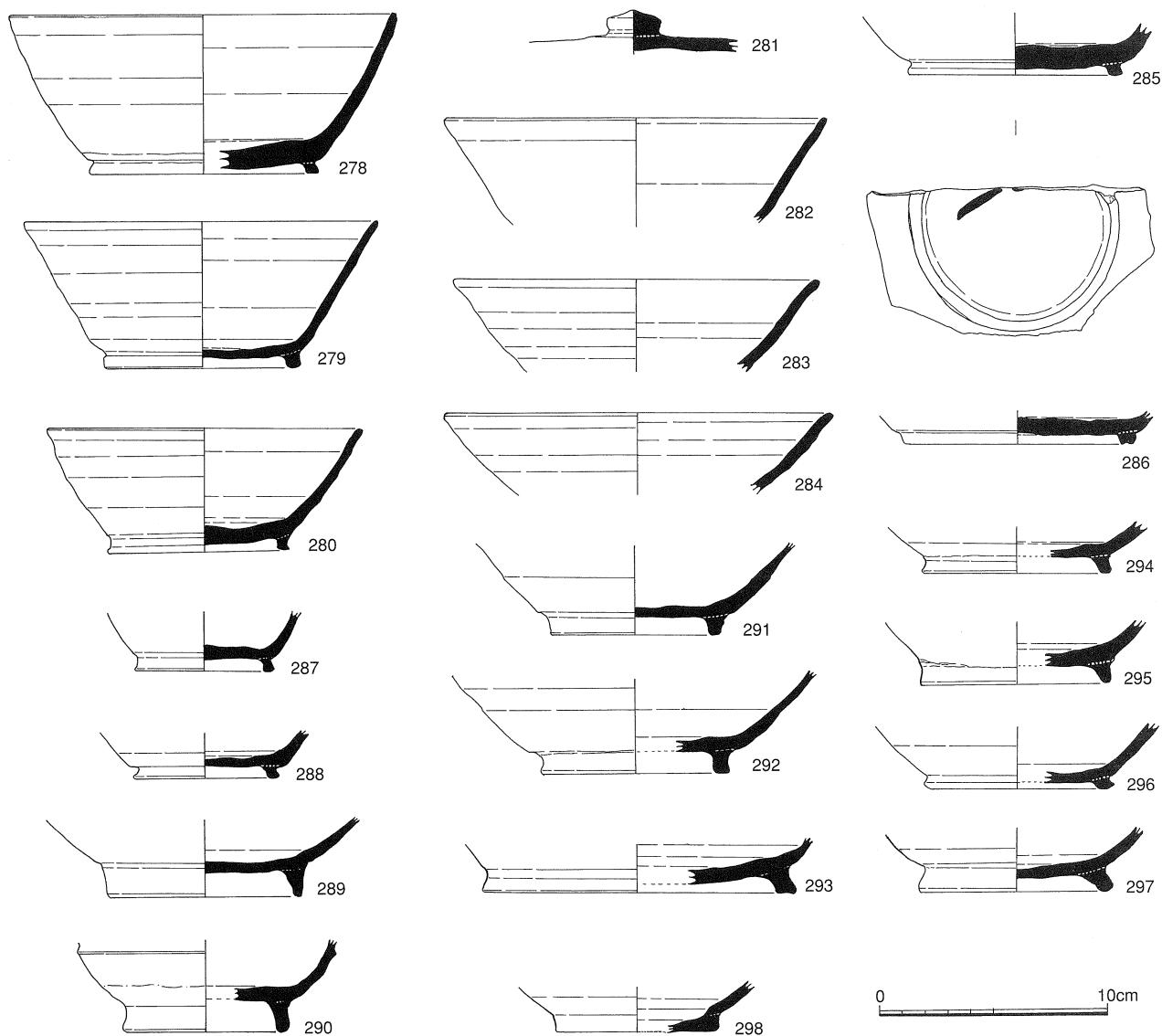


fig.68 黒褐色粘質土出土須恵器坏

取れない。

これらは9世紀を中心として、一部10世紀前半のものを交える土器であると考えられる。

黒色土器

高台の有無に大別される。すべて内面を焼いて黒化する黒色土器A類である。299～301は坏で、胴部下半はヘラ削りを行い、口縁端部は横ナデを行う。内面はヘラをラセン状に回転させて施された暗文が見られる。302～306は前者と同じ作りであるが、細かいヘラ磨きが明瞭に認められる。これらの口縁端部は外反するものが多い。307は坏の底部で細かいヘラ磨きが見られる。308のような小型の坏もある、製作技法は前者と同様である。309～312は高台を持つ坏である。高台は断面三角形を呈するものが多いが、312のように細いものもある。内底面は粗いヘラ磨きを行い、これまで述べた高台の無いものとは、異なったところで製作されている可能性が高い。313は皿で、大きく外反する口縁部を持ち、高台は断面三角形を呈する。内底面には細かいヘラ磨きがあり、ヘラをラセン状に回転させて施された暗文が残る。

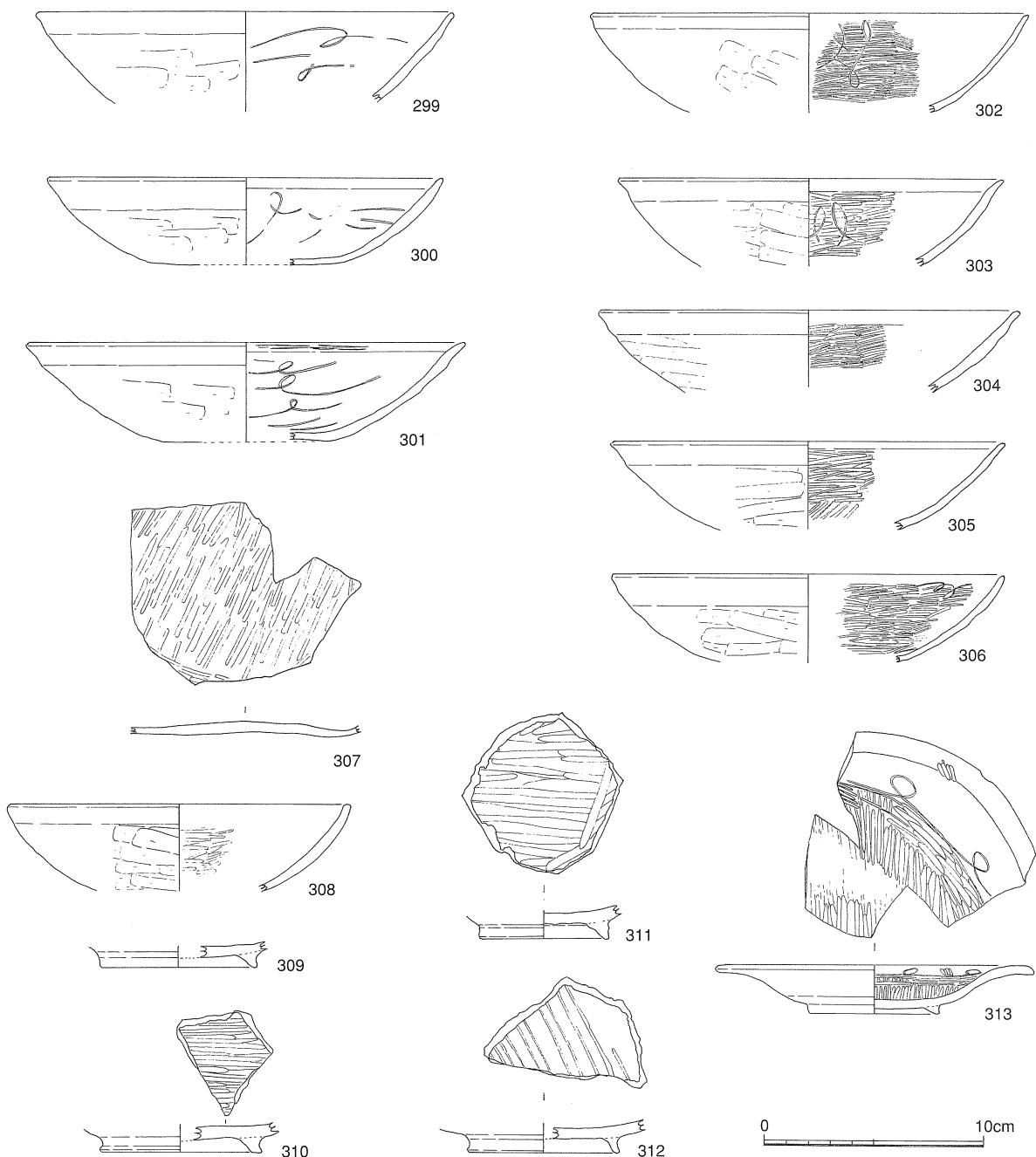


fig.69 黒褐色粘質土出土黒色土器壊・皿

緑釉陶器

314～335は粘土分の多い硬質の胎土を持つ緑釉陶器である。314、315は蛇ノ目高台を持つ皿で、明緑灰色の釉がかかる。318は口縁端部のみを押圧するタイプの輪花を有する碗である。317は稜皿で、あまり明瞭でない稜を有する。319～321は塊である。332～330は塊または皿の高台部である。削り出して輪高台を作るもの（322～326）、底部外面がややくぼんだ平高台をもつもの（327～330）、輪高台のものは高台部まで、平高台のものは全面に施釉される。334、335は回転糸切りを施す小塊のタイプのものである。331は耳皿で、底部を回転糸切りで切り離す。これらは、京都・洛西付近の窯の製品と考えられる。

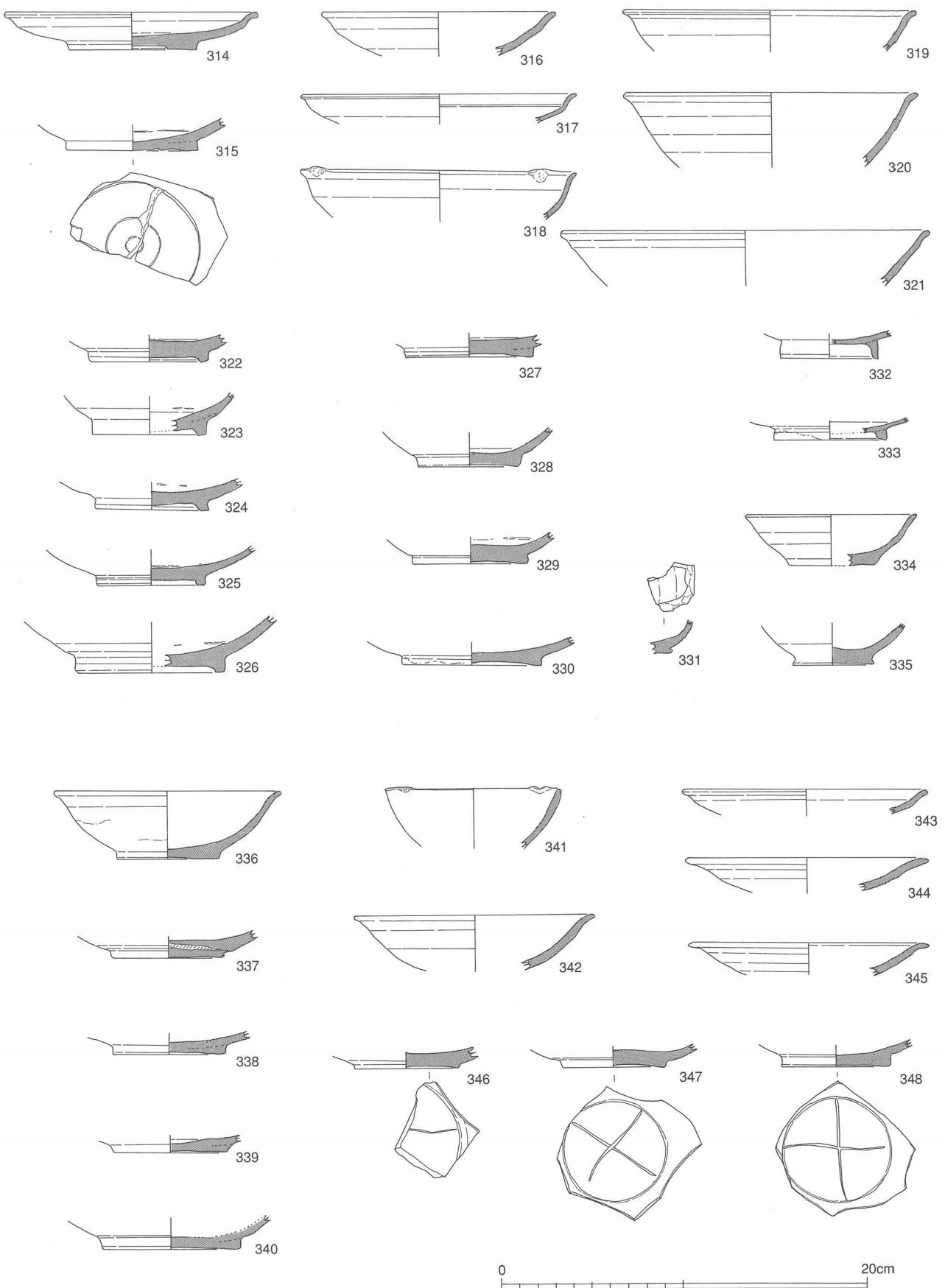


fig.70 黒褐色粘質土出土綠釉陶器

336～348は、砂っぽい胎土で、軟質な焼成状態を示す緑釉陶器である。336は口縁部が外反する塊で、底部は回転ヘラ切りである。341は口縁端部のみを押圧するタイプの輪花塊である。口縁端部は外反するもの（342、344、345）明瞭でない稜を持つもの（343）がある。337～340、346～348は塊または皿の底部で、平高台を削り出して作る。これらは底部外面まで釉を施す。また、346～348は焼成後、×印を高台部に刻む。これらは京都・洛北付近の製品と思われる。以上の緑釉陶器は概ね9世紀～10世紀の初めのものと判断される。

参考文献

- (1) 高橋照彦「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告第60集』1995
- (2) 山本信夫「大宰府出土施釉陶器の編年について」『国立歴史民俗博物館研究報告第82集』1999

灰釉陶器

破片数は緑釉陶器よりも少ない。349～352は塊または皿の口縁部で、図示したものはすべて外反する。353～356は塊または皿の底部で、輪高台を貼り付けている。緑灰色の釉を高台の外側まで施す。小破片のものが多いので断定しにくいか、大略、黒窓90号窯式期のものと考えられ、9世紀中頃～末頃のものと判断される。

参考文献

- 斎藤孝正「越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器」
『日本の美術6 No.409』2000

越州窯系青磁

破片数で11点の越州窯系青磁が出土した。この内、図化できたものは4点である。357は碗口縁部で、やや内傾する高台を持ち、透明なオリーブグリーンの釉が掛かる。山本信夫氏分類I 3タイプにあたる。358のような蛇ノ目高台が付くと思われる。

358は光沢のないオリーブグリーンの施釉を全面に行い、畳付の一部の釉を搔きとっている。また、目痕が畠付に1ヵ所残る。360は外底面が少し窪む平高台の碗で、透明なオリーブグリーンの釉が掛かるが、外面下半から高台にかけては露胎となっている。底面には目痕が明瞭に認められる。山本信夫氏分類I 5タイプにあたる。359は底部外面を削り出し、明黄灰褐色の胎土で、乳灰色の釉が掛かり、一見、生焼けのような印象を受ける。山本信

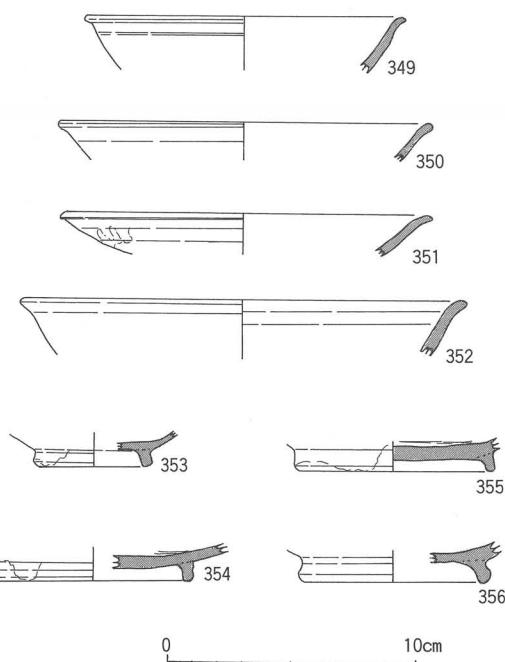


fig.71 黒褐色粘質土出土灰釉陶器

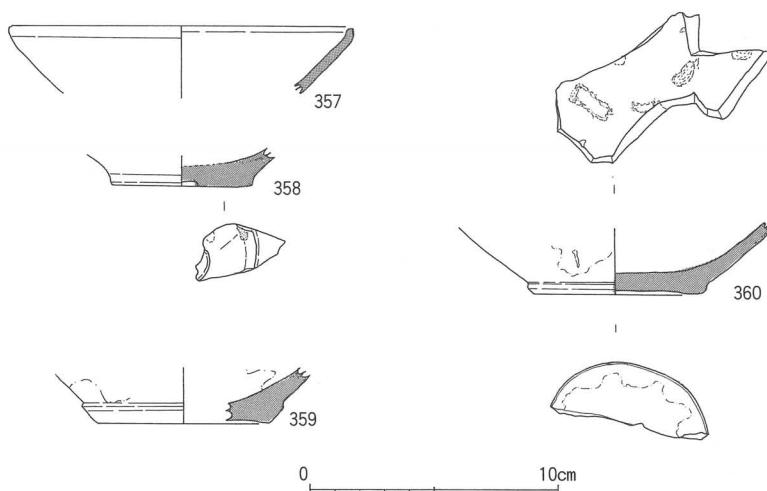


fig.72 黒褐色粘質土出土越州窯系青磁

夫氏分類II 2 タイプである可能性があるが、これについては検討を要する。

参考文献

山本信夫「大宰府出土施釉陶器の編年について」『国立歴史民俗博物館研究報告第82集』1999

須恵器壺・蓋・鉢・硯・甕

365は壺K、366は壺Lで、361、362は薬壺の蓋である。367は壺の肩部で、突帯に環状の耳を貼り付ける。

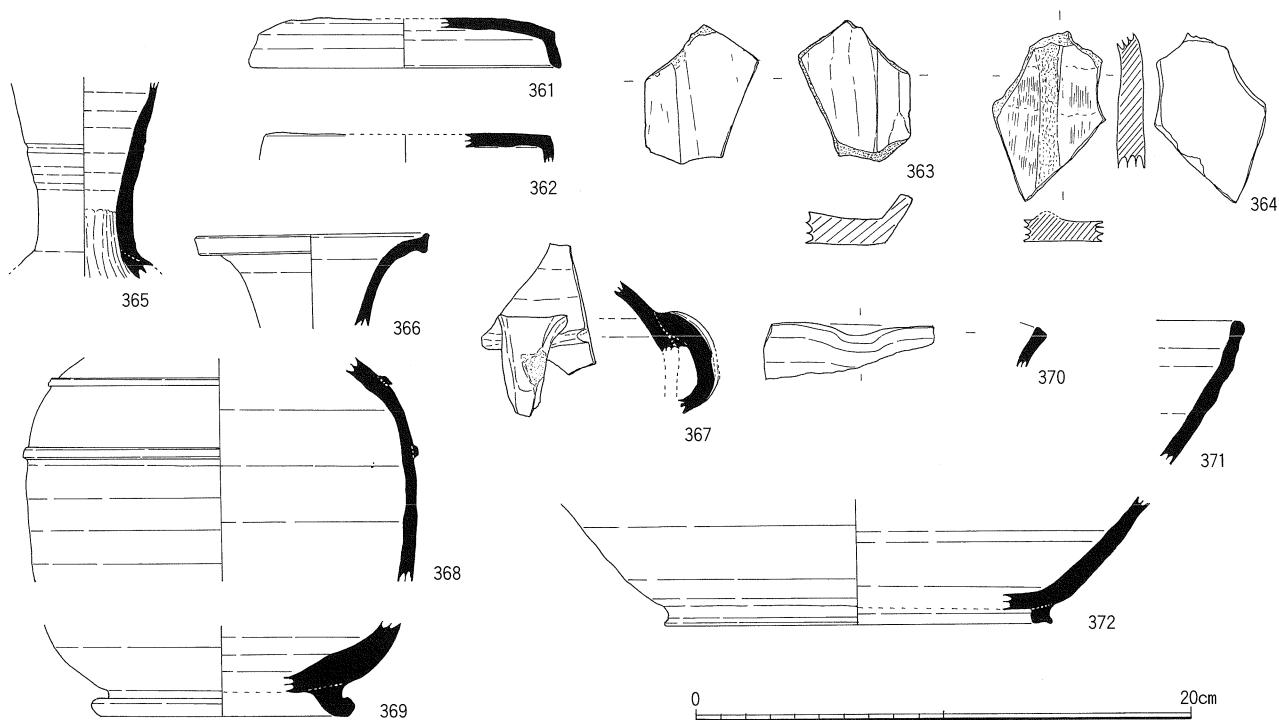


fig.73 黒褐色粘質土出土須恵器壺・蓋・鉢・硯

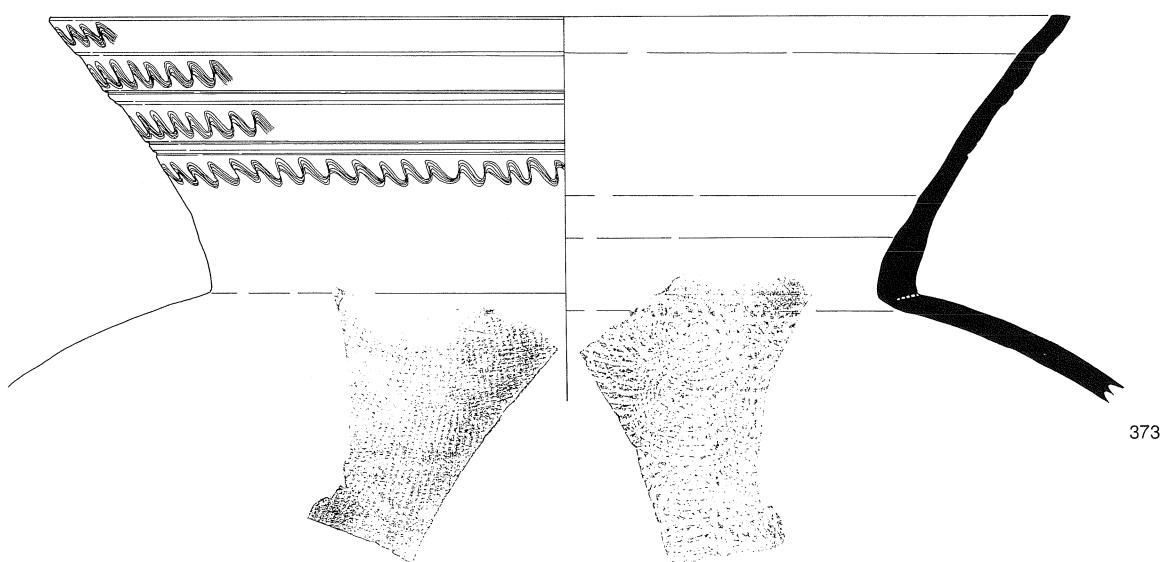


fig.74 黒褐色粘質土出土須恵器壺

368は前者と同一器形と思われる壺で、肩に2条の突帯を貼り付ける。369は壺の底部で、上半分は欠失している。370～372は鉢で370には片口が付いている。363、364は硯で、364には堤の痕跡が残る。いずれも風字硯である可能性が高い。373は甕で、口縁部に4条の波状文を持つ。肩部にはタタキ目の痕跡が残る。

土師器羽釜・甕

374～376は羽釜で、段を持つ短い口縁部を有する。胴部外面は刷毛目を施す。内面は横方向のナデと指頭圧痕が残る。377～380は甕Aで、球形に近い胴部を持つ。小型（377、378）は胴部内面をヘラ削りで調整し、外面には刷毛目を施す。大型の380の内面はヘラ削りで、外面には指頭圧痕が残されている。381は細長い胴部に強く外反する口縁部を持つ。外面は刷毛目、内面は刷毛目と指頭圧痕が残されている。

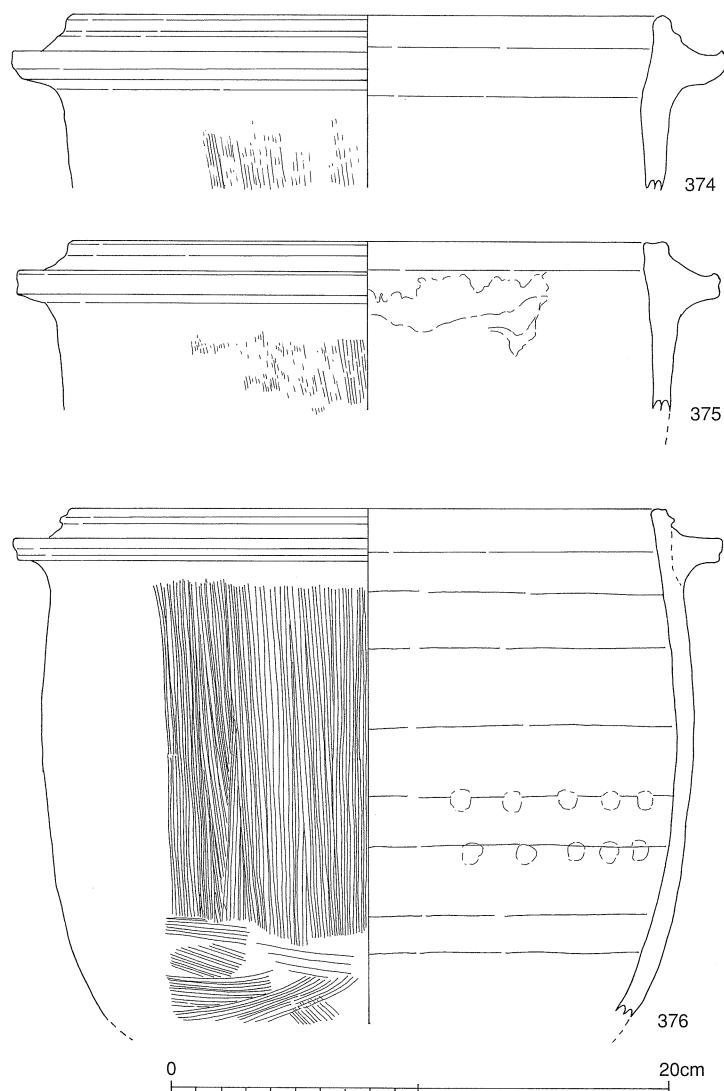


fig.75 黒褐色粘質土出土土師器羽釜

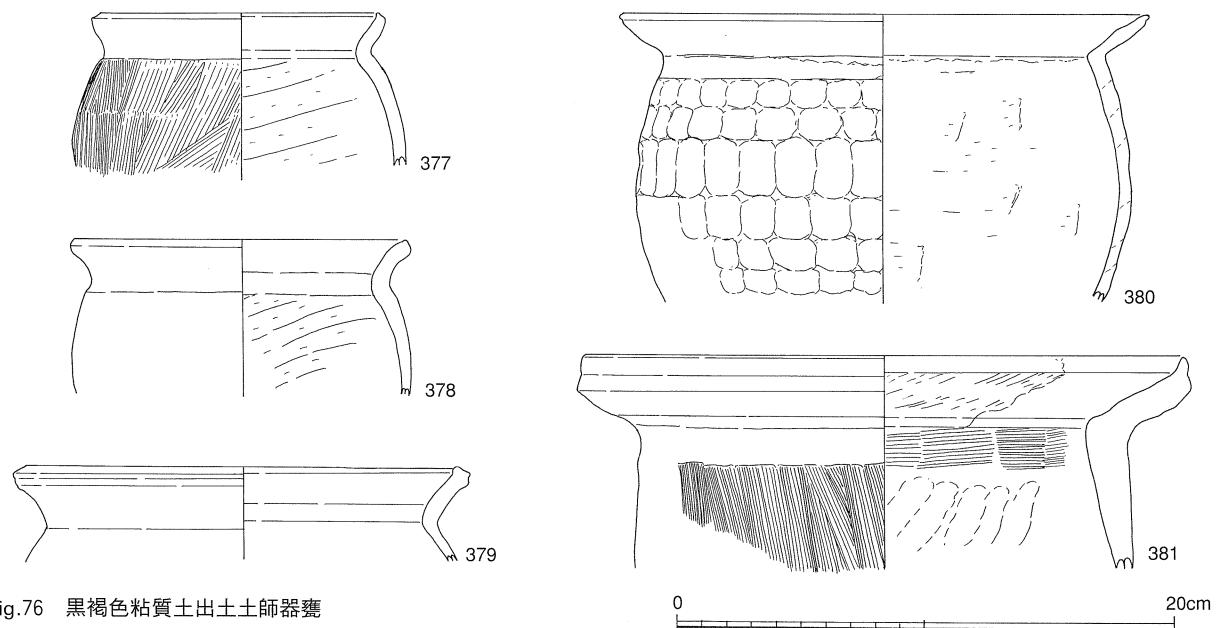


fig.76 黒褐色粘質土出土土師器甕

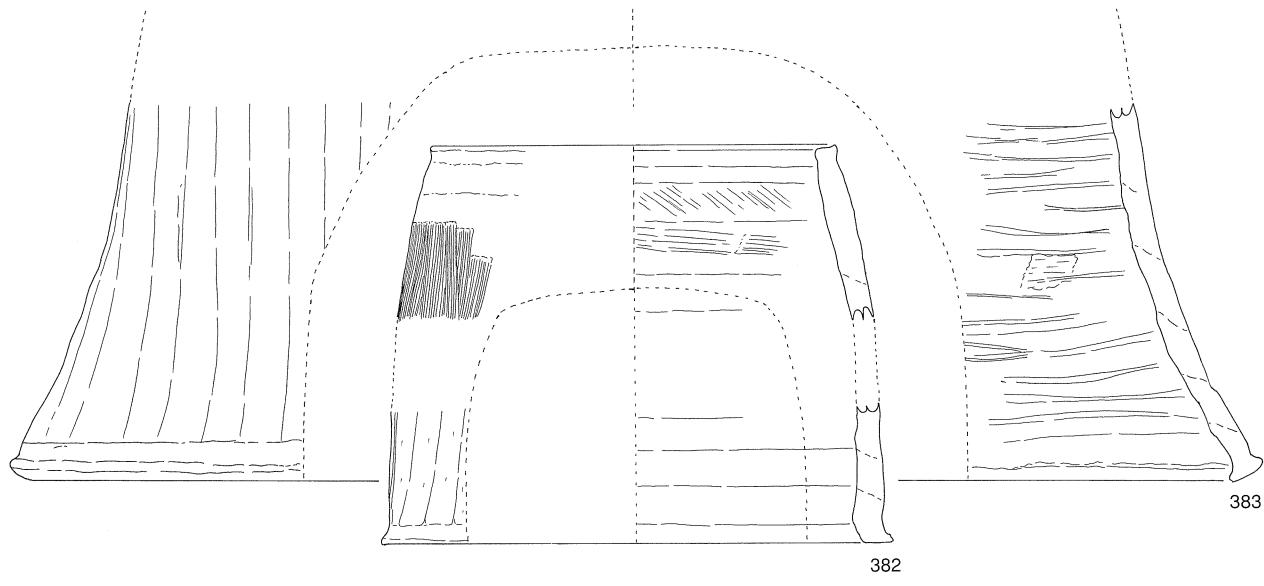


fig.77 黒褐色粘質土出土竈

竈

竈が2点図化可能であった。383は内外面共に板ナデを行う。382は外面上半部は刷毛目、下半部はヘラ削りを行う。内面は刷毛目と横方向のナデを施す。

土師器皿

384～391は口縁端部に横方向のナデを施し、強く屈曲させたいわゆる「ての字」状を呈する皿である。底部外面には指頭圧痕が残されている。これらは概ね黒褐色粘質土の上層から出土している。10世紀に入る土器であると考えられる。

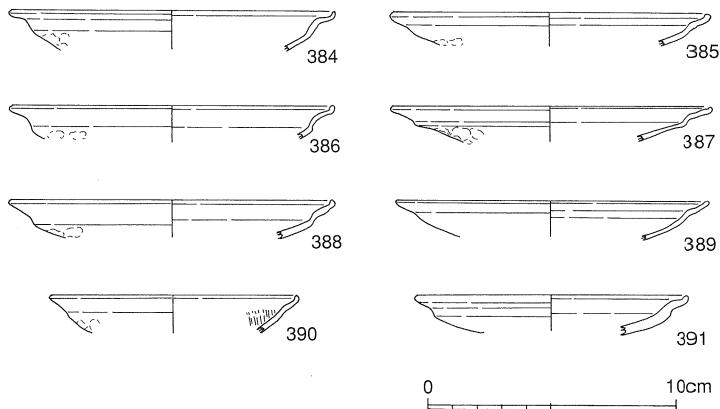


fig.78 黒褐色粘質土上層出土土師器皿

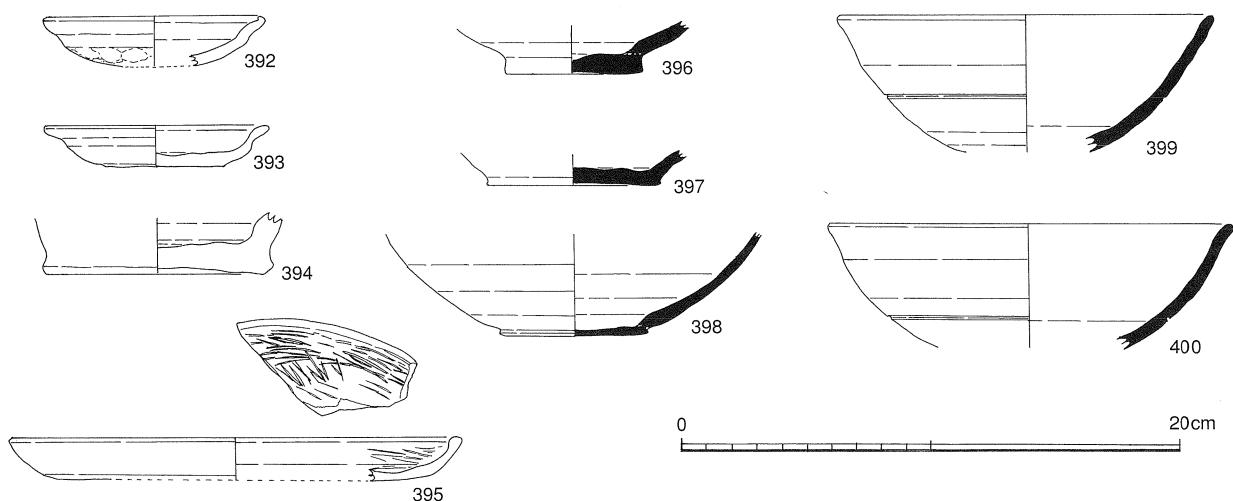


fig.79 黒褐色粘質土上面出土の土器

黒褐色粘質土上面出土の遺物

調査時に黒褐色粘質土上面として取り上げた遺物には、11世紀代のものが混入していた。これらは、おそらく同層の上面が耕作される時に搅乱され、混入したものと考えられる。

392、393は土師器皿で、393、394の底部は回転糸切りである。396～400は東播系の須恵器塊である。395は黒色土器の皿と思われる。

瓦

401～405は土師質の瓦で、401、402、404は平瓦、403、405は丸瓦である。平瓦の凹面は布目圧痕が残り、凸面は401、402はナデ調整、404は縄目の圧痕が残る。403、405は外面はヘラ削り、内面には布目圧痕が残る。406～411は須恵質の瓦である。406は重廓文軒平瓦で、凹面には布目圧痕が残り、凸面はヘラ削りを行う。この瓦の頸には、丹と思われる赤色顔料が塗られた痕跡が残っている。この部分は、軒瓦を載せる建築部材である茅負（かやおい）に接する箇所であり、瓦葺で朱塗りの建物が存在したことを窺わせる。407～410は平瓦で、407は接合する箇所はないが、406と同一個体の可能性が高い。408～410の凹面は布目圧痕が残り、凸面は縄目を残すもの（408、410）やヘラ削りを行うもの（409）がある。411は丸瓦で、内面には布目圧痕が残る。

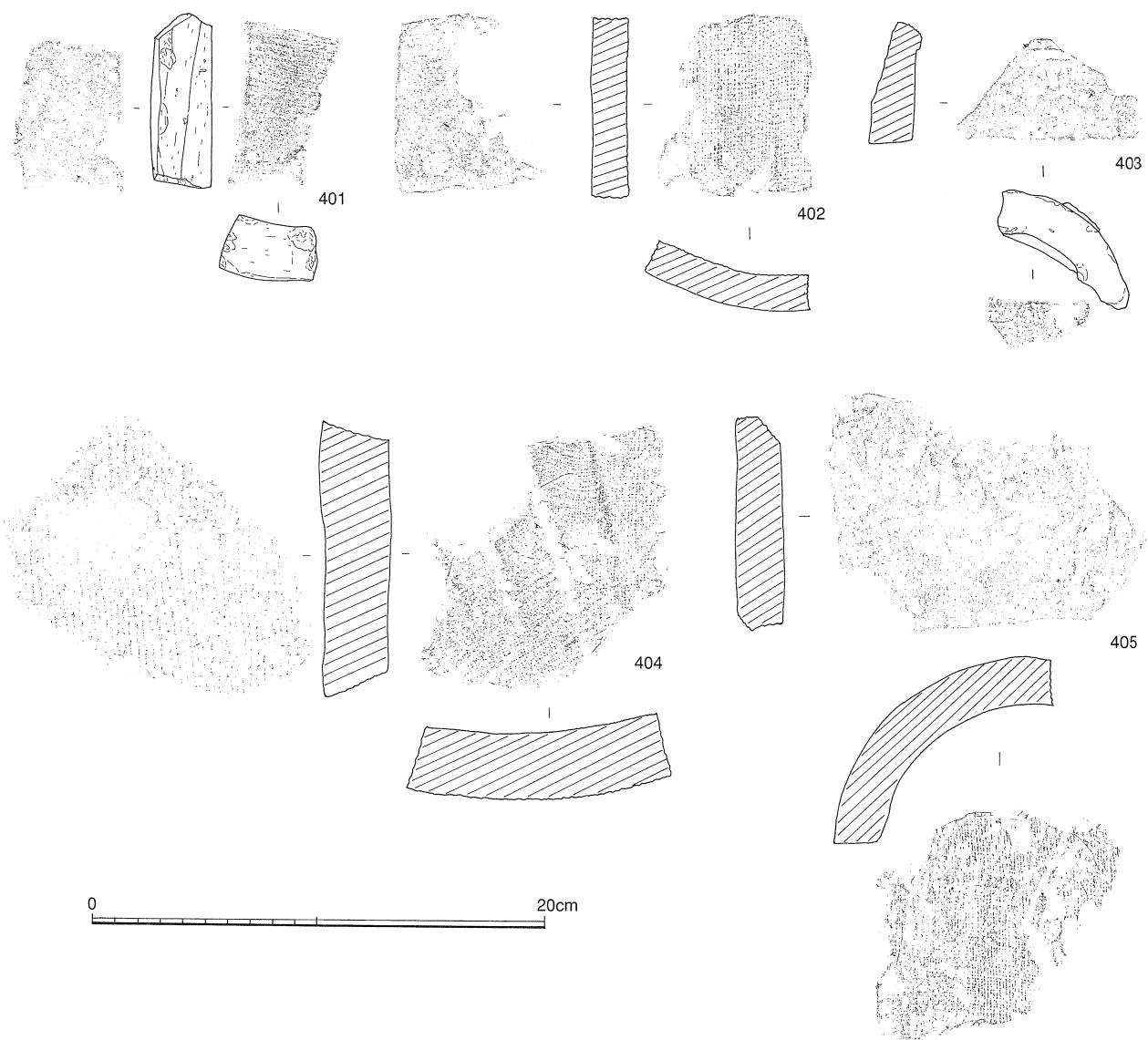


fig.80 黒褐色粘質土出土瓦(1)

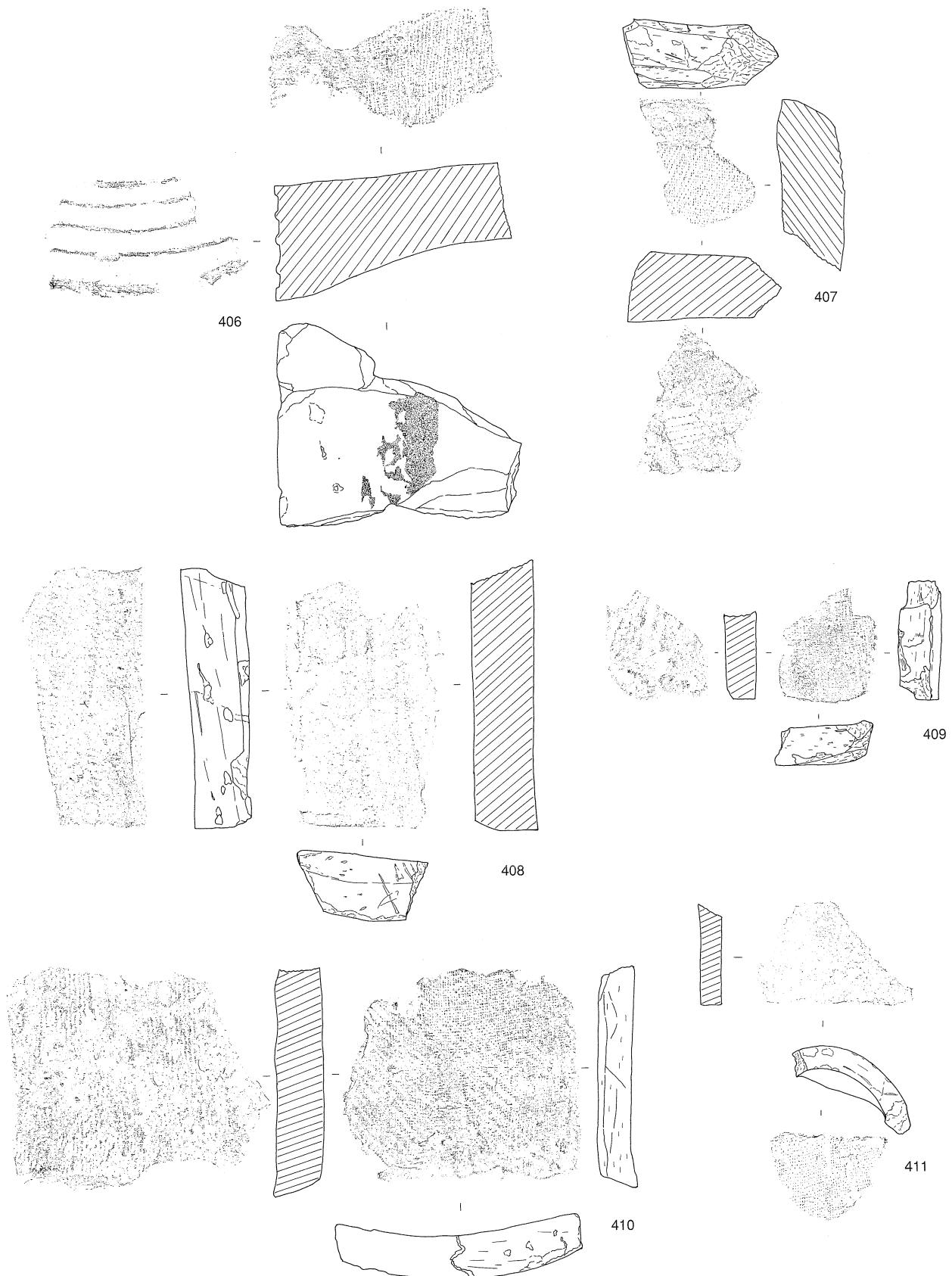


fig.81 黒褐色粘質土出土瓦(2)

0 20cm

土錘・蛸壺・浮子

412～421は棒状有孔土錘で、手づくね整形の後、両端を穿孔する。422～428は環状土錘で大・小がある。429は有溝土錘である。430～433は飯蛸壺で、把手の丸いもの（430）と角ばったもの（431）がある。434、435は軽石製の浮子で、紐を巻いて固定するための抉りが入れてある。黒灰色砂質シルト～暗褐色砂質シルトから出土したものは、412、414、415、418、419、420、425、432、434で、黒褐色粘質土からは、413、417、421、423、424、426、427、428、430、432、433、435が出土している。遺構（S D203）からは422、429が、中世耕作土からは416、431がそれぞれ出土している。

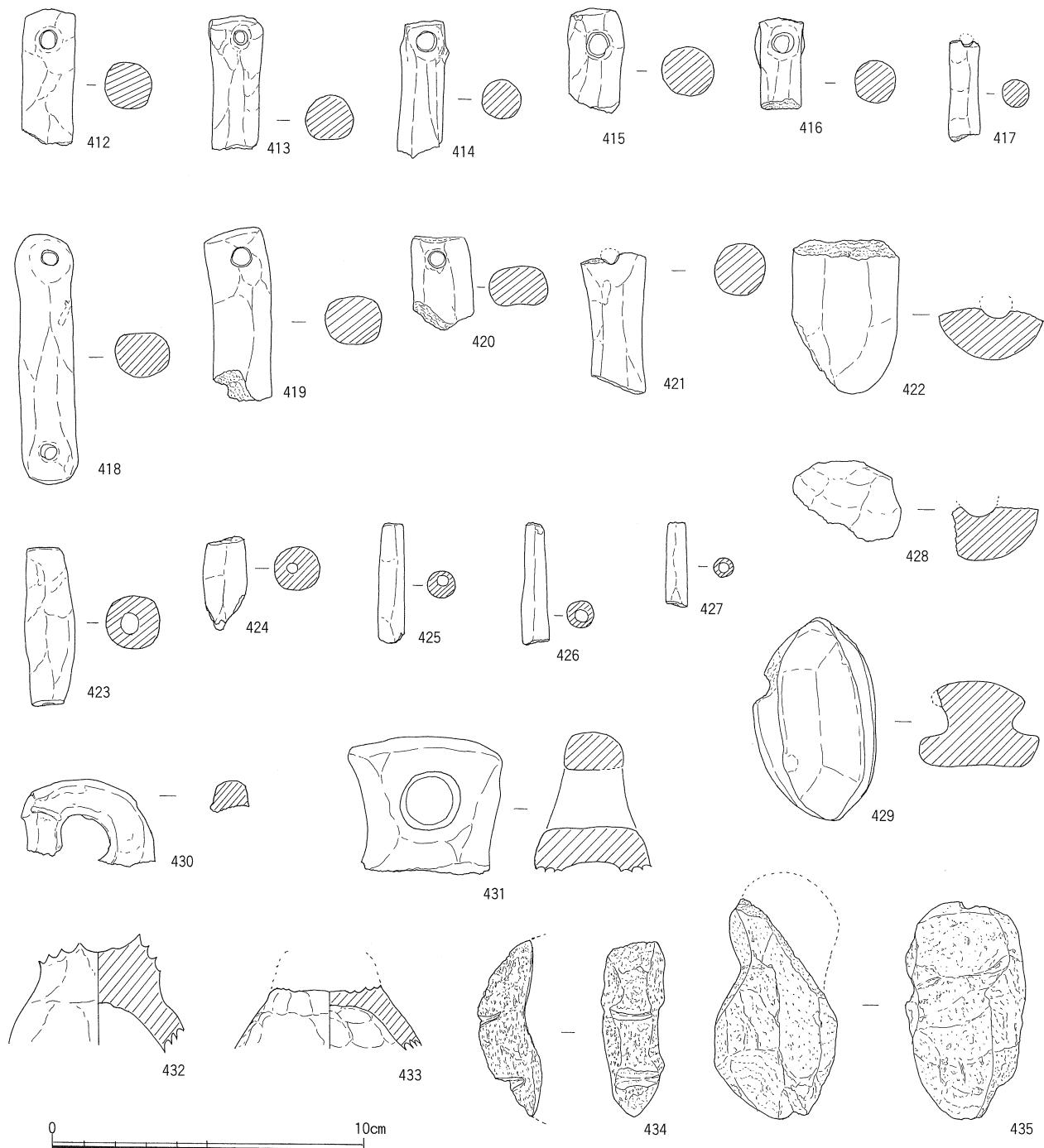


fig.82 第45次調査出土土錘・蛸壺・浮子

埴堀

埴堀の破片が3点出土した。その内、図化したものは2点である。外面には強い火を受けたため、器壁が焼け爛れ、白～緑色に変色している。内面は搔き採られているため、調整は不明である。436は黒褐色粘質土、437は暗褐色砂質シルトから出土している。

轆羽口

轆羽口は破片としては多数出土しているが、小破片が多く、掲載したのは4点である。439～441は羽口先端部で、高熱で灰白色から淡灰色に変色し、細かい気泡が無数に生じている。441には鉄滓が付着している。438は羽口の基部と思われる。ヘラによる面取りで外面を調整している。いずれも環状を呈する。438は暗褐色砂質シルト、439は黒褐色粘質土、440はピット、441は中世耕作土から出土している。

金属製品

金具状のもの（442、443）、釘（444、445、447、448～450、452～455）、鎌状のもの（446、451）、用途不明の板状の鉄片（456、457）、刀子（460）、鍵（458）、鉤（459）が出土した。これらはすべて黒褐色粘質土から発見された。458は当初は、錠前（海老錠）の弦通し孔の部分を想定したが、基部の作りが非常に細いため、錠前を開錠する鍵の柄部と考えた方が良いと判断した。同型のものは見当たらないが、神奈川県東大竹・市場遺跡（奈良・平安時代）の遺跡で似たものが出土している。459は「クルル鉤」と呼ばれる蔵の扉等に使用されるものである。鉄棒を逆L字形に曲げ、先端を鉤爪として引っ掛けられるように曲げている。開錠部の全長は約23cmで、他の出土例との比較では、小形の方に属する。鍵類は、都城、寺院、地方官衙、地方官衙と関連する集落または、その地域で有力な集落遺跡から出土しており、その特殊なあり方が注目される。

参考文献 合田芳正『古代の鍵』1998

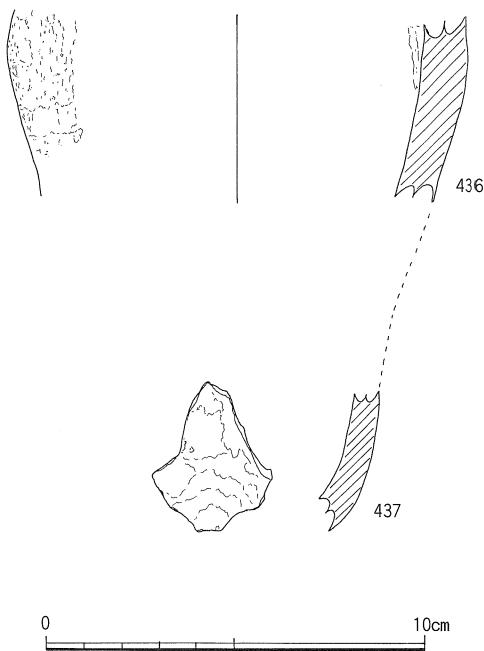


fig.83 第45次調査出土埴堀

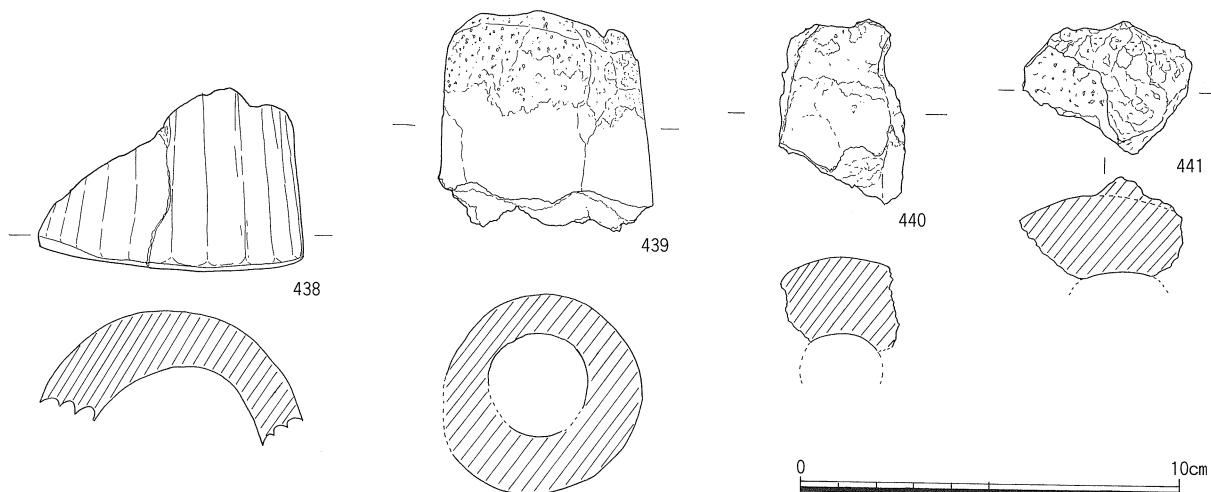


fig.84 第45次調査出土轆羽口

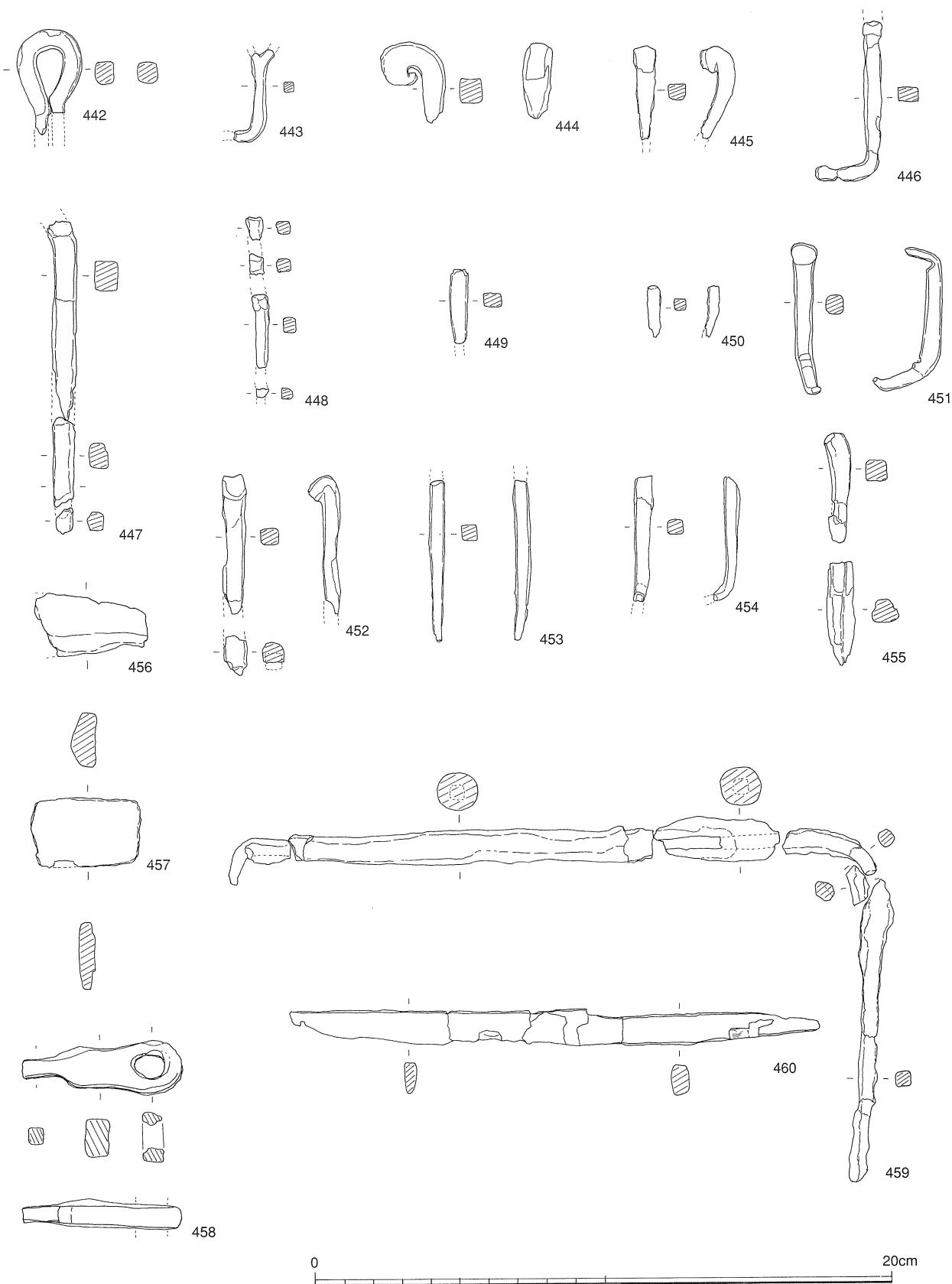


fig.85 黒褐色粘質土出土鉄製品

砥石

砥石は6点出土した。461は3面に縦方向の使用痕を残す、一部の面は焼けている。材質は砂岩で、比重は2.41である。462も焼けて2面が剥離している。平滑化された面には一方向の使用痕が認められる。材質は凝灰質砂岩で、比重は2.15である。463は2面に平滑な面が残されている。敲打痕が何ヵ所か残されており、打ち割られたようである。材質は砂岩で、比重は2.32である。464は6面が平滑化され、良く摩滅した砥石である。材質は凝灰岩で、比重は2.25である。465は2面に縦方向の使用痕を残す。材質は砂岩で、比重は2.28である。466は4面が平滑化されており、条痕や敲打痕が残されている面が認められる。材質は砂岩で、比重は2.47である。461～465は黒褐色粘質土から、466はS P 242から出土した。

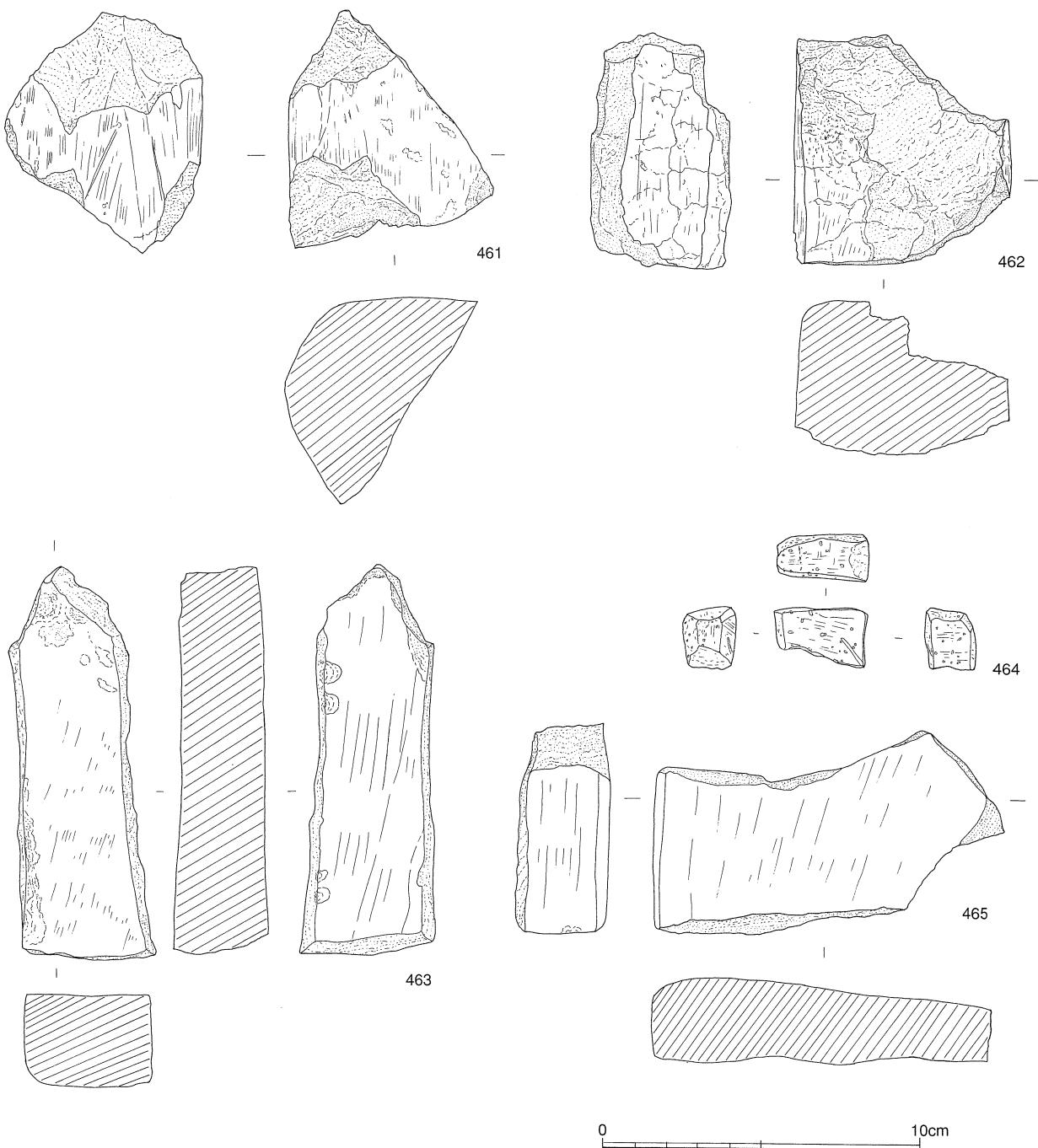


fig.86 黒褐色粘質土出土砥石

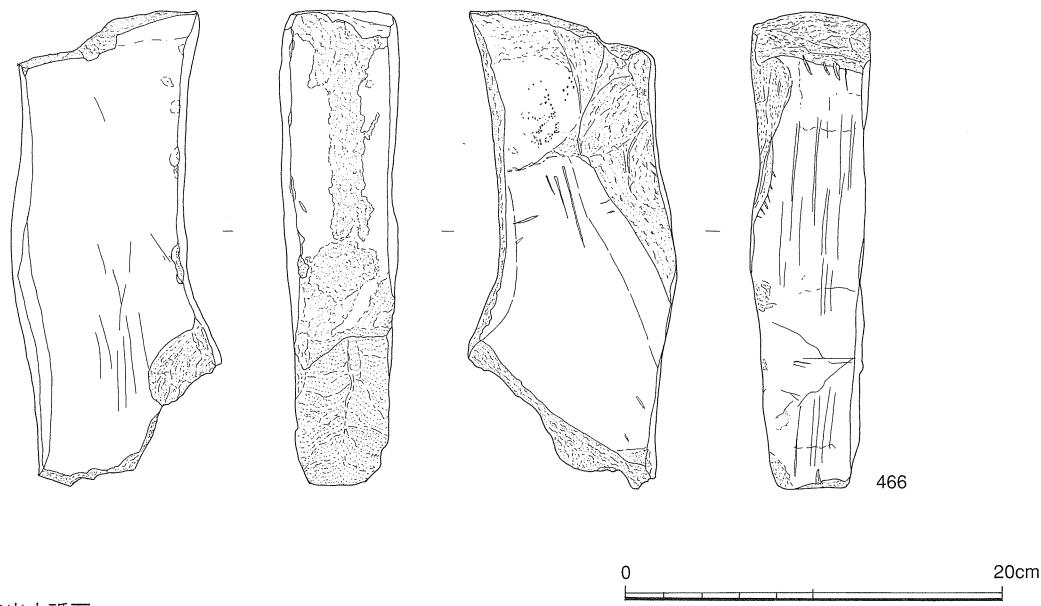


fig.87 S P 242出土木製品

木製品

477はS P 262出土の柱材で腐食は著しいが、面取りが施されている。樹種はヒノキである。476は丸杭で、先端を削る。樹種はコウヤマキである。467～475、478、479は丸杭または割杭である。丸杭は枝状の細い部分を使用して先端を加工している。樹種は479はツガ、その他はマツ属複維管東亜属である。また、暗褐色砂質シルト層から長さ約75cmの薄い板材（樹種はヒノキ）が出土しているが、図示しなかった。

遺構出土の土器・陶磁器

480、481、493は飛鳥時代の須恵器、土師器で、482、484、485、488、489、491、492は奈良～平安時代の須恵器、483、490、494は同時代の土師器、486は黒色土器A、487は灰釉陶器、495は平安時代末の瓦器である。484、488は内面が摩滅しており、転用硯の可能性が高い。490には口縁部に灯芯の痕跡が残る。480はS P 245、481はS D 201、482はS P 243、483～485はS X 201、486～488 S D 203、489はS P 240、490はS P 256、491、492はS D 204、493はS P 246、494はS P 254、495はS D 202から出土した。

中世耕作土出土の土器・陶磁器・瓦

498は深緑色の釉が掛かる綠釉陶器で、近江系のものと推定される。504、505は硬質の胎土の綠釉陶器、506、507は灰釉陶器で9～10世紀のものである。496、497は白磁碗、499～503は青磁碗・鉢で、13～15世紀のものである。508、509、513、514は東播系の須恵器塊、捏鉢で、平安時代末～鎌倉時代のものである。510～512は陶器擂鉢、515は珠文帯を持つ軒丸瓦で室町時代のものである。他に洪武通宝1枚が出土している。

5. 小結

今回の調査では、3面の遺構面が確認できた。第3遺構面では、飛鳥～奈良時代と考えられる流路状の窪みやピット、杭列を確認した。また、同遺構面直上層から出土した三彩は、神戸市内の発掘調査で出土した初例であり、兵庫県下でも10例ほどである。第2遺構面では、9世紀末から10世紀初めの掘立柱建物1棟とピット、溝を検出した。建物が造られる以前の窪地からは9～10世紀頃の遺物が出土し、当該時期の良好な資料を得ることができた。また、炭化物層には栽培植物の種実や大量のイネの藁、粉殻由来の植物珪酸体が含まれていた。付近で穎稲等を穀化し、その粉殻等を焼却して捨てた可能性がある。第1遺構面では平安末～鎌倉・室町時代頃の遺物と共に、溝、犁溝が発見され、この段階では耕作地化されていたと考えられる。

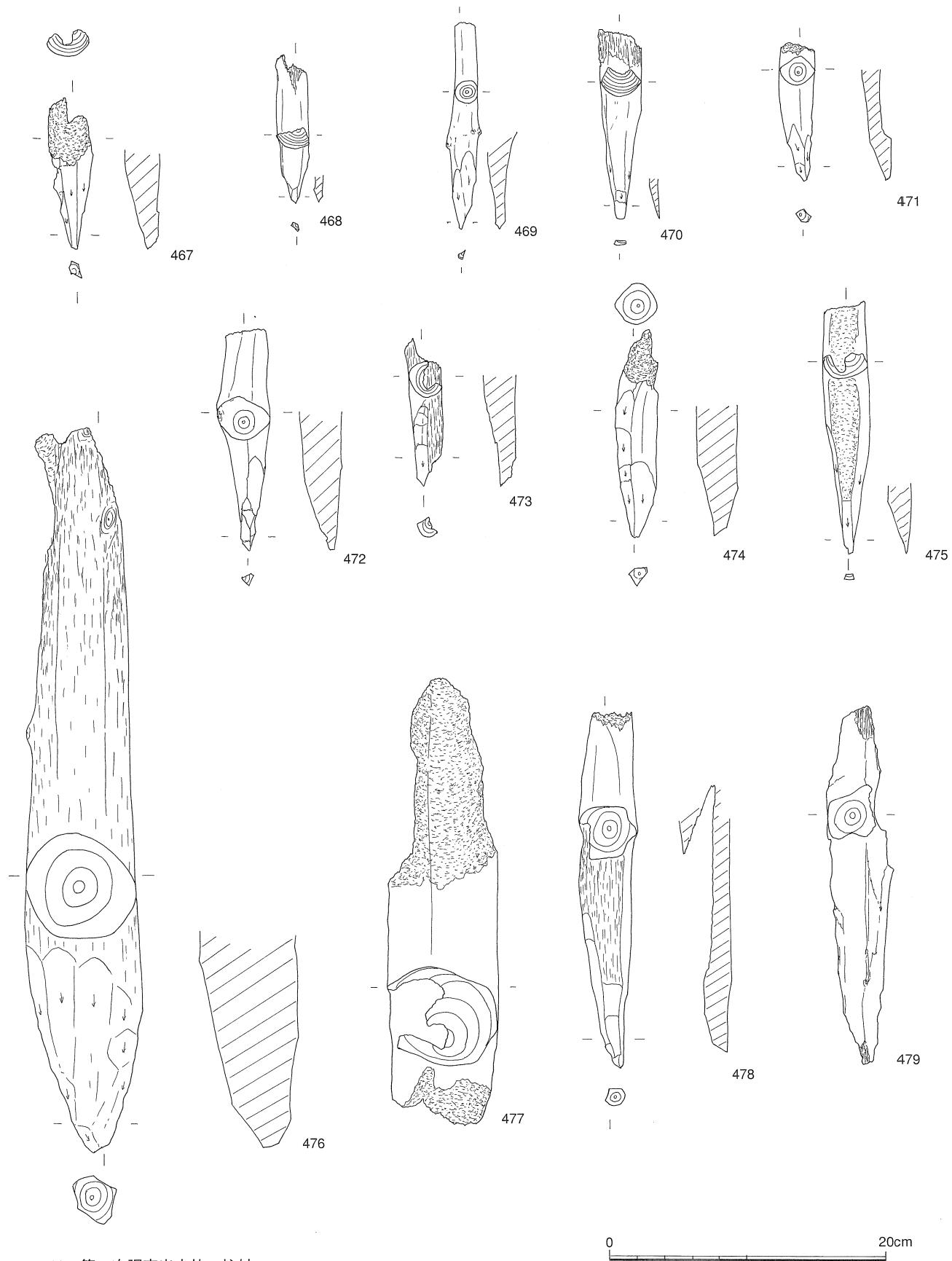


fig.88 第45次調査出土杭・柱材

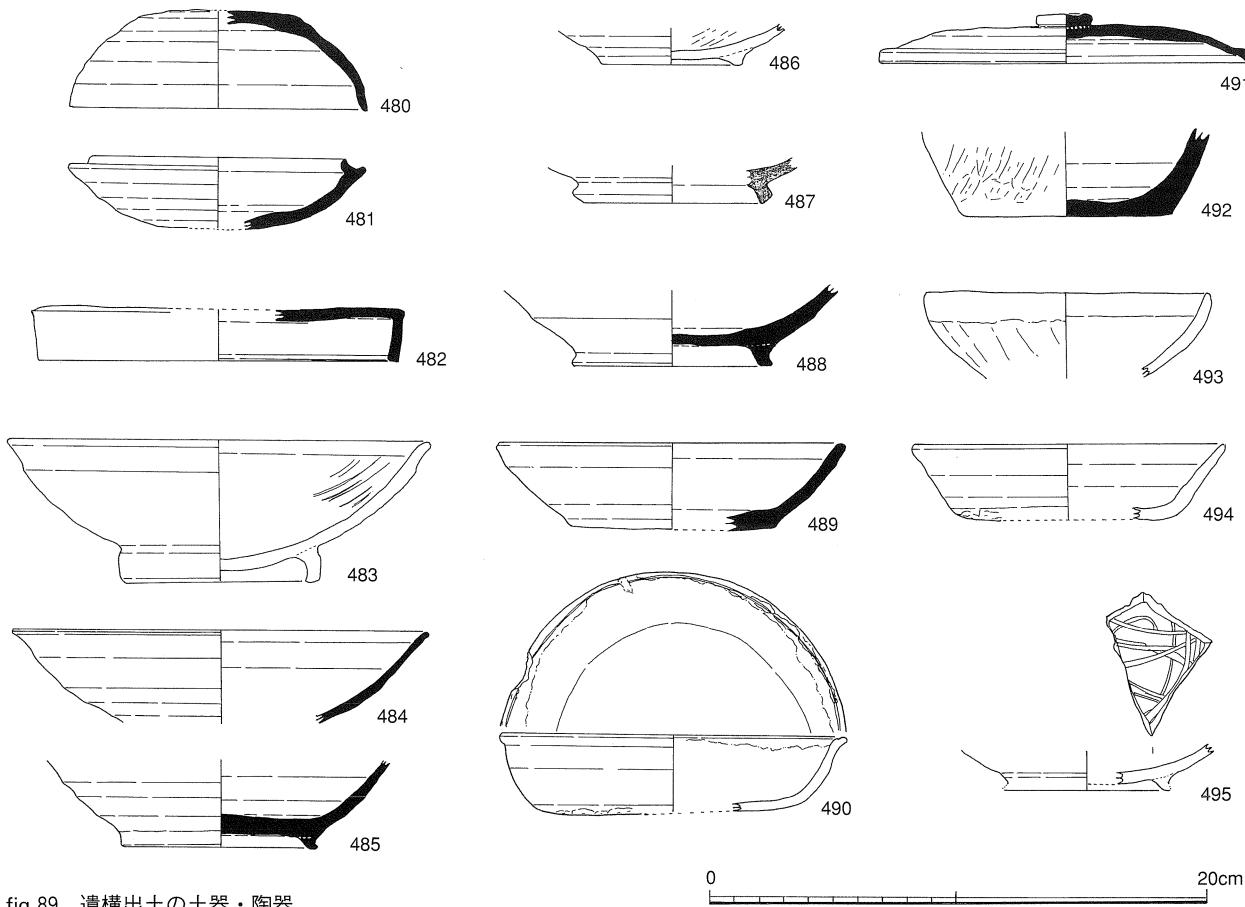


fig.89 遺構出土の土器・陶器

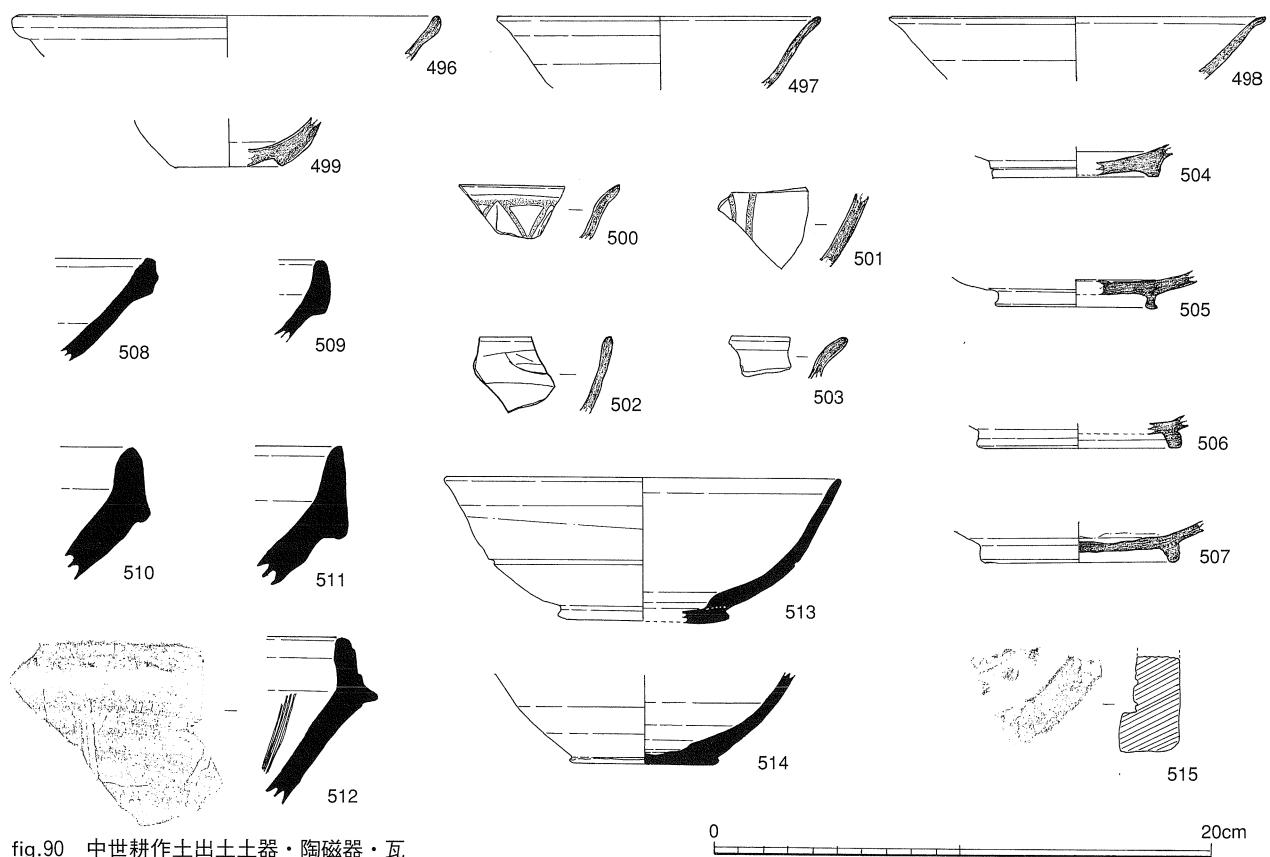


fig.90 中世耕作土出土土器・陶磁器・瓦

第9節 第51—1次調査

1. 調査の概要

(1) 調査の状況

この調査は、これまで記述した国道28号線の東側の拡幅工事に伴う調査と異なり、それに並行して行われる、国道西側の歩道および一部車道部分に設置される電線・下水共同溝の設置に伴う調査の記録である。共同溝のため、国道に沿って北から南に幅1m、長さ約163m（未調査の道路交差点およびバス停部分を除く）の調査を実施した。

調査対象部分のほとんどは、幅約3mの歩道を1m幅で掘削するため、頻繁に往来する歩行者・自転車の安全確保に努めながらの調査となった。また、歩道部分には埋設管・標識・電柱が多数、埋・敷設されて、遺物包含層および遺構検出面が相当攪乱されていた。比較的良好に残っていたのは、植栽帯として使用されていた部分であるが、街路樹を植えていた箇所は根が張っており、調査が不可能であった。

(2) 調査区の設定

調査トレーニチの幅は約1mではあるが、御蔵遺跡をほぼ南北に縦断するような調査方法となっており、遺跡の範囲を知る上で、有効な調査であった。また、調査地を道路交差点で、北から南に向かって便宜上1～5区に区切り、調査を行った。周辺の調査成果との整合性を高めるため、歩道に標識ネイルを打設し、それを図面の中に記入した。調査完了後、基準点測量を実施し、それらのポイントの座標値を求めた。

2. 基本層序

総延長160m以上の長大な調査区のため、遺跡の縁辺部にあたる1区と5区、遺構検出密度の高い2区～4区で説明する。

(1) 1区の基本層序

埋設管等によって、相当攪乱を受けている。残存している部分も、歩道面から30～50cmの間は、アスファルトや舗装ベース（細礫）等が敷かれている。



fig.92 調査前の状況

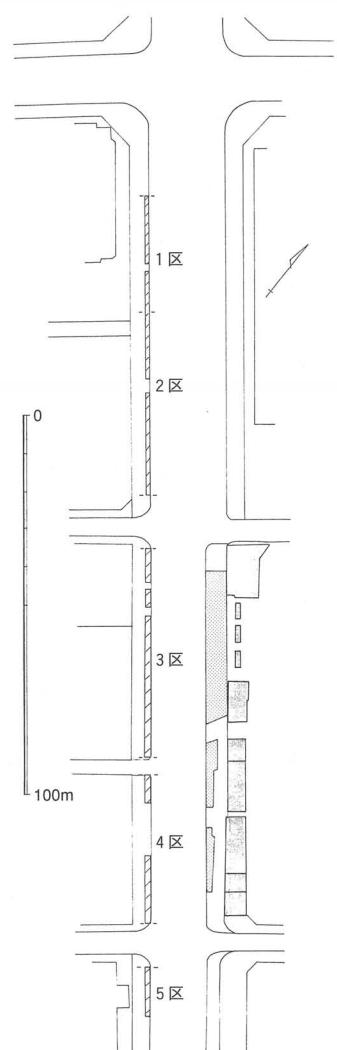


fig.91 第51—1次調査位置図

場所によっては旧耕作土、遺物包含層（灰褐色砂質シルト）が残っている部分もある。歩道面から50~60cmで遺構検出面（黄灰褐色シルト・細砂）となる。

(2) 2区～4区の基本層序

歩道面から約40cm下までは、道路舗装材が敷かれている。その直下で遺物包含層が確認される。遺物包含層は10~20cmほどの厚さで残っている場合が多く、2区では、灰褐色粘質土、3・4区では暗褐色～黒褐色粘質土となっている。その下の黄灰色～黄灰褐色細砂・極細砂が遺構検出面である。4区の南端部では、黒褐色粘質土が漸次、細砂・極細砂層に変化してゆく。この付近で微高地から後背湿地に地形が移り変わる状況を示している。

(3) 5区の基本層序

歩道面から約40~50cm下までは、道路舗装材が敷かれていることは他の地区と同じである。その直下には、中世の耕作土である暗灰色砂質土が広がる。それより以下は粗砂・シルト層が堆積し、安定した土質ではない。洪水の影響を受けやすい不安定な地域であったと推測される。

3. 遺構

(1) 1区の調査

延長約25.5mの調査トレンチである。全体として後世の搅乱が著しく、ピットが5基、溝の可能性が高い落ち込み1カ所が確認されたのみである。

ピットは直径30~60cm程度のものが多い。ピットからは土器の小片がわずかに出土しただけで、時期の詳細は不明である。

(2) 2区の調査

約47mの調査を行った。1区よりも遺構の密度が高く、特に中央部～南部にかけて多くなる。全体で、ピット13基、溝2条、いくつかの不定形な落込みを検出した。

ピットは直径10~20cm前後の楕円または円形である。出土遺物は小破片であるため、穿たれた時期が不明なものが多い。溝S D01には、庄内併行期の土器が多く含まれる。南部では、落ち込みの肩部分にこの時期の甕が1個、完形な状態で出土した。周辺が木の根や後世の搅乱で壊されており、遺構の性格は不明である。

(3) 3区の調査

延長約52.5mを測るトレンチである。北半部は、街路樹の根や搅乱坑により遺構が削られているところが多い。南半部ではピット、土坑が集中する。2区では、ピット21基、土坑1基、溝と推定される遺構6条が確認された。

ピットの中には、平安時代中期（10世紀）の遺物を出土するものがあるが、ほとんどのものが土器の細片しか含んでおらず、時期を明らかにし得ない。土坑SK01は直径約70cm、深さ40cmの円形で、平安時代前期の土師器壺と20~30cm大の石を投棄している。SX01は幅2m以上の溝と考えられるが、遺構の真中にコンクリートの支柱基礎が埋設され、詳細を観察することができなかった。

(4) 4区の調査

延長約27mを測るトレンチであるが、全体的に埋設管や搅乱坑で、遺物包含層や遺構が削平されている。北半部では、溝状の遺構2カ所と小形のピット数基が残存していた。溝状遺構のSX01からは、12世紀代の須恵器壺が出土している。未調査のバス停部分を挟んで南半部では、溝状の遺構、落ち込み状の自然地形が確認された。落ち込みは、南に下がってゆき、飛鳥～平安時代後期の遺物を多く含む、黒褐色～暗褐色の粘質土が堆積している。これは、微高地から後背湿地に地形が移り変わる状況を示している。これらの遺物と

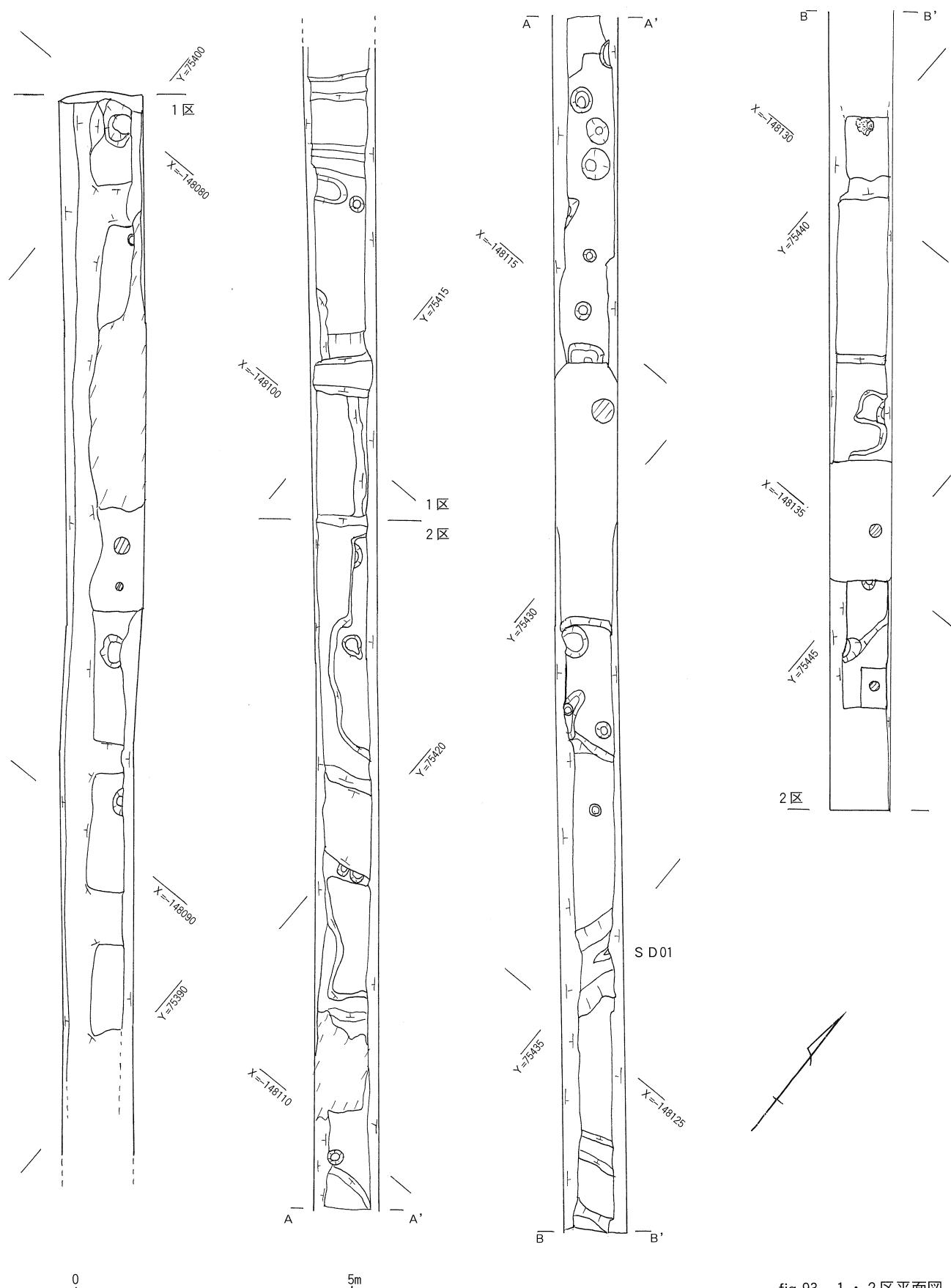


fig.93 1・2区平面図

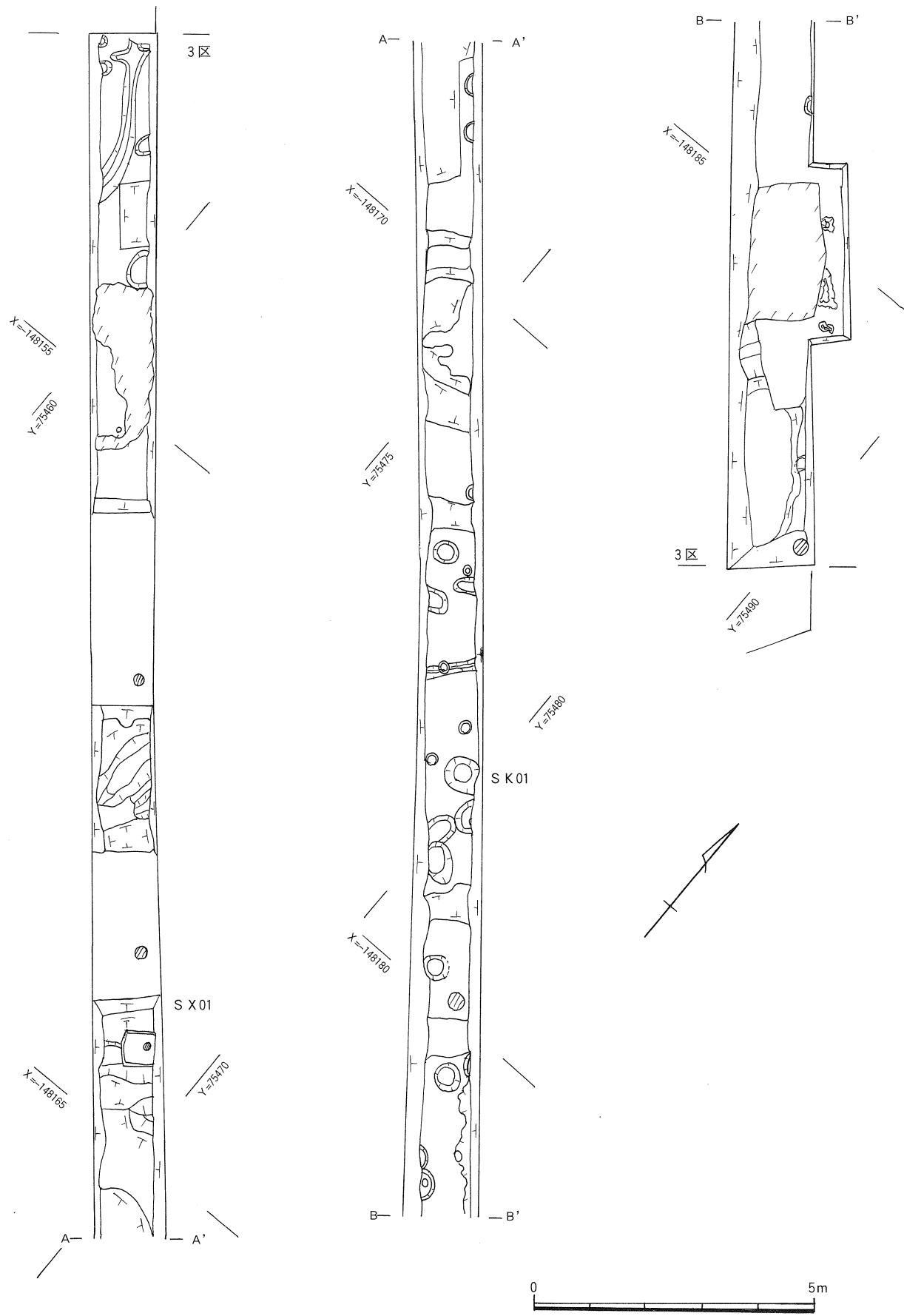


fig.94 3区平面図

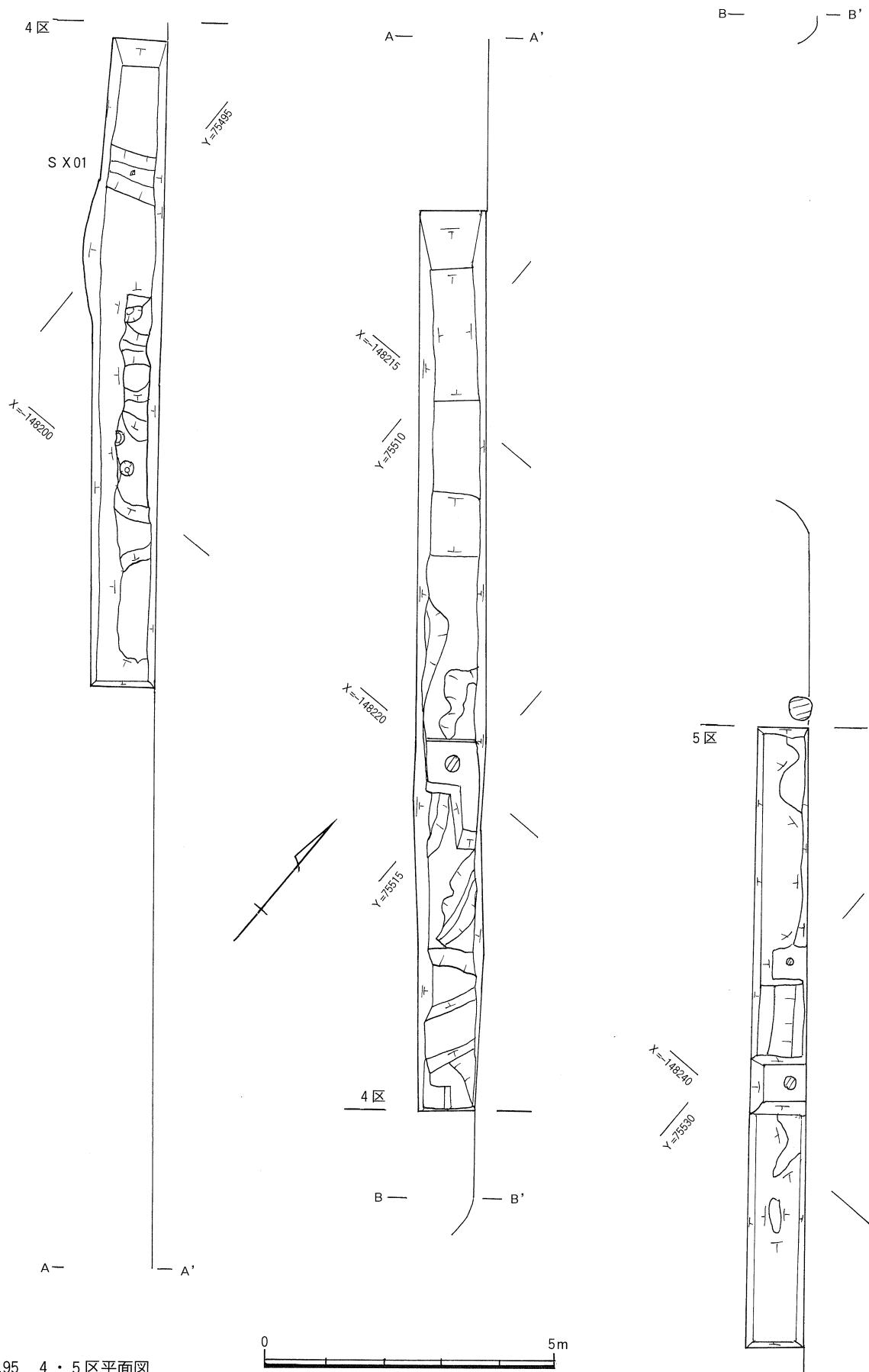


fig.95 4・5区平面図

共に、金環が1点出土した。

(5) 5区の調査

東西方向の道路を挟んで、調査範囲の南端に位置する。約11mの長さで調査を行った。北半分は後世の搅乱が著しく、南端には排水路のコンクリートの擁壁が造られており、これより南の調査はできなかった。本来の堆積土が残った部分を観察すると、中世の耕作土以下は粗砂、シルト層が堆積し、水流の影響を受けやすい状況であることが判明した。4区南端の地形の変化と併せて考えると、国道28号線沿いについては、このあたりで御蔵遺跡の南限と判断してよいであろう。

4. 出土遺物

516は土師器皿で、口縁部を「ての字」にする。517は緑釉陶器で削り出しの平高台を持つ、胎土は軟質である。518～521は須恵器で、518は扁平なつまみを持つ壺蓋、519は口縁部が開く壺、520は直線的な体部を持つ壺、521は糸切り底の壺である。522は土錐で手捏ね整形である。521、522は4区S X 01出土、他は遺物包含層出土である。524～526は釘である。523は4区出土の金環で、連続する青銅製の環に鍍金を施す。兵庫県西宮市具足塚に同様のものがある。

参考文献

武藤誠他「具足塚発掘調査報告」

1976 西宮市教育委員会

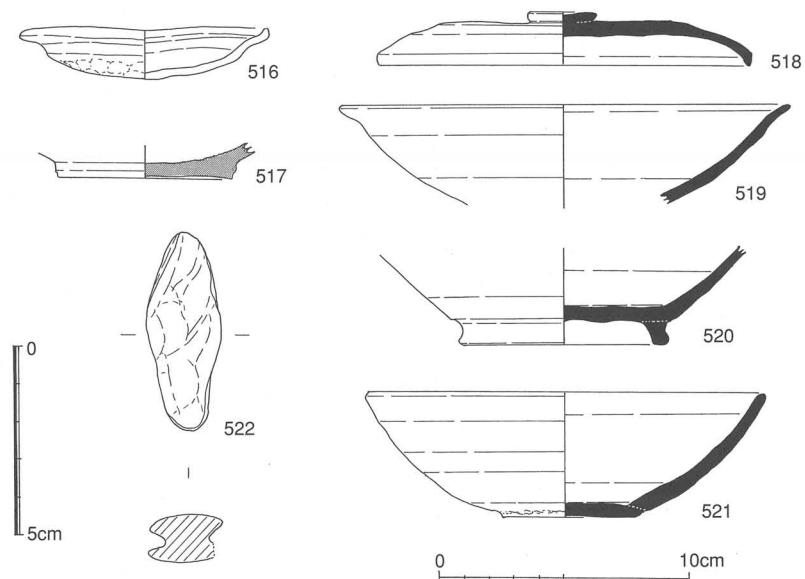


fig.96 第51—1次調査出土遺物

5. 小結

今回の調査では、幅1×163mの調査トレーニチで、調査面積の約半分ほどは遺構面、遺物包含層が後世の搅乱によって破壊されていたが、残存していた部分では、ピット、土坑、溝状の遺構等が確認できた。特に2区南半部から3区にかけては検出された遺構の密度が高い。過去の調査例でもこの周辺では、遺構、遺物が集中して発見されており、御蔵遺跡の中心部と言えるであろう。遺構の時期は、出土した遺物のほとんどが小破片のため、不明なものが多いが、遺構埋土中には、弥生時代後期末、飛鳥時代、奈良・平安時代前期、平安時代末期のいずれかの遺物が含まれる。

また最初に述べたように、この調査では、御蔵遺跡をほぼ南北に縦断するような調査方法となっており、遺跡の範囲、土層の堆積状況のおよそを把握することができた。

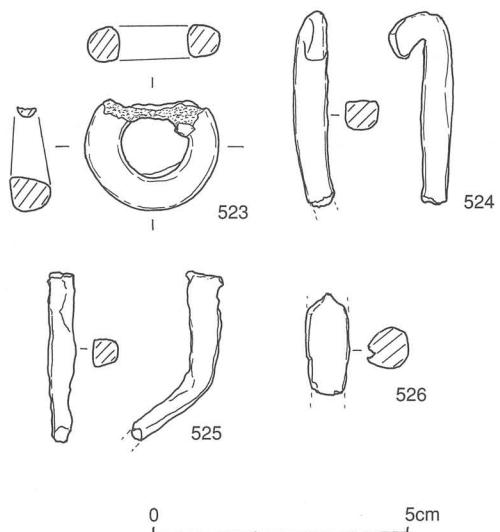


fig.97
第51—1次調査出土金環・金属器

第10節 第51—2次調査

1. 調査の概要

(1) 調査の状況

この調査地は、国道28号線東側の旧歩道部分（車道拡幅部分）であり、平成11年度の調査着手時には現道部分と見なされていたため、調査の対象範囲外となっていたが、平成14年秋の段階で、神戸市建設局との数度にわたる折衝の結果、承諾が得られ、急遽、調査を実施することになった。調査を予定していなかった建設局側は、文化財調査を作業工程の中に組み込んでおらず、路盤の整備工事が半月後に迫る状況の中で、平成14年9月30日に調査に着手した。調査の結果、奈良～平安時代の柱穴、ピット多数、溝、飛鳥時代の流路、集石遺構が確認され、それに伴う出土遺物も28リットル入りコンテナで約20箱出土するという状況となった。

(2) 調査区の設定

調査地が、延長約75mに及ぶ旧歩道部分であるため、調査地を画する道路交差点で、北から南に向かってA, B, C区に区切り、調査を行った。周辺の調査成果との整合性を高めるため、調査地横に木杭を打設し、それを図面の中に記入した。また、調査完了直前に基準点測量を実施し、それらのポイントの座標値を求めた。

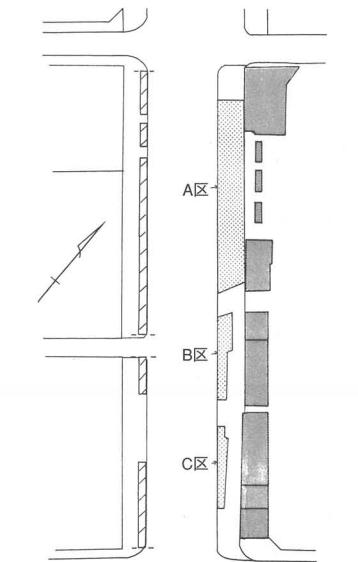


fig.98 第51—2次調査位置図

2. 基本層序

調査地が歩道として使用されていたため、水道、ガス等の埋設管や石組みの暗渠などによって遺物包含層はほとんど削平され、遺構検出層も上面を、20～40cm削り取られている。土層が観察できたのは、主に西側の壁面と東側のごく一部の壁面である。

(1) A区の基本層序

A区では歩道舗装面から30～50cmの間は、アスファルトや舗装ベース（細礫）、瓦礫、近代以降の盛り土等が敷かれている。ごく一部で遺物包含層（黒～暗褐色粘質土）が残っている部分もある。その下の褐色細砂で遺構が検出されるが、この層もかなり削られている。南半部ではその下に奈良～平安時代前期の土器を含む褐色中砂～細砂が堆積しているのが東側壁面で確認された。さらに下には飛鳥時代の流路堆積土である灰褐色～黄褐色粗砂層が検出された。

(2) B区の基本層序

歩道面から約50cm下までは、瓦礫、道路舗装材が敷かれている。その下には北半分の西壁面では遺物包含層（暗褐色粘質土）が確認されるが、東壁面では旧耕作土と思われる土層の下に、流路堆積土（黄褐色粗砂混じり暗褐色粘質土・12世紀頃の土器を含む、暗黄灰色～黄灰褐色細砂・粗砂、黒灰色シルト）が確認された。

(3) C区の基本層序

歩道面から約30cm下までは、道路舗装材が敷かれている。搅乱を受けていない部分ではその直下に近代～中世の耕作土と思われる灰色系砂質土が重なる。B区北半部まで広がっていた遺物包含層（暗褐色粘質土）は見当たらず、わずかに遺物を含む褐灰色砂質土が確認され、その下の黄灰色砂質土～シルトで小規模なピットが検出された。

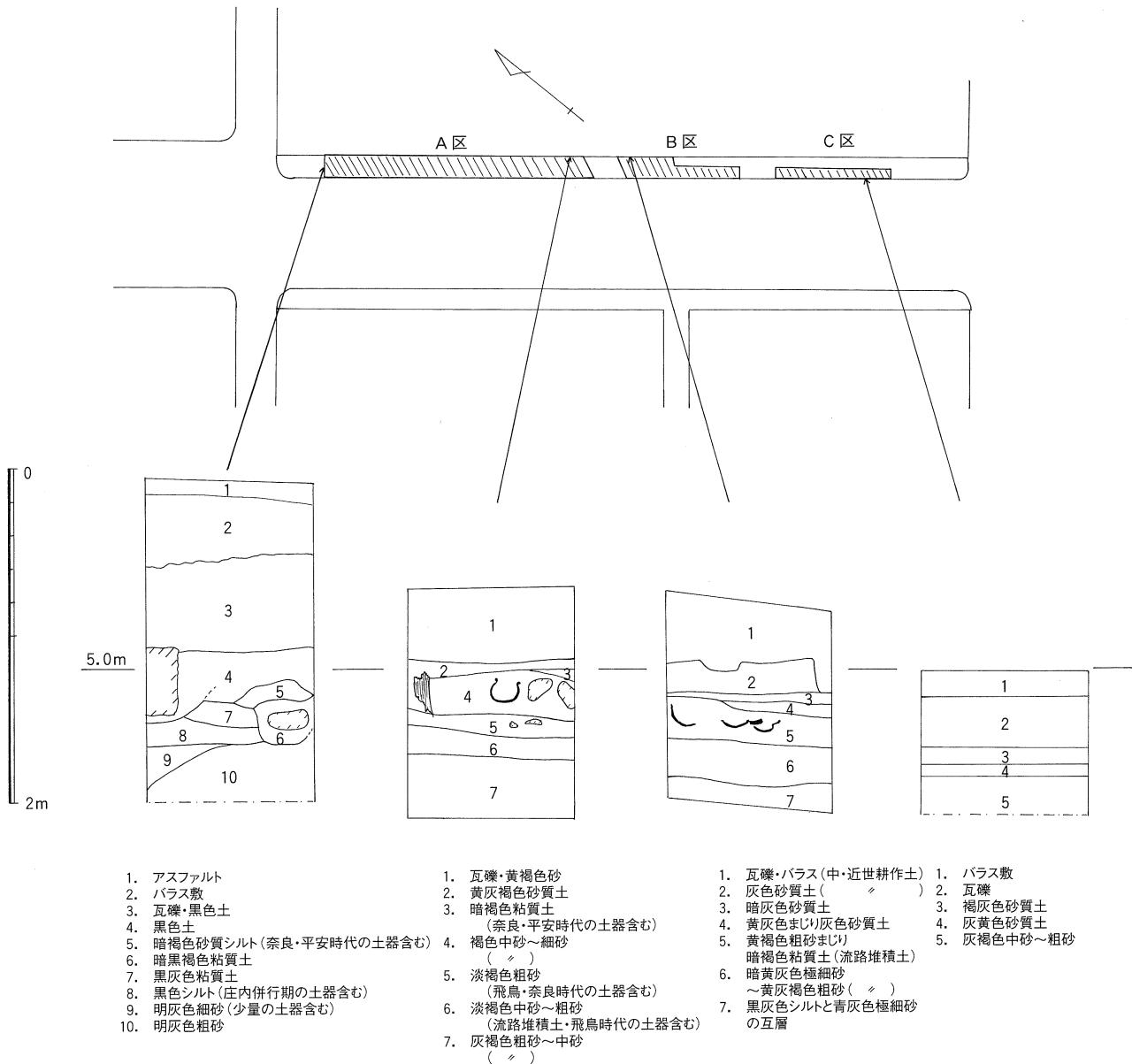


fig.99 第51—2次調査柱状土層図

3. 遺構

(1) A区の調査

長さ約40.5m、幅約4.5～3.8mの調査区である。北半部は第45次調査地と南半部は第37－4次調査地と接する。基本層序の項で説明したように後世の搅乱が著しく、遺物包含層、遺構検出層は削平が著しい。しかし、北半部では奈良～平安時代のピット、柱穴、溝が多数検出された。

ピット、柱穴

遺構検出層が、相当削平を蒙っているため、深いものでも20cmほどしか残っていない。二本の埋設管の間でわずかに削り残された部分では、ピットが多数検出されており、本来はかなり濃密に遺構が分布していたものと想定される。ピットは一辺直径40～50cm程度の隅円方形のものが多い。ピットからは土器がわずかに出土しただけで、時期の確定は難しいがおよそ奈良～平安時代の時期の中に収まると思われる。

なお、北半部に残存した遺物包含層から、鍍金された帶金具の一部（裏金具）が発見された。

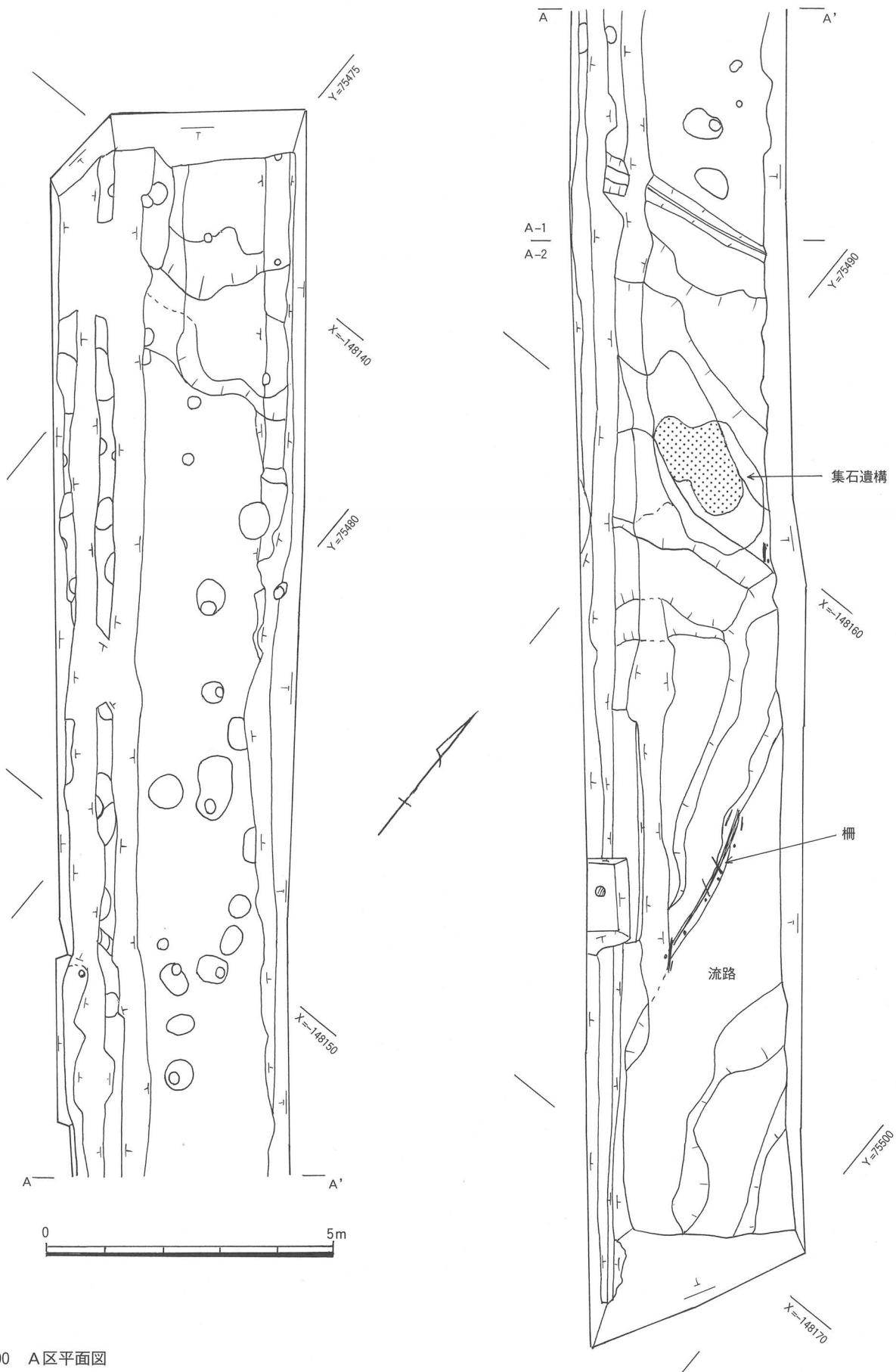


fig.100 A区平面図

流路

南半部では、飛鳥時代の流路が検出された。調査区の主軸に対して斜め方向で検出されたため、両肩が確認できず、精確な幅を測る事はできなかったが、およそ3.5~4.5mの幅に収まるのではないかと推定される。深さは50~70cmを測る。流路内には褐色系の粗砂・砂礫層が堆積しており、両方の肩に近い部分には暗褐色~黒褐色シルト層が堆積している。堆積の状況を見ると、砂礫や粗砂の堆積するかなり流速のある状況が想定されるが、流路底面から出土した植物種実の同定結果では、水生植物が生育する滞水した環境であったと推定されている。堆積土内からは、飛鳥時代初頭から中頃の土器、木製品、部材等が出土した。出土した須恵器坏身には、漆の付着したものが見られる。

柵遺構

西側の肩に近い部分から柵遺構が確認された。これは、直径3~10cm程度の丸太杭を打ち込み、建築部材を転用したと思われる枘穴を穿った長さ約3mの木材を護岸の土留めに用いている。また、流路の中からは飛鳥時代初頭~中頃の土器、木製品、木屑等が出土した。木材の樹種同定の結果を見ると、コウヤマキが多用されていることに特徴がある。

集石遺構

流路に直行するような状況で幅5~6m、深さ40cm程度の落ち込みが取り付く。あたかも流路が逆L字状に曲がっているように見えるが、堆積土の状況が先述の流路と異なり、細砂とシルトの互層となっていることや、接点部分に流路の護岸をするための柵の一部がさらに北に延びるような状況で検出されていること（その柵の大半は隣接地の建物基礎工事の際に掘り取られている）から、流路に接続する落ち込みまたは別の浅い流路と考えておきたい。また、流路との境目付近に拳大の川原石を大量に投げ入れていた。石の下からは、斎串等の木製品、部材、木屑、飛鳥時代前半~中頃の土器等が出土した。この遺構の集石直下層から採取された種実化石からはナデシコ科、アカザ属、ヒュ属、

アブラナ科等の人里植物、耕地雑草が確認され、乾燥した人為環境であったと分析されており、常時、水が溜まっている環境ではなかったと推定される。

また、流路と集石遺構周辺からは、モモの核が81点、ウリの種子1点が発見されている。

胞衣壺？

作業用通路に使用するために、掘り残していたA区南半部の東壁の一部を、調査完了直前に調査したところ、土師器の甕が正立した状態で出土した。甕の上には蓋に用いられたと見られる土師器皿2枚、中に落ち込んだ状態で1枚、横に置かれた状況で2枚の合計5枚の皿が発見された。また、甕の口縁部から少し中に入った位置で獸骨らしいものが1点出土した。蓋に用いられた2枚は甕の口の部分からはずれた状態で出土している。これらの器の埋納された理由は不明であるが、胞衣壺の可能性を指摘しておきたい。甕や土師皿の時期は10世紀代と考えられる。

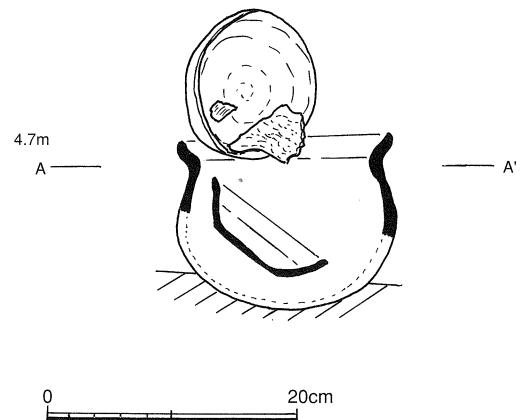
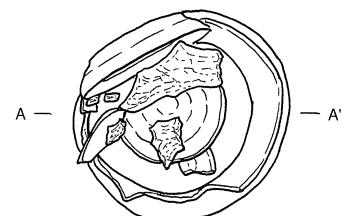


fig.101 A-2区出土胞衣壺？出土状況図

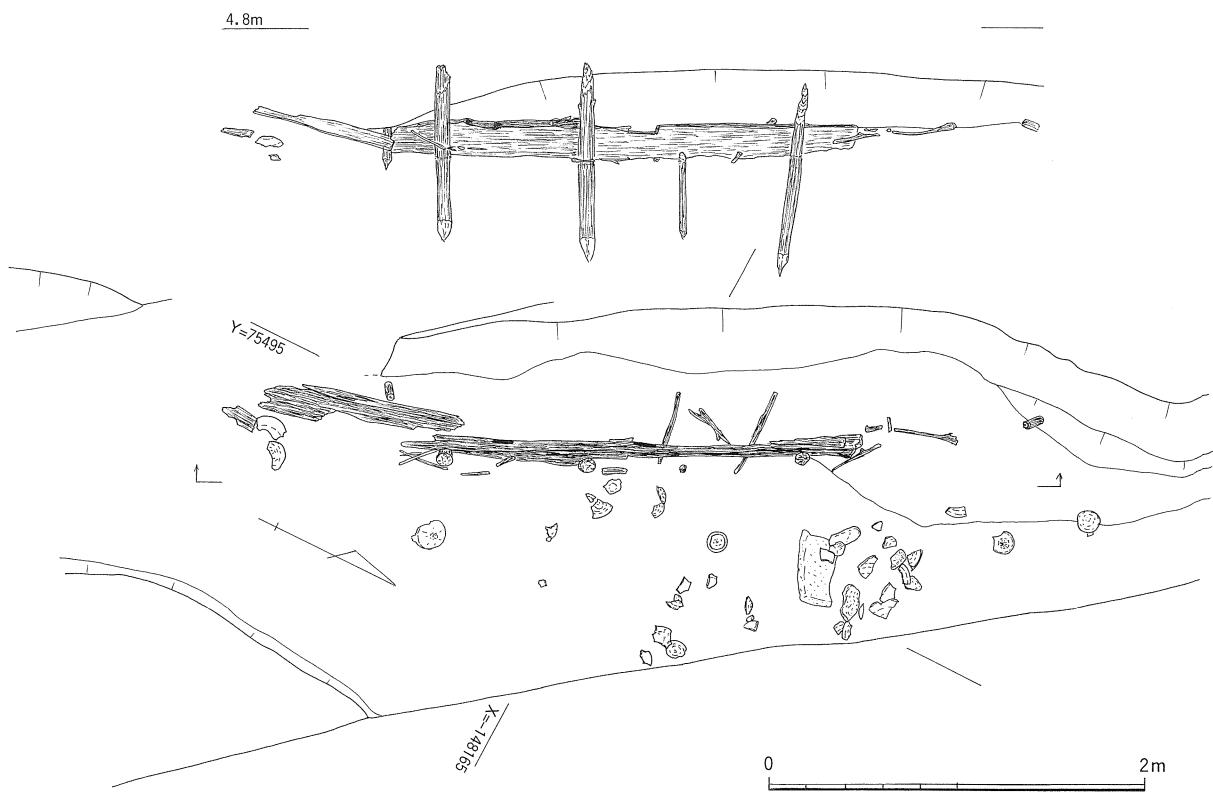


fig.102 柵平・断面図



fig.103 集石遺構平・断面図

(2) B区の調査

長さ約17.5m、幅約3.8~2.5mの調査区である。北半部は第37-2次、南半部は第37-1次調査地とほぼ接する。

調査地の大半は遺構検出面まで、後世の削平を受けている。北半部では、流路が検出された。幅1m、深さ20cmほどであるが、本来は、幅1.5~2m、深さ60cm以上あったようである。東側壁面に残った上層の堆積土は、褐色粘質土で、下層は粗砂~極細砂が堆積している。上層堆積土からは、12世紀代の土器が出土している。この流路は、位置関係からみて、第37-2次調査で確認されたものと同一であると判断される。

南半部は調査幅が狭くなり、遺構面に達するまで深く削られているため、遺構は確認できなかった。また、基本層序の項で述べたように、西壁面の北半分では遺物包含層（暗褐色粘質土）が確認されるが、南半分では、その層が消失しており、遺構の密度も疎になることから考えて、このあたりからは、遺跡の中心部分から離れてゆくものと判断される。

(3) C区の調査

長さ約17.5m、幅約1.2~1.8mの調査区である。第26-2次調査地と接する。東半分は搅乱坑により遺構面までが掘り取られている。小規模なピットが2基、確認された。この周辺ではA、B区でみられたような遺物包含層（暗褐色粘質土）はみられず、少量の遺物を含む褐灰色砂質土がみられるのみである。

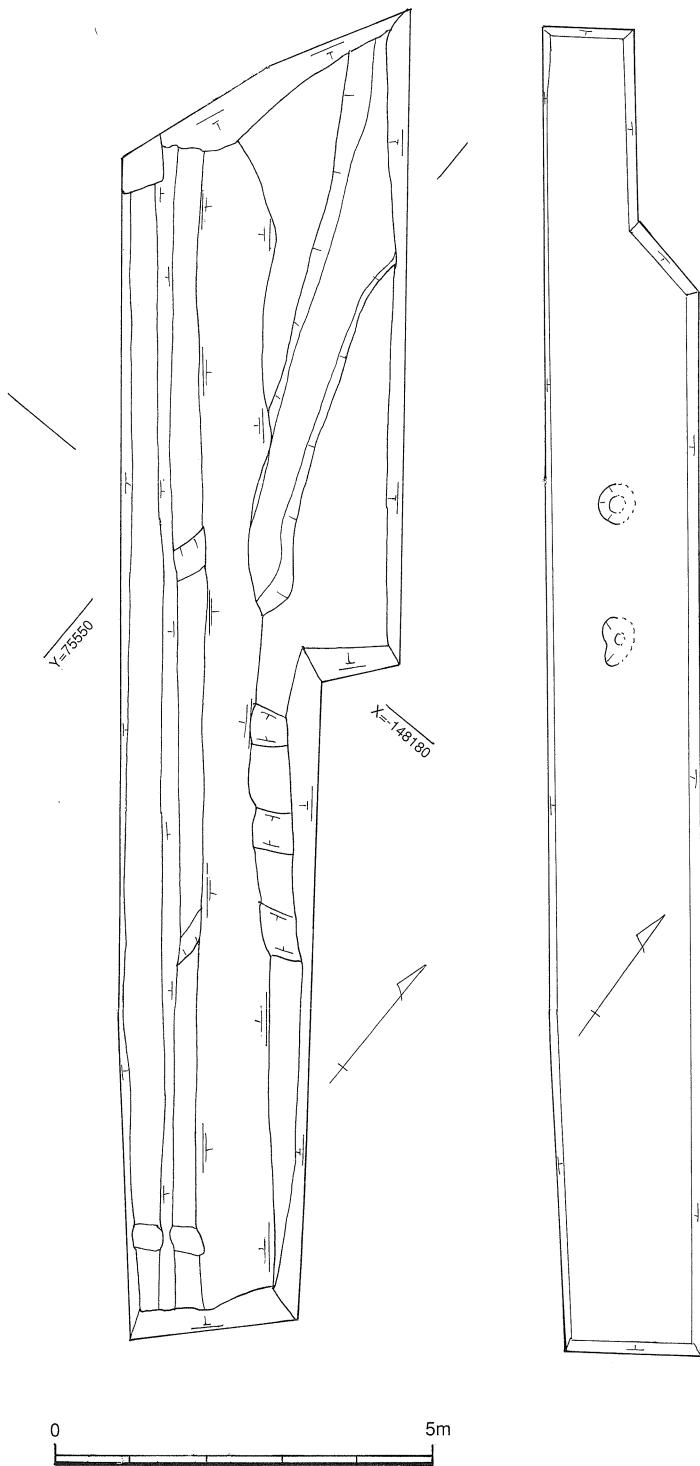


fig.104 B・C区平面図

4. 出土遺物

主にA区に残された遺物包含層と飛鳥時代の流路、集石遺構周辺から出土している。B区では流路堆積土から、遺物は出土しているが少量である。C区の出土量は非常に少ない。

流路出土の土器

土師器

527～531は壺Cで大形（527、528）小形（529～531）のものに分かれる。外面はヘラ削り、ヘラミガキを行い、口縁端部は横方向のナデで仕上げる。内面を放射状の暗文で調整し、内底面にラセン状の暗文を施すものもある。532～534は高壺である。532の壺部内面はやや幅広のヘラ磨きで調整し、外面は刷毛目とヘラ磨きを行う。指頭圧痕が明瞭なもの（532）がある。脚部はナデ調整、指頭圧痕が残る。内面はヘラ削りである。535は甕で、胴部外面と口縁端部内面は刷毛目調整、胴部内面はヘラ削りを行う。

須恵器壺

536～580は壺Hである。壺蓋（536～559）は口径が10～12cmのばらつきがあり、541のように稜が比較的明瞭なものから558のように扁平なものがある。540、544はヘラ記号がある。壺身（560～580）は立ち上がり

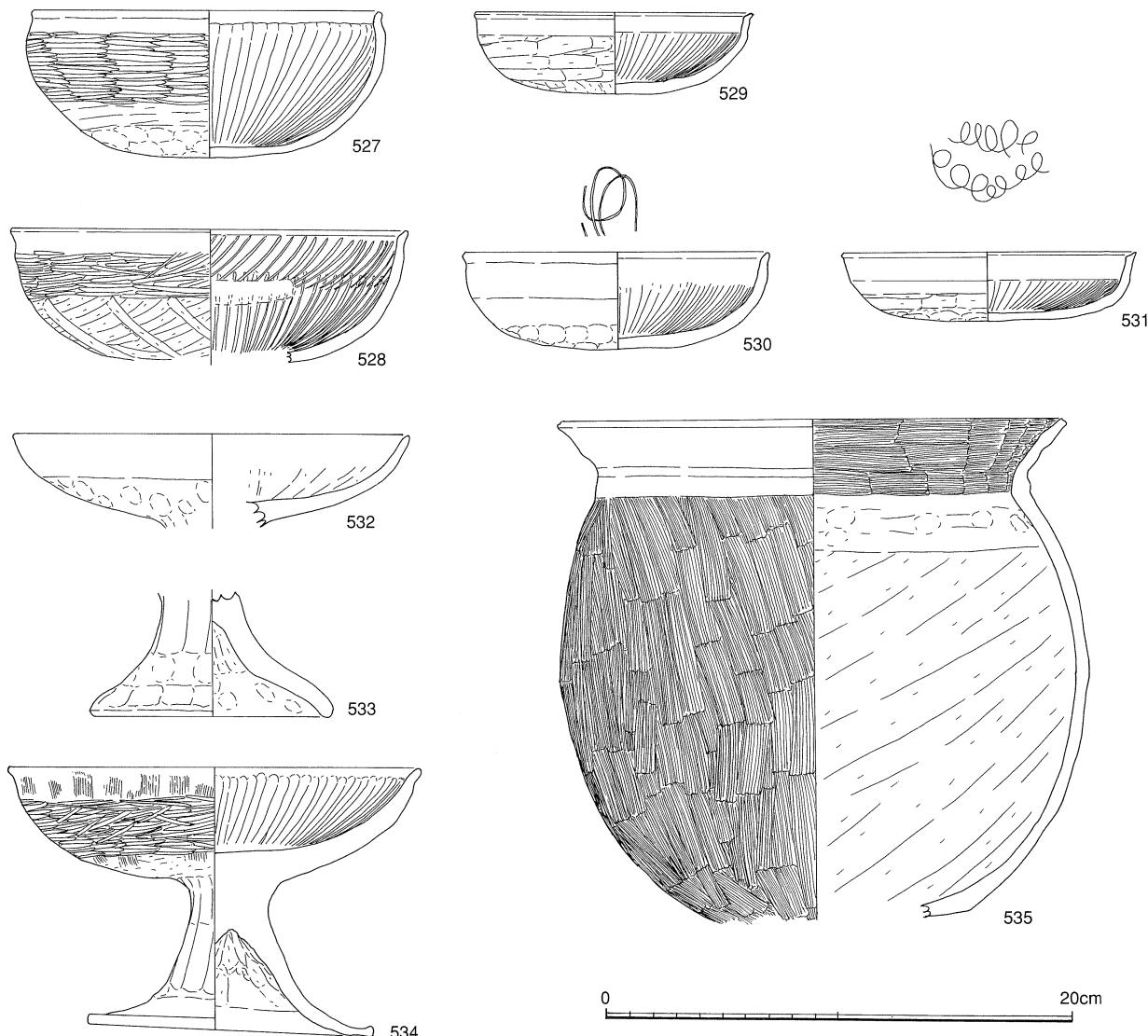


fig.105 A-2区流路出土土師器

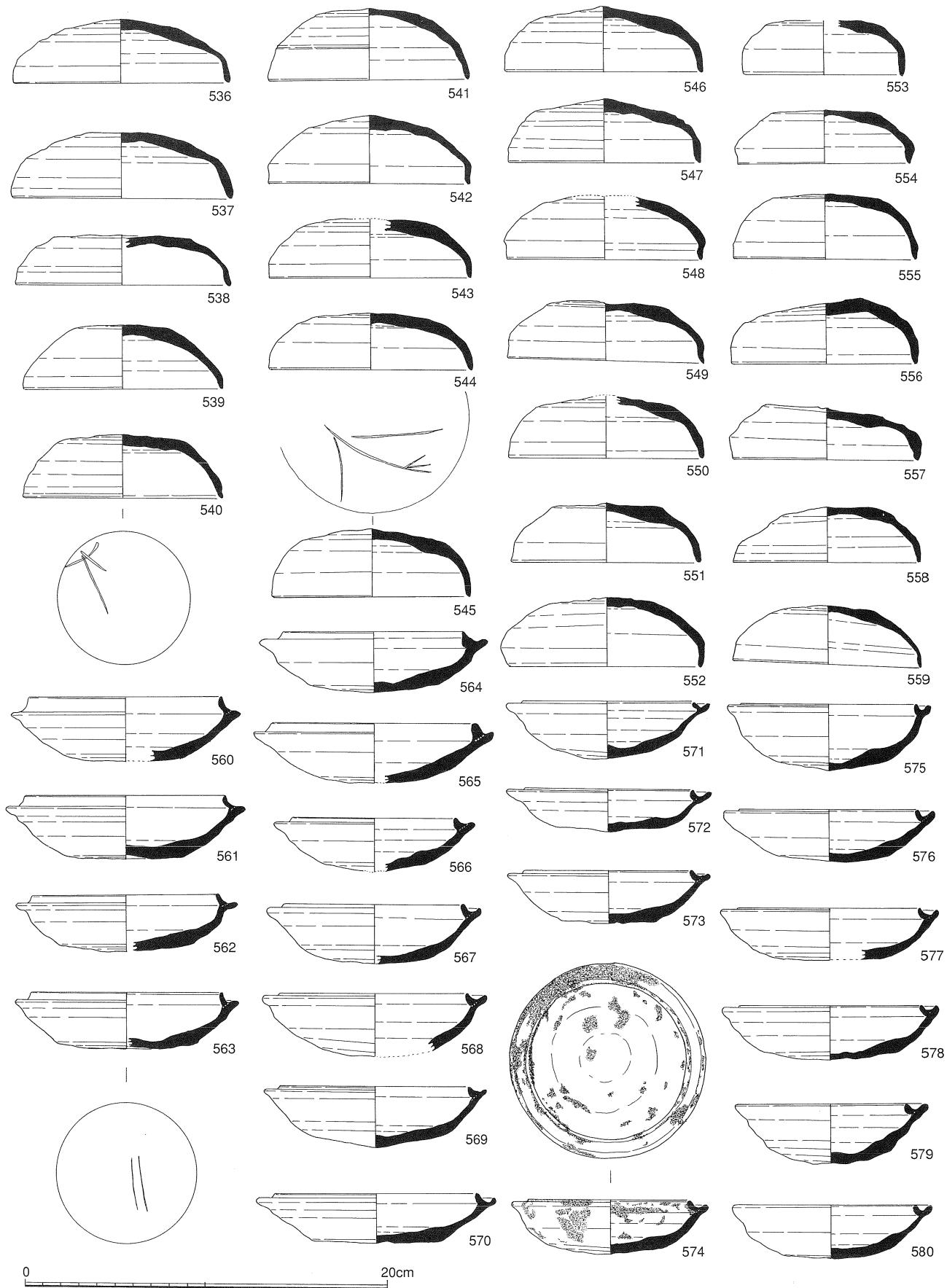


fig.106 A-2区流路出土須恵器(1)

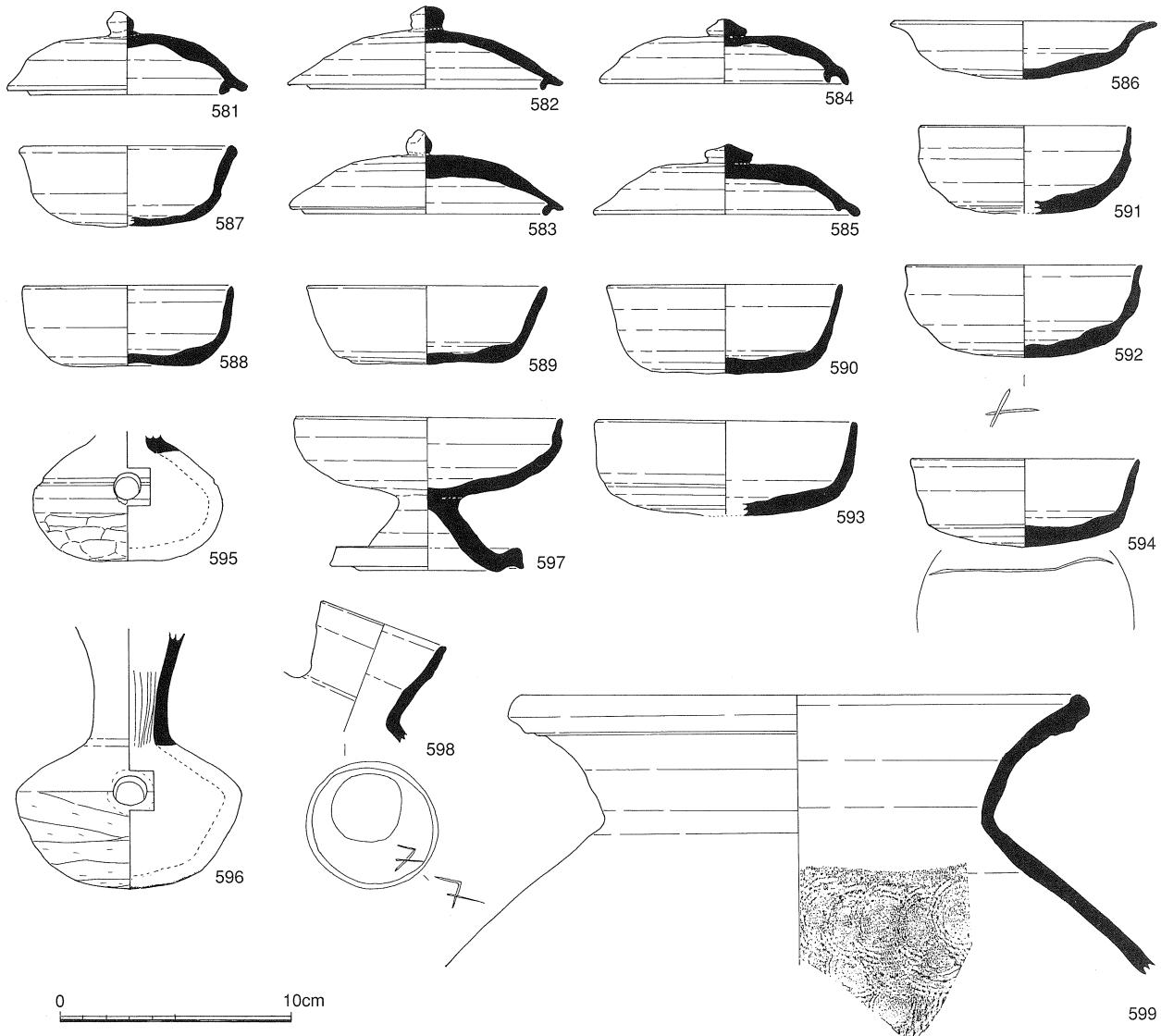


fig.107 A-2区流路出土須恵器(2)

りが高いもの（560、561）、口縁部内で收まるもの（579、580）、その中間的なものがある。口径は10.5～8.5cmの幅がある。574は内外面に漆が付着する。563は底部外面にヘラ記号が刻まれる。

須恵器壺・高壺・甕・横瓶・甌

581～585は壺Gの蓋である。宝珠つまみは高くつまみ上げたもの（581～583）、扁平なもの（584、585）がある。587～594は壺Gで、底部から口縁部の立ち上がりが明瞭なものと丸みをおびたものがある。595、596は甌で下膨れしたもの、肩が張るものがある。598は横瓶の口縁部で、内面にヘラ記号がある。597は高壺である。599は甕で、内面は叩き目、外面は自然釉が掛かり明瞭でない。586は皿と考えている。

木製品

流路の中および集石遺構の周辺から板・角材、木製品、建築部材、杭材、木端、付け木が出土している。600は斎串の先端部で、606は抉りを入れた加工材である。618は先端を尖らせた板材、612は先端が焦げた付け木で、631～635の杭は柵に使用し、630は長方形の枘穴が2ヶ所穿たれた建築部材が転用されている。その他の材は端材、削り屑、または用途不明である。使用された樹種にはコウヤマキが多いことが目を惹く。なお、各材の樹種については第3章を参照いただきたい。

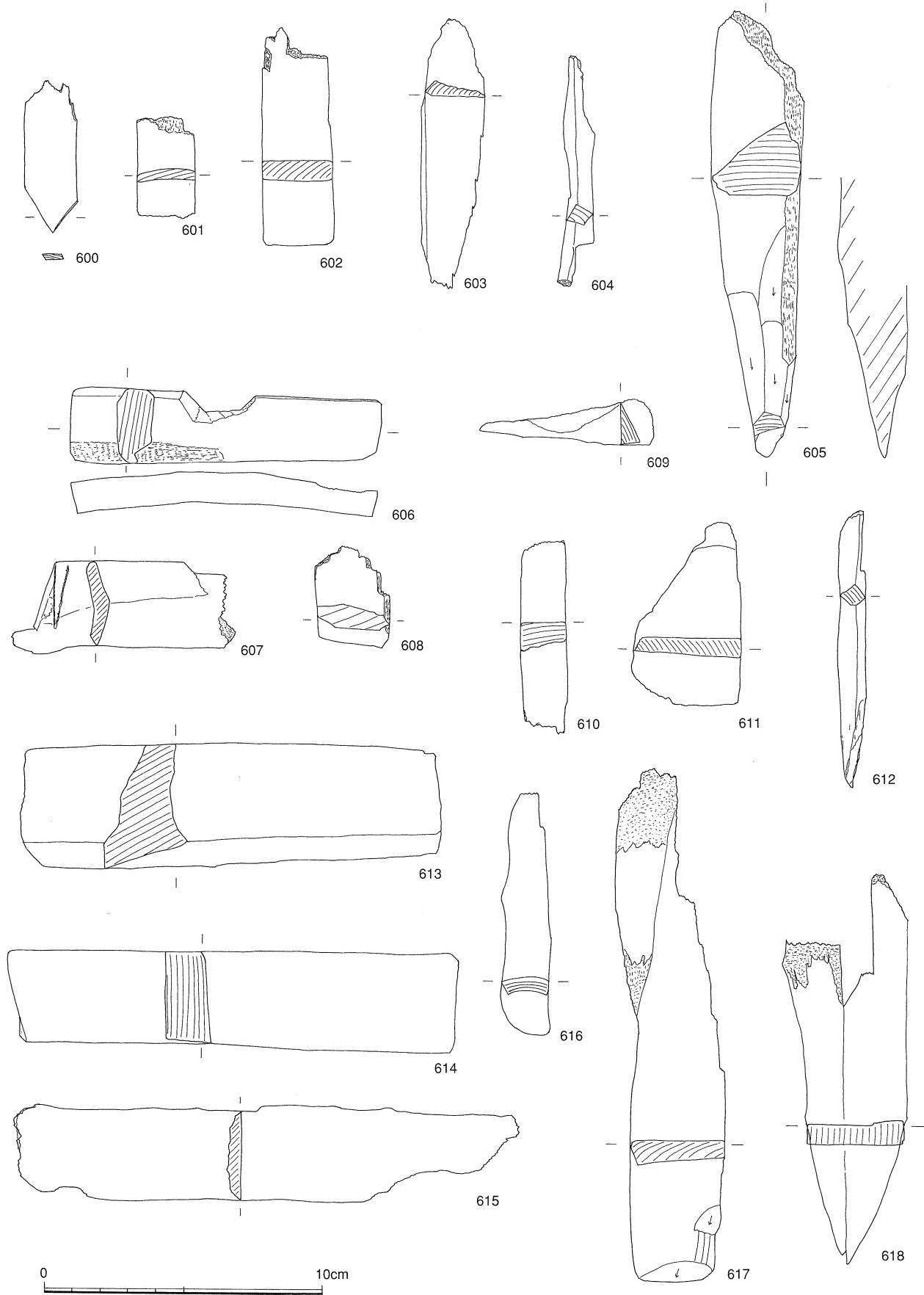


fig.108 A-2区流路出土木製品・部材(1)

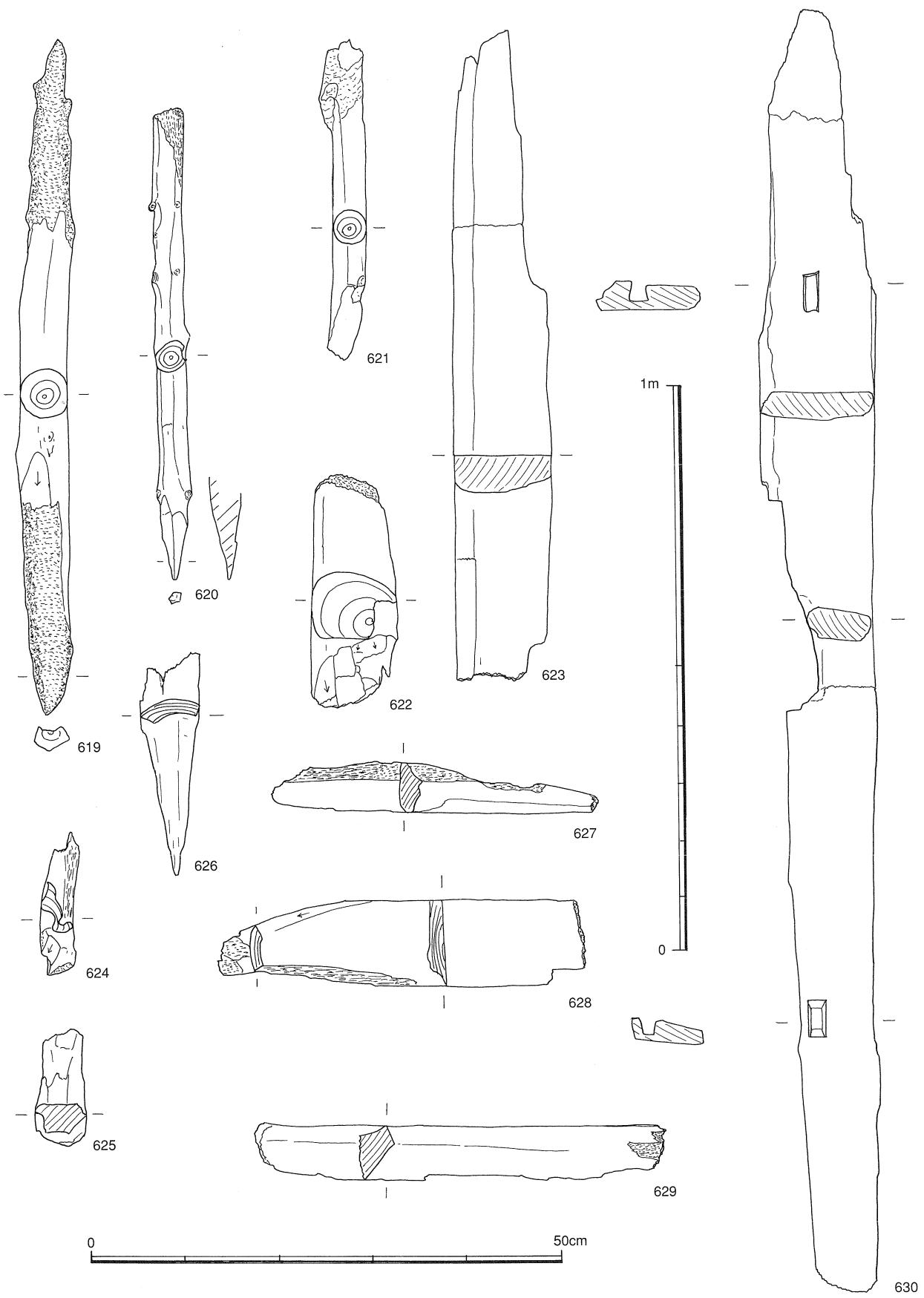


fig.109 A-2区流路出土木製品・部材(2)

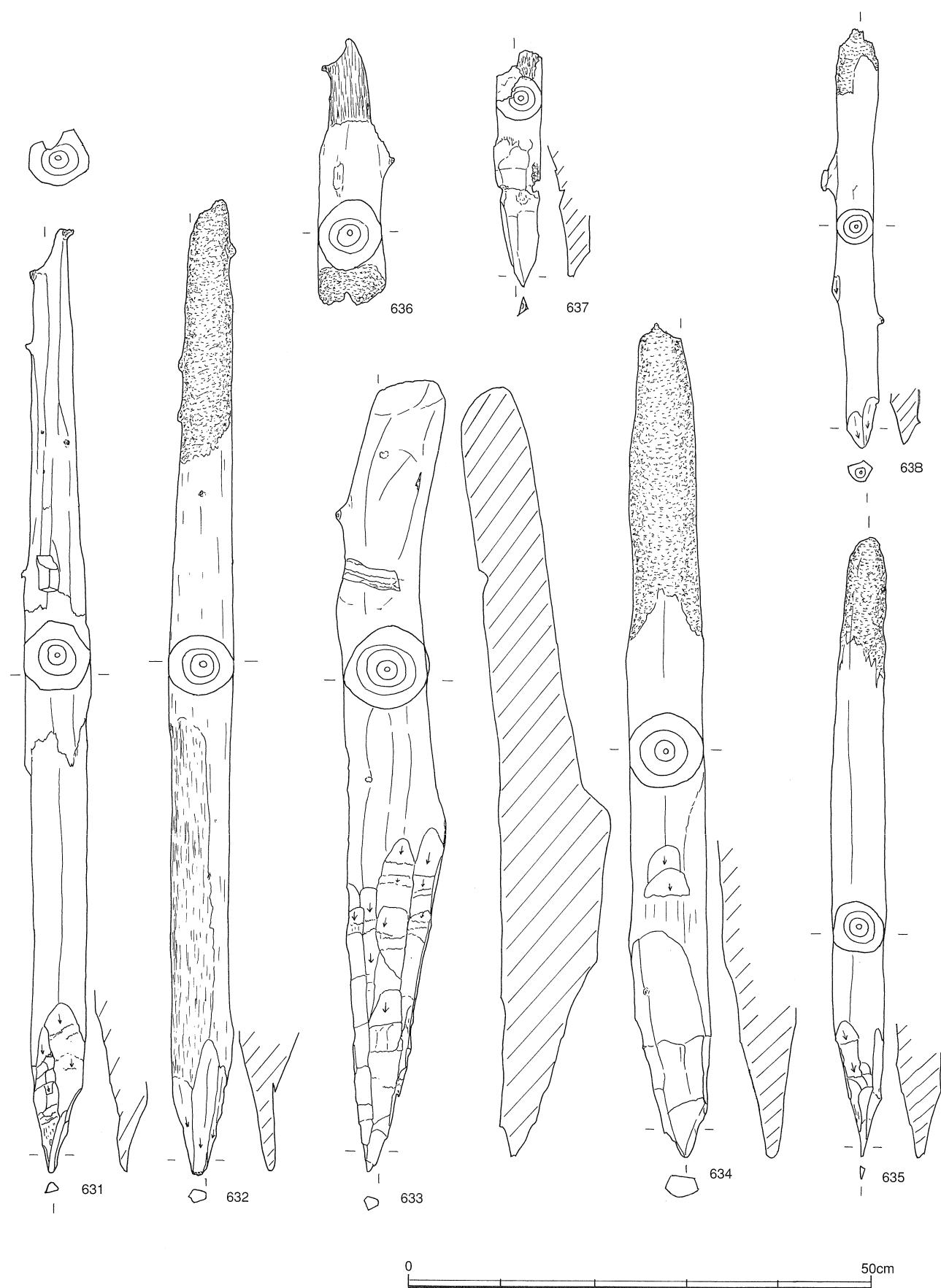


fig.110 A-2区流路出土杭

土錘・蛸壺

639～641は棒状有孔土錘で断面円形を呈し、両端を穿孔する。642は環状土錘である。643～645は蛸壺で、鈕の綱通しの孔は摩滅している。外面には指頭圧痕が残る。これらはいずれも手捏ね整形である。639は集石遺構の下から、640は落ち込み、641は集石遺構付近、642、643は遺物包含層、644、645は流路からそれぞれ出土した。

A区出土帶金具

A区北半部にわずかに残存した遺物包含層（黒褐色粘質土）中から帶金具（跨帶）が出土した。一端が折損しているので、本来の形状は不明であるが、 $3.6 \times 2.5\text{cm}$ 以上、厚さが4mmの略方形を呈する。表面には1mmの孔を4ヵ所穿っている。

また、一方の端面には稜が設けられ、その面には鍍金が施されている。形状から見て、①石帶（巡方）の裏金具②金属製跨帶（鉈尾）の裏金具などの場合が推定される。いずれにしても跨帶の裏金具であるならば、鍍金が施されたものは全国的にも珍しいものである。

註

跨帶については奈良文化財研究所 翼淳一郎、山中敏史、小林謙一、次山淳氏のご教示を得た。

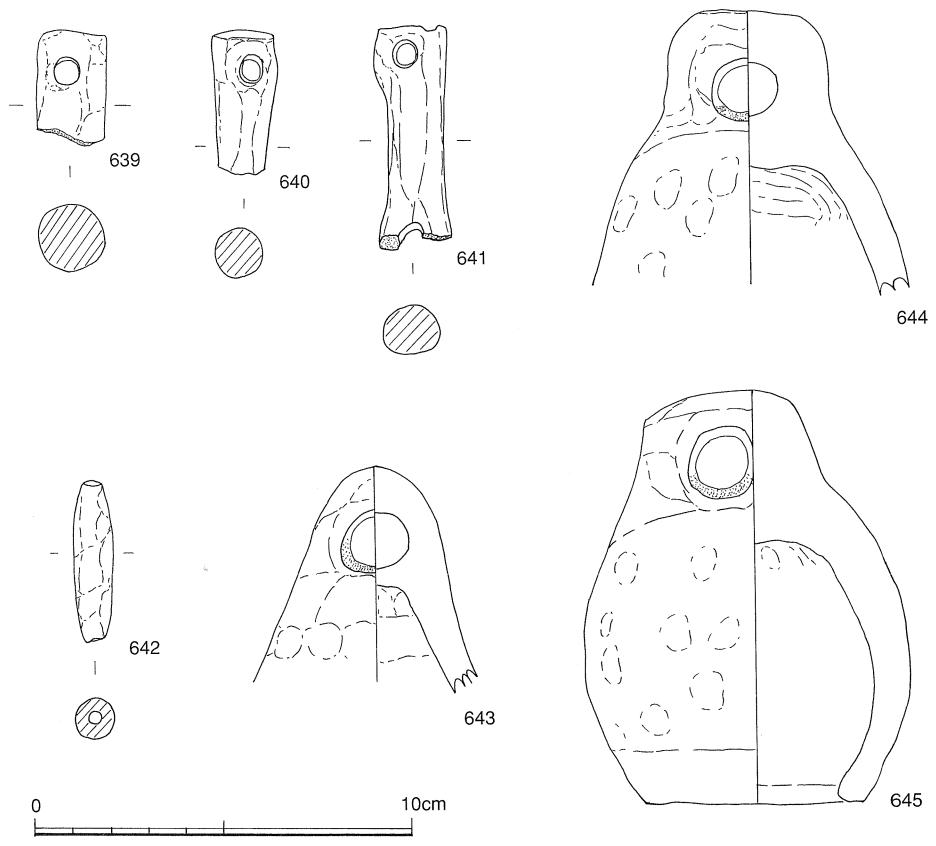


fig.111 A区出土蛸壺・土錘

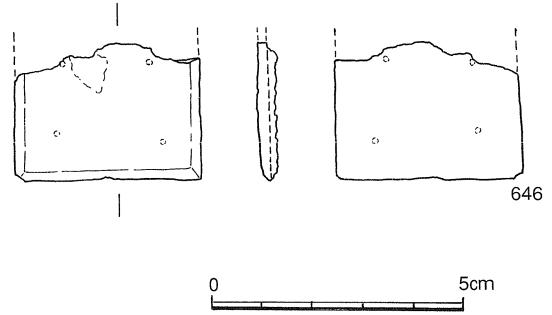


fig.112 A区出土跨帶

A区黒・暗褐色粘質土出土土器

A区南端部の壁面付近に残っていた黒～暗褐色粘質土からは、平安時代の遺物が出土している。647～650は須恵器で、647はやや高い高台を有する壺、648、658は壺A、649、650は皿Aである。いずれも底部外面はヘラ切りである。658の外底面には墨書（十一？）がかすかに残されている。651～653、657は土師器壺A、654は皿Aである。底部には指頭圧痕を残す。口縁端部内面に段を有するもの（651、653、654）がある。657の内面には板状工具を当てて、器壁を調整した痕跡が残る。655の土師器壺Aの口縁部には、墨で花弁状の文様を描いているが、小破片なので、全体の様子は判らない。656は土師器皿で、口縁端部を強く屈曲さ

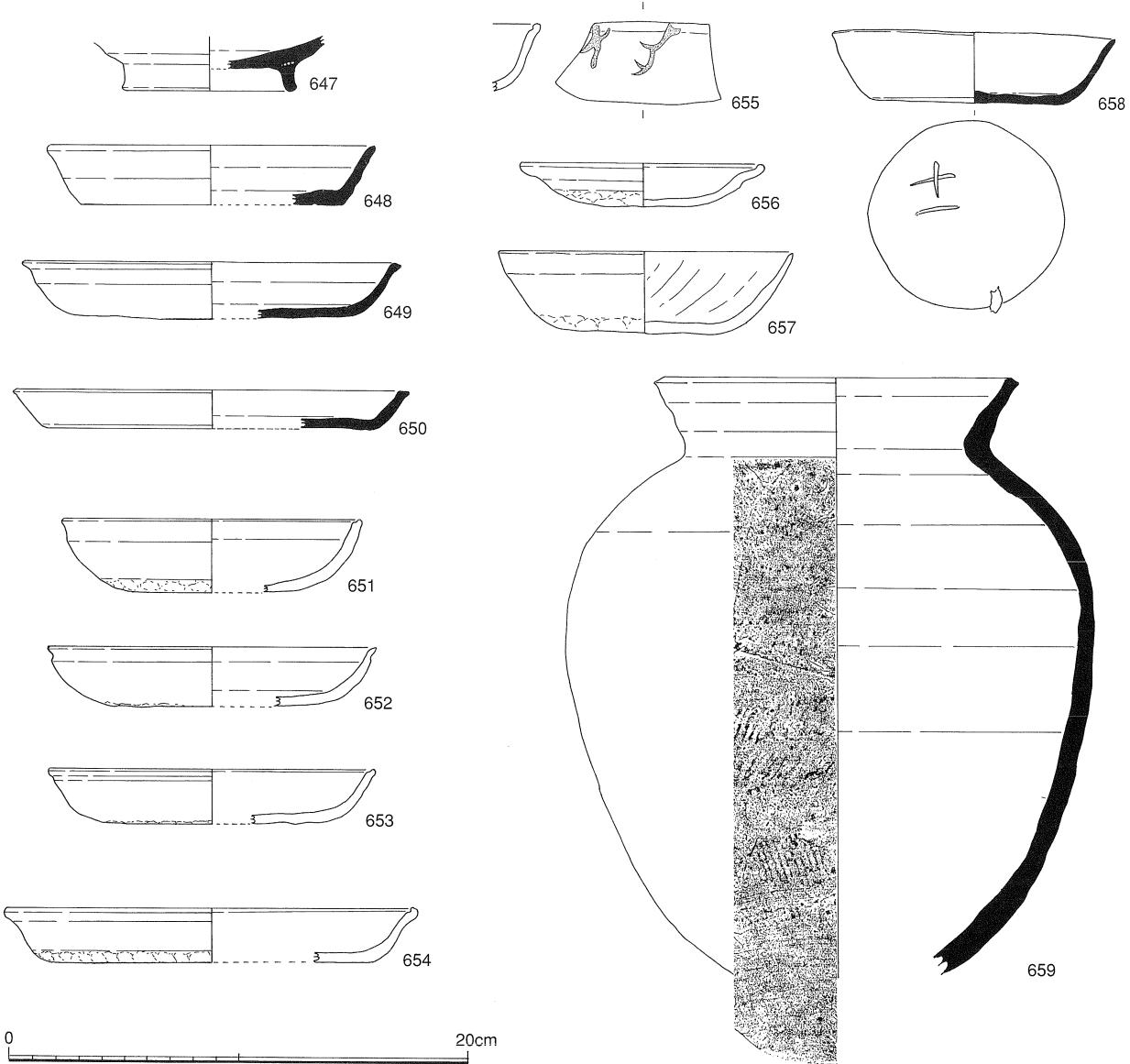


fig.113 A区黒色～暗褐色粘質土出土土器

せる「ての字」状口縁の皿である。659は須恵器甕で、外面は叩き目、口縁部～内面にかけては横ナデを施す。ほぼ完形品であるが、底部は欠失している。659については年代が遡る可能性があるが、その他の土器の年代は、ほぼ9世紀～10世紀に収まると推定される。

A区黒・暗褐色粘質土出土瓦

先述の土層からは土器と共に瓦が出土した。663は土師質で、残りは須恵質である。662は丸瓦で、内面には布目痕が残り、外面にはナデ整形を行う。その他は平瓦で、凹面にはナデと布目痕が、凸面にはナデと繩目痕が残る。焼成状態は良好なものが多い。

胞衣壺の可能性がある土器

666から671はA区南半部の東壁部分から出土した土師器甕、皿である。遺構の項で説明したように、これらの土器は胞衣壺とその蓋、供献された土器と推定される。666～670は土師器皿で外面は横方向のナデ、底面には指頭圧痕が残る。口縁部は外反するが、端部内面に不明瞭な段（668）を持つものがある。670には灯芯の痕跡が残る。口縁部が歪んでいるものが多く、粗雑な作りであるという印象を受ける。

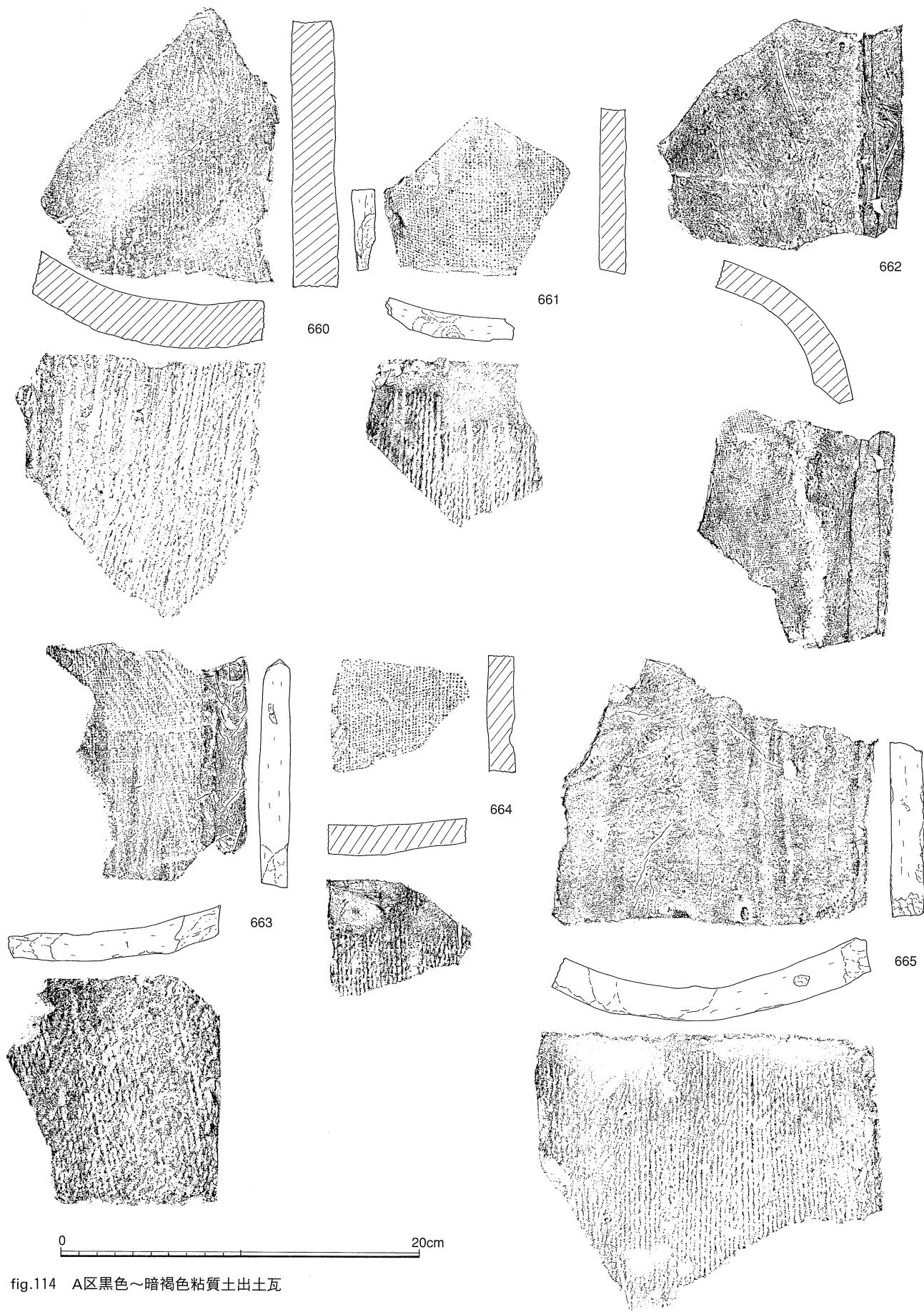


fig.114 A区黒色～暗褐色粘質土出土瓦

671は土師器甕で、口縁部は横方向のナデを行い、内面はナデ調整、外面は器壁が剥離しており、調整はよく判らない。底面には指頭圧痕がわずかに残る。これらの土器は概ね、10世紀に属すると考えられる。

B区出土土器・陶器

672～675は緑釉陶器で、672、673は削り出して輪高台を、674、675は平高台を作る。672は軟質で、673～675は硬質の胎土である。674は底面まで、その他は高台部まで施釉する。675は内底面にヘラ記号を刻んでいる。

これらは、いずれも遺物包含層から出土している。676～678は須恵器塊で、調査区断面から出土したが、土層観察から流路上層の出土土器と判断される。内外面を横ナデで成形し、底部は糸切りである。12世紀頃の東播系の須恵器である。なお、図化していないが、この他に瓦が出土している。

5. 小結

A区の調査では、飛鳥時代の流路、それに伴う柵遺構、集石遺構、奈良～平安時代にかけてのピット、柱穴、溝が検出された。調査区の大半が、遺構検出面まで後世の搅乱によって削平を受けていたにもかかわらず、上記のような遺構が確認できたことは、大きな成果であった。B区では12世紀段階で埋没する流路が上面を削られながらも残存していた。C区では、ピットが2基確認できたのみで、遺跡の中心部からは外れていくようである。これらは、これまでの周辺の調査結果と調和的な状況と言えるであろう。また、出土遺物については、飛鳥時代前期～中頃の遺物がA区から大量に出土し、あまり明確でなかった当該時期の土器様相の一端を明らかにできたものと考える。また、斎串等の木製品等と考え合わせて、飛鳥時代における御蔵遺跡のあり方を、再考させる良好な資料を提示したと評価できる。さらに鍍金された帶金具については、在地の有位者、あるいは国司クラスの人物の所持品であったであろうが、いずれにせよ、当遺跡が地方官衙となんらかの関わりを持っていたことを示す資料と言える。

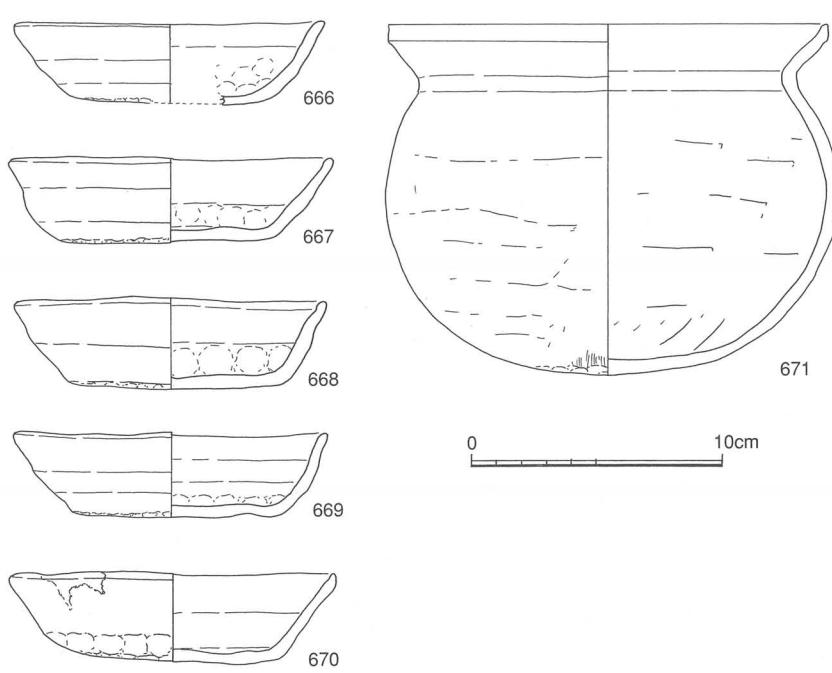


fig.115 A—2区出土土器甕・壺

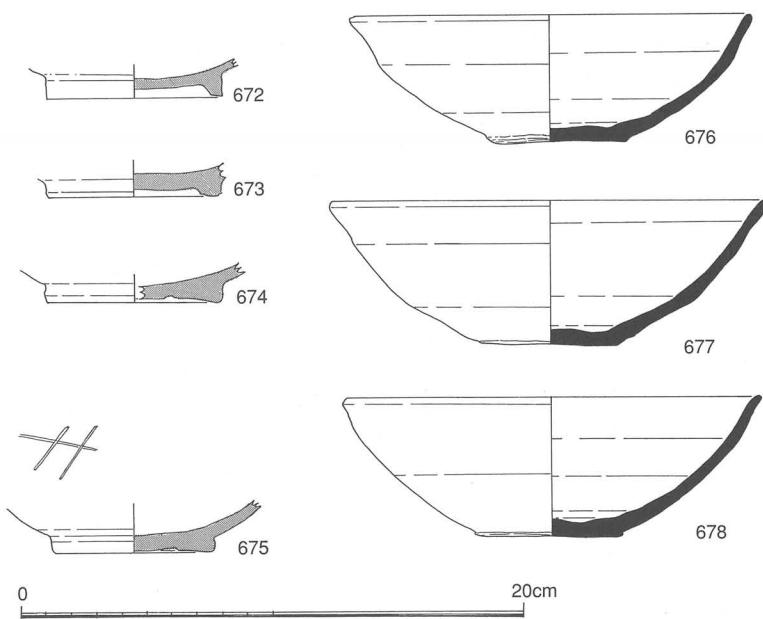


fig.116 B区出土緑釉陶器・須恵器

第11節 御蔵遺跡出土の動物遺存体

遺跡からの出土遺物には多種多様なものが存在するが、その一つとして動物遺存体がある。しかしこれらは土中に埋蔵されている間に微生物や酸などによって分解され、完全な形で遺存することは国内の遺跡においてはまずあり得ないと言ってよい。おもに出土する部分は歯や骨といった比較的堅固な部位で占められ、特に歯牙のエナメル質の残る割合は他の部位に比して多いようであり、埋蔵環境としては低湿地のような湿潤・還元状態、もしくは砂丘や砂浜など乾燥状態において残存している場合が多い。御蔵遺跡は標高5～7m前後の沖積地にあり、動物遺存体は地下水による湿潤と、シルト層による大気からの遮断によってほぼ一定の環境下に守られていたと考えられる。

御蔵遺跡では律令時代の遺構、遺物が検出されているが、動物遺存体もその特徴的な遺物として挙げることができる。今回収録された調査においても多くの動物遺存体が出土しているが、その多くが包含層出土であるため、いつ、どのようにして土中に埋蔵されたのか、詳細な情報に欠けるものである。出土している動物種はウシ・ウマ・シカ・イノシシが大部分を占め、その他にイヌ・鳥類、また海獣類と推定されるものが見られる。破片数は種を同定し得たものだけで約80点を数えるが、同定に至らなかつたものを含めると100点以上になる。また何頭程度の動物が存在したかであるが、解体されて廃棄されたものが、さらにはばらばらになって2次堆積し、その一部のみが出土したと考えると、各頭数を割り出すことはあまり有意義でないと考える。

出土状況を調査ごとに概観する。第37－4次調査では、平安時代後期の落ち込み状遺構（S X201）埋土に、ウシを中心としてウマ・シカの遺存体がかなり密に出土している。出土部位に規則性はないようで、祭祀などを意図して埋めたものではないと思われる。ウシ頭蓋骨の吻部付近やシカの下顎筋突起など、比較的残りにくいであろう部分も残存していた。そのため、埋蔵された遺存体の多くが残存しているものと考えられるが、どの種についても全身のごく一部が検出されているに過ぎない。またウマ肩甲骨に認められる打撃痕やウシ踵骨の火熱を受けた痕跡を見ると、何らかの理由で解体され、不要部分が廃棄されたものと考えられる。またウシ下顎臼歯（A-2）に見られる、病変と思われる異常咬耗や、ウシ・ウマ臼歯より推定される年齢の多くが10歳以上と老齢であることなどから、あるいは斃死した動物を解体し、廃棄していた可能性も考えられよう。

第45次調査では遺構に伴って出土した遺存体はごく少なく、包含層出土がほとんどである。前述の第37－4次調査に比するとシカ・イノシシが若干目立つようであり、中でも注目できるのは、鹿角ないし角座を伴ったシカの前頭骨が8点出土していることである。他の部位はごく少数出土であるのに対し角周辺部が多く出土することは、集積が行われたことが想起される。2次的に堆積しているため埋没の状況が不明であり、他の獣骨と混在していることが解析を困難にしているが、鹿角製品に関わる何らかの工房的な施設が周辺に存在した可能性も考えられる。またウシ臼歯には病変の認められるもの（C-8）、あるいはウシ幼獣の脛骨（C-1）も出土しており、斃死した生命力の弱い個体を利用し、その不要部分を廃棄した可能性がある。

第51-1・2次調査では包含層出土のものに加え、流路内に堆積したものも存在する。ここでもウシ・ウマ・イノシシ・シカ前頭骨が出土しており、骨には解体痕の残るものを見られる。また1点のみではあるが海獣類のものと思われる不定形骨が存在し、当時の動物利用の多様さを示唆するものである。また流路からは斎串が出土しており、動物遺存体にも何らかの祭祀行為に伴うものが存在する可能性もある。

以上、一部ではあるが御蔵遺跡出土の動物遺存体について概観した。飛鳥時代、仏教が伝来し、国家的宗教として受容されたことにより、殺生は慎むべきとの宗教觀に基づき禁肉食の詔勅が出されたこともあった。

しかし一方では、養老律令の廐牧令に動物利用の条項が見られるように、不意に斃死した牛馬は役所の管理のもとに売却し、代価を返却すること、また革なめしの材料として牛馬の脳を利用していたことも事実のようである。当遺跡で出土している牛馬の推定年齢に老齢のものが多いことは、斃死遺体の利用を想像させるものではないだろうか。しかしいずれにしてもこれら動物遺体を一手に管理していたのは役所であり、牛馬をはじめとする動物遺体の出土が顕著な遺跡は、官衙色の濃い場所と考えられる。特に解体や加工を行っていた官営工房の存在は、こうした動物遺体の出土によって想像されるといえる。

御蔵遺跡では律令期の官衙に関連する様々な遺構・遺物が出土しており、その性格が次第に明らかになりつつある。こうした中で動物遺存体が示唆する状況は、遺跡の検討をおこなって行く上で重要な部分を担うべきものと考えられる。

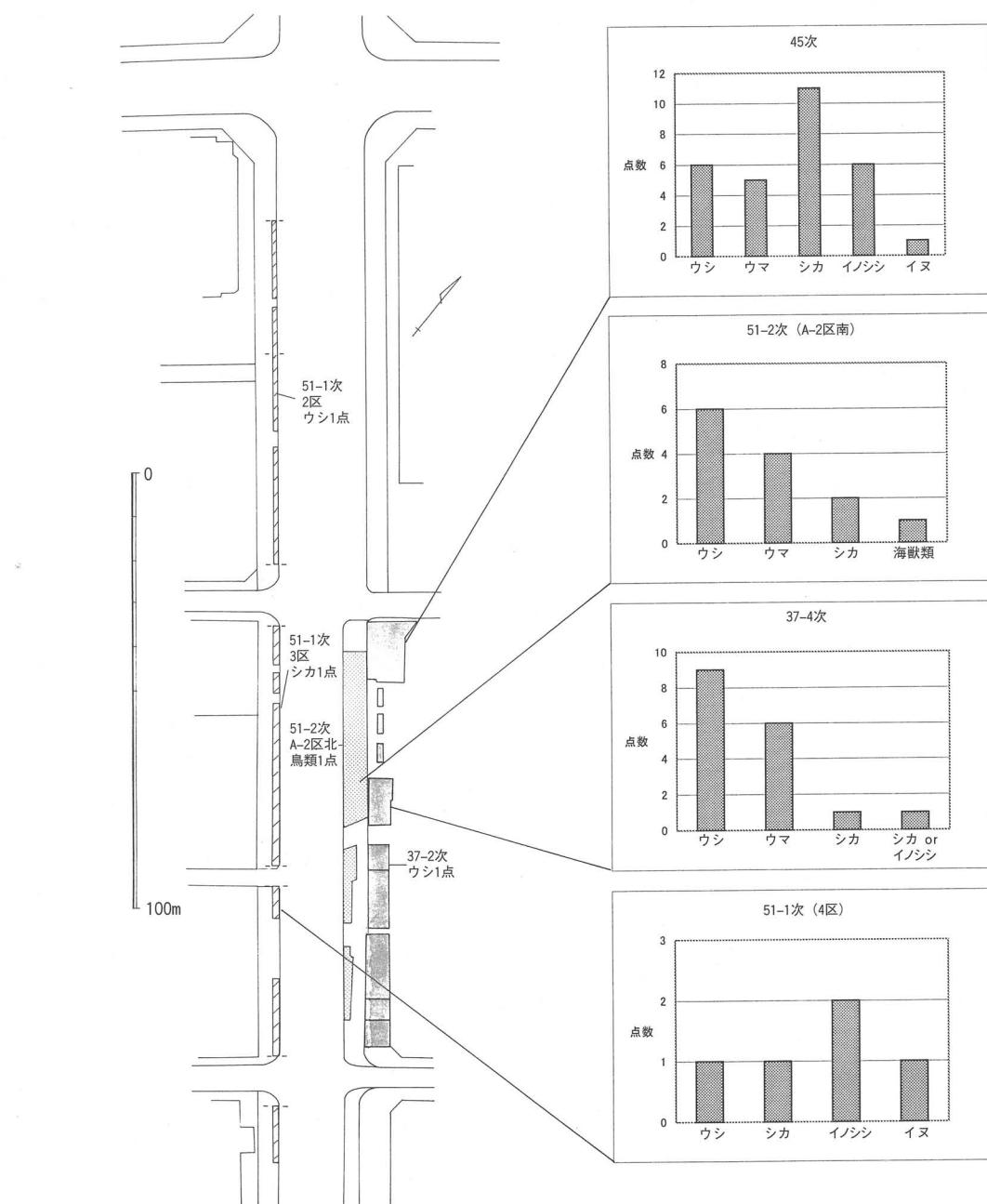


fig.117 動物遺存体種別出土点数

	遺物番号	層位	時期	種類	部位	計測値 (mm)	推定年齢	備考	
第3 7 4 次	A-7	包含層	平安時代後期	ウシ	右上顎臼歯M1～M3	長=29.0、幅=18.7、高=37.5	9～11		
	A-5			ウシ	右上顎臼歯M1～M3	長=30.7、幅=17.7～、高=38.2	9～11		
	B-2			シカorイノシシ	左上腕骨遠位				
	A-2	SX 201		ウシ	下顎 左下顎骨+臼歯P3～M3	前臼歯列長=55.04、P2前端下顎高=40.6、M1前端下顎高=54.5			
						P3 長=20.1、幅=11.4、高=13.7	14～19		
						P4 長=24.0、幅=13.2、高=20.0			
						M1 長=23.2、幅=15.6、高=17.5			
						M2 長=28.2、幅=15.5、高=29.3			
						M3 長=41.8、幅=15.3、高=46.8		異常磨耗	
	A-3			ウシ	頭骨				
	B-5			ウシ	左踵骨			焼成痕	
	B-1			ウシ or ウマ	橈骨				
	A-4			ウマ	左下顎骨+臼歯M1～M3	M1 長=23.4、幅=14.1	12～15		
	B-3					M2 長=22.6、幅=12.9、高=26.5			
	B-4					M3 長=26.4、幅=10.9、高=30.6			
	A-1			ウマ	左肩甲骨	関節面長=53.1、関節面幅=34.8		打撃痕	
	B-6			シカ	右下顎骨筋突起				
	A-8			ウシ	頭骨				
	A-9			ウマ	左踵骨	最大高=135.2、最大幅=46.1			
	A-10			ウマ	右下顎臼歯P3～M2	長=23.4、幅=12.3、高=32.3	10～		
	A-6			ウマ	左上顎臼歯P2	長=34.4、幅=23.2、高=38.0	5～10		
				ウマ	左上顎臼歯P2	長=34.6、幅=20.4、高=21.4	13～		
				ウシ	右上顎臼歯M2 or M3	長=31.0、幅=20.1、高=31.9	11～12		

	遺物番号	層位	時期	種類	部位	計測値 (mm)	推定年齢	備考	
第4 5 次	C-13	黒褐色粘質土	奈良～平安時代	ウマ	右下顎臼歯P3～M2	長=27.4～、幅=13.6、高=37.8	10前後		
	D-22			イノシシ	右上顎臼歯P4				
	D-10			シカ	左下顎臼歯M3	長=28.7～、幅=9.2、高=18.7			
	C-4			ウシ	右脛骨近位				
	D-16			シカ	左距骨				
	D-14			シカ	左距骨	外側最大長=40.4～、内側最大長=39.2			
	D-1			シカ	左前頭骨角座				
	C-5			ウシ?	踵骨				
	D-5			シカ					
	D-8	黒褐色粘質土下層		シカ					
	C-1			ウシ	左脛骨遠位	遠位端最大幅=51.0	幼獣	体高~100cm	
	D-21			イノシシ	右上顎臼歯M3	幅=16.2～			
	D-6			シカ	左角				
	D-2			シカ	右前頭骨角座				
	D-20			イノシシ	左下顎臼歯M2・M3	長=37.5、幅=16.2			
	D-17			イノシシ	右距骨	外側最大長=40.1			
	D-23			イノシシ	歯槽骨+右上顎臼歯P3				
	C-10			ウマ	左上顎臼歯P3～M2	長=26.8、幅=19.7、高=64.7	3～4	偏磨耗	
	D-12	黒褐色粘質土上面		シカ	右脛骨遠位				
	D-4			シカ	左前頭骨	基部周囲長=98			
	C-12			ウマ	上顎臼歯P3～M2	幅=22.4		異常咬耗	
	C-6			ウシ	上顎臼歯M1～M3	長=33.5～、幅=25.3、高=41.9	8～10		
	C-11	黒褐色粘質土上層		ウマ	左上顎臼歯P3～M2	長=32.6、幅=19.9、高=21.6	15前後		
	D-9			ウマ	右下顎筋突起				
	D-7			シカ	左前頭骨				
	-			イヌ?	肋骨				
	D-19			イノシシ	左距骨	外側最大長=38.1			
	C-3	黒褐色粘質土下層		ウシ	橈骨	骨幹最小幅=39.6		体高115～120cm	
	C-2			ウシ	橈骨				
	D-15			シカ	左距骨	外側最大長=40.4、内側最大長=39.4			

fig.118 御蔵遺跡出土動物遺存体(1) 推定年齢および推定体高は西中川駿氏の年齢早見表による

	遺物番号	層位	時期	種類	部位	計測値 (mm)	推定年齢	備考	
第45次	C-8	S D203-E	奈良～平安時代	ウシ	右下顎臼歯M3	長=39.0、幅=14.5		異常磨耗	
	D-3	S D203-W		シカ	左前頭骨	基部周囲長=105			
	D-11	S P217		シカ	中手骨遠位	遠位端最大幅=29.8～			
	C-9	S P246		ウシ	右下顎臼歯M3	長=37.7、幅=15.0、高=28.7	12～13		
	C-7	S P246		ウシ	右下顎臼歯M3	長=27.3～、幅=15.7、高=18.4	14～15		
	D-18	暗褐色砂質シルト		イノシシ	右距骨	外側最大長=38.3～、内側最大長=38.5			
	D-13			シカorイノシシ	左上腕骨遠位				
第511次	遺物番号	層位	時期	種類	部位	計測値 (mm)	推定年齢	備考	
	E-7	黒褐色粘質土	奈良～平安時代	ウシ	上顎臼歯M1～M3				
	E-2			シカ	中手骨				
	E-8			ウシ	左上顎臼歯M1～M3	長=28.6、幅=14.9、高=44.3	7～9		
	E-9			ウシ	左上顎臼歯M1～M3	長=26.0、幅=14.0、高=19.9	16～17		
	E-5			イノシシ	切歯				
	E-4			シカ	左下顎				
	E-3			イヌ	第二頸椎（軸椎）	高=32.9、棘突起長=44.6、歯突起～横突起=45.6			
	E-6			イノシシオス	犬歯				
	E-1			シカ	左橈骨	骨幹最小幅=23.0、近位端最大幅=40.1、近位端関節面幅=38.8			
第512次	遺物番号	層位	時期	種類	部位	計測値 (mm)	推定年齢	備考	
	F-17	攪乱 清掃		鳥類	左大腿骨	近位最大幅=14.7～、近位最大深長=11.1			
	F-2	東半部 攪乱 清掃		シカ	右前頭骨角座	基部周囲=107～			
	F-3	暗褐色粘質土～黄褐色粗砂		ウシ	左尺骨				
	F-8	暗褐色粘質土（東壁拡張）	流路 黒色粘質土	ウシ	上顎臼歯				
	F-9			ウシ	左下顎臼歯M3	長=39.8、幅=14.7、高=30.3	12～13		
	F-1			シカ	右前頭骨				
	F-10			ウマ	左大腿骨頭部			カットマーク	
	F-4	暗褐色粘質土		ウマ	右下顎骨頸突起				
	F-5			ウシ	下顎骨				
	F-15			ウマ	左橈骨遠位				
	F-14	暗褐色粘質土		海獣類？					
	F-11	流路上層 黒色粘質土		ウシ	左中節骨	長=40.9、最大幅=31.9、最小幅=26.8、遠位端幅=28.0			
	F-6	流路中層 黄灰色粗砂		ウシ	右上顎臼歯M1～M3	長=29.6、幅=16.9、高=44.0	7～9		
	F-7	暗褐色粘質土		ウシ	上顎臼歯M1～M3				
	F-16			ウマ	左橈骨遠位				
	F-12			？					
	F-13			？					

fig.119 御蔵遺跡出土動物遺存体(2)

参考文献

松井章 1991 「動物遺存体から見た馬の起源と普及」『日本馬具大鑑 I』古代上 吉川弘文館

GARRAUX 1972 『Atlas of Animal Bones』ELSEVIER PUBLISHING COMPANY

DRIESCH 1976 『A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES』

西中川駿 1989 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究

—とくに日本在来種との比較。文部省科学研究費補助金（一般B）研究成果報告書』

西中川駿 1991 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究。文部省科学研究費補助金（一般B）研究成果報告書』

第3章 自然科学的分析の成果

1. 御藏遺跡（第45次・第51-2次調査）における樹種同定

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から属レベル程度の同定が可能である。また、木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2) 試料

試料は、第45次調査で出土した平安時代の柱材1点、飛鳥～奈良時代の板材1点、丸杭10点、割杭2点の計14点、および第51-2次調査で検出された飛鳥時代の流路、しがらみ、集石遺構周辺から出土した木材47点の計61点である。

(3) 方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結果

fig.120～122に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の濟州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

マキ属 *Podocarpus* マキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞が散在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に1～2個存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりマキ属に同定される。マキ属には、イヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。材は、耐朽性が強く、耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、

じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

ツガ *Tsuga sieboldii* Carr. マツ科

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1分野に2～4個存在する。

放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質より、ツガに同定される。ツガは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20～25m、径50～80cmである。材は耐朽、保存性中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxyylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の、分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～10細胞高ぐらいである。

以上の形質よりコウヤマキに同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

横断面：小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは2~3個放射方向に複合し、散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

横断面：中型から大型の道管が、1~数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

横断面：小型の道管が、単独ないし2個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く80を越えるものがある。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8~10m、径20~30cmである。材は強靭、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ヤマガキ *Diospyros Kaki* Thunb. var. *sylvestris* Makino カキノキ科

横断面：大型から中型の道管が、単独および2～3個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の壁は厚い。柔細胞は周囲状および接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は单穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。いずれの放射組織も高さがほぼ同じで、層階状に配列する傾向を示す。

以上の形質よりヤマガキに同定される。ヤマガキは、本州（西部）、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径1mぐらいに達する。材は、建築、器具などに用いられる。

(5) 所見

①第45次調査

分析の結果、平安時代および飛鳥～奈良時代の木材の樹種は、ツガ1、マツ属複維管束亜属10、コウヤマキ1、ヒノキ2と同定された。杭材には、水湿に耐えるマツ属複維管束亜属やコウヤマキが利用されている。また、柱材と板材には、当時用材として多用されたヒノキが使われている。

②第51－2次調査

分析の結果、飛鳥時代の木材の樹種は、カヤ1、マキ属1、モミ属9、ツガ1、マツ属複維管束亜属7、スギ3、コウヤマキ16、ヒノキ3、ヤナギ属1、ツブラジイ1、コナラ属アカガシ亜属2、サカキ1、ヤマガキ1と同定された。

用材の傾向として、古墳時代ないし律令期以降は、瀬戸内沿岸、近畿中央部、東海西部、九州北部にかけてはヒノキが多用され、モミ属やコナラ属アカガシ亜属も多く利用されるが、本遺跡ではコウヤマキが最も多く、モミ属やマツ属複維管束亜属も多く利用されているのが特徴的である。

コウヤマキは、弥生時代から近畿地方中央部を中心に棺材や刳り物に用いられ、古墳時代では葬送関連の木製品や柱材として用いられている。また、律令期には主に建築材として用いられるが、いずれの時期も主要に用いられる木材とはならない。また、マツ属複維管束亜属の用例は、律令期以降の建築材に用いられる以外はほとんどない。

杭材は、各遺跡において近隣に生育する木材を用いる傾向にあるが、本遺跡ではコウヤマキが多く使われている。また、割材や木端はコウヤマキ、モミ属、マツ属複維管束亜属が多く、チョウナ屑はヒノキやサカキであることから、これらの樹種は本遺跡で加工された可能性が高いと考えられる。コウヤマキ、モミ属、マツ属複維管束亜属はいずれも尾根筋などのやや乾燥したところなどに多く、特にマツ属複維管束亜属は他の樹木の生育できない土壤の発達しない岩肌の露出したところにも生育する。

以上のように、本遺跡では当時の近畿地方中央部周辺でヒノキが多用される様相とは異なり、コウヤマキ、モミ属、マツ属複維管束亜属が多く利用される特徴が認められる。これは、杭材、割材、木端が多いという用途の違い、および木材が供給される近隣の後背山地の植生に左右された地域的な要因によるものと考えられる。

文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞・木材の構造、文永堂出版、p. 20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞・木材の構造、文永堂出版、p. 49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.

金原正明（1995）近畿地方における弥生古墳時代の木材利用と画期・古墳文化とその伝統、勉誠社、p. 553-562.

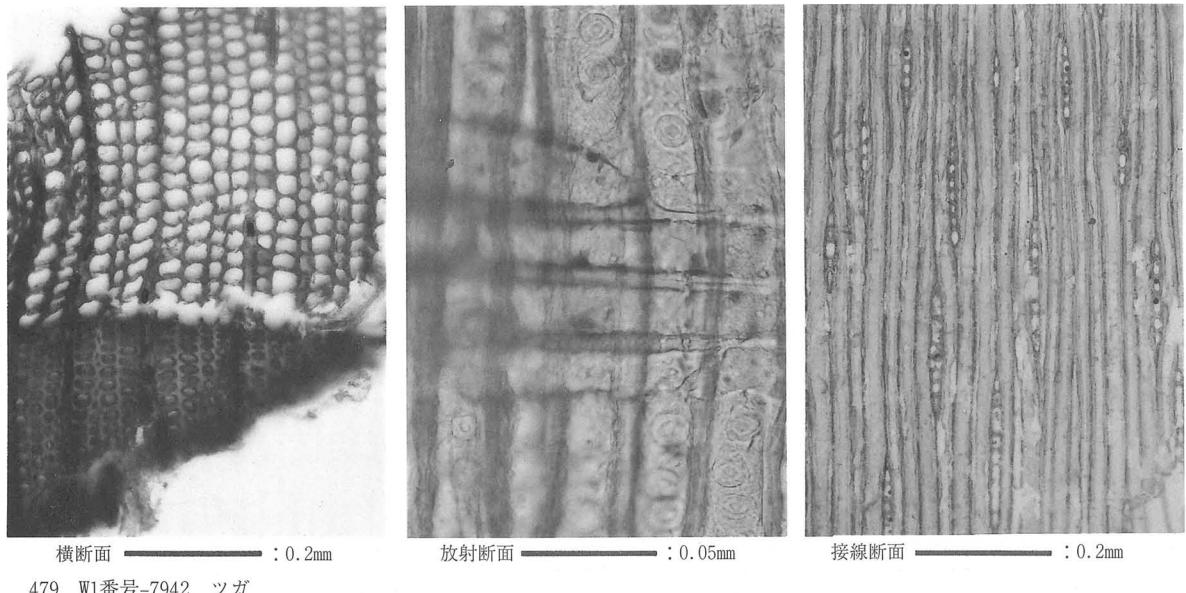
遺物No.	地区	遺物名	出土層位	W1番号	時期	備考	結果(和名/学名)
477	2区南半	柱材	SP 262	7939	平安時代前期		<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
—	2区北半	板材	暗褐色砂質シルト	7940	飛鳥～奈良時代	遺構面下層	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
—	3区	丸杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト	7941	飛鳥～奈良時代	コウヤマキ	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
476	3区	丸杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト	7942	飛鳥～奈良時代	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
479	3区	丸杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト	7943	飛鳥～奈良時代	マツ属複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
471	3区	丸杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト	7944	飛鳥～奈良時代	マツ属複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
473	3区	丸杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト	7945	飛鳥～奈良時代	マツ属複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
478	3区	丸杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト	7946	飛鳥～奈良時代	マツ属複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
474	3区	丸杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト	7947	飛鳥～奈良時代	マツ属複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
475	3区	丸杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト	7948	飛鳥～奈良時代	マツ属複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
467	3区	丸杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト	7949	飛鳥～奈良時代	マツ属複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
472	3区	丸杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト	7950	飛鳥～奈良時代	マツ属複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
468	3区南半	割杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト	7951	飛鳥～奈良時代	マツ属複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
469	2区北半	丸杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト	7952	飛鳥～奈良時代	マツ属複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
470	2区北半	割杭	暗褐色～黒褐色砂質シルト				

fig.120 第45次調査における樹種同定結果

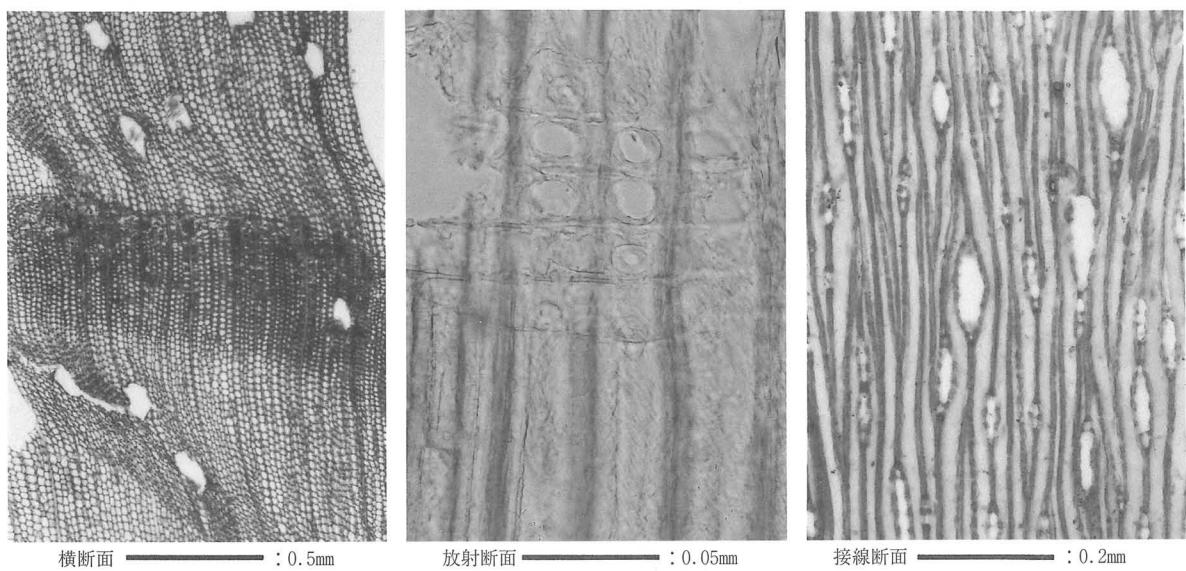
出土地区	遺物名	出土層位	W1番号	時期	圓面番号	結果(和名/学名)
600	A-2北端	斎串	集石遺構の下・黒色シルト	8805	飛鳥時代	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
601	A-2北半	木端	集石遺構の下・黒色シルト	8815	飛鳥時代	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
602	A-2	板材	集石遺構付近	8804	飛鳥時代	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don
603	A-2南半	割板	流路内柵付近	8803	飛鳥時代	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
604	A-2南半	割材	流路内柵付近	8801	飛鳥時代	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
605	A-2北半	杭先	集石遺構の下・黒色シルト	8812	飛鳥時代	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
606	A-2北半	加工材	集石遺構の下・黒色シルト	8809	飛鳥時代	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
607	A-2北半	木端	集石遺構の下・黒色シルト	8808	飛鳥時代	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
608	A-2北半	木端	集石遺構の下・黒色シルト	8817	飛鳥時代	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
609	A-2北半	板材	集石遺構の下・黒色シルト	8810	飛鳥時代	<i>Abies</i>
610	A-2北半	棒状	集石遺構の下・黒色シルト	8818	飛鳥時代	モミ属
611	A-2北半	木端	集石遺構の下・黒色シルト	8816	飛鳥時代	モミ属
612	A-2南半	つけ木	流路内柵付近	8802	飛鳥時代	ヤマガキ
613	A-2北半	角材	集石遺構付近	8799	飛鳥時代	マツ属複維管束亞属
614	A-2北半	角材	集石遺構の下・黒色シルト	8811	飛鳥時代	スギ
615	A-2北半	割板	集石遺構の下・黒色シルト	8813	飛鳥時代	モミ属
616	A-2北半	割材	集石遺構付近	8800	飛鳥時代	コウヤマキ

fig.121 第51-2次調査における樹種同定結果(1)

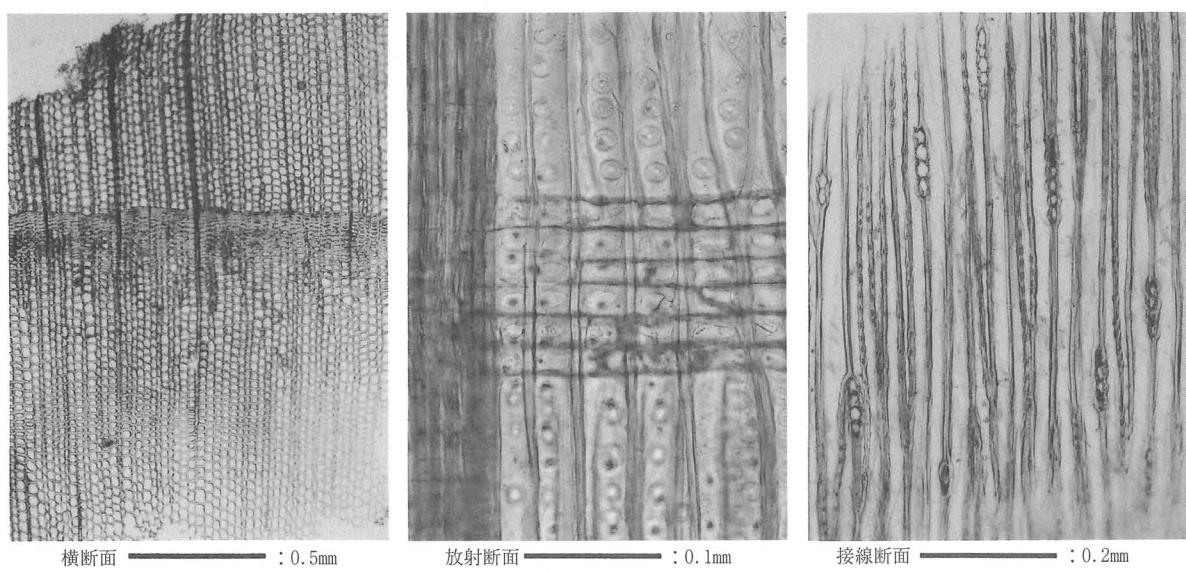
出土地区	遺物名	出土層位	W番号	時期	図面番号	結果(和名/学名)
617 A-2北半	割材	集石遺構の下・黒色シルト	8814	飛鳥時代		マツ属後維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
618 A-2北半	加工材	集石遺構の下・黒色シルト	8807	飛鳥時代		コウヤマキ
619 A-2	杭	流路内	8794	飛鳥時代	木-19	コウヤマキ
620 A-2北半	杭	集石遺構の下・黒色シルト	8806	飛鳥時代		コナラ属アカガシ亜属 <i>Sciadopitys</i> subgen. <i>Sciadopitys Sieb. et Zucc.</i>
621 A-2	杭	流路内	8782	飛鳥時代	木-2	コナラ属アカガシ亜属 <i>Sciadopitys</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
622 A-2	加工材	流路内	8781	飛鳥時代	木-1	コナラ属アカガシ亜属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
623 A-2	割材	流路内	8788	飛鳥時代	木-10	モミ属
624 A-1	部材	S P 217	8797	飛鳥時代		マキ属
625 A-2南半	加工材	暗褐色粘質土	8796	飛鳥時代		ツガ
626 A-2北半	割材	黒色シルト・集石遺構付近	8798	飛鳥時代		モミ属
627 A-2	割材	流路内	8785	飛鳥時代	木-13	モミ属
628 A-2	板材	流路内	8783	飛鳥時代	木-4	モミ属
629 A-2	割材	流路内	8786	飛鳥時代	木-8	モミ属
630 A-2南端	板材	流路内柵付近	8787	飛鳥時代		モミ属
631 A-2	杭	流路内	8792	飛鳥時代	木-17	コウヤマキ
632 A-2	杭	流路内	8790	飛鳥時代	木-15	コウヤマキ
633 A-2	杭	流路内	8819	飛鳥時代	木-3	カヤ
634 A-2	杭	流路内	8793	飛鳥時代	木-18	コウヤマキ
635 A-2	杭	流路内	8784	飛鳥時代	木-5	コウヤマキ
636 A-2	杭	流路内	8795	飛鳥時代	木-20	コウヤマキ
637 A-2	杭	流路内	8789	飛鳥時代	木-14	ヤナギ属
638 A-2	杭	流路内	8791	飛鳥時代	木-16	コウヤマキ
- A-2北半	チヨウ	集石遺構の下・黒色シルト	-	飛鳥時代		ヒノキ
- A-2南半	ナ屑	集石遺構の下・黒色シルト	-	飛鳥時代		マツ属後維管束亜属 <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
- A-2南半	割材	流路内柵付近	-	飛鳥時代		マツ属後維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
- A-2南半	つけ木	流路内柵付近	-	飛鳥時代		マツ属後維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
- A-2南半	木端	流路内柵付近	-	飛鳥時代		マツ属後維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
- A-2南半	木端	流路内柵付近	-	飛鳥時代		ヒノキ
- A-2北半	割材	集石遺構付近	-	飛鳥時代		コウヤマキ
- A-2北半	チヨウ	集石遺構の下・黒色シルト	-	飛鳥時代		ヒノキ
- A-2北半	ナ屑	集石遺構の下・黒色シルト	-	飛鳥時代		マツ属後維管束亜属 <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
- A-2北半	木端	集石遺構の下・黒色シルト	-	飛鳥時代		マツ属後維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
fig.122 第51-2 次調査における樹種同定結果 (2)						Cleyera japonica Thunb. Castanopsis cuspidata Schottky



479 W1番号-7942 ツガ



471 W1番号-7943 マツ属複維管束亞属



476 W1番号-7941 コウヤマキ

fig.123 第45次調査の木材(1)

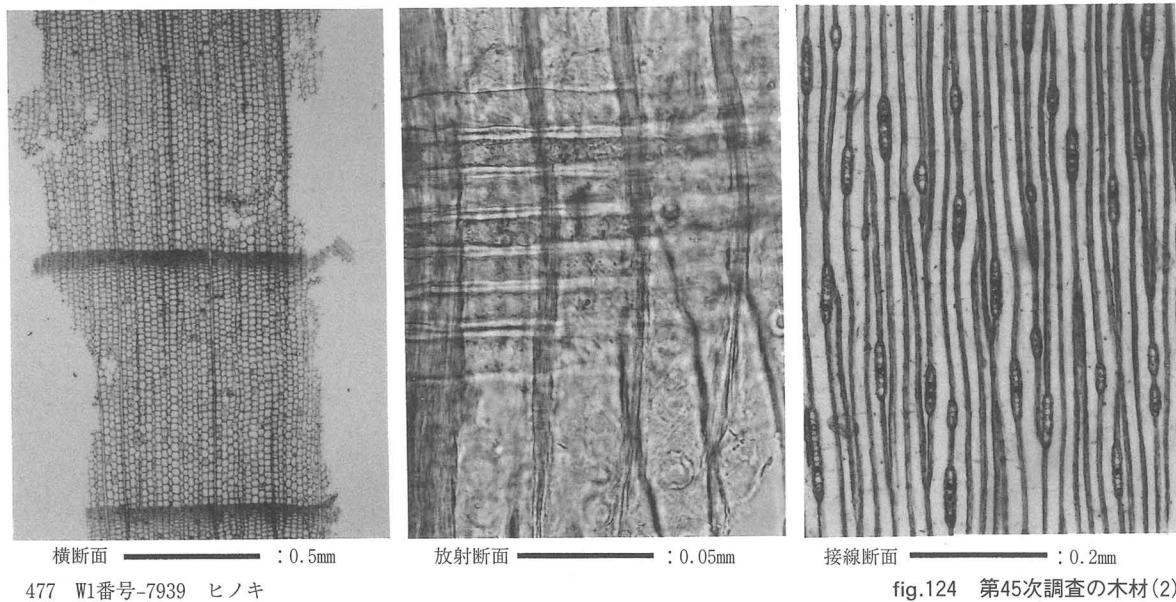


fig.124 第45次調査の木材(2)

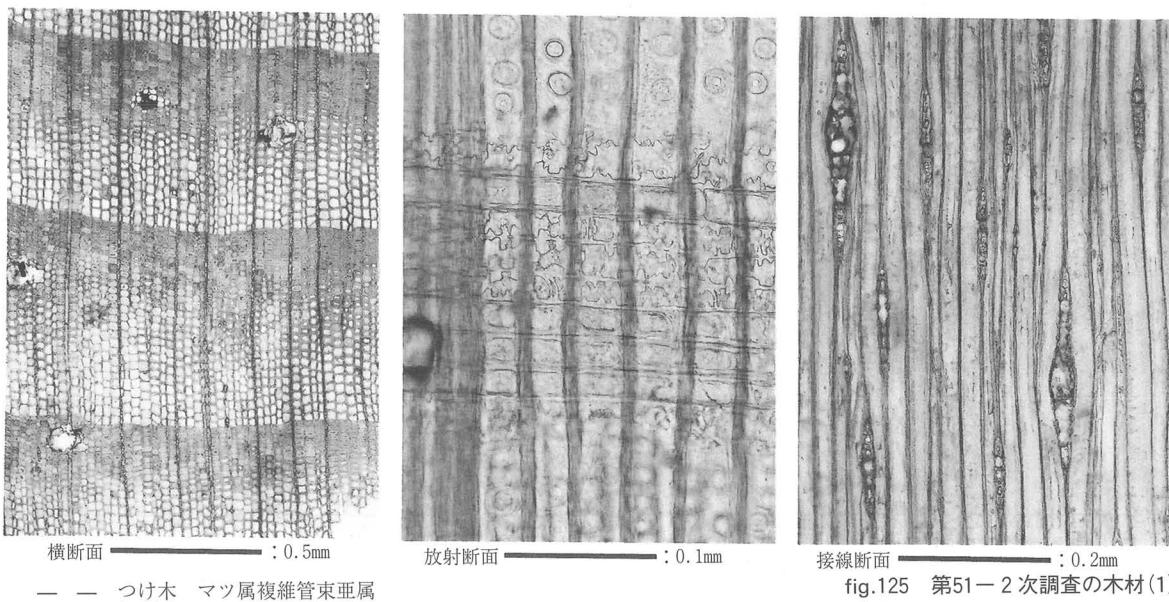
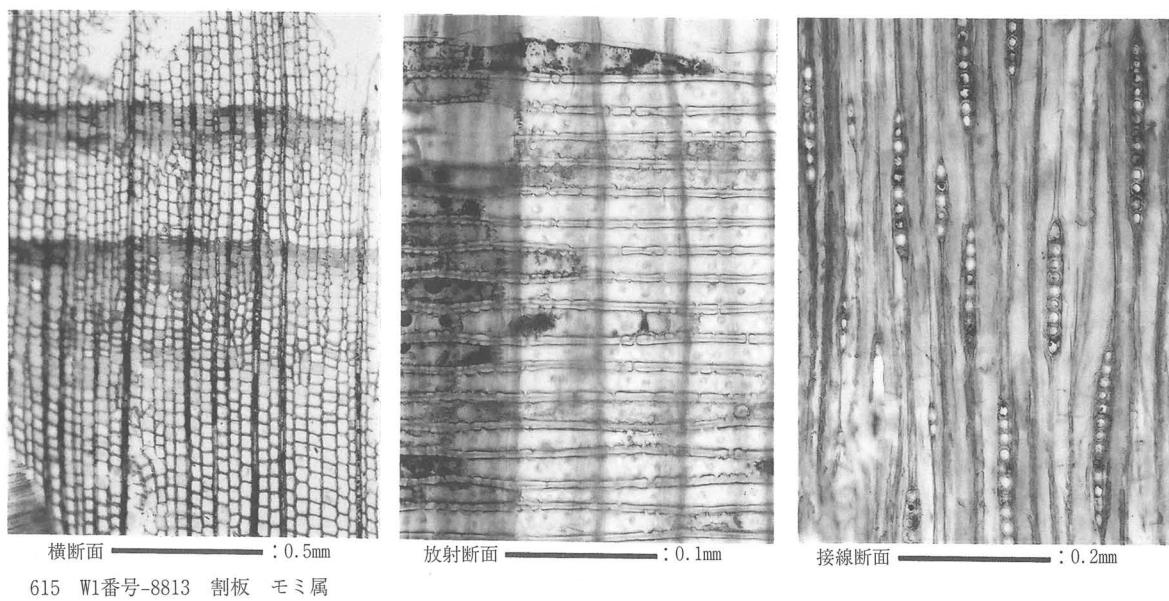
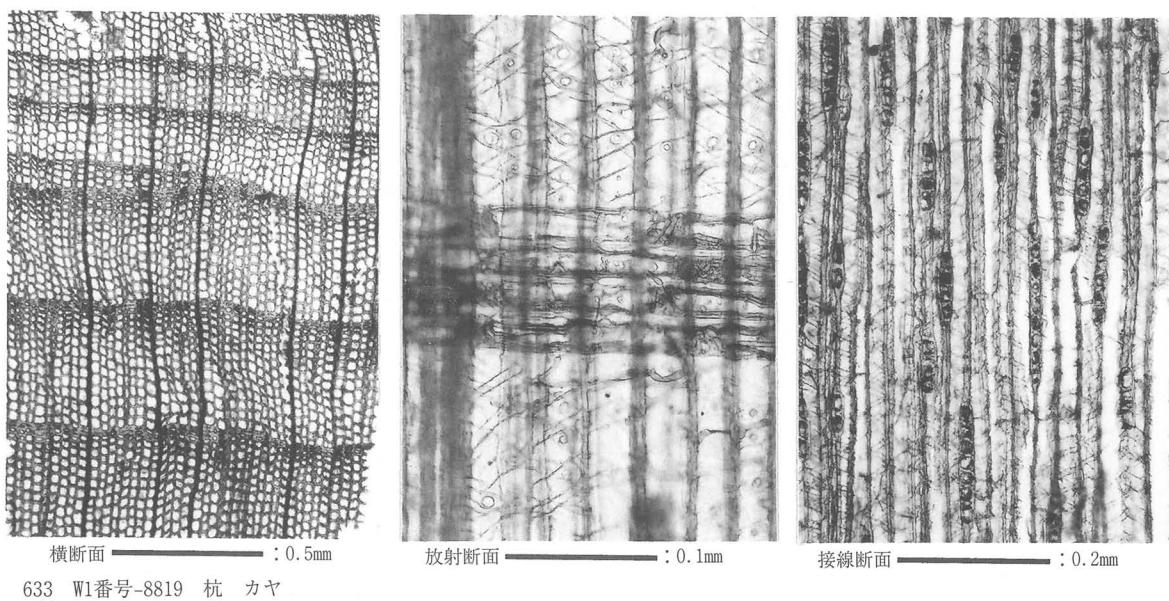


fig.125 第51－2次調査の木材(1)

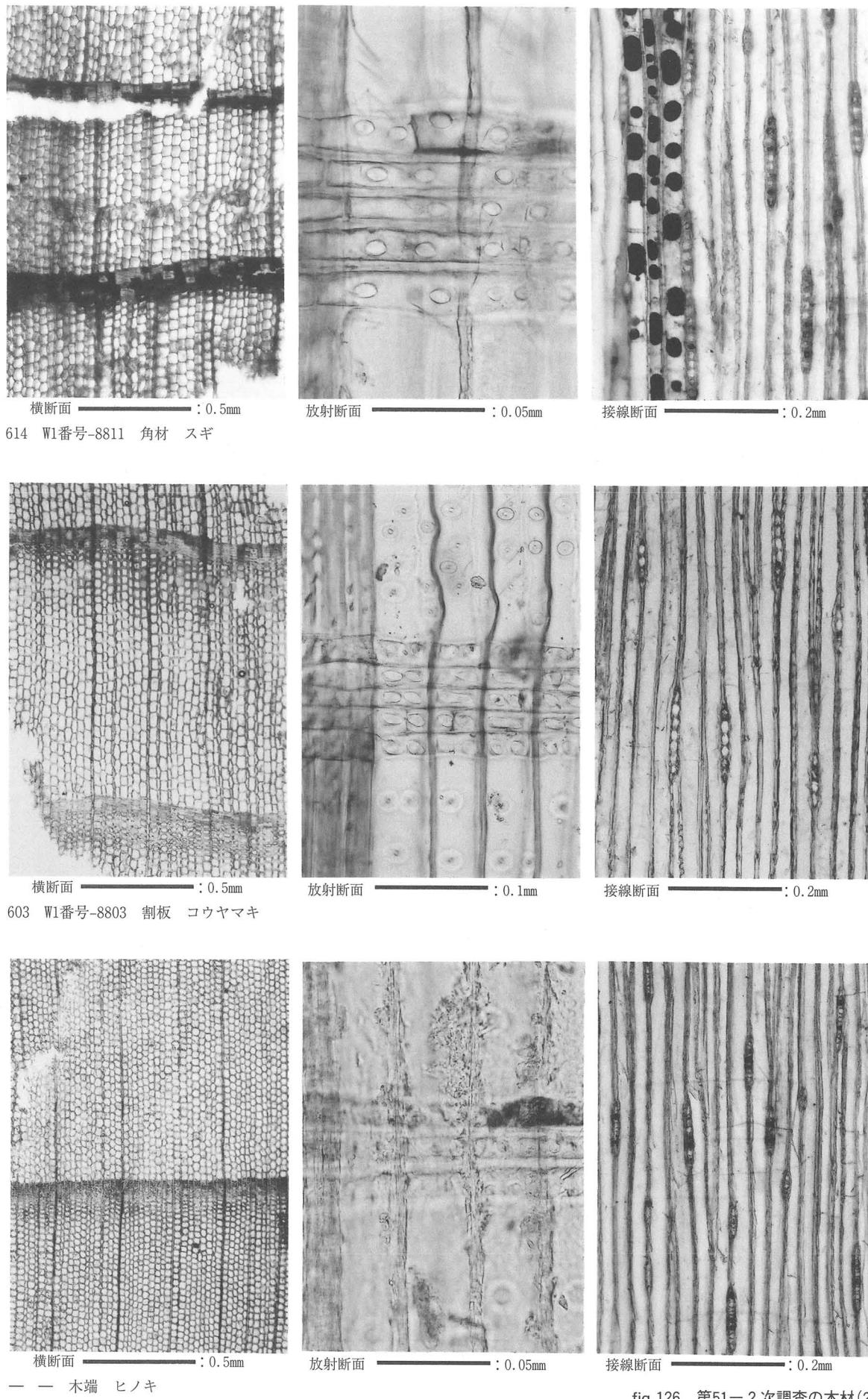


fig.126 第51—2次調査の木材(2)

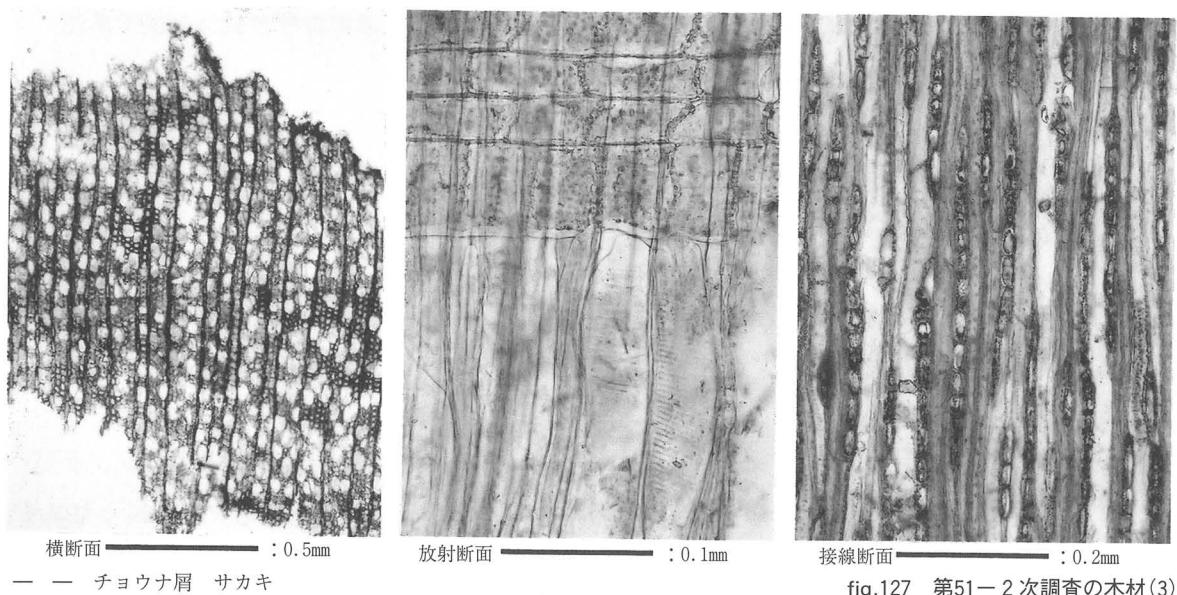
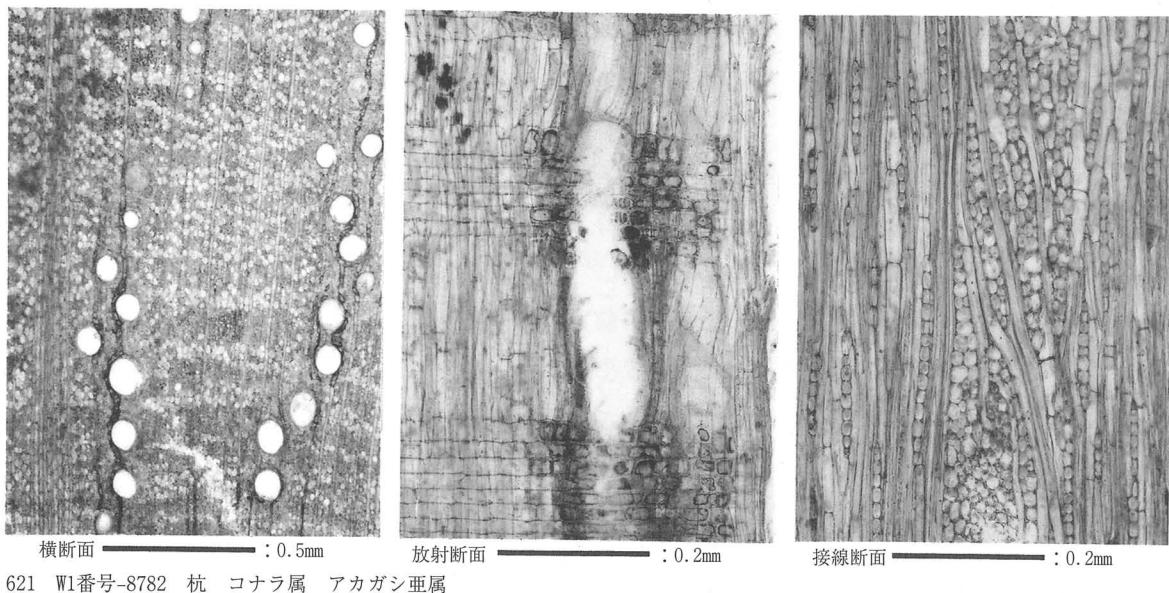
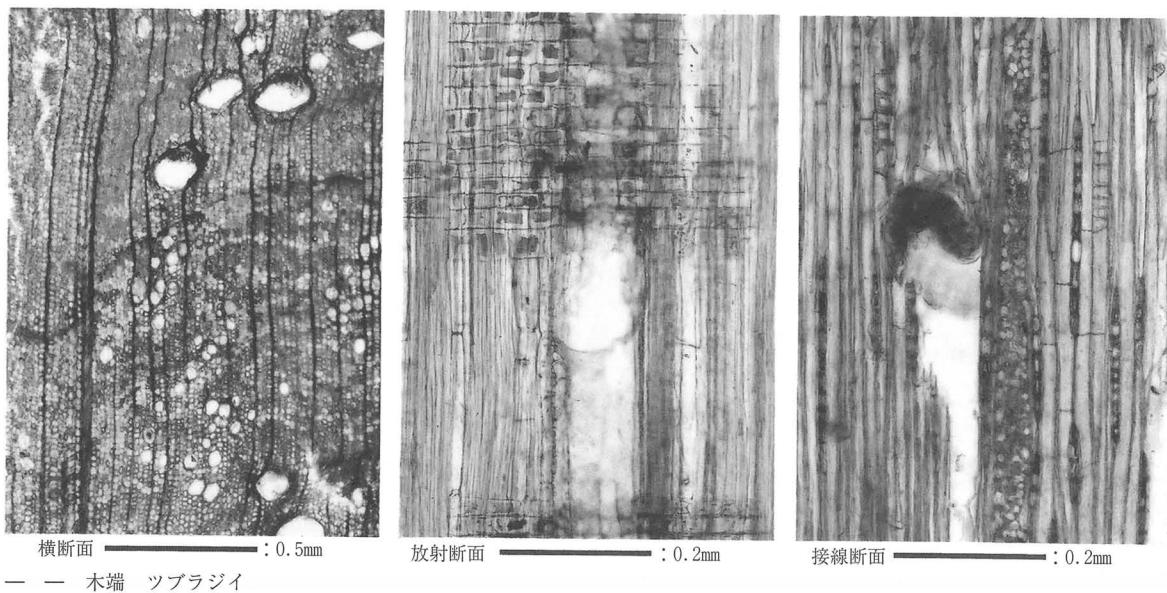


fig.127 第51-2次調査の木材(3)

2. 御蔵遺跡における植物珪酸体分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

(2) 試料

分析試料は、第45次調査の2区C地点から採取された7点および2区と3区の炭化物層から採取された2点の計9点である。試料の詳細を分析結果図に示す。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約 $40\mu\text{m}$ のガラスピーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による $20\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(4) 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果をfig.128およびfig.129に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、イネ（穂の表皮細胞由来）、ムギ類（穂の表皮細胞）、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

[イネ科－タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、その他

(5) 考察

①稻作跡の検討

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

C地点では、3層（鎌倉～室町時代）、5層（平安～鎌倉時代頃）、6層（奈良・平安時代）、7層（奈良・平安時代）、8層（奈良・平安時代）、10層（飛鳥～奈良時代）、12層（庄内・飛鳥時代）について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネが検出された。

このうち、3層、5層、6層では密度が10,000個/g以上、7層と8層では5,000個/g以上と高い値であり、10層でも4,000個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

12層では、密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稻作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

②イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類（穎の表皮細胞）は、C地点の6層から検出された。ここで検出されたのは、コムギやオオムギに見られる形態のものである（杉山・石井, 1989）。密度は700個/gと低い値であるが、穎（穂殼）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものも含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

③炭化物層について

平安時代前～中期とされる炭化物層（2区、3区）からは、イネが極めて多量に検出された。イネの密度は、2区では42,400個/g、3区でも19,000個/gといずれも極めて高い値である。また、3区ではイネの穂殼（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体が35,600個/gと多量に検出され、2区でも2,200個/gが検出された。その他の分類群では、メダケ節型、ネザサ節型、ブナ科（シイ属）などが検出されたが、いずれも少量である。

以上の結果から、これらの炭化物層の給源植物はおもにイネ藁と考えられ、3区の炭化物層にはイネ糲

(殻) も多く含まれていると推定される。

④植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。12層ではメダケ節型やネザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族A、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、およびブナ科（シイ属）などの樹木も検出された。10層と8層でも、おむね同様の結果である。7層から3層にかけては、メダケ節型やネザサ節型が減少傾向を示しており、ヨシ属は見られなくなっている。おもな分類群の推定生産量によると、12層ではヨシ属、10層より上位ではイネが優勢となっていることが分かる。

以上の結果から、庄内・飛鳥時代とされる12層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはメダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹篠類も生育していたと考えられる。また、遺跡周辺にはブナ科（シイ属）などの照葉樹林が分布していたと推定される。飛鳥～奈良時代とされる10層の時期には、ヨシ属などが生育する湿地を利用して水田稲作が開始されたと考えられ、その後も鎌倉～室町時代とされる3層の時期まで、継続的に稲作が行われていたと推定される。とくに、奈良・平安時代とされる7層より上位では集約的な稲作が行われていたと考えられ、イネ科の野・雑草はほとんど見られなかつたと推定される。

(6) まとめ

植物珪酸体分析の結果、3層（鎌倉～室町時代）、5層（平安～鎌倉時代頃）、6層（奈良・平安時代）、7層（奈良・平安時代）、8層（奈良・平安時代）、10層（飛鳥～奈良時代）の各層では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、12層（庄内・飛鳥時代）でも、稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、6層ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、12層もしくは10層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。

平安時代前～中期とされる2区と3区の炭化物層の給源植物はおもにイネ藁と考えられ、3区の炭化物層にはイネ粉（殻）も多く含まれていると推定される。

文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体.富士竹類植物園報告, 第31号, p. 70–83.
- 杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村、FP直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析. 日本第四紀学会要旨集, 19, p. 94–95.
- 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史.第四紀研究, 38(2), p. 109–123.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）.考古学と植物学.同成社, p. 189–213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－.考古学と自然科学, 9, p. 15–29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－.考古学と自然科学, 17, p. 73–85.

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料	大型植物化石							炭化物層	
			3層	5層	6層	7層	8層	10層	12層	2区	3区
イネ科	Gramineae (Grasses)										
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)		128	170	141	74	51	40	7	424	190
イネ糊殻(穎の表皮細胞)	Rice husk Phytolith				7					22	356
ムギ類(穎の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum</i> type (husk Phytolith)										
キビ族型	Panicaceae type		7		22		7	7	7		
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)					22	7		14		
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		14	14	7			13			
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae A</i> type		21	28	30	7	37	59	36		14
ウシクサ族B	<i>Andropogoneae B</i> type		7								13
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)										
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>		14	14	37	37	88	59	58	14	13
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		21	35	37	60	51	73	50	14	13
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)		14	7	15	7	22	13	14		
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>			7		7	7	13	7		
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>					7					
未分類等	Others		28	28	15	22	15	66	22	14	
その他のイネ科	Others										
表皮毛起源	Husk hair origin		7	28	59	22		7		29	44
棒状珪酸体	Rod-shaped		92	263	378	298	299	291	209	244	438
未分類等	Others		269	426	497	372	402	410	360	280	375
樹木起源	Arboreal										
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>		14	21	7	7	15	20	22	14	25
クスノキ科	Lauraceae					7					
その他	Others		7	14	7			7	14		
(海綿骨針)	Sponge		28	28	7	7		7	14		
植物珪酸体総数	Total		645	1057	1261	930	1015	1084	821	1070	1467

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²·cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	3.75	5.01	4.14	2.19	1.50	1.17	0.21	12.46	5.60
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)					1.38	0.42	0.91		
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.18	0.18	0.09			0.16		0.18	
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	0.16	0.16	0.43	0.43	1.02	0.69	0.67	0.17	0.15
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.10	0.17	0.18	0.29	0.25	0.35	0.24	0.07	0.06
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	0.11	0.05	0.11	0.06	0.16	0.10	0.11		
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.02		0.02	0.02	0.04	0.02			

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	44	40	60	54	70	59	64	71	71
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	27	42	25	36	17	30	23	29	29
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	29	13	15	7	11	8	10		
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	5	3	2	3	2	3	2		

fig.128 第45次調査における植物珪酸体分析結果(1)

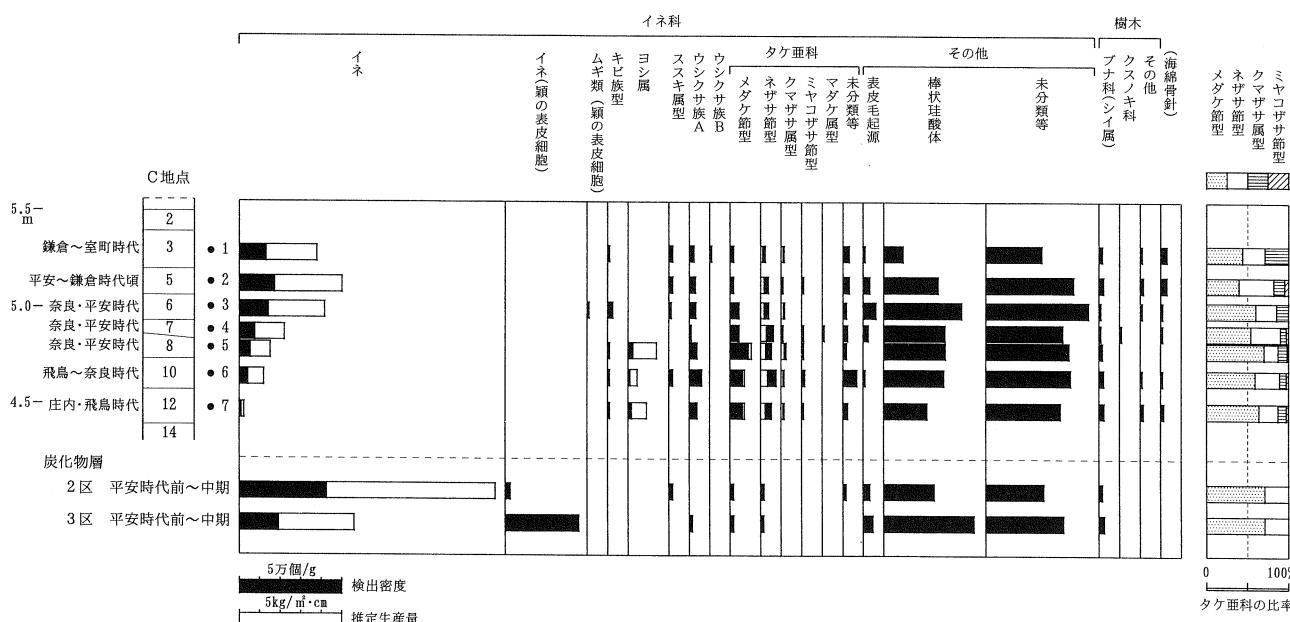
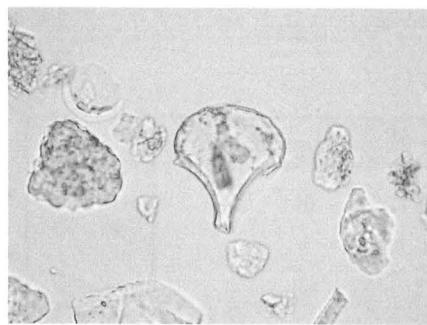
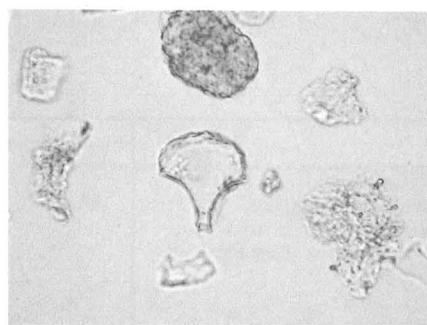


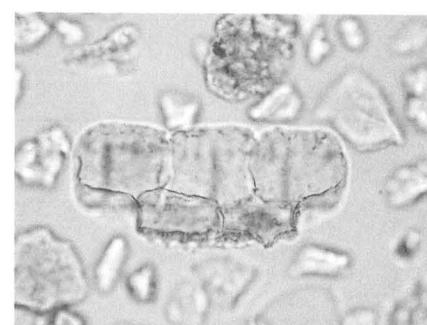
fig.129 第45次調査における植物珪酸体分析結果(2)



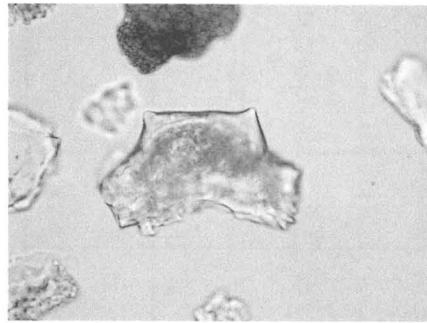
イネ
C地点 5



イネ
炭化物層 3区



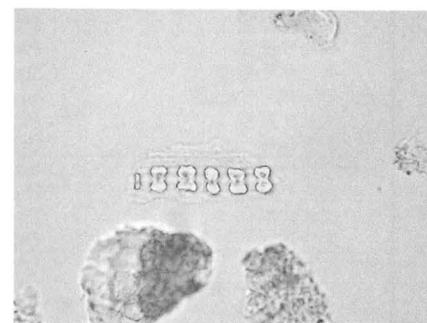
イネ
C地点 8



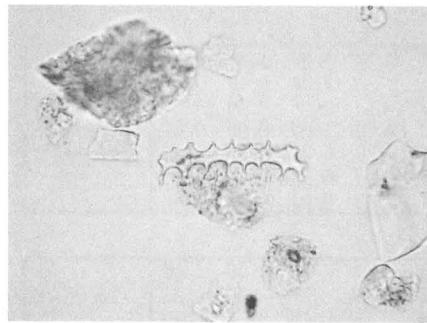
イネ糊殻（穎の表皮細胞由来）
炭化物層 2区



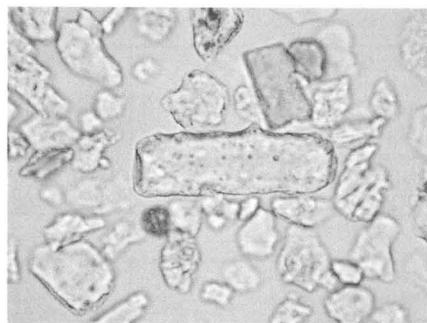
イネ糊殻（穎の表皮細胞由来）
炭化物層 3区



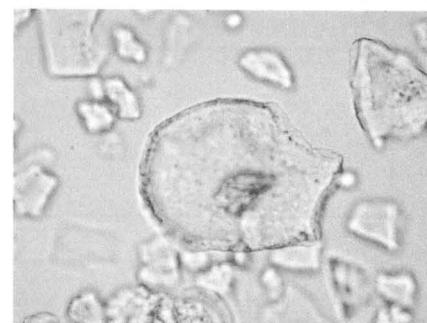
イネ（短細胞由来）
炭化物層 2区



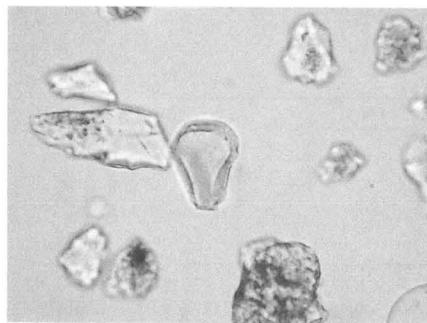
ムギ類（穎の表皮細胞由来）
C地点 6



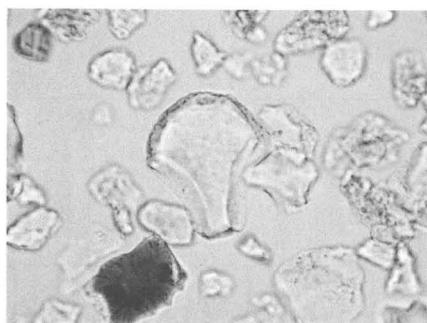
キビ族型
C地点 8



ヨシ属
C地点 8



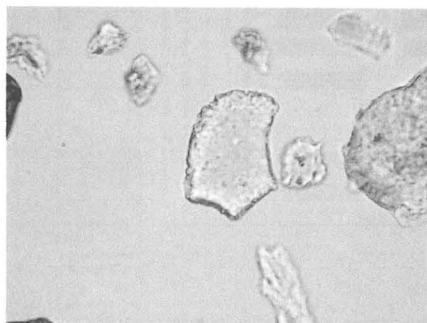
ススキ属型
C地点 3



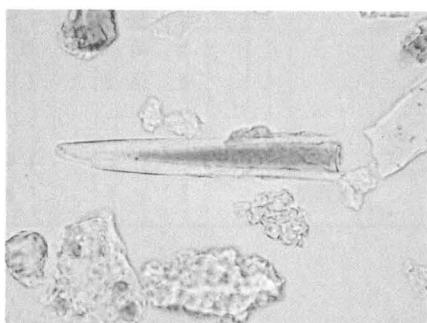
メダケ節型
C地点 8



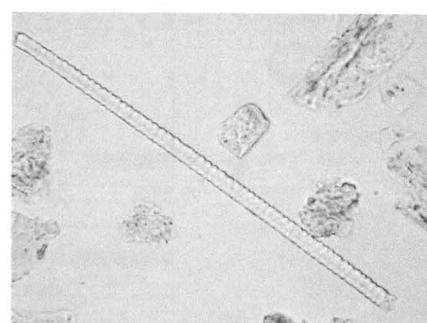
ネザサ節型
C地点 5



クマザサ属型
C地点 6



表皮毛起源（イネ糊の剛毛由来？）
炭化物層 3区



棒状硅酸体（イネ糊の芒由来？）
炭化物層 3区

3. 御蔵遺跡における花粉分析

(1) はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(2) 試料

分析試料は、第45次調査の2区C地点から採取された7点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

(3) 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトトリシス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

(4) 結果

① 分類群

出現した分類群は、樹木花粉24、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉20、シダ植物胞子2形態の計49である。分析結果をfig. 131に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[樹木花粉]

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科 イヌガヤ科—ヒノキ科、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、ブドウ属、ハイノキ属、モクセイ科、ニワトコ属—ガマズミ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科 イラクサ科、マメ科、ウコギ科

[草本花粉]

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、フウロソウ属、チドメグサ亜科、

セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

单条溝胞子、三条溝胞子

②花粉群集の特徴

花粉組成の変遷から、下位より3区分の花粉分帯を設定した。以下に、各分帯ごとに花粉群集の特徴を記す。

1) I 帯：10層（試料6）・12層（試料7）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科の出現率が高く、ヨモギ属、カヤツリグサ科、オモダカ属、ミズアオイ属が伴われる。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、クリなどがやや低率に出現する。

2) II 帯：8層（試料5）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではイネ属型を含むイネ科が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科が伴われる。また、ミズアオイ属がやや増加し、ソバ属が出現する。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などがやや低率に出現する。

3) III 帯：7層（試料4）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではイネ科が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科が伴われ、アカザ科ヒュウ科、タンポポ亜科がやや増加する。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などが低率に出現する。

4) IV 帯：3層（試料1）～6層（試料3）

花粉があまり検出されない。

(5) 花粉分析から推定される植生と環境

庄内・飛鳥時代とされる12層から飛鳥～奈良時代とされる10層にかけては、調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと考えられ、オモダカ属やミズアオイ属などの水生植物（水田雑草）も生育していたと推定される。また、遺跡周辺はイネ科を主体としてヨモギ属やカヤツリグサ科なども見られる草原的な環境であったと考えられ、周辺地域にはマツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの森林が分布していたと推定される。

奈良・平安時代とされる8層でも、おおむね同様の状況であったと考えられるが、この時期には周辺でソバなどの畑作が行われていたと推定される。7層の時期には、アカザ科ヒュウ科、タンポポ亜科などが生育する乾燥地が増加したと考えられ、周辺地域では森林植生が減少したと推定される。

6層より上位では、花粉があまり検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献

中村純（1973）花粉分析. 古今書院, p. 82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純（1980）日本産花粉の標微. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p. 187-193.

中村純（1977）稻作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p. 21-30.

分類群		3層	5層	6層	7層	8層	10層	12層
学名	和名	試料1	試料2	試料3	試料4	試料5	試料6	試料7
Arboreal pollen	樹木花粉							
<i>Abies</i>	モミ属			2	2	1	3	
<i>Tsuga</i>	ツガ属				6	2	8	
<i>Pinus subgen. Diploxyylon</i>	マツ属複維管束亜属	1		6	34	28	39	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1		6	28	18	33
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ				1	1		
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科			4	8	7	7	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属			1		1		2
<i>Betula</i>	カバノキ属					4		
<i>Corylus</i>	ハシバミ属							1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ				3	2		
<i>Castanea crenata</i>	クリ			4	8	17	4	
<i>Castanopsis</i>	シイ属			9	28	15	23	
<i>Fagus</i>	ブナ属				1			
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	2		6	8	6	12	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属			11	32	16	37	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ					3	2	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	1	1	8				
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属				1			
<i>Ilex</i>	モチノキ属					1		1
<i>Acer</i>	カエデ属						1	
<i>Vitis</i>	ブドウ属				2	4	3	
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属							1
Oleaceae	モクセイ科				1			
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属				4	7	1	
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉							
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		3	3	30	8	14	
Leguminosae	マメ科					2		2
Araliaceae	ウコギ科				3			
Nonarboreal pollen	草本花粉							
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属				1	3	47	
Gramineae	イネ科	1	5	59	138	112	119	
<i>Oryza type</i>	イネ属型				4	26	27	
Cyperaceae	カヤツリグサ科		1	14	37	38	23	
<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ				2		1	
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属				21	3	8	
<i>Polygonum</i>	タデ属			1		1	2	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節				3	1	3	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属				1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒュ科			17	6	10	10	
Caryophyllaceae	ナデシコ科		1		1	1		
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属				1	1		1
Cruciferae	アブラナ科	16	7	6	2	4	1	
<i>Geranium</i>	フウロソウ属				1			
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科				2	4	7	4
Apioideae	セリ亜科				1	3	2	3
Lactucoideae	タンポポ亜科	2	1	12	5		3	
Asteroideae	キク亜科		1	5	4	3	4	
<i>Xanthium</i>	オナモミ属				1	1	3	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1	1	18	46	43	52	
Fern spore	シダ植物胞子							
Monolate type spore	単条溝胞子	2	7	10	6	9	9	
Trilate type spore	三条溝胞子		4	12	3	6	5	
Arboreal pollen	樹木花粉	0	4	2	49	176	133	177
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	3	3	33	10	16
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	20	17	138	279	255	311
Total pollen	花粉総数	0	24	22	190	488	398	504
Unknown pollen	未同定花粉	0	2	1	6	7	7	5
Fern spore	シダ植物胞子	0	2	11	22	9	15	14
Helminth eggs	寄生虫卵							
Unknown eggs	不明虫卵							1
Total	計	0	0	0	0	0	0	1
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

fig.131 第45次調査における花粉分析結果

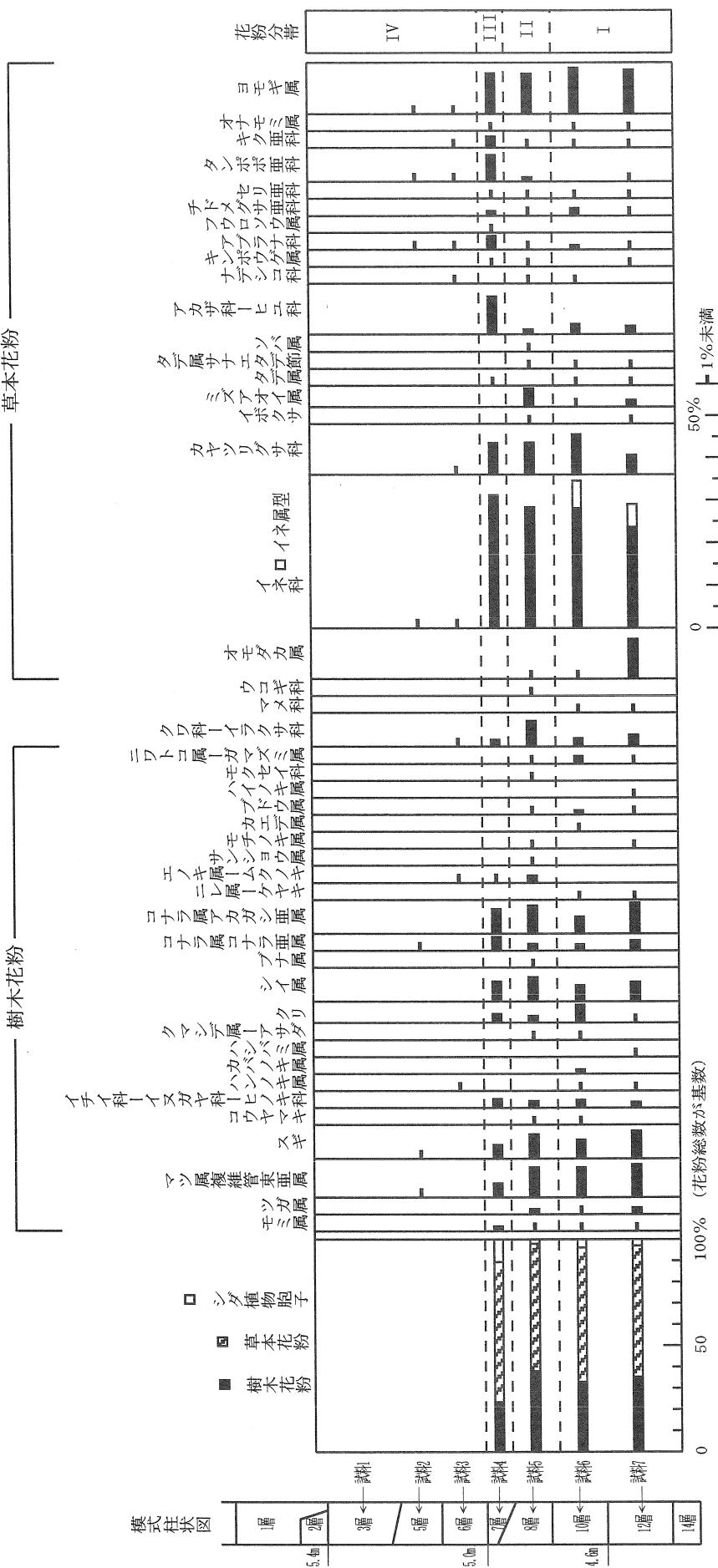


fig.132 第45次調査における花粉ダイヤグラム

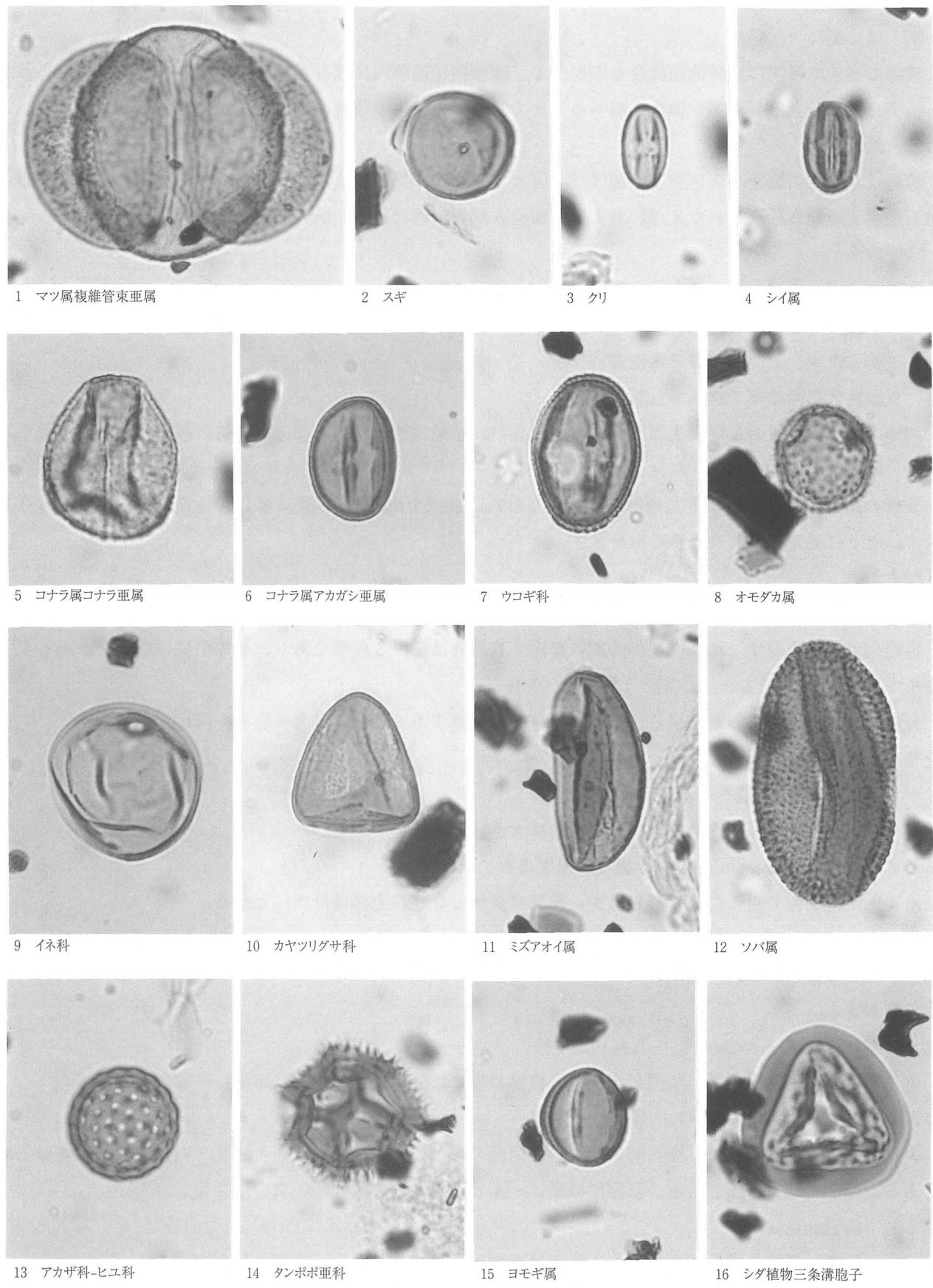


fig.133 第45次調査の花粉・胞子

— 10 μm —

4. 御蔵遺跡における種実同定

(1) はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

(2) 試料

試料は、第45次調査の炭化物集中地区（2区と3区）から採取された13点、第51－2次調査の流路底面と集石遺構下層から採取された2点、および選別済み試料84点である。試料の詳細を分析結果表に示す。

(3) 方法

堆積物については、以下の方法で種実の抽出と同定を行った。

- 1) 試料200ccに水を加えて泥化
- 2) 攪拌した後、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

(4) 結果

分析の結果、樹木2、草本21の計23が同定された。結果をfig.134～138に示し、各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

〔樹木〕

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* 毯果・種子 マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平5角形であり、その中央にはへそがある。

モモ *Prunus persica* Batsch 核、1/2核 バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

〔草本〕

イバラモ属 *Najas* 種子 イバラモ科

黄褐色～灰褐色で長楕円形を呈す。表面には大きい網目模様がある。

オモダカ *Sajittaria trifolia* L. 果実 オモダカ科

淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲は翼状となり、上部は針状にとがる。

イネ *Oryza sativa* L. 果実 イネ科

完形のものは無かった。炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

オオムギ *Hordeum vulgare* L. 果実 イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。

コムギ *Triticum aestivum* L. 果実 イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈する。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。比較的四角い形を呈し、短い。

イネ科 Gramineae 穎

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

カヤツリグサ属 *Cyperus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で狭倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は三角形である。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

黄褐色から茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平、三角形、両凸レンズ形である。

コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms-Laub. 種子 ミズアオイ科

淡褐色で橢円形を呈す。表面には縦方向に8~10本程度の隆起があり、その間には横方向に微細な隆線がある。種皮は薄く透き通る。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形と両凸レンズ形がある。

アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝がはしる。

スペリヒュ *Portulaca oleracea* L. 種子 スペリヒュ科

黒色で円形を呈し、一ヶ所所が切れ込みへソがある。へソには白色のへソしとねがある。表面全体に突起がある。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みへソがある。断面は両凸レンズ形である。

ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科

茶褐色で橢円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6~8本の隆起が走る。

ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata* Trautv. var. *Heterophylla* Hara 種子 ブドウ科

茶褐色で広卵形を呈す。腹面に「ハ」字状の孔が2つあり、背面のカラザは長く伸びる。

チドメグサ属 *Hydrocotyle* 果実 セリ科

淡褐色で半円形を呈す。断面は橢円形である。両面に明瞭な一本の円弧状の隆起が走る。

シソ属 *Perilla* 果実 シソ科

茶褐色で円形を呈し、下端にへソがある。表面には大きい網目模様がある。

イヌコウジュ属 *Mosla* 果実 シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にへソがある。表面は網目模様である。

シソ科 Lamiaceae 果実

倒卵状3稜形を呈し、先端は切形で扇形。着点は扇形で斜切形である。

ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

淡褐色~黄褐色である。橢円形を呈し、一端には「ハ」字状のへこみがある。

ヒヨウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子・果皮 ウリ科

淡褐色で橢円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。藤下がヒヨウタン仲間とするものには、ヒヨウタン・フクベ・カンピョウが含まれ、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。

タカサブロウ *Eclipta prostrata* L. 果実 キク科

黄褐色で長倒卵形を呈し、一端は切形である。中央部にはいぼ状の突起がある。

ササゲ属 *Vigna* 種子（炭化） マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。ササゲ属にはリヨクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状の研究では識別は困難である。

シャジクモ属 *Chara* 卵胞子 シャジクモ科

黒色で楕円形を呈す。断面は円形で、表面には右下がりの螺旋状の隆起が8～1本程度ある。

(5) 種実群集の特徴

①第45次調査

2区7・8層間の炭層では、穀粒（?）として選び出した試料からイネ、オオムギ、コムギ、ササゲ属、イネ科、水洗後の試料から栽培植物のオオムギ、わら灰試料および500cm³試料から多数のカヤツリグサ科が検出された。3区7・8層間の炭層では、水洗後の試料、わら灰試料、および500cm³試料から主にカヤツリグサ科が検出された。R-152 (No.1)、R-172 (No.2)、R-176 (No.3)、R-189 (No.4)、R-194 (No.5) の種実類は、いずれもモモ核と同定された。

分類群	学名	和名	部位	2区			3区		
				7・8層間の炭層 穀粒(?)	水洗後	わら灰* (500cm ³ 中)	7・8層間の炭層 穀粒(?)	水洗後	わら灰* (500cm ³ 中)
	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	5					
	<i>Hordeum vulgare</i> L.	オオムギ	果実	2	2				
	<i>Triticum aestivum</i> L.	コムギ	果実	1					
Gramineae		イネ科	果実	4					
Cyperaceae		カヤツリグサ科	果実		118	153	2	229	232
Caryophyllaceae		ナデシコ科	種子		1	1			1
<i>Vigna</i>		ササゲ属	種子	1					
<i>Chara</i>		シャジクモ属	卵胞子			1	2	2	1
Total		合計		13	2	119	155	0	231
									234

*0.25mm篩

fig.134 第45次調査における種実同定結果(1)

分類群	学名	和名	部位	R-152	R-172	R-176	R-189	R-194
				2区南半	3区	2区北半	2区南半	2区南半
Arbor		樹木						
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核		1	1	1		
		1/2核					1	2
Total		合計		1	1	1	1	2

fig.135 第45次調査における種実同定結果(2)

②第51—2次調査

流路底面の試料では、カヤツリグサ科、カヤツリグサ属、タデ属、ナデシコ科、コナギがやや多く検出され、ヒュ属、イネ科、チドメグサ属、スゲ属、カタバミ属、シソ属、ヒヨウタン類、タカサブロウなども検出された。集石遺構下層では、ナデシコ科、アカザ属、ヒュ属、アブラナ科、イヌコウジユ属が検出された。R-076、R-077、R-079、R-104、R-108、R-204、R-205、R-206、R-209、R-211では、モモ核81点、マツ属複維管束亜属毬果2点、ウリ類種子1点が同定された。

(6) 考 察

①第45次調査

2区と3区の炭化物層からは、カヤツリグサ科が多量に検出され、栽培植物のイネ、オオムギ、コムギ、ササゲ属なども検出された。植物珪酸体分析では、イネ糊（殻）に由来するものが多量に検出されたが、イネ糊は少量であり、糊殻は認められなかった。このことから、イネ糊（殻）については完全に燃焼して灰化・

消失し、植物珪酸体だけが残存した可能性が考えられる。

R-152 (No 1)、R-172 (No 2)、R-176 (No 3)、R-189 (No 4)、R-194 (No 5) の種実類は、いずれも栽培植物のモモ核と同定された。

学名	和名	部位	R-076			R-077			R-079			R-104		R-108		R-204			R-205							
			1	2		1	2	3	1	2	3	4	5	6	1	1	2	1	2	3	4	1	2	3		
Arbor	樹木																									
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	毬果																								
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子																								
<hr/>																										
学名	和名	部位	R-205												R-206											
			4	5	6	7	8	9	10	11	12				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Arbor	樹木																									
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	毬果																								
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子																								
<hr/>																										
学名	和名	部位	R-206												R-237											
			13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32		1		
Arbor	樹木																									
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	毬果																								
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子																								1
<hr/>																										
学名	和名	部位	R-209			R-211												R-216			1	2				
			1	2	3	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2			
Arbor	樹木																									
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	毬果																								1
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子																								

fig.136 第51-2次調査における種実同定結果(1)

学名	分類群	和名	部位	(*堆積物200cc 0.25mm目篩水洗)																					
				流路底面*			集石遺構下層*																		
Herb	草本																								
<i>Najas</i>		イバラモ属	種子														1								
<i>Sagittaria trifolia</i> L.		オモダカ	果実														1								
Gramineae		イネ科	穎													5									
<i>Cyperus</i>		カヤツリグサ属	果実													11									
<i>Carex</i>		スゲ属	果実													3									
Cyperaceae		カヤツリグサ科	果実													25									
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl var. <i>plantaginea</i> Solms Laub.		コナギ	種子													7									
<i>Polygonum</i>		タデ属	果実													18									
<i>Chenopodium</i>		アカザ属	種子													2		7							
<i>Amaranthus</i>		ヒユ属	種子													6		3							
Caryophyllaceae		ナデシコ科	種子													10		8							
<i>Oxalis</i>		カタバミ属	種子													3									
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> Trautv.		ノブドウ	種子													1									
<i>Hydrocotyle</i>		チドメグサ属	果実													5									
Cruciferae		アブラナ科	種子													1		2							
<i>Perilla</i>		シソ属	果実													3									
<i>Mosla</i>		イヌコウジュ属	果実													1		1							
Labiatae		シソ科	果実													1									
<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.		ヒヨウタン類	種子													3									
<i>Eclipta prostrata</i> L.		タカサゴロウ	果実													3									
Total			合計													110		21							
Unknown			不明種実													5									

fig.137 第51-2次調査における種実同定結果(2)

②第51—2次調査

流路底面からはカヤツリグサ科、コナギ、スゲ属などの水生植物、およびヒユ属、チドメグサ属、カタバミ属などの人里植物ないし耕地雑草が検出され、集石遺構下層からはナデシコ科、アカザ属、ヒユ属、アブラナ科などの人里植物ないし耕地雑草が検出された。このことから、流路内は水生植物が生育する滞水した環境であり、その周囲や集石遺構は人里植物ないし耕地雑草が生育する乾燥した人為環境であったと推定される。また、流路底面からはヒヨウタン類も検出され、周辺でヒヨウタン類が栽培されていた可能性が認められた。

R-076、R-077、R-079、R-104、R-108、R-204、R-205、R-206、R-209、R-211の種実類は、モモ核がほとんどであり、マツ属複維管束亜属（毬果）、ウリ類も認められた。モモとウリは栽培植物であり、周辺で栽培されていた可能性が考えられる。

試 料		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	試 料		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
R-076	1	21.25	19.19	14.62	R-206	5	20.14	18.14	15.27
	2	19.72	18.72	15.35		6	25.89	21.68	17.52
R-077	1	16.81	15.13	13.14		7	27.38	22.05	18.21
	2	18.42	15.21	12.39		8	25.45	21.21	17.53
	3	23.38	19.84	16.32		9	22.83	18.17	14.14
R-079	1	21.63	14.81	16.31		10	27.43	22.76	18.65
	5	23.28	18.21	14.58		11	23.67	19.59	16.19
	6	22.89	17.20	15.68		12	25.11	21.91	17.08
R-104		21.51	18.62	14.46		13	25.71	21.32	16.57
R-108	1	21.59	16.54	12.99		14	22.86	18.25	14.84
R-204	1	19.40	16.90	12.88		17	25.99	20.72	16.34
R-205	3	21.41	18.56	14.81		18	26.39	21.83	18.10
	5	24.69	21.20	17.31		19	17.72	15.95	12.86
	6	25.58	21.55	16.63		20	23.27	19.86	16.00
	7	24.61	19.54	12.93		21	23.76	18.05	14.52
	8	24.93	17.82	14.86		22	24.69	20.98	16.92
	9	25.53	21.63	16.52		24	23.77	16.75	13.53
	10	26.51	23.05	18.91		26	26.68	21.65	18.04
	11	27.67	21.91	16.49		27	24.51	22.18	17.17
	12	24.92	21.13	16.63		28	23.93	20.28	15.30
	1	28.61	21.79	16.63		29	19.96	17.76	14.35
	3	26.72	22.40	17.82					

fig.138 第51—2次調査におけるモモ核計測値（計測可能な完形物のみ）

文献

- 笠原安夫（1985）日本雑草図説、養賢堂、494p.
- 笠原安夫（1988）作物および田畠雑草種類. 弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣 出版、p.131—139.
- 南木陸彦（1992）低湿地遺跡の種実. 月刊考古学ジャーナルNo355、ニューサイエンス社、p.18—22.
- 南木陸彦（1993）葉・果実・種子. 日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276—283.
- 吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナルNo355、ニューサイエンス社、p. 2—14.
- 金原正明（1996）古代モモの形態と品種. 月刊考古学ジャーナルNo409、ニューサイエンス社、p.15—19.

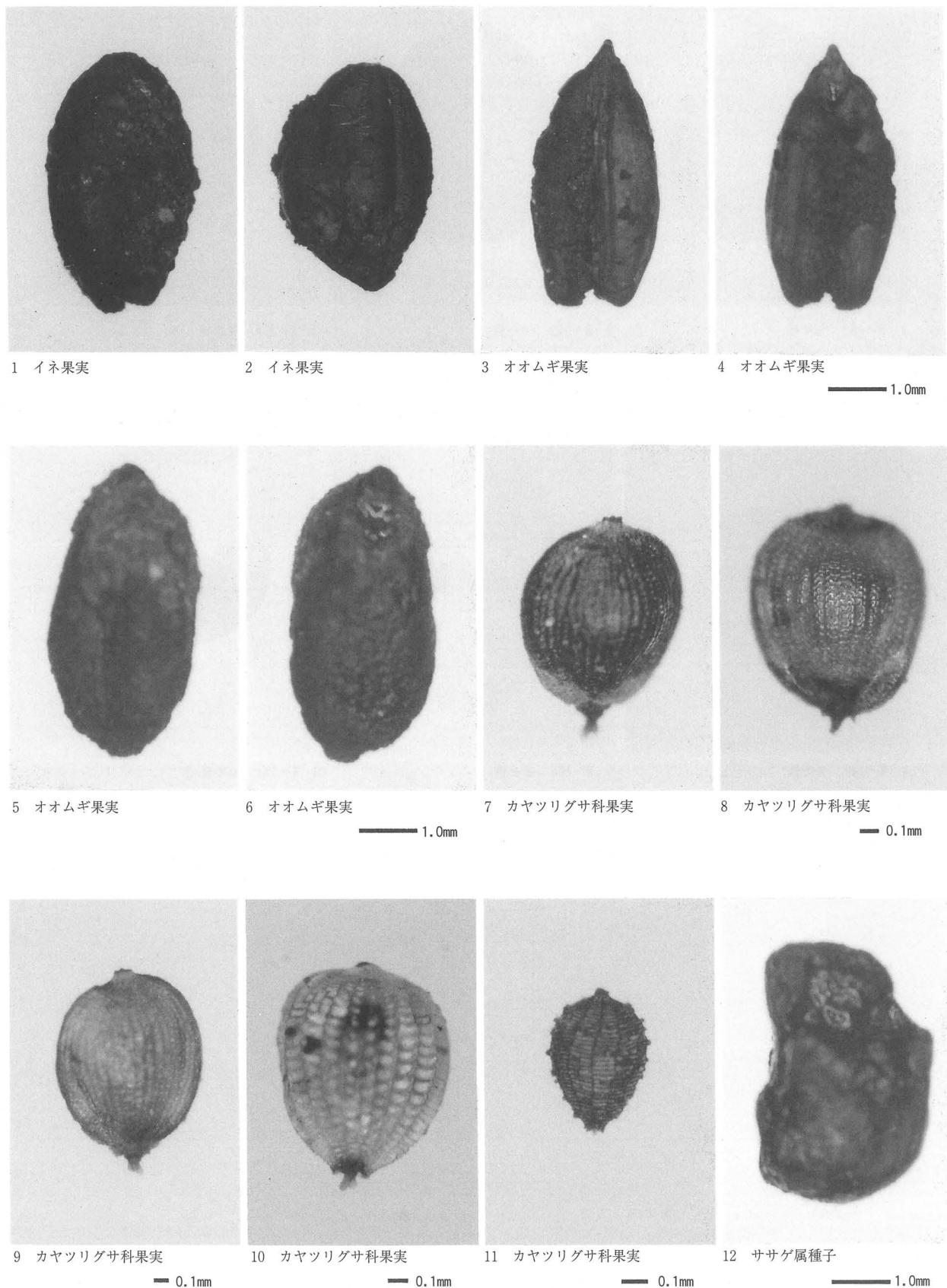
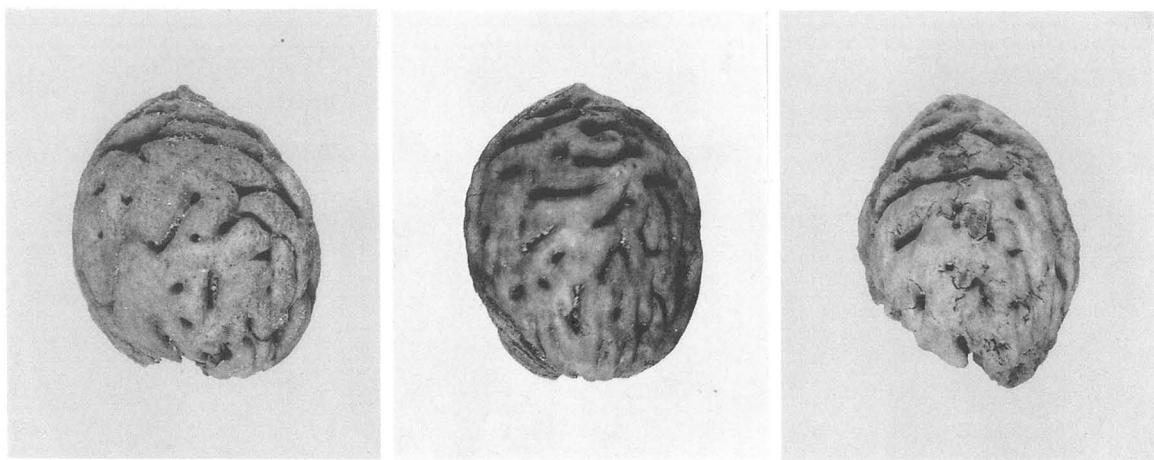


fig.139 第45次調査の種実(1)



1 R-152 モモ核

2 R-172 モモ核

3 R-176 モモ核



4 R-189 モモ核

5 R-194 モモ核 1

6 R-194 モモ核 2

— 5.0mm —

fig.140 第45次調査の種実(2)



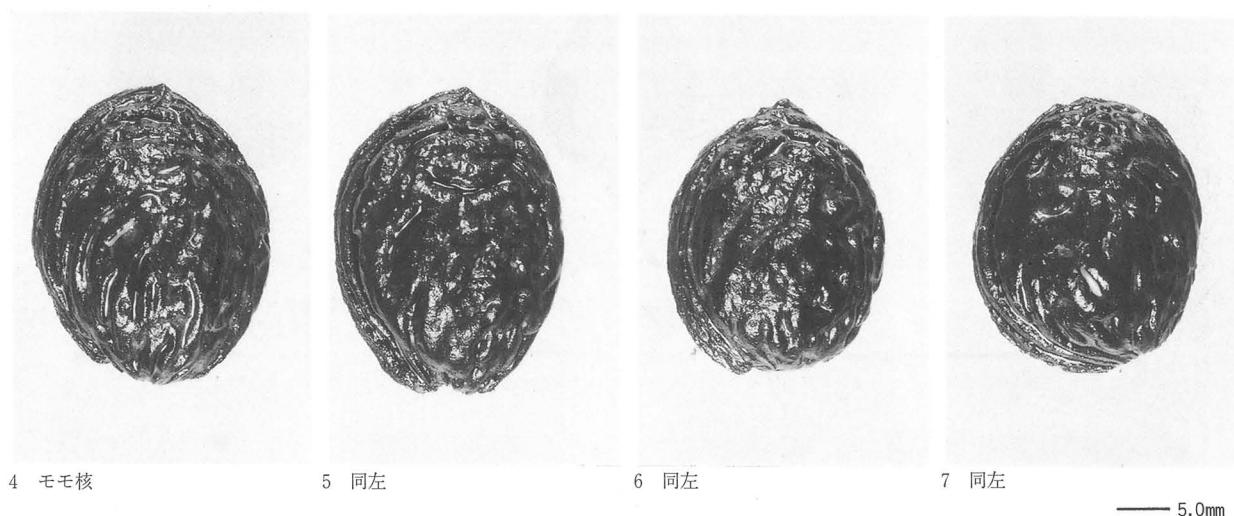
1 マツ複維管束亞科毬果

2 同左

3 ウリ類種子

— 5.0mm —

— 1.0mm —



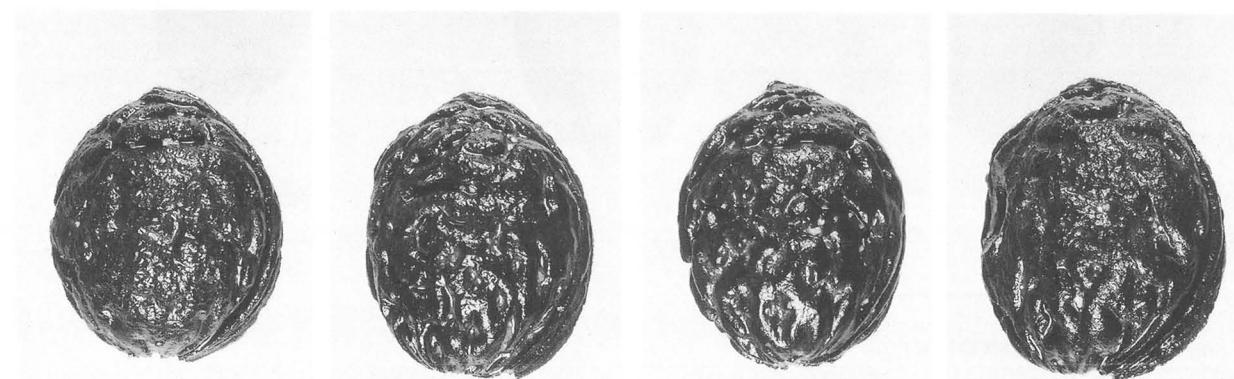
4 モモ核

5 同左

6 同左

7 同左

— 5.0mm —



8 モモ核

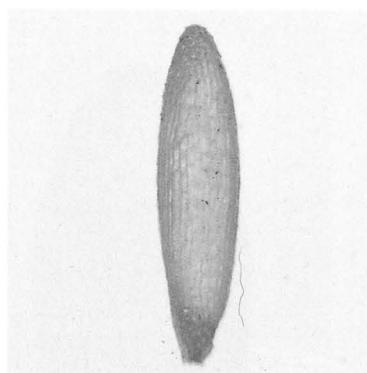
9 同左

10 同左

11 同左

— 5.0mm —

fig.141 第51—2次調査の種実(1)



1 イバラモ属種子



2 オモダカ果実



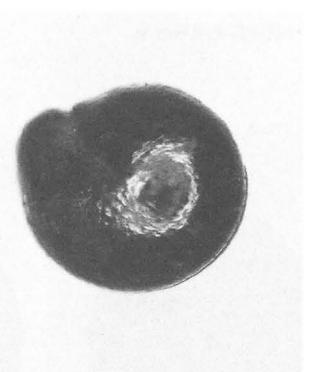
3 カヤツリグサ科果実



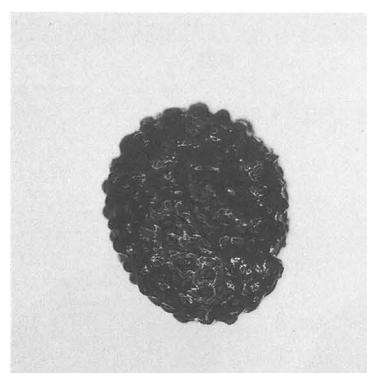
4 コナギ種子



5 タデ属果実



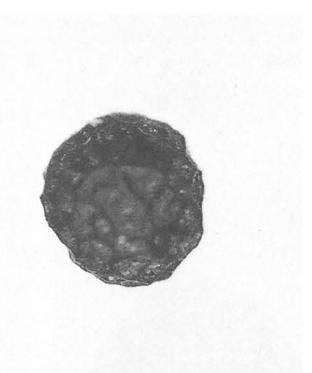
6 アカザ属種子



7 ナデシコ科種子



8 カタバミ属種子



9 イヌコウジュ属果実

fig.142 第51—2次調査の種実(2)

第4章 まとめ

第1節 奈良・平安時代における御蔵遺跡の性格について

1. 八部（やたべ）郡内における奈良・平安時代前期の遺跡の建物群構成

この項では、八部郡内で奈良・平安時代前期に存続した、主要な3つの遺跡の建物群構成について、現在までに判明している点について述べてみたい。なお、これらの建物については、報告書、年報等の記述を基にして、個々の建物の年代を決定し、およそ8～9世紀代の建物とされたものを抜き出していることを了解していただきたい。

(1) 御蔵遺跡の建物群について

御蔵遺跡については、現在までに判明している掘立柱建物の配置は、fig.143の様になっている。これをみると、国道28号線よりも西側に多くの建物が発見されている事が判る。また、河川の微高地上に立地する遺跡であることから、地形に制約され、南北方向に細長く遺構が分布している。

小規模な調査が多いため、建物址一棟全体の規模が分るものは少ない。建物の方向は、現在の区画街路の並びとは全く異なった、北を意識した建物方位を志向していることが判る。現在の区画街路は、大正時代頃の区画整理の際に、それまでの水田区画の方位をそのまま踏襲したものであるらしく、その水田区画は条里に基づくものであったといわれている。つまり、近代まで残されていた条里の方向とは全く異なった方位で、古代の建物群は存在していたことになる。

国道に近い側は側柱建物が多く、その西側に総柱建物がいくつか並んでいることが読み取れる。総柱建物であることが確実なものは、3×3間（4.2×3.9m）、3×2間以上（6.6×3.4m）の2棟が確認されており、倉庫と考えるのが妥当である。これを正倉的な性格の建物と想定して、松村恵司氏の倉の平面規模と収納量の試算⁽¹⁾を援用すると、前者は300斛（1000束）、後者は1000斛（3000束）程の穀穀が収まる倉であることがいえる。また、総柱建物周辺の側柱建物は床を持たないあるいは、低床の倉庫である「屋」の可能性があるが、これについては確証が得られていない。

国道に近い側の側柱建物は郡庁、館、厨、雜舎等の可能性が指摘されるが、現在のところ、特に規模の大きな建物や礎石建の建物は発見されていない。しかし、顕の部分に丹塗りの痕跡が残った軒平瓦あるいは、平・丸瓦類がこれまでの調査で、発見されていることから、瓦葺の殿舎（総瓦葺であったかは不明）が存在したことはほぼ間違いないであろう。また、総柱建物群と側柱建物群の間で発見された井戸（9世紀代）からは、「大殿」と墨書きされた曲物桶が出土した。この曲物が他所から搬入された物でなく、当遺跡で使用された物品であるとするならば、このように称される殿舎が付近に存在していたことを示唆している。

建物の時期の確定は非常に難しいが、概ね奈良時代後半～平安時代前半（8世紀後半～9世紀）に、座標北からおよそ10°～18°の幅で、西に振る角度の桁方向と同じとする建物群が建築されてゆくのではないかと考える。なお、10世紀にはいると、建物の規模が小型化し、これまでの様相とは異なってくる。

また、建物群の西側は低湿地となっており、幅約40～50mの遺構空白域が存在する。その西側にある微高地上では、飛鳥時代末～奈良時代初頭の掘立柱建物、平安時代までの遺構や転用硯、「大手」と書かれた墨書き土器、帶金具（鉈尾）が出土している。この周辺の調査例が少ないため、建物構成については窺う事ができないが、この微高地まで施設が拡がっていることは確かなようである。

国道の東側でも、建物が複数棟、確認されている。第45次調査で発見された建物は9世紀末～10世紀初頭頃の庇付き建物である。また、飛鳥時代と判断された掘立柱建物群や国道西側の建物群と方位が異なる側柱建物、総柱建物が数棟確認されているが⁽²⁾、建てられた年代については確定が難しい。

